

図68 排水溝(西溝) 朝顔形埴輪12~14

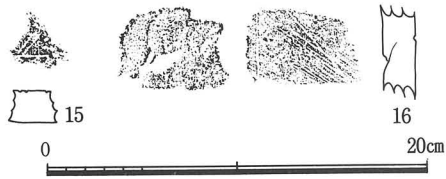


図69 排水溝(西溝) 形象埴輪15・16

は表面に斜向沈線がみられ、器財埴輪の破片とみられる。

東溝では埴輪と土師器がある。埴輪は中型と小型の円筒および朝顔形を検出している。中型の円筒では、A5類の口縁部17があり、内外面ともハケ調整したのち、ベンガラが塗られている。胴部は5点を観察した。タガは1類19と3類21のほか三角形にちかい20がある。外面の調整はいずれもヨコハケで、21はBa種とみられる。内面はハケ調整が目立っている。18・19にはベンガラが塗られている。基底部は2点22・23で、どちらも外面をヨコハケ、内面をナデ調整している。23などはどちらかといえば板ナデにちかく、また接合法は右巻きづくりである。底面には板材の圧痕が認められる。小型は基底部が1点(24)出土している。2号窯などで出土している典型的な小型とは異なるが、推定される口縁規模から小型に含めている。タガはやや丸みをもつ2類で、基底部高は14cmと、中型円筒よりもやや高くなっている。外面のヨコハケはBb-1種で、内面はナデ調整している。接合法は右巻きづくりである。朝顔形25は口縁部中位の破片で、突帯は剥がれている。擬口縁の形状からA2類とみられ、外面はハケ調整、内面はナデ調整している。26は中型円筒に描かれたヘラ記号で、

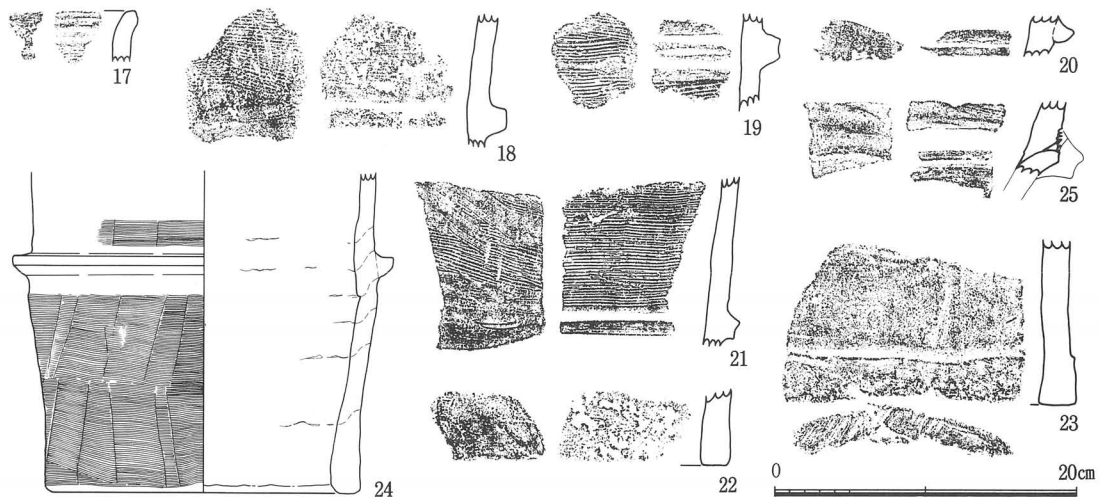


図70 排水溝(東溝) 円筒埴輪17~24 朝顔形埴輪25

図形から右向きの動物とみられる。三日月形の胴部につづいて脚部を刻んでおり、下端はタガに達している。記号の残存高は6.2cmである。

27(図75)は甕の体部上半の破片である。風化のため調整は不明。色調は淡灰褐色を呈している。

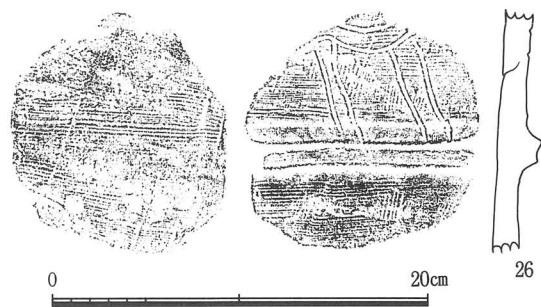


図71 排水溝(東溝) へら記号26

1号土坑の遺物(図72、PLATE66、表48-6)

円筒や朝顔形の破片が出土している。円筒は18と22が小型で、あとはおおむね中型とみられる。口縁部はA2類が6点(1~5・7)、A3類が2点(6・8)と判断されるが、A2類の小片のいくつかについては、A3類に含まれる可能性がある。内外面ともハケ調整のもの(1・2・7・8)、外面をハケ、内面をナデ調整するもの(3・5・6)、内外面ともナデ調整するもの(4)とがある。胴部は13点検出した。タガは2類(9)と4類(14)を少量含むも、1類のM形が大半を占めている。13については、タガが指で押さえられて歪つになっているものである。外面の調整はBb種ないしBc種のヨコハケである。内面はナデ調整が目立っていて、胴部のより上方の部位のものにはハケ調整がみられる。スカシ孔は円形である。なお20の資料は谷部包含層出土の破片と接合している(PLATE66a)。基底部の2点23・24は、Bb-2種である。23の底部外縁の一部にへらでそぎ落とした調整痕がみられる。小型は胴部と基底部のみである。18は1類のタガをつけ、外面をヨコハケ調整し、内面はなでている。22は外面にBc種とみられるヨコハケをほどこし、内面はナデ調整している。朝顔は口縁部が2点みられる。26は外面をナデ、内面をハケ調整している。27は内外面ともハケ調整している。25は口径26cmほどの小型の口縁部片で、上縁部

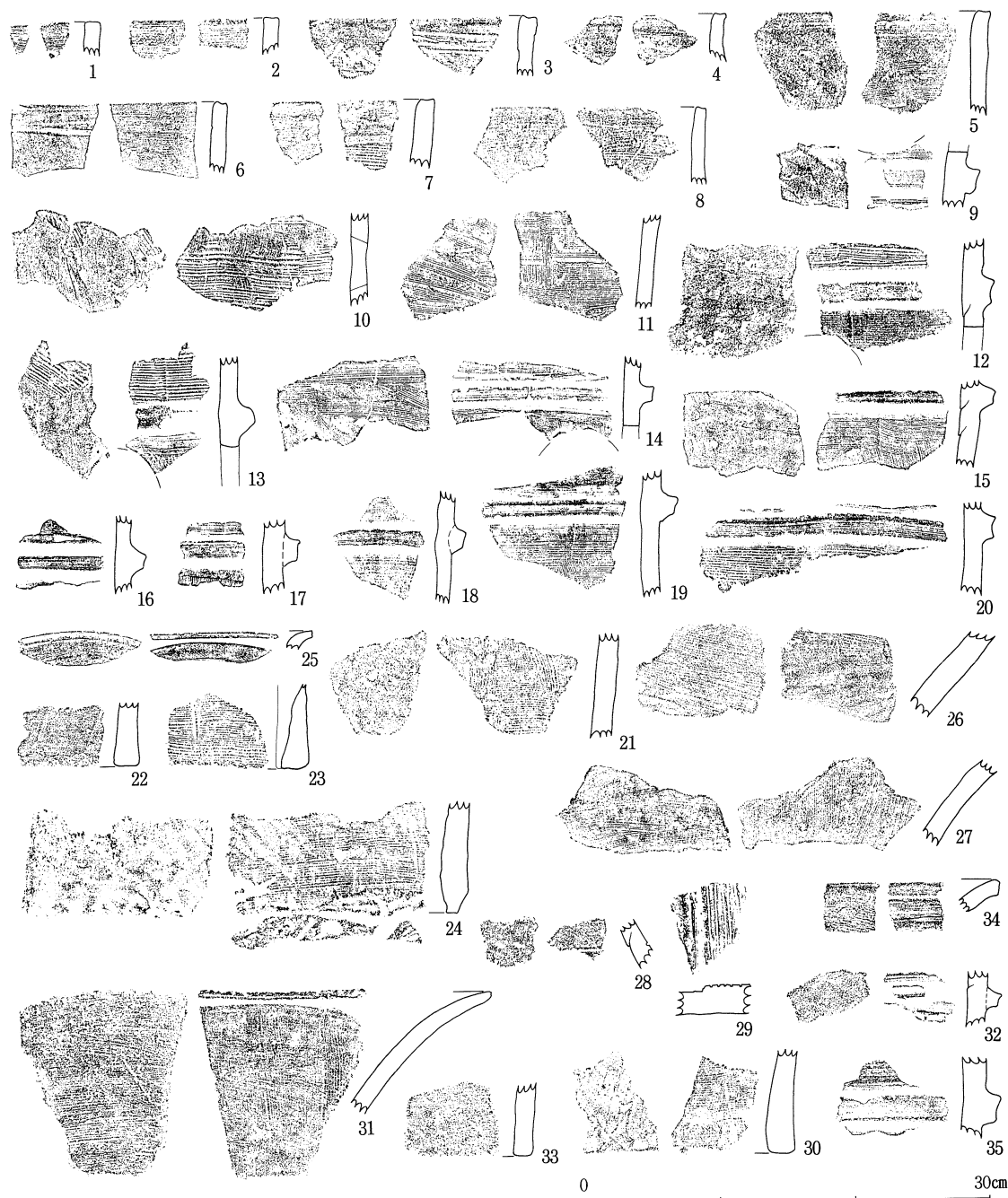


図72 1号土坑 円筒埴輪 1~24 壺形埴輪25 朝顔形26・27 形象埴輪 草摺28 靱29
 ピット1 円筒埴輪30 朝顔形埴輪31 ピット2 円筒埴輪32・33 朝顔形埴輪34 ピット4 円筒埴輪35

は大きく外反している。壺形埴輪の類とみられる。形象では28が草摺片で、29については靱などの器財の一部とみられる。ベンガラの塗布は6・15・16・21・26~29の資料にみられる。1号土坑の埴輪類は全般的に小さな破片が多く、また色調や胎土もさまざまで、雑多のものを詰め込んでいたとおもわれる。

ピットの遺物(図72、PLATE66b、表48-6)

ピット1では基底部**30**と朝顔形**31**を検出している。**30**は外面をB種ヨコハケで調整し、内面はなでている。**31**は中型で、端部を薄く仕上げたA2類である。外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整している。内外面ともベンガラ塗りの刷毛の痕跡が顕著にみられる。**31**は調整および形状から3号窯の**93**(西溝の資料と接合)と同一個体と考えられる。ピット2では円筒**32・33**と朝顔形**34**が出土している。**32**は1類のタガをつけたもので、外面をヨコハケ、内面をナデ調整している。**33**はやや薄手の基底部で、器表面はかなり風化している。**34**はA2類で、内外面ともハケ調整し、ベンガラ塗りが塗布されている。ピット4からは大型円筒の胴部とみられる破片**35**を検出している。タガはM形の4類で、外面をヨコハケ、内面をナデ調整している。また外面にはベンガラの滴がみられる。ピット8からは3号窯の**4**と同一個体の円筒の口縁部**36**(PLATE66b)が出土している。

灰原の遺物(図73~75、PLATE67・68a、表48-7)

埴輪と土器がある。埴輪では円筒・朝顔形・形象がある。円筒では大型と中型がある。大型の**12**は胴部片で、Ⅱ類とみられる。タガはやや幅のひろいM形の1類で、間隔は12.5cmである。外面のヨコハケはBb-1種で、内面はハケ調整後に一部をなでている。ヘラ記号のある**29**はやや幅のひろい2類のタガをつけている。中型はすべての口縁部を含む15点を資料化している。口縁部はA1類が1点(**1**)、A2類が2点(**3・8**)、A3類が5点(**2・4~7**)である。**6**は外面を細かなタテハケ、内面をナデ調整するほかは、外面をヨコハケ、内面をハケ調整している。**3**についてはBb-2種が観察される。胴部のタガは1・2・3類がみられる。外面の調整はいずれもB種ヨコハケで、**9**と**13**はBc種と特定された。内面は**13**がタテハケで、ほかはナデ調整している。スカシ孔は円形である。底部の**15**は外面を細かなヨコハケ、**16**は粗いヨコハケをほどこしたものである。接合法は**15**が左巻きづくりである。朝顔形は中型とみられる12点を検出した。口縁部が10点、肩部が1点、胴部が1点である。口縁端部の形状はすべてA1類であるが、調整はハケとナデが混交している。**28**は肩部としては整然としたヨコハケをほどこしている。なお**24~26**は暗青灰色を呈し、いちじるしく焼き歪んでいるもので、胎土や調整は2号窯の**102~105**とよく似ている。また灰原ではこのほかにも、**10・11・14**などの破片が振れていたたり、歪んだりしている。ベンガラ塗布資料は、円筒の**9・13**と朝顔形の**20・24・26・27**である。

ヘラ記号は**29**の1点で、胴部に刻まれている。凸型を呈する3本の弧線は1号窯の中型円筒**3**などにもみられる。形象は鞆・大刀・冑・草摺・蓋・その他がある。鞆は背板**30・31**と矢筒部**32**がある。**30**はレリーフ状になった円形の飾り文の部分で、表面にベンガラ塗りを塗布している。板状の**31**は風化のため部位が判然としないが、梯状の界線がわずかに認められる。**32**は裾のコーナー部とみられ、角は鈍角になり、上端にも稜線を挟んで傾斜する面を形成している。各面には界

線で縁どった区画内に鋸歯文・平行線・斜向線を配している。内側には焼き歪みによるヒビ割れが認められる。32は暗青灰色の須恵質のものであるが、後述する包含層出土品である淡褐色の51と接合している(口絵23下)。大刀33は鞘におさめた刀部に盾を貼りつけた形式のもので、ちよ



図73 灰原 円筒埴輪 1～16 朝顔形埴輪 17～28

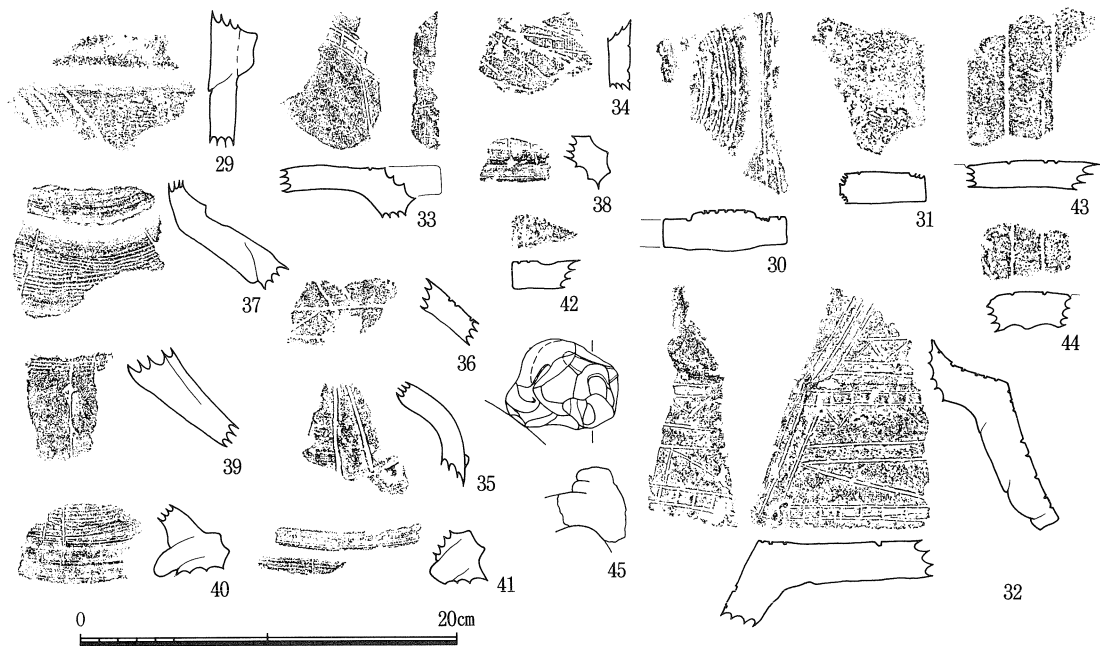


図74 灰原 ヘラ記号29 形象埴輪 靴30~32 大刀33・34 冑35 草摺36 蓋37~41 その他42~45

うど盾部の右上の部分に相当し、梯状の界線と縦の分割線がみられる。側面の鞞部には刺繍を表現したへら描きが認められる。34は鞞部の破片で、やはり刺繍を小刻みなへら描き沈線であらわしている。いずれも2号窯の147に接合したものと同一個体になる。35は冑片で、縦位のへら描線は地板を表現したものとみられ、下方の胴巻板の部位には粘土帯の剥がれたあとがある。外面にはベンガラが塗られている。36は草摺の断片で、綴紐を模した鋸歯文がみられ、ベンガラが付着している。蓋37~41はいずれも傘部の破片で同一個体である。これらから復原される傘部外周の径は約45cmである。中位にはタガ状の突帯をめぐらして内区と外区をつくり、それぞれに縦の2本線を6カ所程度ひいて区割りしている。後述する2号工房の蓋と比べるとかなり小形である。42は器財の破片で、表面に界線がみられ、ベンガラを塗布している。43・44は灰原のちかくで出土したもので、2本の縦線がひかれている。43の右側の線などは一度ひいたものを埋め殺して、ひき直したものである。45は手づくね様の埴輪片で、形象の一部とみられるが、種類は特定できない。

土器では壺と高坏がある。46は小形の無頸壺ないし直口壺で、外面はナデ調整、

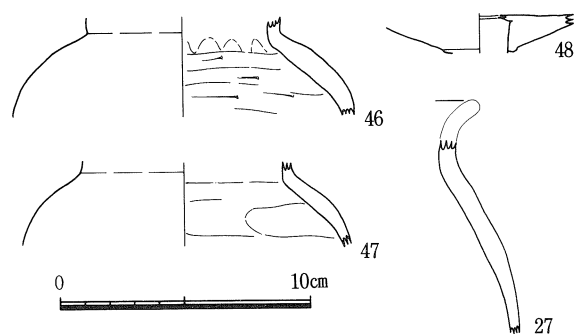


図75 排水溝(東溝) 土師器 甕27 灰原 土師器 壺46・47 高坏48

内面はヘラケズリしている。47は小形の広口の直口壺とみられる。風化のため外面の調整は不明。内面はヘラケズリしている。どちらも胎土に若干の砂粒を含み、淡黄灰色を呈している。48は小形の高坏底部片である。ハケ調整後に内外面をていねいになでている。脚部の剥離痕が明瞭で、柱状部上端を覆う粘土が厚さ約3mmと測定された。胎土は精良で、色調は淡赤褐色を呈している。

包含層の遺物(図76~79、PLATE48・68b・69・70a・131)

A群窯およびその周辺から出土した遺物について記述する。埴輪では円筒・朝顔形・形象がある。円筒はいずれも中型とみられ、17点を図化した。口縁部はA2類(9)、A3類(1~8)、A4類(11)、B1類(10)、C類(12)である。A3類が多くみられる傾向は、A群窯の状況とよく似ているが、C類はA群窯では検出されなかったものである。A類、B類の調整・色調などはおおむねA群窯の資料の範疇にあり、特段記すものはない。C類の12は内外面をヨコハケ調整したのち、肥厚部をヨコナデしている。なお肥厚部下縁に糊とみられる穀粒痕がついている。13は焼き歪んだ胴部片で、タガを割りつけるための2本の沈線がひかれている。ベンガラ塗布資料は9点(1~6・8・11・12)である。基底部では、15・17が右巻きづくりで、左巻きづくりの16は接合部の外側の粘土帯が剥がれたものである。また17の基底部高は9.5cmを測る。

朝顔形は15点を図化した。いずれも中型とみられる。12点の口縁部のなかで、A1類が6点(18~23)、A2類が1点(24)、B類が1点(25)である。また27・28については擬口縁の形状から、A1類に比定される。これらについても、円筒のA類・B類と同様に、A群窯で焼かれたとみられるもので、その調整や色調など、とくにかわったものは含まれていない。ベンガラ塗布資料は10点を数える。

ヘラ記号では、33の格子状のものは2号窯の117・118や3号窯の30と同種で、34の笹の葉状のものは1号窯の4、35は3号窯の115とおなじもので、39は口縁部内面にほどこされているという特異性から3号窯の10の相合傘様のものとみられる。そのほかでは36が縦線と左下がりの斜線3本が組み合わさった幾何学的な記号で、37・38では記号の一部を検出している。施文された部位が判明するのは、39のほかでは、33・36・37が胴部で、34は1号窯の類例から口縁部とみられる。また40は朝顔形の口縁部外面に刻まれた記号の一部である。ベンガラは35・37・39・40にみられる。

形象では家・盾・鞆・冑・草摺・蓋・その他がある。家では、41~45までがI類の破片で、46はII類である。I類の文様については2号窯の項の復原図(図44)を参照されたい。46は網代を表現しているとみられ、屋根材か壁材の一部であろう。これらの家にはベンガラはみられない。盾は4点出土している。47は鱗部で、盾面に直弧文、外縁に綾杉文をほどこしている。48は鋸歯文の一部がみられる。49・50については、鋸歯文が半截竹管で描かれていて、この手法は後述

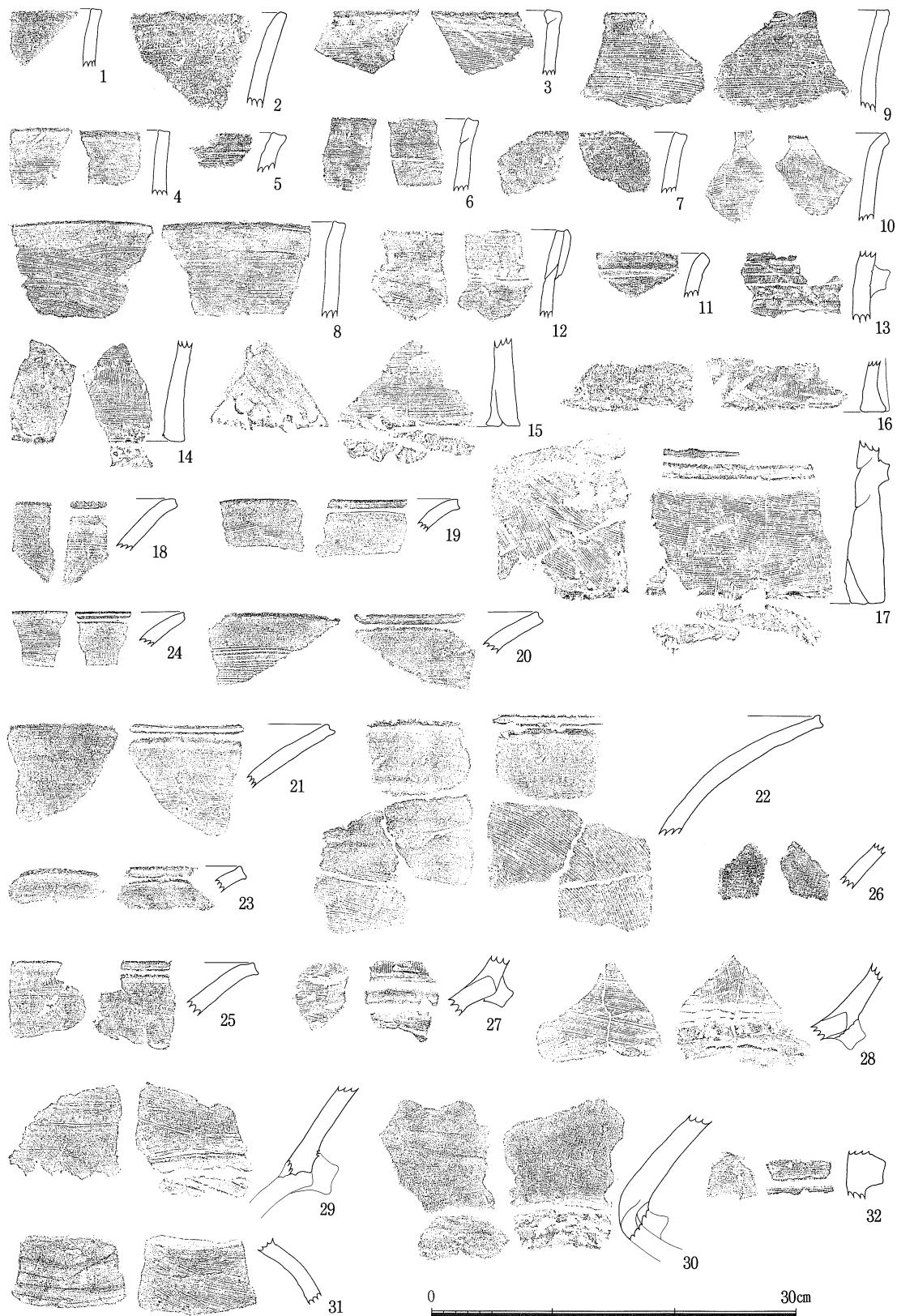


图76 包含層 円筒埴輪 1~17 朝顔形埴輪 18~32

するように新池遺跡では6世紀になってあらわれる手法である。当該包含層出土埴輪のなかでは、この2点のみが新しくなる。ベンガラは47・48にみられる。靱は矢筒部51と背板52・53がある。51は矢筒部の下方の破片とみられ、上縁に横位の鋸歯文、下縁に梯状の界線を配し、そのなかに2本線と斜向線を配している。灰原の32と接合する(口絵23下)。52・53は梯状の界線を刻みつけた破片である。54は形状不詳だが、細い梯状の界線が認められる。ベンガラは51・52にみられる。冑55は地板をあらわす縦の沈線をほどこしたもので、上端には伏鉢の剥がれた痕がある。灰原の35と同一個体とみられ、ベンガラも塗られている。草摺は9点(56~64)検出している。56~60・62・63は沈線文帯の隔段に鋸歯文を配したもので、61は2段つづきの無文帯があり、63は2段つづいて鋸歯文をほどこしている。61と64はそれぞれ2号窯の148の上端部と下端部に対応するものと考えられ、これらの多くは2号窯で出土した草摺と一連のものともみら

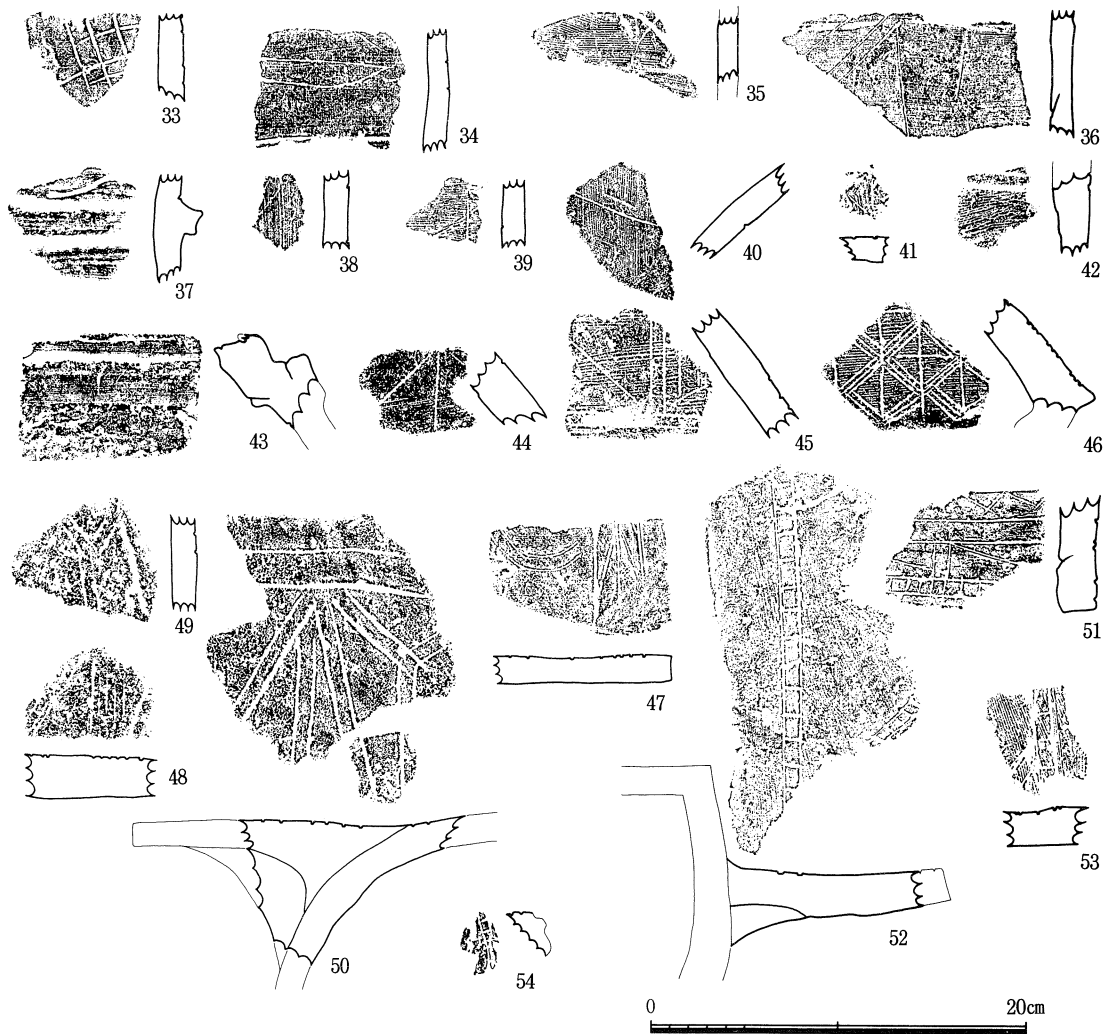


図77 包含層 ヘラ記号33~40 形象埴輪 冑41~46 盾47~50 靱51~54

れる。草摺はすべての破片にベンガラが塗布されている。蓋は5点出土している。65・66は傘部上端、69は同部中位、67・68は同部裾の破片である。65～68は灰原で検出した蓋と同形式・同規模のものであるが、69は傘面を区分するのに突帯ではなく沈線をつけており、規模もひとまわり大きいものである。これらにはベンガラはみられない。70・71は器財埴輪の飾り板とみられるもので、周縁の一部が波形にヘラ切りされている。外縁部は梯状の界線がめぐらされ、71の内区には2本線が斜めにひかれている。2点とも両面にベンガラが塗られている。72・73は薄手の口縁部片で、外面に平行線文、上端に刻目文がみられる。単独で用いられたとみるよりは、何かの器財埴輪の部分品とみられる。ベンガラの塗布はない。74はやや不整な円柱状で、下端がすこし大きくなっている。ミズラの下半部かも知れない。75は断面が楕円形の棒状のもので、円孔が貫通している。柄の類であろうか。どちらもベンガラはみられない。

76は排水溝(西溝)のちかくで検出した大形の甕である。やや肩の張った球形の体部に、外反する口縁部がつくもので、口径は15.3cmを測る。体部外面はハケ調整したのちに、肩部に再度ヨコハケをほどこしている。内面のヘラケズリはおよそ肩部までである。口縁部はヨコナデし、上縁部がわずかに内傾している。布留式の系統とみなせる。胎土には砂粒を多く含み、淡

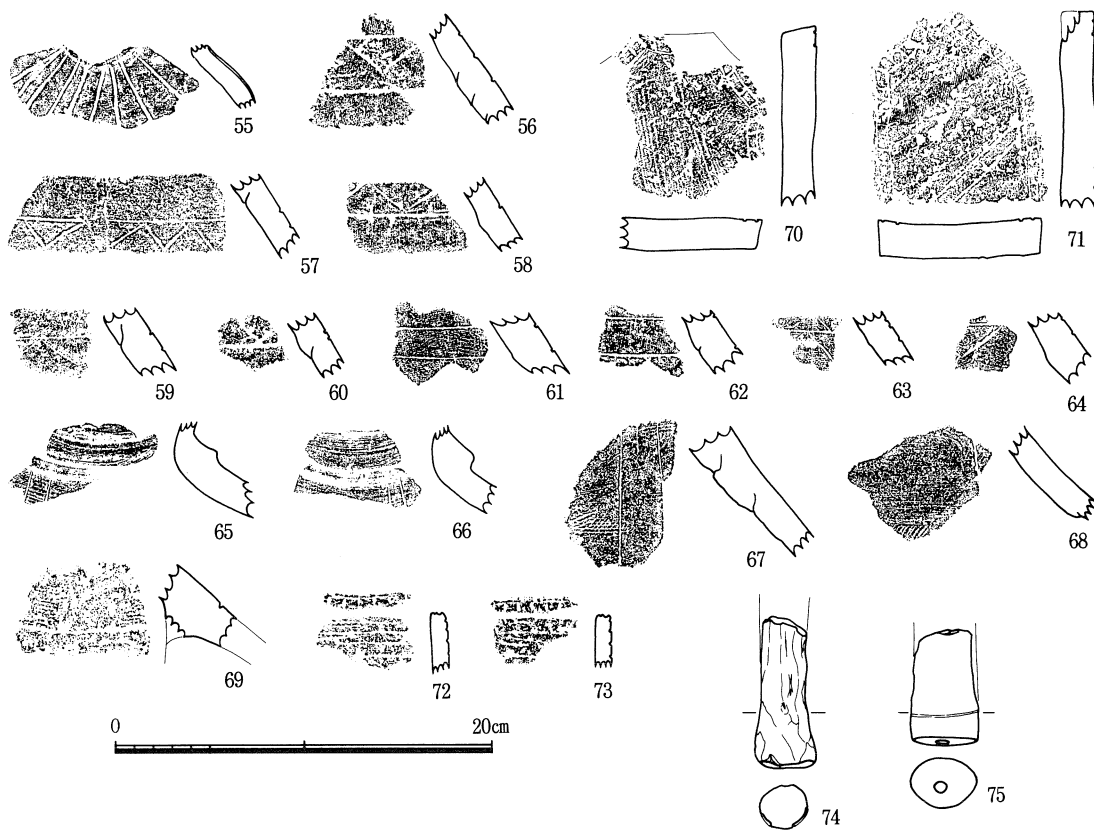


図78 包含層 形象埴輪 甕55 草摺56～64 蓋65～69 その他70～75

褐色を呈している。外面に煤が付着している。**77**は東端部で出土した小形の鉢である。半球形の体部に外反する口縁部がつくもので、口径は14.5cmである。外面はハケ調整し、内面は底部を指おさえで整形し、胴部はヘラケズリしている。胎土は砂粒が多く、淡灰褐色を呈している。**78**は東端部で出土した弥生土器の底部片である。後期の甕とみられ、底径は5.4cmを測る。胎土に角閃石を含み、茶褐色を呈している。生駒西麓産である。**79**は前庭部から出土した弥生土器の底部片である。底径5.4cmを測るくぼみ底で、後期の壺とみられる。胎土に角閃石を含み、茶褐色を呈している。生駒西麓産

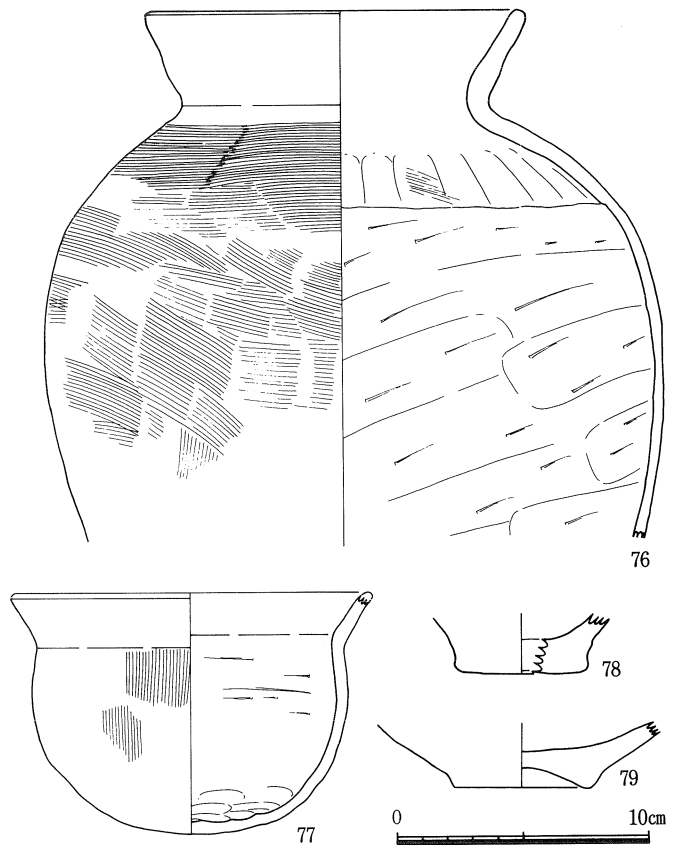


図79 包含層 土師器 甕76 鉢77 弥生土器 甕78 壺79

である。これらの土器のなかで土師器は、**76**がおおむね布留式Vとみられ、**77**は6世紀代以降のものとおもわれる。

ii) B群窯(図80・81、PLATE12a・c)

B群窯はA群窯の排水溝(西溝)から22mほど北側へ隔てたところに築かれた埴輪窯群である。B群窯が設営されたのは扇形に内弯する西向きの斜面地で、標高はおよそ53mから57.5mである。A群窯とのあいだには、かつて段丘の稜線端部が舌状に張り出し、両群は地形的に分断されていたとみられる。今回の調査は窯数の確認と平面規模の把握を目的としておこなったので、窯については原則として輪郭の検出、灰原についてはそのひろがりを確認した。表7に各窯のデータを示している。

南から順に4号から8号まで、全部で5基の窯を検出した。4号窯は戦後の土砂採取によって焼成室の中位以上

埴輪窯	全長(m)	幅(m)	中軸方位	備考
4号	5.8	1.6	E-34.0° -S	半壊
5号	2.5	1.3	E-32.0° -S	半壊
6号	11.5	1.5	E-37.5° -S	
7号	10.8	2.1	E-37.0° -S	
8号	14.8	1.7	N-89.0° -E	煙出し部調査

表7 B群埴輪窯の規模一覧表

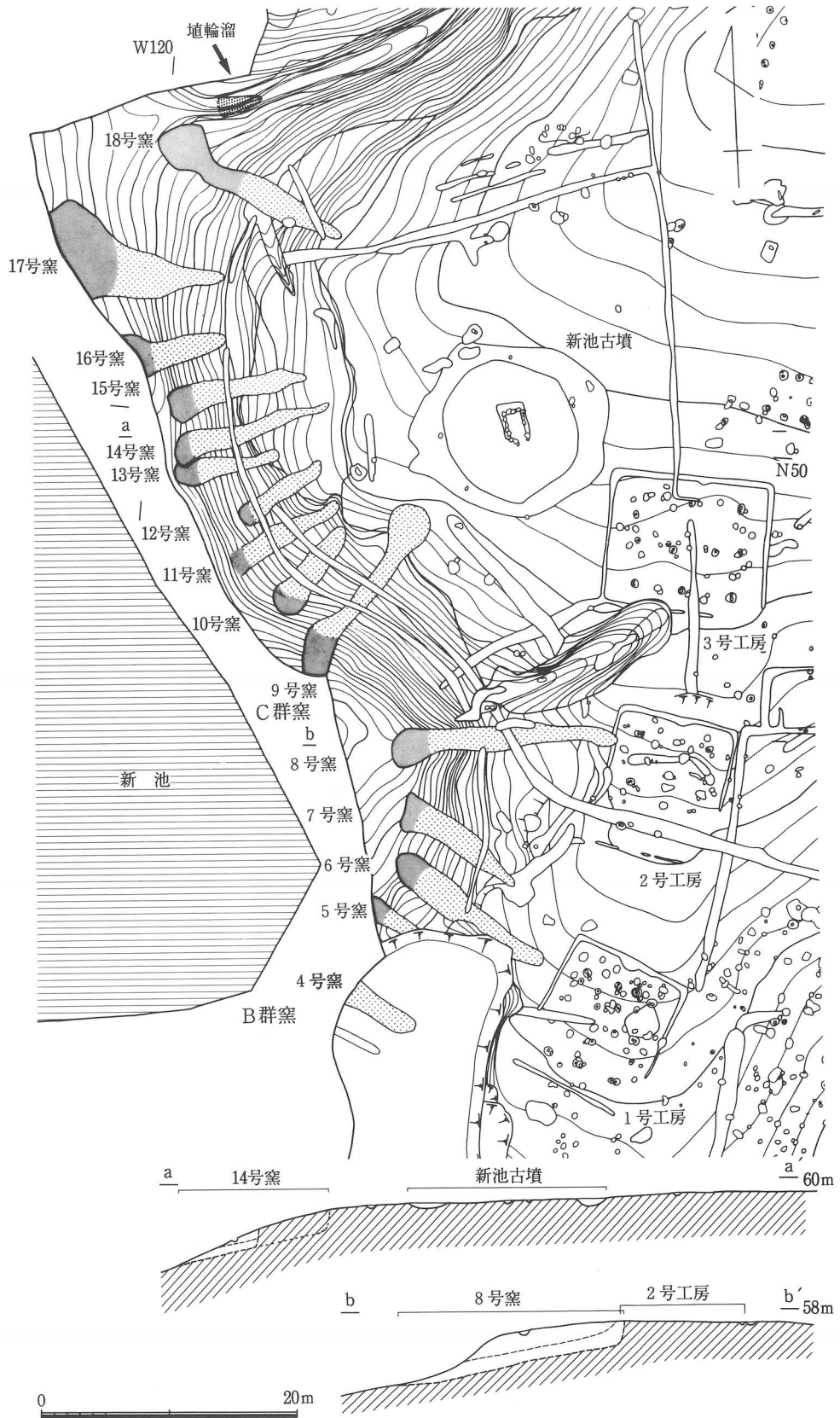


图80 B群窯・C群窯 位置图

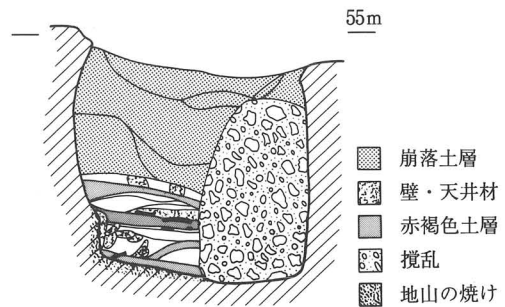
が水平に削り取られていて、壁面の赤い焼土が窯の輪郭を縁取るようにして発見された。5号窯も土砂採取によって奥側が消失して、窯を輪切りにした焼成室の断面が崖面に露出していた(PLATE12c)。検出面から床面までの深さは約1.2mで、落ち込んだ焼土にスサはみられなかった。焚口部は窯本体から少しふくらんで掘削されている(図81a)。6号窯は焼成室の一部が壊されているものの、煙出し部から焚口部まで遺存している。窯の検出は地山面での陥没土の輪郭によって確認しており、焼土は煙出し部や焚口でわずかにみられただけである。7号窯はやや小振りの窯で、おなじく煙出し部から焚口部までのこっている。8号窯はB群のなかでもっとも長大な窯で、遺存状態もよかった。図80bは8号窯の煙出しに設けた試掘坑の土層断面である。検出面から煙出し部床面までの現存深は約2mを測る。埋土中にみられる板状の焼土塊は壁材である。壁面にのこる焼けの範囲や赤褐色焼土の堆積の状況から判断すると、煙道は細く見積もっても、その上端で直径0.5mはくだらないとおもわれる。また調査ではこの煙出し部が、後述する2号工房を切り込んでつくっていたことを確認している。

灰原はおおよそ南側では53.8m、北寄りのところでは53.2mの等高線から下位にあって、その大半はすぐ西側にある「新池」の池底にひろがっている。新池側の当該地点では、これまでも湧水期になると、厚く堆積した炭灰や多くの埴輪片が認められている。

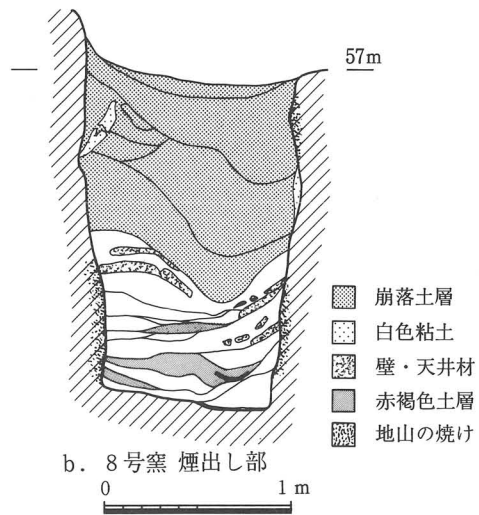
B群窯の遺物(図82・83、PLATE70c・71、表48-8)

遺物は埴輪のみである。大半は遺構検出面までの堆積土および灰原上面から出土したもので、個別の窯との対応は指摘できない。そのなかで、23~26については、8号窯の煙出し部の床面から検出したものである。

円筒は大型の底部1点(13)と小型の胴部2点(7・11)のほかはすべて中型であり、一括して記述する。類型が判明するのは中型Ⅱ類の1のみである。口縁部はA1類(2)、A2類(1)、A3類(4)、



a. 5号窯 焼成室横断面図



b. 8号窯 煙出し部

図81 5号窯・8号窯

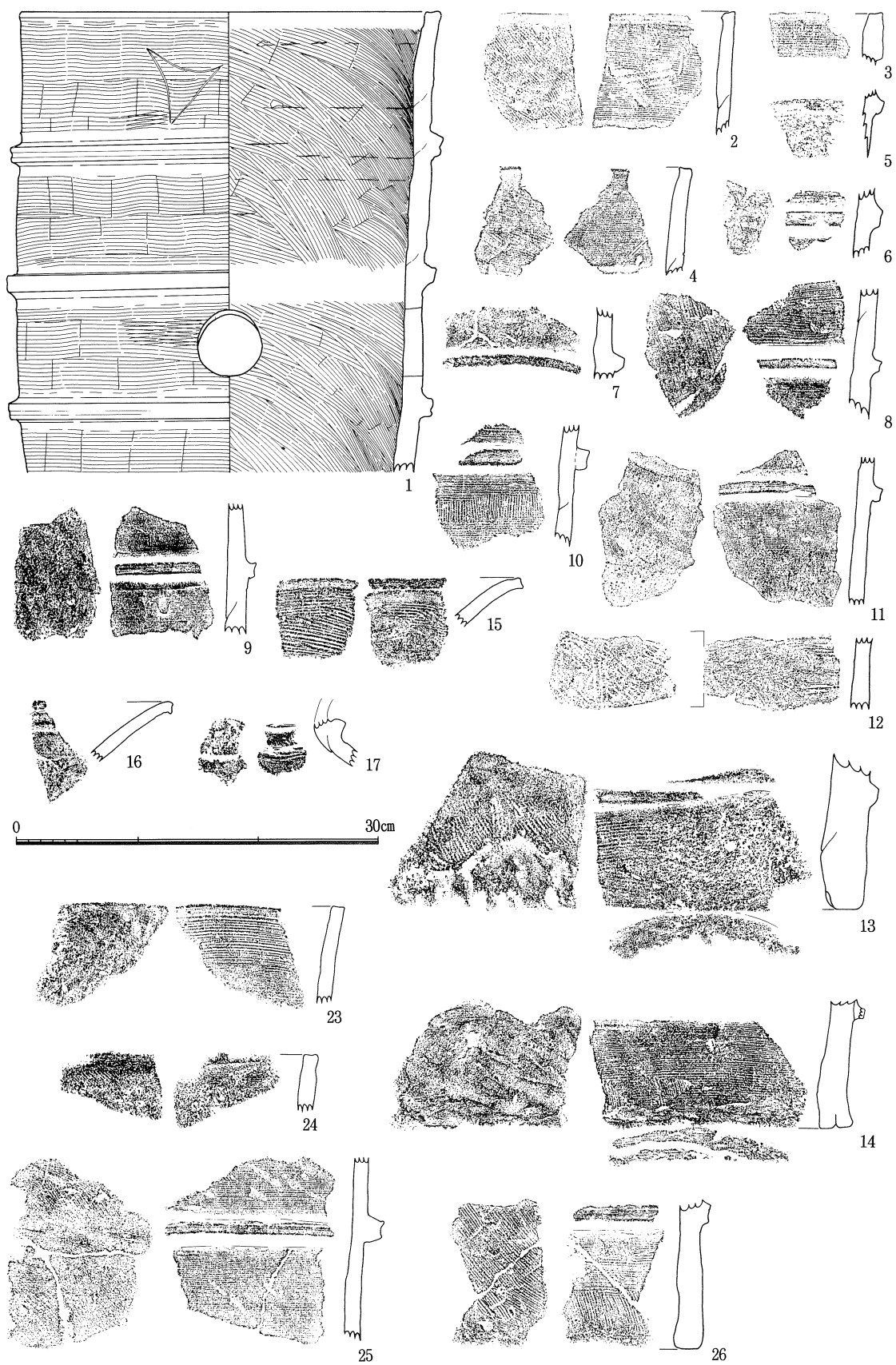


图82 4号~8号窯 円筒埴輪 1~14・23~26 朝顔形埴輪 15~17

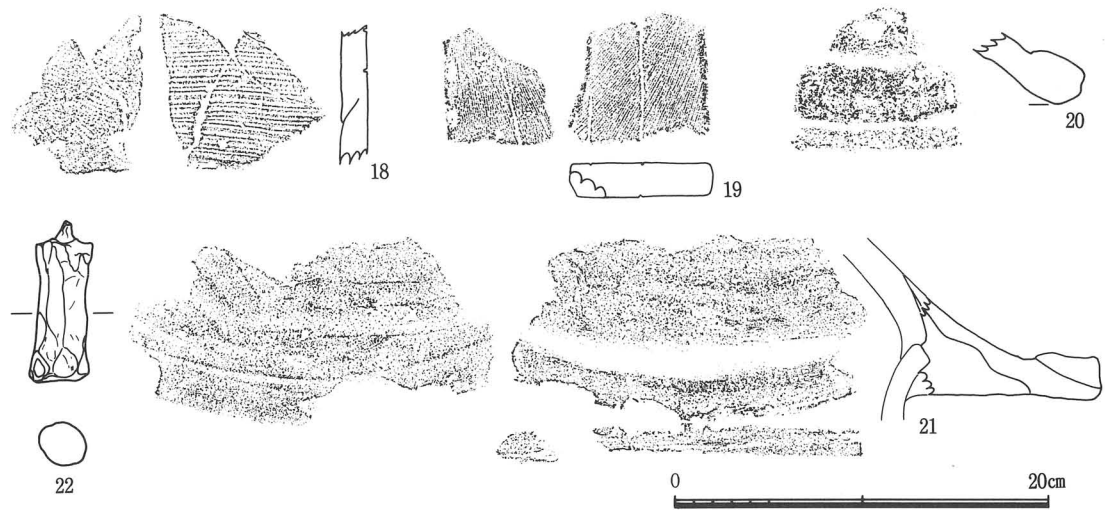


図83 4号～8号窯 ヘラ記号18 形象埴輪 蓋19～21 その他

C類(3)が1点ずつみられる。1の口径は35.1cmで、口縁部の高さは9.8cmを測る。A類は外面をB種ヨコハケ、内面は斜めにハケ調整している。C類の3も肥厚部にB種ヨコハケがみられる。胴部はいずれもB種ヨコハケをほどこしている。タガは1類から4類まで多様で、細いもの8・9や低平なもの6が目立っている。1ではBb-1種ヨコハケをほどこし、タガの間隔は約11cm、スカシ孔の直径は5.4cmである。12には長方形のスカシ孔がみられる。基底部は2点あり、高さは大型の13が8.4cm、中型の14が8.8cmである。外面の調整はB種ヨコハケで、接合法では右巻きづくり14がみられる。

朝顔形では中型の口縁部が2点ある。細かなハケ調整をほどこしたA2類の16とハケ目の粗いB類の15で、16には両面にベンガラが塗布されている。また17は小型の頸部で、ベンガラはみられない。ヘラ記号は3点みられ、1は菱状、18は下向きの二重弧線で、4にも沈線の一部がみえる。

形象では、蓋と人物がある。19はていねいなハケ調整をほどこした立ち飾り部の破片で、両面には外縁線と枠線がみられる。20・21は傘縁部で、どちらも粘土帯を貼りつけて下端を肥厚させている。21は傘部を分割して成形しており、上面の区割り線はみられない。22は高さ8.3cmの円柱状のもので、上端の中心に突起が作りだされ、下面には黒斑がある。ミズラとおもわれる。これらのなかで、6と18の埴輪については段丘上面にある工房群の埴輪に類似品があり、そこからの流出品とみられる。

8号窯煙出し部の埴輪はいずれも円筒である。口縁部ではA2類(24)とA3類(23)、胴部では突出した1類M形のタガをもつ25、基底部ではやや扁平なタガをもつ26がある。調整はB種ヨコハケであるが、種別は特定できない。基底部の高さは9.6cmである。

iii) C群窯 (図80・PLATE12b・d)

C群窯はB群窯からつづく一連の斜面地に設けられていて、9号から18号までの10基を数える。この斜面地はB群窯北側のくびれ部の最奥部を境に大きく外弯し、そのまま35mほど北へのびたのち、北端部で東北方向にのびる開析谷の南崖面にとりついている。窯跡群のある部位の標高は53mから58mで、B群窯のレベルとはほぼ同じである。南端にある9号窯とB群の8号窯の間隔は、もっとも接近している焚口部同士で4.3mを測る。C群窯はB群窯と同様に、基数と規模の把握を目的としておこなった。表8に各窯のデータを示している。

C群の窯はいずれも焚口から煙出し部まで確認され、良好な遺存状態を示していた。規模は最大が12.7m、最小が6.2mとかなりのばらつきがみられる。また9号から17号までは約30mのあいだに9基の窯が近接して築かれていて、なかには13号と14号のように焚口の一部が重なっているものも認められた。ただ18号だけは斜面地が東側にまわり込んだところ

ろに築くことを余儀なくされたためか、すこし離れたところに位置している。このなかで9号窯と18号窯について、確認調査をおこなった。

図84は9号窯の煙出し部の断面で、遺構検出面から約2.3mの深さで窯の床面を検出した。煙道の上半部は崩れ

埴輪窯	全長(m)	幅(m)	中軸方位	備考	
9号	12.7	1.5	N-40.5° -E	煙出し部調査	
10号	6.8	2.1	N-37.5° -E		
11号	8.8	1.5	N-62.0° -E		
12号	7.0	1.4	N-58.0° -E		
13号	7.1	1.5	N-80.0° -E		
14号	11.5	1.4	N-76.5° -E		
15号	9.0	1.6	N-79.0° -E		
16号	6.2	1.8	N-77.5° -E		
17号	8.0	2.6	E-2.0° -S		
18号	8.2	2.5	E-32.0° -S		確認調査

表8 C群埴輪窯の規模一覧表

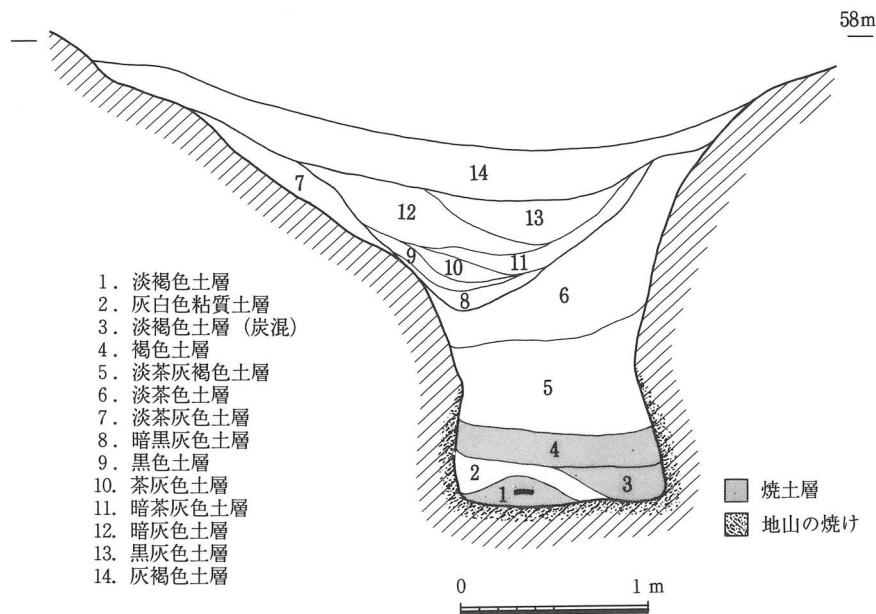


図84 9号窯 煙出し部

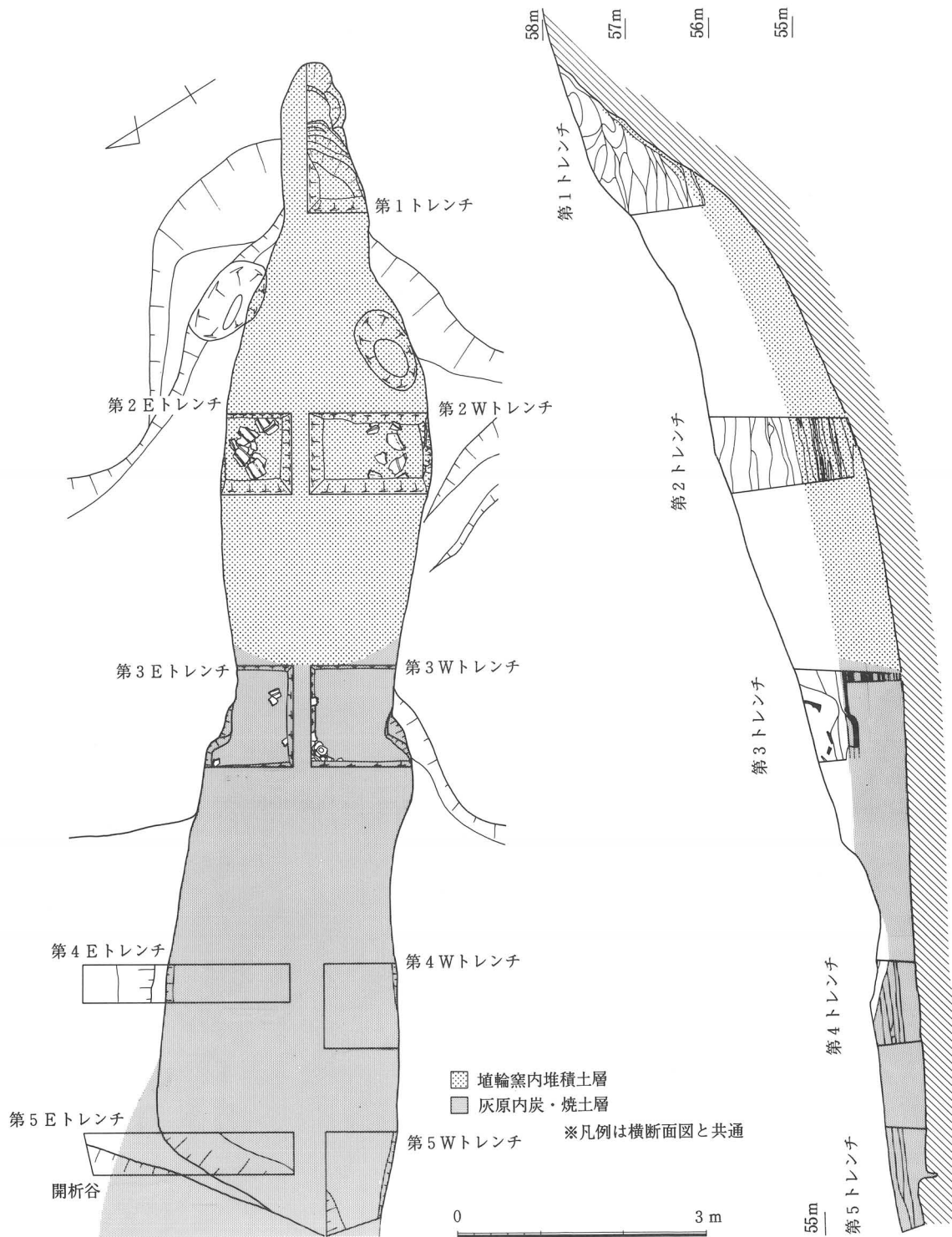


図85 18号窯 平面図・縦断面図（確認調査）

ていたが、フラスコ状に掘削された下半部はよくのこっている。壁面や床面の焼固の程度は弱く、赤色化も顕著でない。この壁面の曲線を煙道上端にむけて延長すれば、地山面での孔径は0.3~0.4mになるとおもわれる。遺物としては煙出し部の下層から埴輪片11、中層から10、上層の落ち込み部から奈良時代の土器片が出土しているほか、焚口部で多くの埴輪片を検出している。

18号窯は全長8.2m、焼成室中央部(第2トレンチ)での幅2.5m、同部での現存深は1.4mである(図85)。焚口の幅は2.1mですこし狭くなっている。煙出し部(第1トレンチ)は焼成室奥壁部から絞ったように急に狭くなり、先端では0.5mを測る。したがって窯の全体は、図85のようにコーラ瓶のような形を呈することになる。床面の傾斜は焚口から焼成室中央部までは約9°と緩やかで、そこから奥壁までは20°~26°と次第にきつくなり、煙道は約50°~55°で立ち上がっている。壁面と床面は素掘りのままで、粘土などを貼った痕跡はみられなかった。第2トレンチの断面図をみると、埋土は上位の崩落土層と下位の堆積土層におおきく分けられる(図86)。崩落土層は灰褐色ないし茶灰褐色系の砂質土・砂礫・粘質土などで、いずれも地山を形成している土層が埋没したものである。堆積土層は淡赤褐色の焼土層と赤黄褐色系土層との互層が連続した

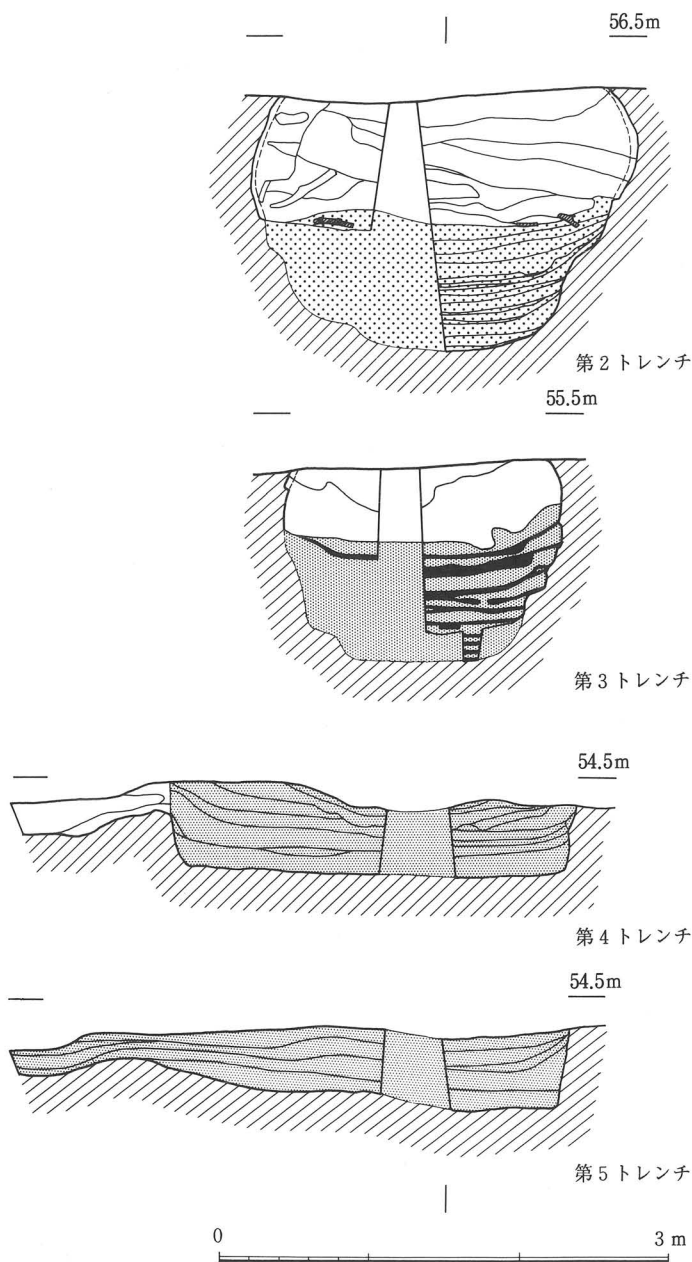


図86 18号窯 横断面図

もので、床面となる焼土層は厚さ数cmのものから11cmのものまで全部で9枚確認された。西側の壁面をみると、堆積土の中位で段が認められ、焼成室は一度掘り直されていることがわかる。土層中からは壁材や天井材とみられる焼土塊が多数検出されたが、スサを混入させたものはなかった。焚口にあたる第3トレンチの横断面図および縦断面図では、焼成室の9枚の床面に対応する黒灰色炭灰層と淡赤褐色焼土層の互層を9ないし10層分検出している。また煙出し部の第1トレンチでは、崩落土層の上に暗茶灰色ないし黒灰色土層がみられるが、堆積土層中からわずかな焼土が出土しているものの、壁面にもうすい焼けが遺存するだけで、それほど焼固していない。遺物としてはいくつかの床面から埴輪片を検出している。如何せん今回はトレンチ調査であるため、出土状況について云々することは、将来の整備調査をまって検討することにしたい。

前庭部は窯の延長線上を北西方向に長さ5.3m、幅2.5～2.9m、深さ0.5mの箱形に掘りくぼめて成形しており、その末端には幅0.7m、深さ0.3mの溝を設け、北側に隣接する開析谷に接続している。

C群窯の灰原は、B群窯と同様に、その大半は「新池」側にひろがっている。北端にある18号については、検出した前庭部や開析谷の周辺一帯に炭灰や焼土に混じって大量の埴輪片が散乱していた。図87は18号窯のすぐ北側にある開析谷に形成された埴輪溜である。調査したのはその東端部で、長さ4.5m、幅2mの範囲を検出した(PLATE13)。断面図の土層について記すと、第1群の第1層は当初から底部に堆積していた砂礫層、第2群の第2層から第10層まではその後の砂礫土層や砂質土層、第3群の第11層から第15層は操業期間中に堆積した黒褐色系の土層、第4群の第16層以上は廃窯後の土層である。このうち第3群が埴輪と焼土を多含する土層で、灰原に相当する。また第2群の大半を占める第3・4・7・8・9・10層は南側、すなわち18号窯側から堆積しているのが読み取れる。これらの土層は窯の構築時に排出されたものと考えられ、その東側へのひろがりについては、断面図の位置から東へ1.5mほど寄ったところで第3群の埴輪群がほとんど底面に接して出土し、それより以東には第2群の土層はみられなかった。このことから18号窯構築時の土砂は開析谷のくぼみに限定的に投棄され、その後に灰原がその土砂を覆うようにして形成されていったことがわかる。その結果、この開析谷は堰止められた恰好になり、上流側にある深さ3.4mの谷は当該レベルまで急速に埋積することになったとみられる。なおこの埴輪溜の遺物としては円筒が大部分で、あと若干の形象があり、そのほかに土師器の甕5と若干の土師器片や焼け焦げた木片がある。

C群窯の遺物

9号窯の遺物(図88・89、PLATE74、表48-9)

埴輪は円筒・朝顔形・形象がある。円筒では器壁の薄い8などが小型になる可能性があるが、

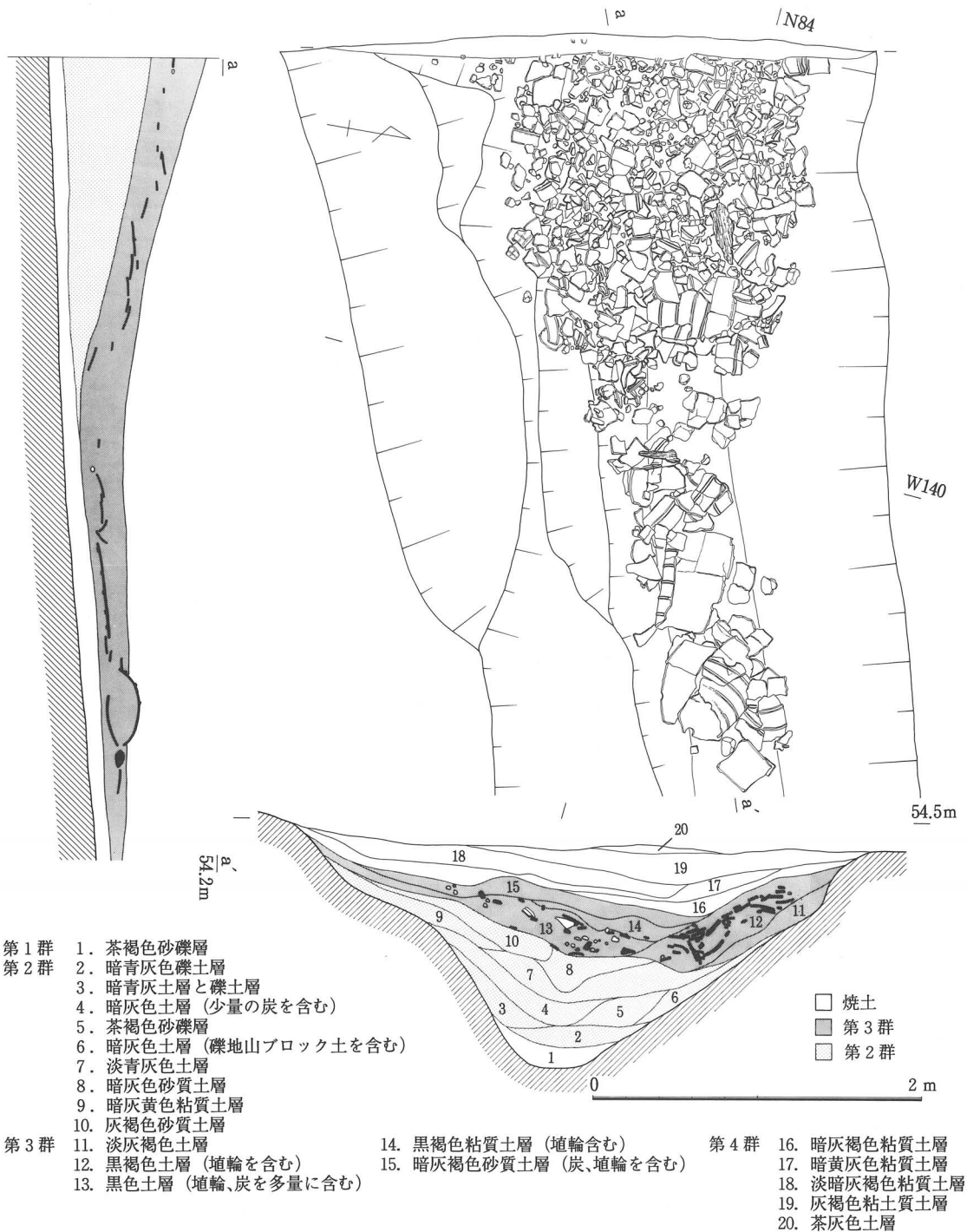


図87 18号窯 埴輪溜

破片の多くは中型とみられる。口縁部はA2類1・2、A3類3・4、C類15がある。口縁部の高さは2が7cm、4が8cmで、A3類がやや高くなっている。胴部では11にB種ヨコハケが唯一みられるほかは、いずれも2次調整は認められない。タガは1類のM形が多くて、なかには6や16のように扁平なものもある。タガの間隔は5で6.5cmを測る。スカシ孔は円形以外は検出して

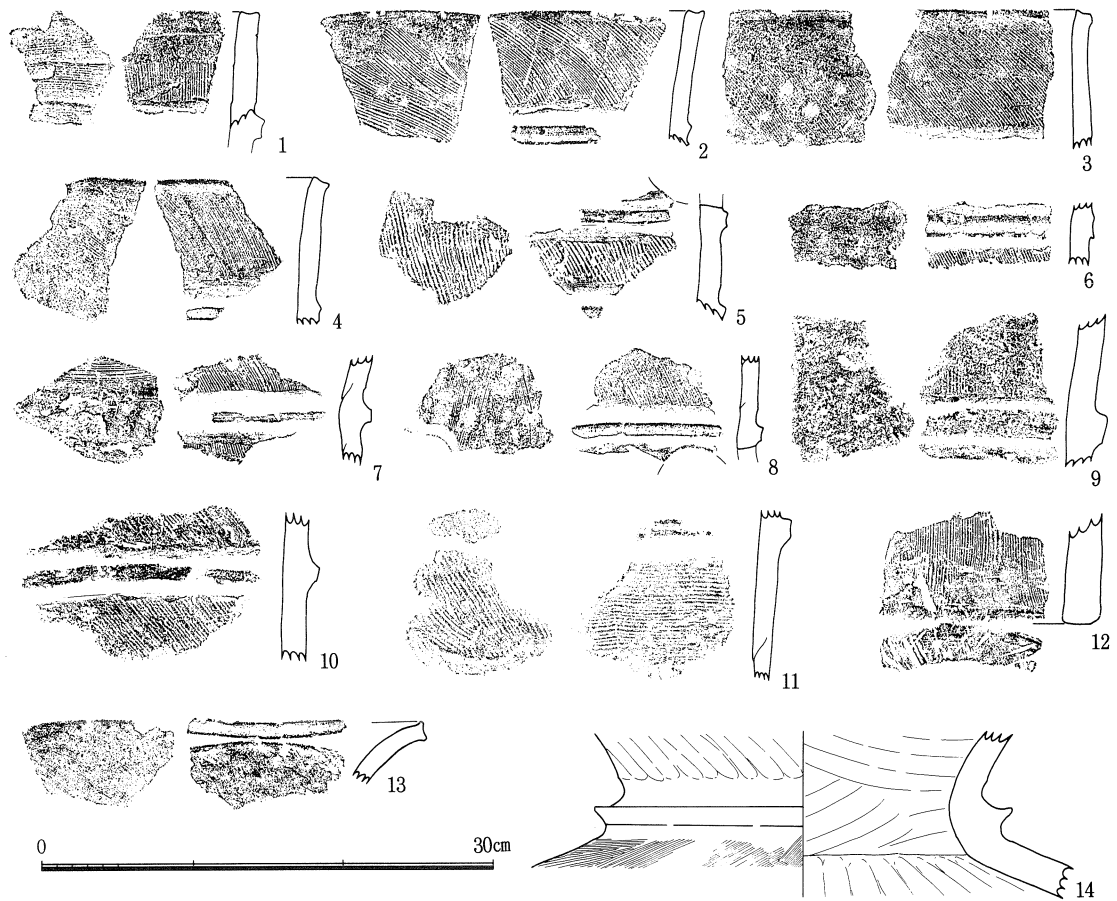


図88 9号窯 円筒埴輪1~12 朝顔形埴輪13・14

いない。基底は1点のみ得られている。朝顔形は小型の口縁部と中型の頸部がある。13はA1類で、外面をナデ調整、内面を斜めにハケ調整している。14は鋭く突出した突帯を有するもので、肩部はていねいにハケ調整し、口縁部はなでている。内面は指ナデ調整痕が顕著で、数多くの指紋がみられる。ヘラ記号は2点あり、15は口縁部につけられた○の中心に横線をひき通したもので、16は凸形の弧線を刻んでいる。形象は盾がみられる。17は鱗部の破片で、盾面に半截竹管で描いた外郭線と鋸歯文があり、鋸歯文の内側はヘラ描きの単直線によって埋めている。18は中央部の破片で、盾面には半截竹管による横位の区割り線がひかれている。19も同じく中央部の破片で、外区にヘラによる鋸歯文、内区に連続三角文を配している。20は器財埴輪の鱗状の部分とみられ、半截竹管による界線がみとめられる。なおこの界線は一度引き直されている。9号窯の埴輪は円筒の特徴からV期の前半に比定できるもので、これらのなかにベンガラ塗布資料はなかった。なお19については盾面の文様構成が古相を示し、かつ半截竹管による条線がみられないことからすると、すぐ南に隣接するB群窯からの混入品になるのかもしれない。

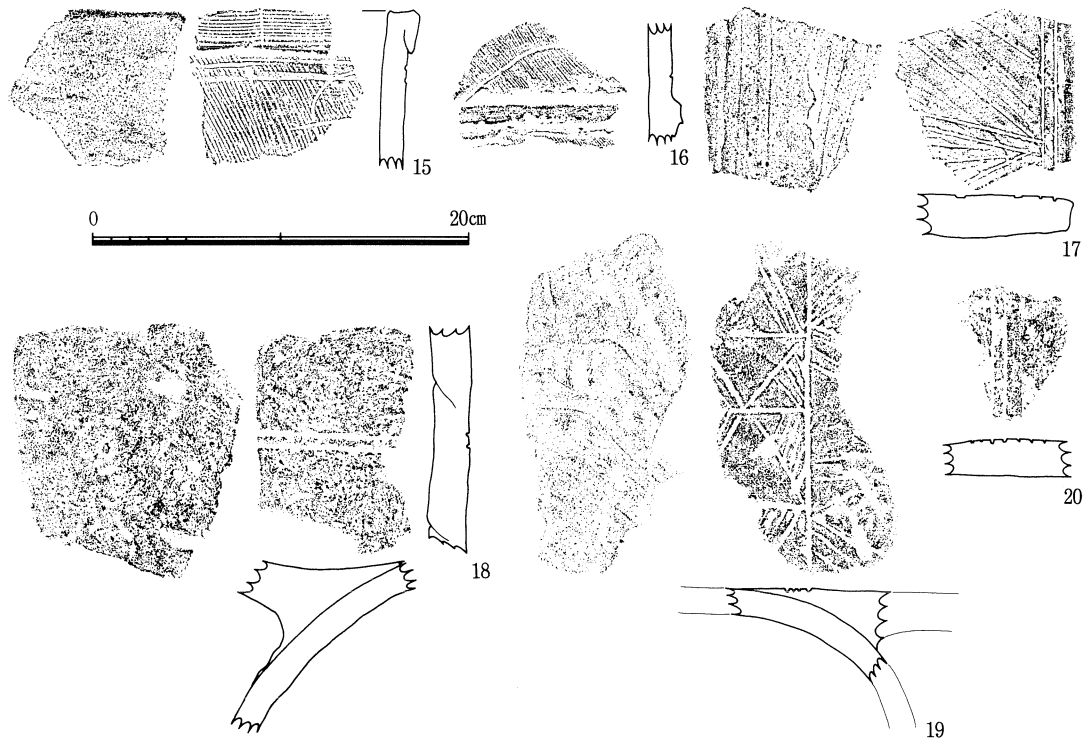


図89 9号窯 ヘラ記号15・16 形象埴輪 盾17~19 その他20

10号窯~16号窯の遺物(図90~92・PLATE72・73a・75・76a、表48-10)

円筒・朝顔形・形象がある。円筒では中型が多い。口縁部の4点はA1類(17)、A2類(2)、A3類3、D類1がそれぞれ1点ずつある。胴部は1次調整のタテハケのみで、2次調整をほどこしたものは出土していない。タガは1類のM形(7・14)が主体だが、低平なもの(4・8・12)が多く、断面が三角形のもの(5)もみられる。6は低平な4類にヘラあたりが連続的に認められる。スカシ孔は円形である。また15の内面には黒斑がみられる。朝顔形の16は肩部片で、外面はタテハケをほどこしている。ヘラ記号は舟17と縦型の羽状文18がある。17の舟は1号井戸の1や8号溝の6のように艫の矩形の表現がなく、舟体もゴンドフ状に深く描かれている。

形象では家・盾・蓋・大刀・人物・動物・その他がある。家の19は屋根の網代部分とみられる。20は出入り口と大壁の表現がみられるもので、残存高28.4cmを測る。幅5cmの出入り口には長さ約15cmの庇がつき、両側部には沈線がひかれている。外面はハケ、内面はナデ調整している。21は屋根の棟部で、一端に破風がみられる。上縁には鰹木の剥がれた痕がある。盾は鱗状部22~30と円筒部31とがある。これらの沈線はいずれも半截竹管によって描かれ、なかでも25・27などは文様構成や上向きの小孔から石見型と認定される。22にも同様の小孔があげられている。また25は後述する8号溝の36・37と比べると、上辺中央の角状突起が矩形に突出し、直弧文の構成も異なっている。蓋32は傘部片で、下縁には沈線で割り付けたあと粘土帯を貼り肥厚

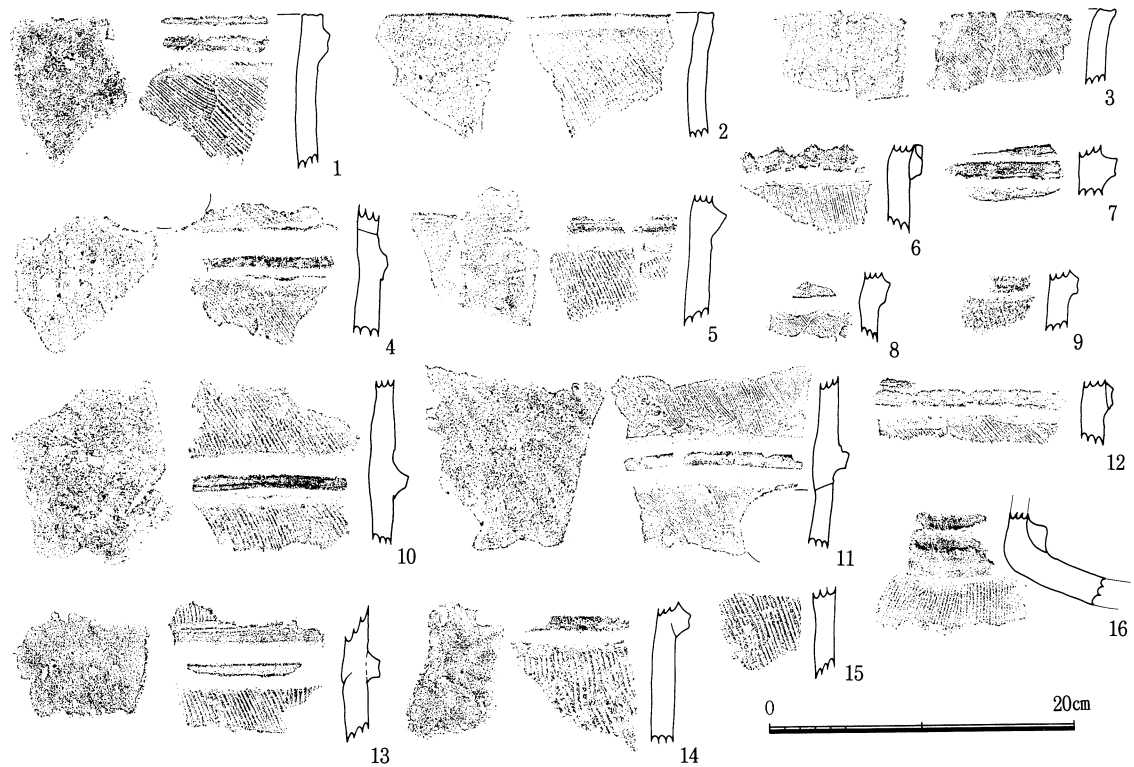
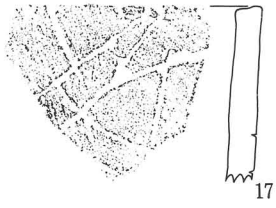


図90 10号~16号窯 円筒埴輪1~15 朝顔形埴輪16

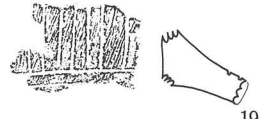
させている。大刀**33**は護拳部で、裏面の柄に取り付く部分に剥離痕がある。幅は4.9cmで、端部に刺突文、両側縁に沈線をほどこしたのち、半截竹管による直線を粘土帯に直交させている。**34**も同様の粘土帯で、**33**と同じ文様がみられる。人物は3点出土している。**35**は頭部を欠いた上半身像である。残存高は43.8cm、裾幅25.2cm、底径14.8cmを測る。両手を前に突き出し、手の平をあわせていることから合掌していたとみられる。指は親指が完存で、左手の中指が中途まで遺存し、ほかは復原である。衣服は右前にあわせ、裾は大きく開いている。襟から打ち合わせにかけては半截竹管による条線を2帯平行にひき、そのあいだをまばらな斜線で埋めている。条線は両肩のところとぎれており、もとは耳飾りが垂れていたか頸飾りの大きい珠がかぶさっていたのであろう。腰紐は低平な粘土帯を貼りつけ、結び目は左側に寄っている。スカート状の裾は2段の格子文で区画されている。この衣服は襲とみられなくもないが、セットになる襷の表現がみられない。様相としては巫女と考えられるので、襷は省略したものとおもわれる。製作手法は円筒の基台から頸部まで粘土紐を順次へ巻き上げて一旦調整した後、頭部、腕、裾部を付け加えている。外面はおもにハケ調整であるが、腕から肩にかけてははいねいになでている。内面は指ナデ調整するが、裾部の分厚いところでは一部をヘラケズリしている。腕は肘までが中空で、その先は中実である。スカシ孔は両脇にあって、径約4.5cmを測る。胎土は砂粒を含むも精良である。色調は淡褐色を呈している。ベンガラはみられない。**36・37**は



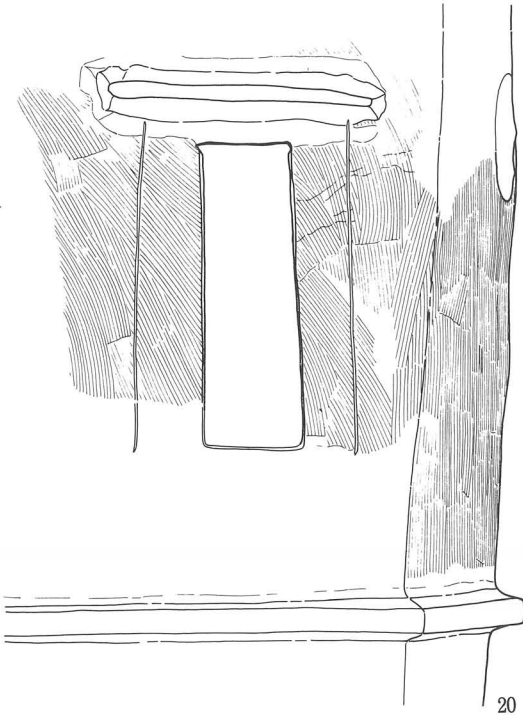
17



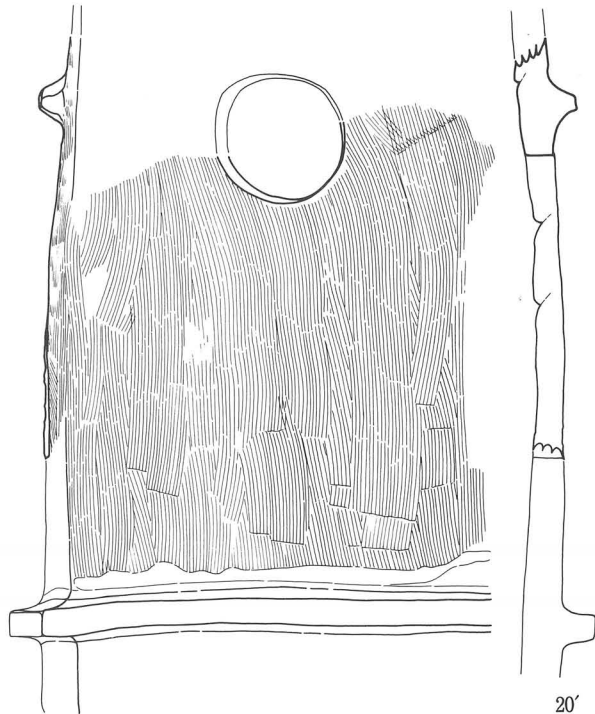
18



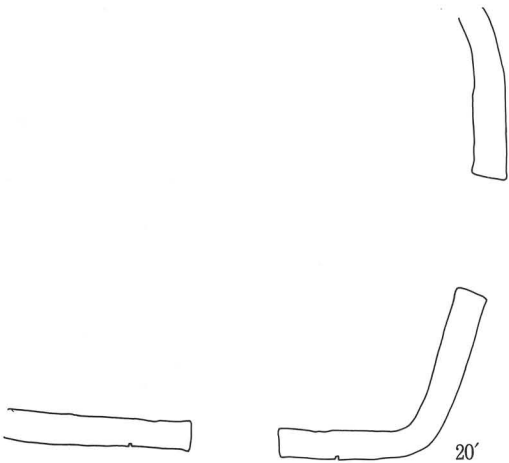
19



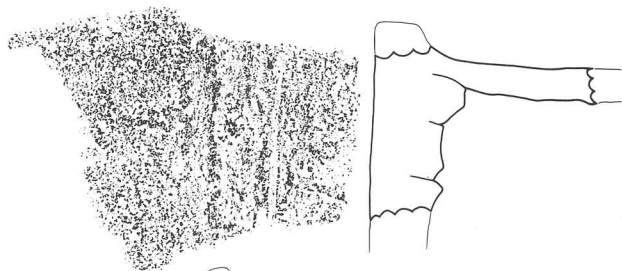
20



20'



20'



21



図91 10号～16号窯 ヘラ記号17・18 形象埴輪 家19～21

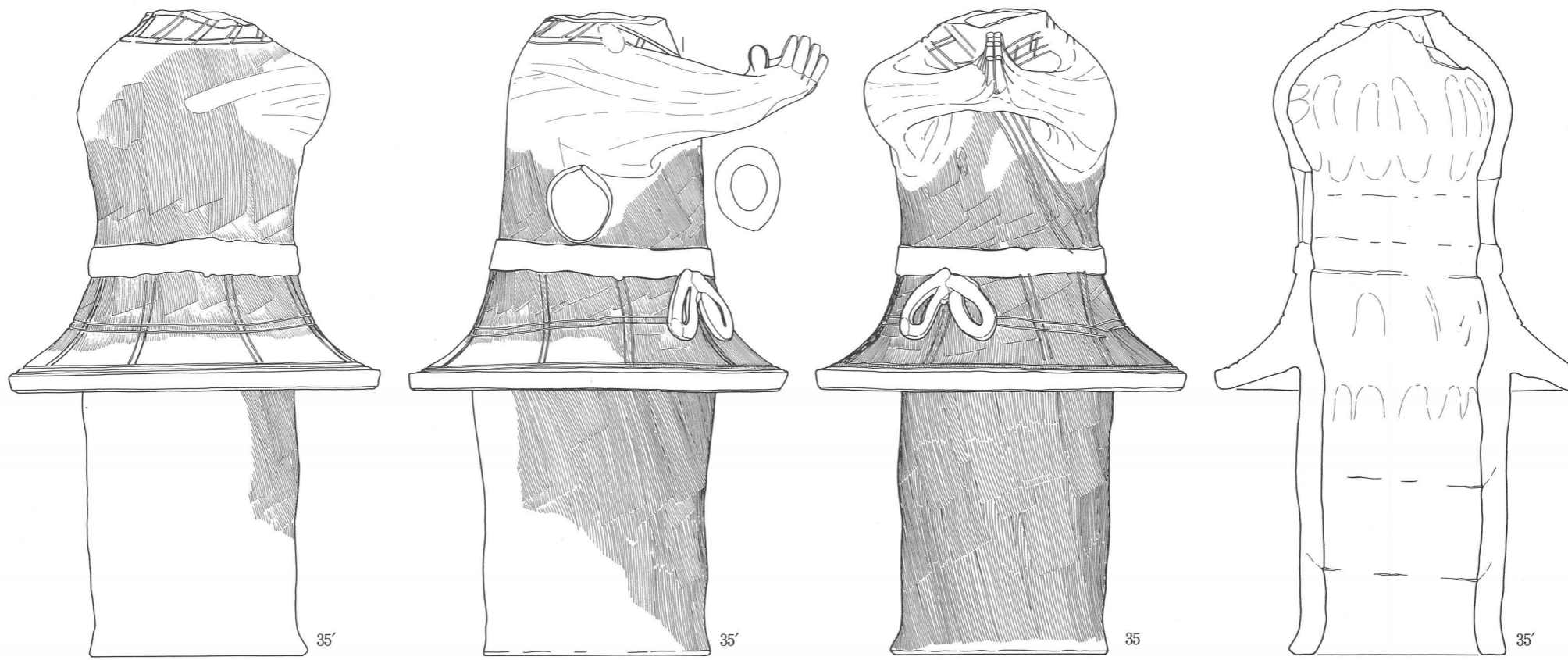
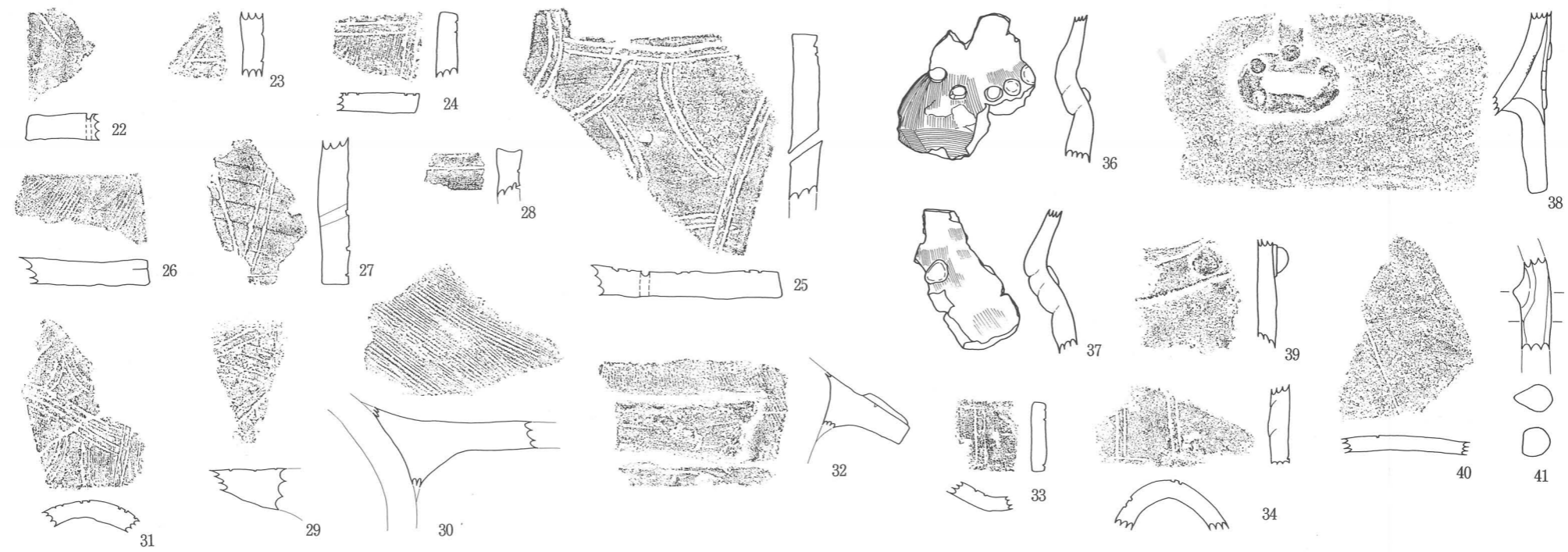


図92 10号~16号窯 形象埴輪 盾22~31 蓋32 大刀33・34 人物35~37 動物38・39 その他40・41

頸部片で、どちらにも頸飾りである直径1cm~1.5cmの粘土粒を連ねて貼りつけている。動物では馬が2点出土している。38は鞍の障泥の部分である。馬体への貼りつけは、上端を折り曲げた粘土板を下からあてがい、馬体と粘土板のあいだに粘土を詰め込んでいる。外面には鋸留した輪鏡をつけている。39は三繫の断片で革帯に金具を付している。40は薄手の粘土板に沈線をほどこしたもの、41は突起のある円柱状のものである。41は鹿の角ともみられるが定かでない。

17号窯の遺物(図93~95、PLATE73b・76b・77、表48-11)

円筒と形象の埴輪がある。円筒はいずれも中型である。口縁部はA2類が1点(6)、A3類が

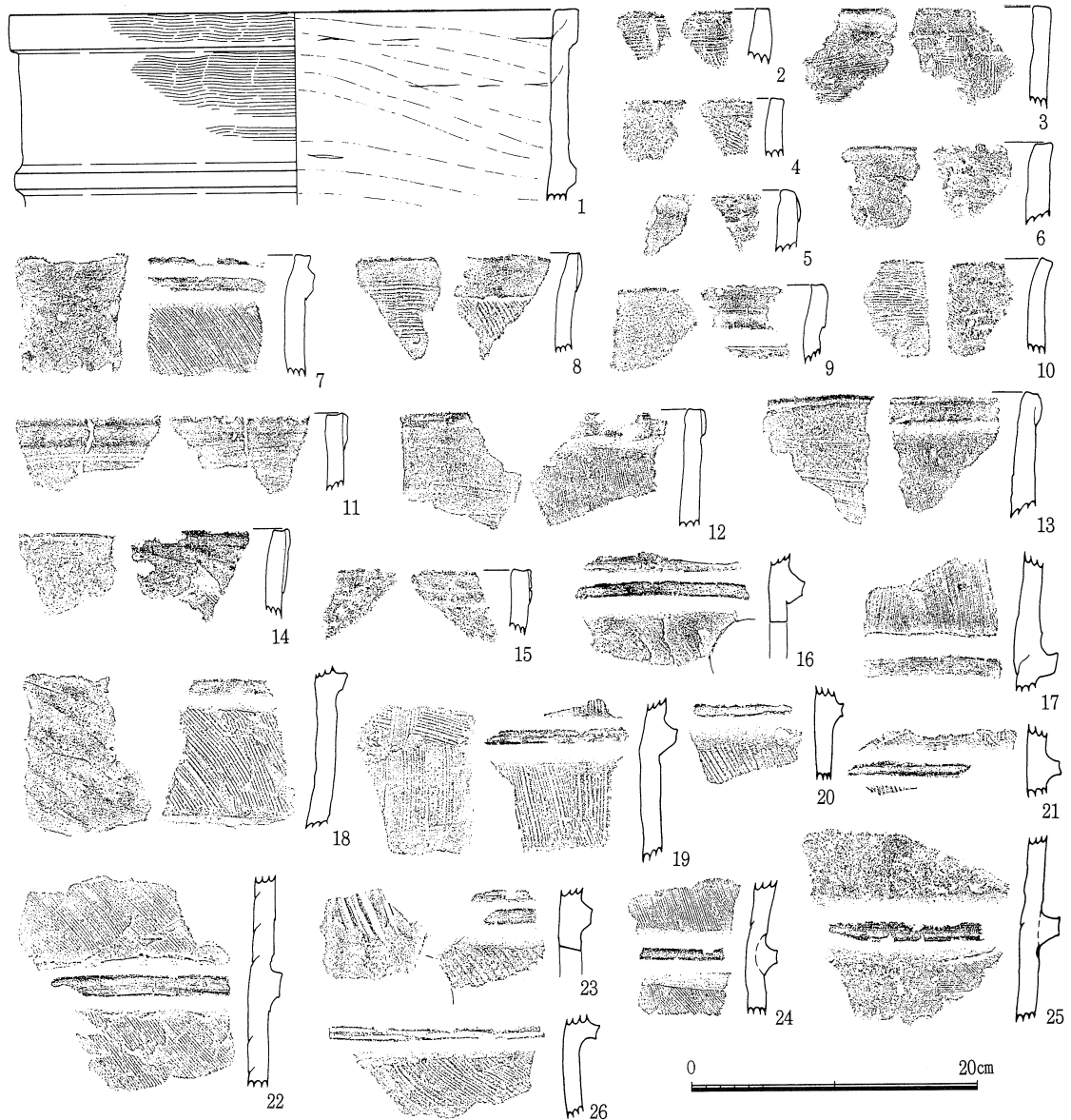


図93 17号窯 円筒埴輪 1~26

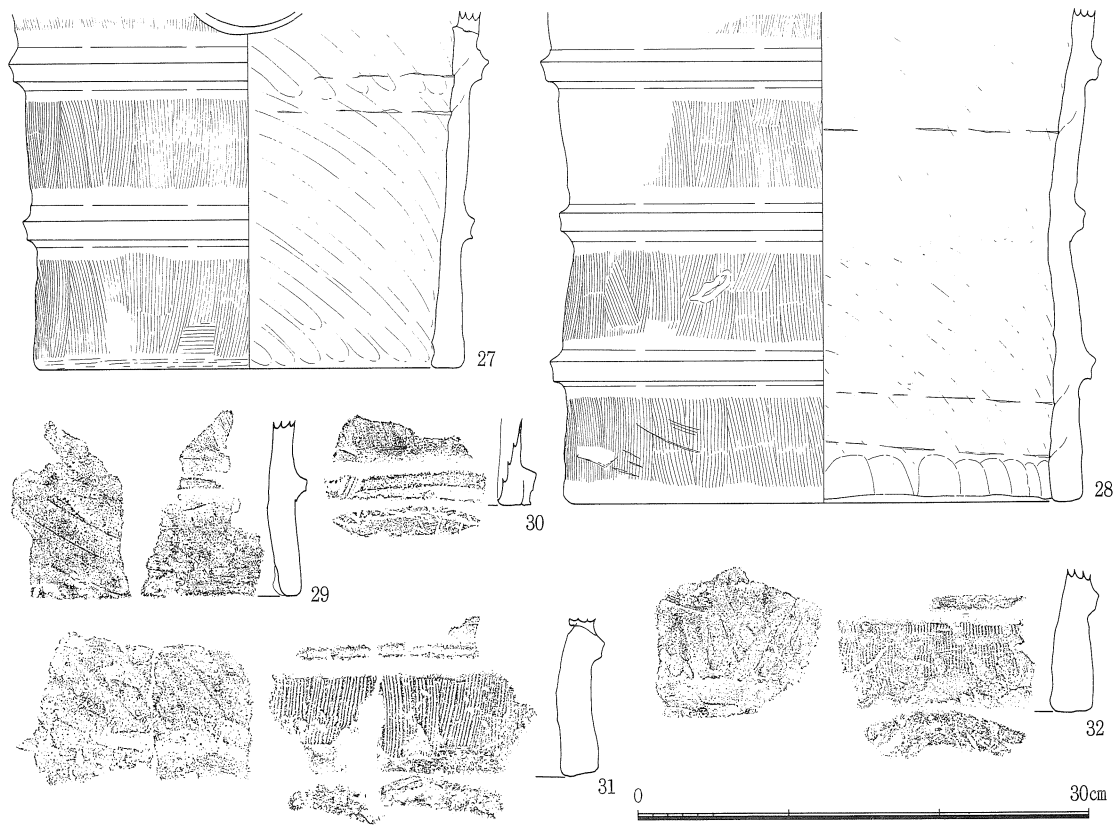


図94 17号窯 円筒埴輪27~32

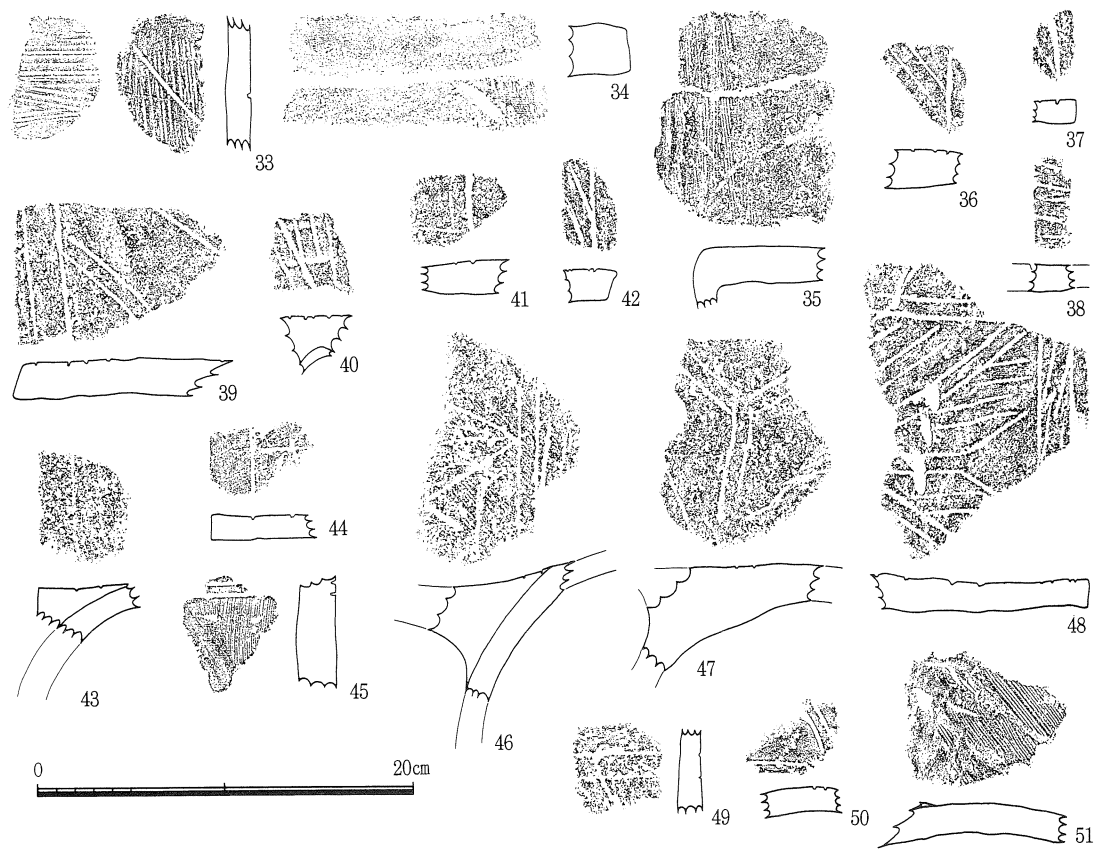


図95 17号窯 へら記号33 形象埴輪 家34・35 盾36~51

3点(3・4・10)、C類が10点(1・2・5・8・9・11~15)、D類が1点(7)で、量的にはC類の多さが目立っている。C類については、肥厚部の高さが3cm以内のもの(1・8など)と4cmを越えるもの(14)がみられる。1は口径39.9cm、口縁部の高さ10.4cmで、外面はヨコハケ、内面はナデ調整している。口縁部の外面を2次調整するのは1だけで、ほかは1次調整のタテハケのみが看取される。胴部についても、2次調整するものはほとんどみられず、25の横方向のハケも1次調整のものとして判断される。タガは1類が目立つものの、2類(18・22)、3類(21)、4類(17・26)もあって、かなり多様である。タガの間隔は27が11cm、28が10cmである。スカシ孔は円形のみ確認している。基底部の高さは6.4cm(29・32)から8.4cm(27)におさまっている。30は下端部外縁にタガ状の突帯を巻きつけたもので、ほかに例をみない。いちおう基底部に含めているが、倒立技法による形象埴輪の基台部とも考えられる。ただしその場合は形象の本体と組み合わせで樹立することになる。接合法は27と31が右巻きづくり、28が左巻きづくりである。ヘラ記号は斜行する沈線が1点(33)認められるだけである。また16には、かすかに布目痕が観察される(PLATE70b)。

形象では家(34・35)と盾(36~51)がある。34は家の基台部の外縁、35は壁面の一部とみられる。盾は鱗部と円筒部の破片があり、大半の盾面には半截竹管によって外郭線や鋸歯文が描かれている。このなかで46・48は盾面の構成が「II字形」を呈するものであるが、42や48などでは綾杉文までも半截竹管で刻まれている。51は円筒部の破片で、鱗部を接着するための刻み目が多数つけられている。

なお17号窯の埴輪にはベンガラはみられない。

18号窯の遺物(図96~98、PLATE73b・78、表48-12)

18号窯ならびに18号窯の灰原の資料については、平成5年度の整備にともなう調査が予定されているために、今回は埴輪と土師器の一部を報告する。

埴輪は円筒を4点紹介する。1は口径44cm、残存高102.6cmを測る。基底部を欠くものの、井戸から出土した同型式の円筒2をもとに復原すると、110cmになる。口縁部はB1類で、高さは17.2cmである。タガは低平な1類で、8.4cm~9.2cmの間隔で10条が確認される。円形のスカシ孔は2・5・7・9の各段にそれぞれ2孔ずつあけられている。外面は1次調整のタテハケのみで、内側も全面をハケ調整している。外面をみるとタガの3条と6条あたりでハケ目の方向が変わり、また内側では第9段に相当する部位で接合部をなでつけていることから、およそ4段階にわけて粘土が積み上げられていったことがわかる。胎土は精良で、色調は淡黄褐色を呈している。

2は中型のC類の口縁部で、口径は39cmを測る。外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整している。ところで2の内面上半にはハケ調整後にほどこされた多数のヘラタタキ痕がみられ

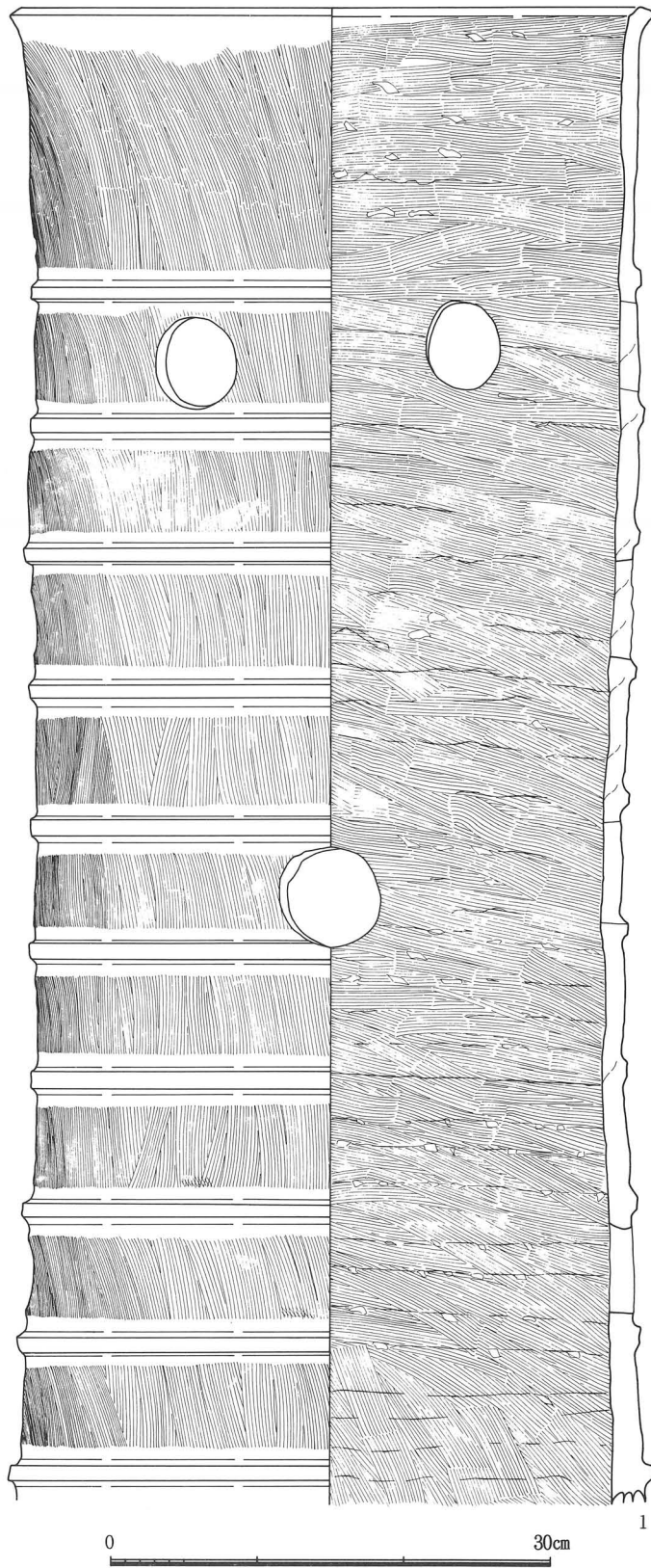


图96 18号窑 円筒埴輪 1



図97 18号窯 円筒埴輪 2～4

るが、これらは図の▲印の左側では右縁が深く、逆に右側では左縁が深くなっているのが観察された。こうした痕跡はおそらく成形直後に先端部をしゃもじ状に丸くしつらえた工具で口縁部の歪みを正したあととみられ、埴輪の傍らに居立った工人がヘラを左右に振り分けながら調整していた所作が想像される。3は中型の上半部で、口径37.8cm、残存高43.6cmを測る。口縁部はA3類で、高さは10.8cmである。器面の調整は外面が1次調整のタテハケ、内面はナデ調整である。タガは低平なM形の1類で、その間隔は13cmから14cmである。スカシ孔は円形で、上位2段には穿孔していない。また最上段に3本の平行斜線からなる記号文がみられる。

4は小型で、口径27.4cm、器高52cmを測る。口縁部はA3類で、高さは9.4cmである。外面は基底部から第1段にかけてナデ調整し、上半部をタテハケ調整している。内面はナデ調整である。タガは低平なM形の1類で、間隔は約15cmである。スカシ孔は円形で、第1段と第2段に直交するように穿たれている。基底部は高さ17.5cmで、接合法は左巻きづくりである。

第2段には3本の沈線を矢印状に刻んだ記号文がみられる。

土師器では甕がある。5は口径16.3cm、器高23.7cm、最大腹径22.3cmを測る平底の甕である。体部はほぼ球形で、口縁部は頸部から上方に立ちあがったのち、上縁部が外弯している。底部は径8cmと安定していて、内面は平滑になでられている。体部外面は基本的にナデ調整であるが、子細にみると、中位に斜め上方へむかうナデケズリとみられる条痕がわずかに認められる。内面は底部から引き続いて平滑にナデ調整している。口縁部は内外面ともていねいなヨコナデをほどこし、端部は尖りぎみにまるくおさめている。胴部には炭化物が付着した縦6mm、横3.5mmの穀粒圧痕がみられる。また体部中位と口縁部外周に煤がついている。胎土には径2mm前後の粗砂粒を多く含むも精良で、色調は茶灰色ないし淡茶褐色を呈している。

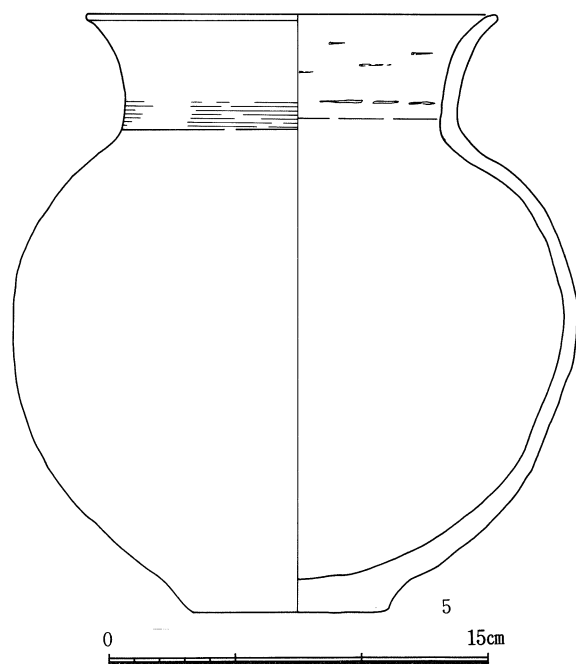


図98 18号窯 土師器 甕 5

II 埴輪工房

工房群は段丘の西辺部にあり、3棟が南北にほぼ等間隔に連なって設けられていた(図99、PLATE14)。南から順に1号・2号・3号とする。なおこのあたりの段丘は北から南へ向かって緩やかに傾斜している、上面は開墾のために一様に削平されていた。

1号工房(図100・101、PLATE15・16)

1号工房は東西10.2m、南北11.6mの方形にちかい長方形を呈し、周溝をもつ。周溝の一部は削平されて途切れているが、本来は全周していたと考えられる。遺存状態のよい北側の周溝

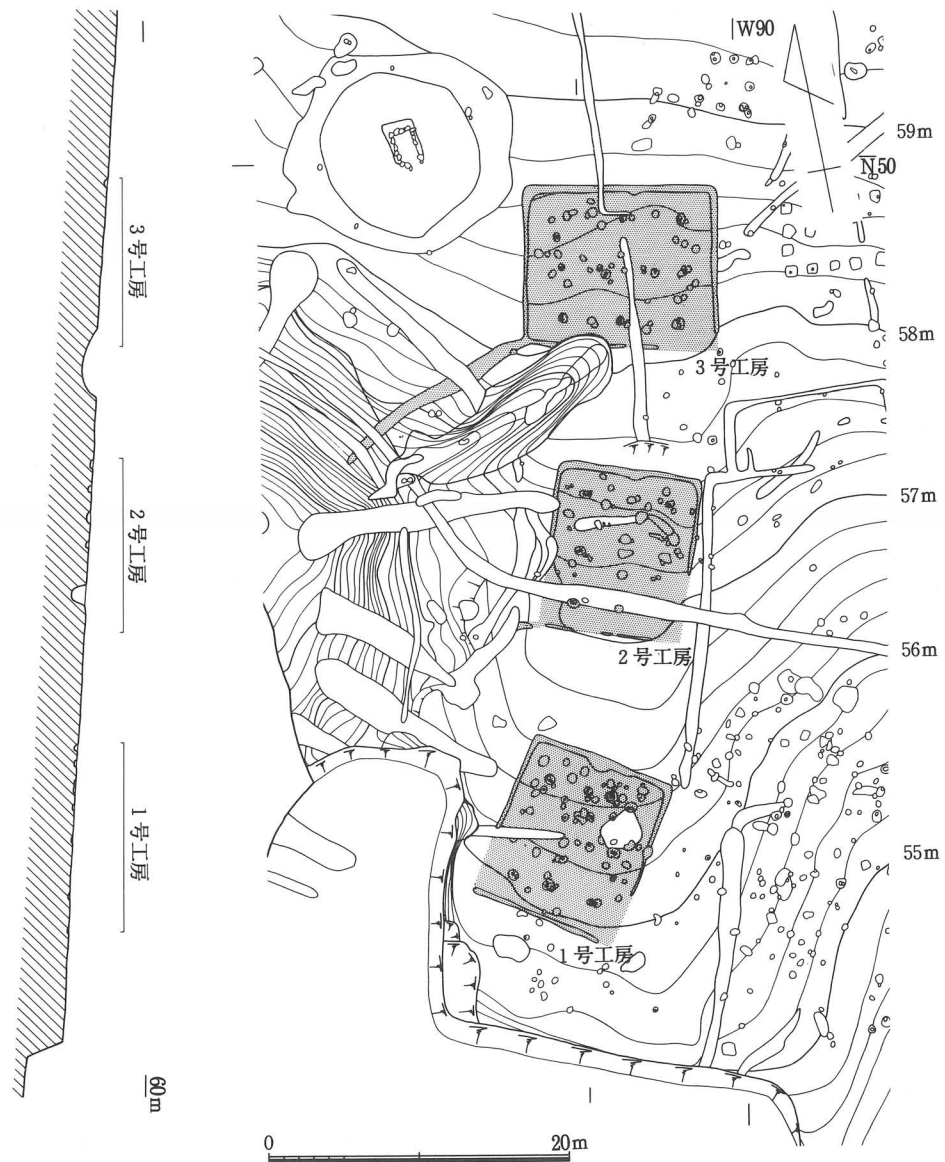
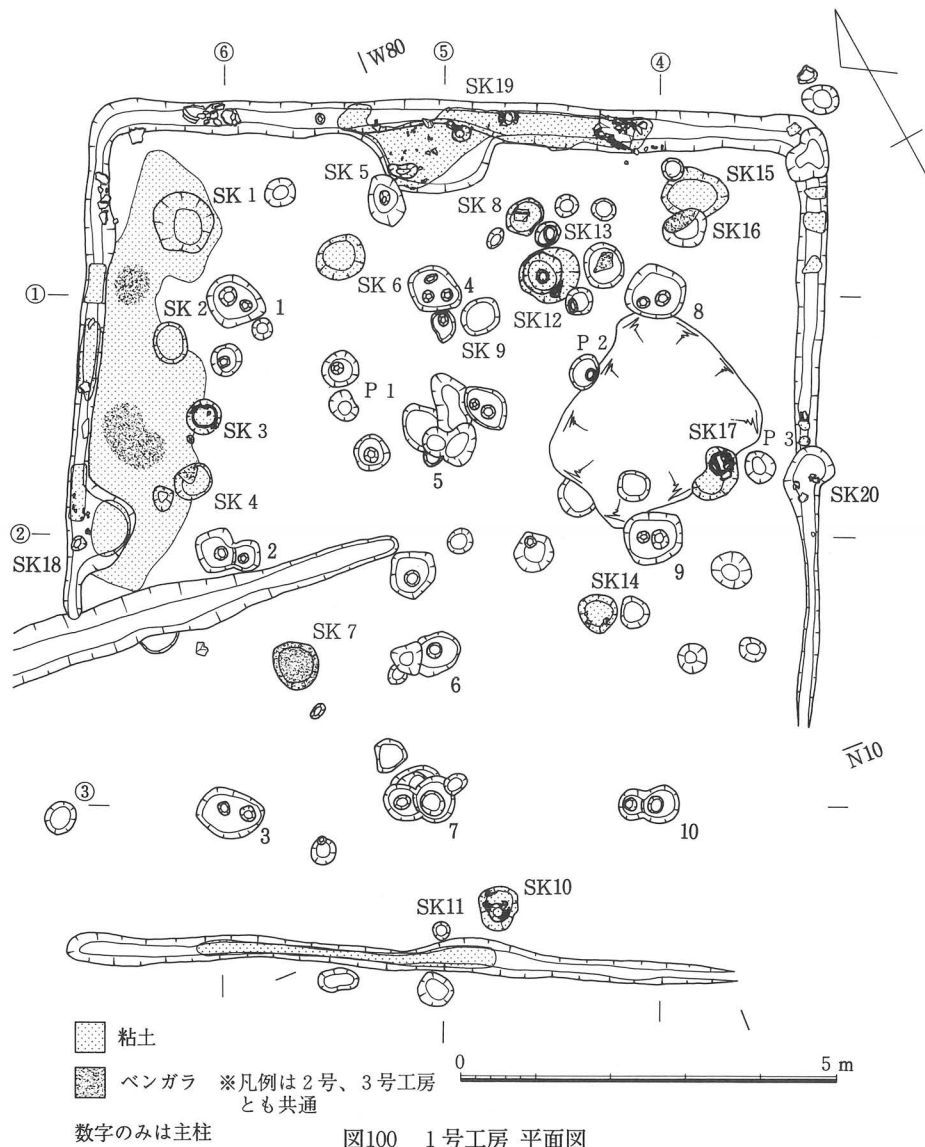


図99 工房群 位置図

(以下では北周溝といった表現にする)では、溝幅0.56m、現存深0.3mを測り、床面と外周地山面(削平面)との段差は0.15mである。南周溝は削平の度合が強かったために、深さは0.1m未満ときわめて浅くなっている。また北周溝底と南周溝底の比高差は約0.5mあり、かりに床面と溝底の高低差が北周溝・南周溝とも同じとすれば、床面が北から南へ 2° 前後で傾斜していたことになる。主柱穴は桁行2間(柱間3.3m前後)、梁行2間(柱間2.9m前後)の側柱(主柱1~4・7~10)と中軸線上にある2本の棟持ち柱(主柱5・6[柱間、両端部約2m、中央部約2.7m])で構成されている。中軸線の方法はN- 30° -Eで、南北棟の建物になる。側柱はいずれも東西にならんだ2個一対の柱痕(以下、東側の柱をE、西側の柱をWと表現する)を有する柱穴からなり、掘形は径0.5mから0.9mの不整な円形(主柱8)や楕円形(主柱3)もしくは双円形(主柱10)などさまざまである。棟持ち柱の掘形は径0.4mと0.55mで、それぞれ単独の柱痕が確認された。



各柱痕の直径は14cm(主柱1E)から最大30cm(主柱7E)のものまでであるが、ほとんどは20cm未満である。深さについては、主柱9Wの0.32mや主柱6の0.36mがやや浅くて、ほかは0.5~0.75mとかなり深い。

工房内での柱穴以外の遺構としては、土坑が注目される(図102・103、PLATE17・18、口絵5・6)。土坑はまず床面に点在する土坑Ⅰ類と周溝に接して掘られた土坑Ⅱ類がある。土坑Ⅰ類は、おおむね直径0.5~1.5m、深さは0.1~0.55mの不整円形で、粘土ないし粘質土を埋置するもの(SK1~4・6・8・10・12・14・17)が10カ所、ベンガラを検出したもの(SK7・13・16)が3カ所、粘土とベンガラをともに検出したもの(SK15)が1カ所あり、あとは粘土もベンガラも検出されなかった。粘土を検出した土坑のうち、6カ所には円筒埴輪が伴っていた。これらの円筒埴輪はSK3やSK17の埴輪のように、もとは高さ30cm前後になるようにうち欠いていたと考えられる。おそらく焼き損じたりした埴輪を粘土の外容器として用いるべく、土坑内に立て置いたものであろう。なおこのほかにも同等の規模の土坑がいくつかみられる。南端のSK11などは、SK6と同様に、坑底に炭がみられ、土坑Ⅰ類であった可能性が高い。土坑Ⅱ類(SK18・19・20)

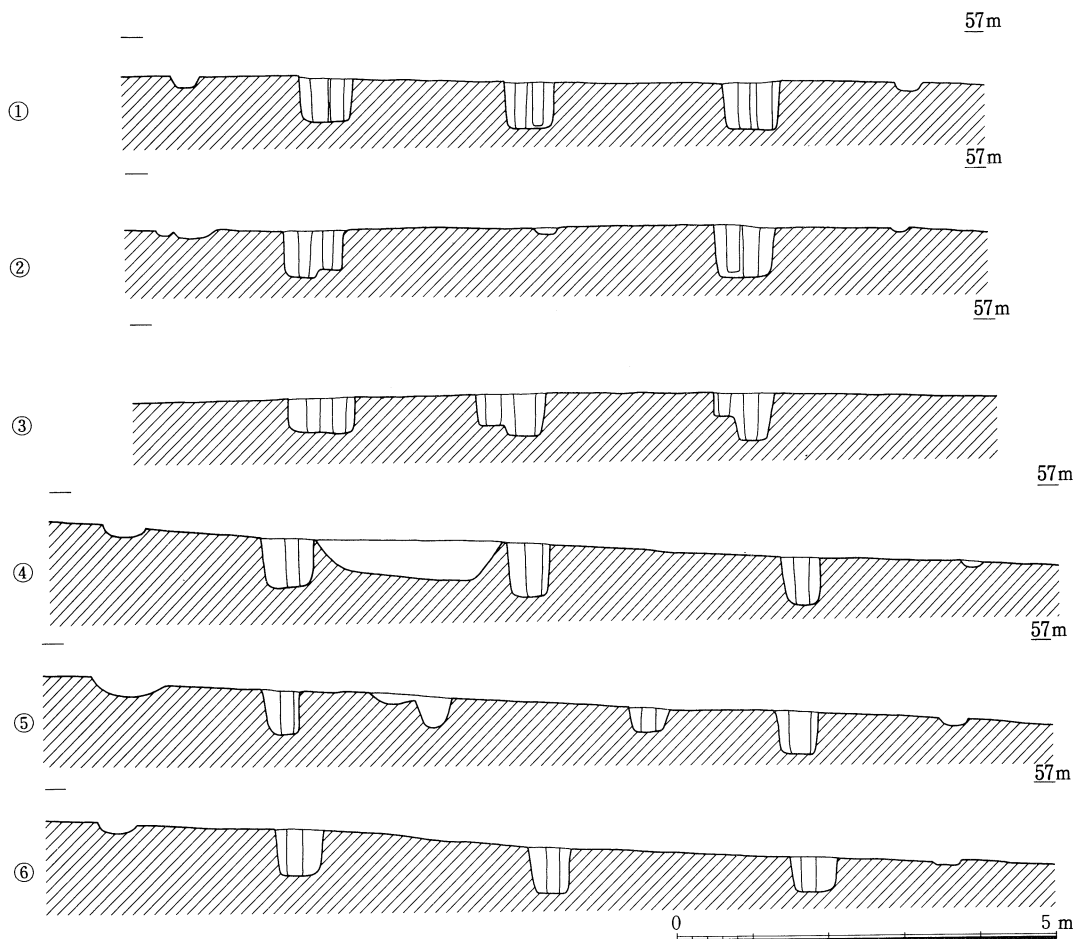


図101 1号工房 縦断面図

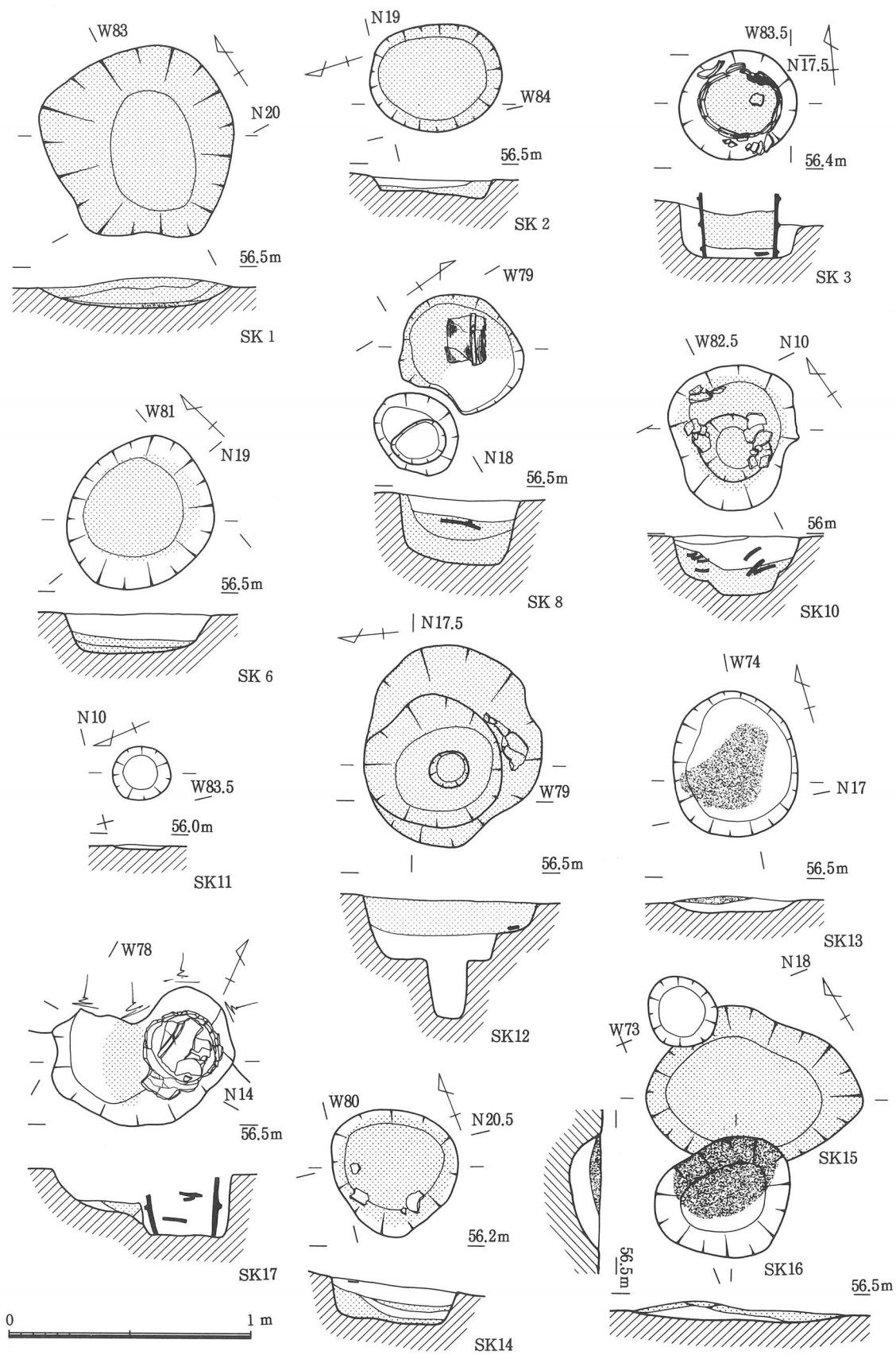


图102 1号工房 土坑

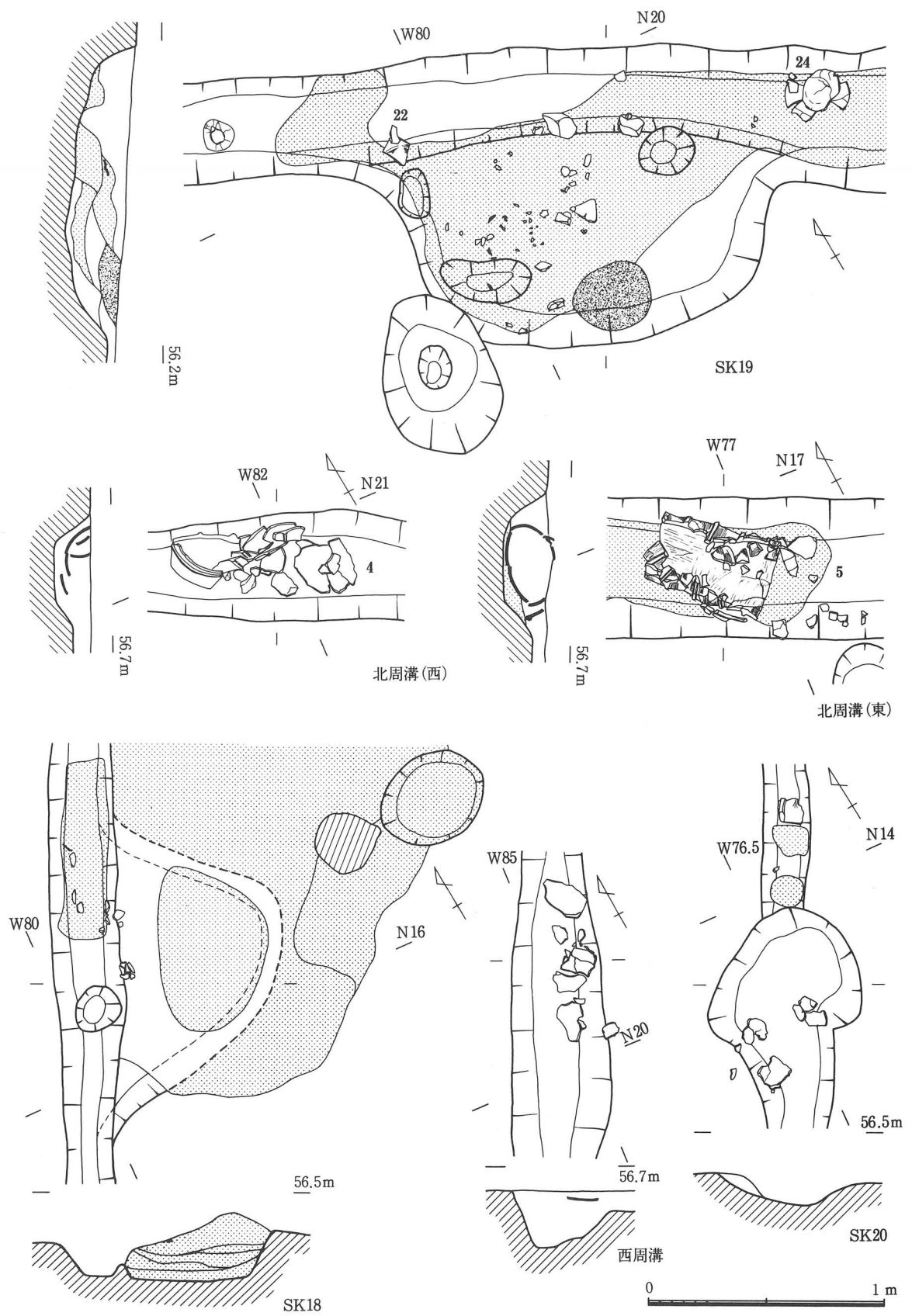


图103 1号工房 土坑·周溝

は、西周溝、北周溝、東周溝のそれぞれの中央部に設けられていた。SK18は幅1.4m、奥行0.7m(周壁までは0.92m)、深さ0.2mの不整な台形を呈している。内部には灰白色ないし淡茶灰色系の粘土を0.3mの厚さに盛り上げるようにして入れていて、一部の土層には炭やベンガラがみられた(口絵6)。SK19は幅1.8m、奥行0.95m(周壁までは1.24m)、深さ0.2mの不整な長方形を呈している。土層は大きく3層にわけられる。坑底には炭粒を含む淡茶褐色土と灰白色ないし淡茶灰色系の粘土からなる一群があり、そのうえには茶灰色土とベンガラを含む赤褐色土の一群、そして最後に炭とベンガラを含む淡茶灰色土が堆積していた。ただし周溝部分はその間に何回かささらされているようである。土坑内からは土師器片と須恵器片が若干出土している。また、最上層の淡茶灰色砂質土は工房廃絶後の流入土である。SK20は直径0.7m、深さ0.12mの不整な円形を呈し、一部が外壁に食い込んで掘られていた。前2者に比べて小さく、埋土も周溝と同じ茶灰色土である。坑底から周溝にかけて円筒埴輪が出土している。周溝の一部が単に掘りひろげられた可能性もある。

遺物としては、土坑や周溝などから出土した埴輪・須恵器・土師器がある。埴輪については巻末の観察表に出土地点を示している。なかでも北周溝の東側で検出した5や同じく西側の4などは、その場所に置かれてあったものが、後に破損したような恰好で1個体ずつがまとまって出土している。

須恵器はSK19の西北隅で甕22、西周溝の中央部で甕23を検出している。23は主柱1・9・ピット1・主柱8Eの出土資料と接合し、22の一部については2号工房の包含層から出土するなど、破損後に破片がかなり移動している。土師器では高坏24がSK19の北東部の周溝内、25・27が北周溝西半部、26・31がSK18、28が主柱6、29がピット2、30がSK7、32がピット3、33・35・39・41がSK10、36がSK18、37がSK2、40が南周溝、その他は埋土である。粘土塊42が主柱9Wから出土している。

そのほかに粘土や粘質土が工房の西北部の床面や周溝内のいたるところにみられる。工房の南半分に粘土のひろがりが見られないのは、床面が削平されているためで、さきのSK11のようきわめて浅い土坑なども、もう少し深かったと考えられる。

1号工房の遺物(図104~108、PLATE79・80・84・88b・108a、表48-13)

埴輪・須恵器・土師器・粘土塊・鉄製品がある。

埴輪では円筒と朝顔形がある。円筒は中型1~18と小型19がある。中型では復原品のなかにもタガの条数が確定できるものはなかった。口縁部は小片の6がA1類であるほか、1がA3類である。1は口径34.1cmを測り、口縁部高は中型としてはやや短く、8.8cmを測る。外面の調整はBa種ないしBb-1種で、内面も同様のハケ調整をほどこしている。胴部については、17点が資料化できた。タガは1類が8点と多く、あと2類が4点で、形状はM形が圧倒的である。

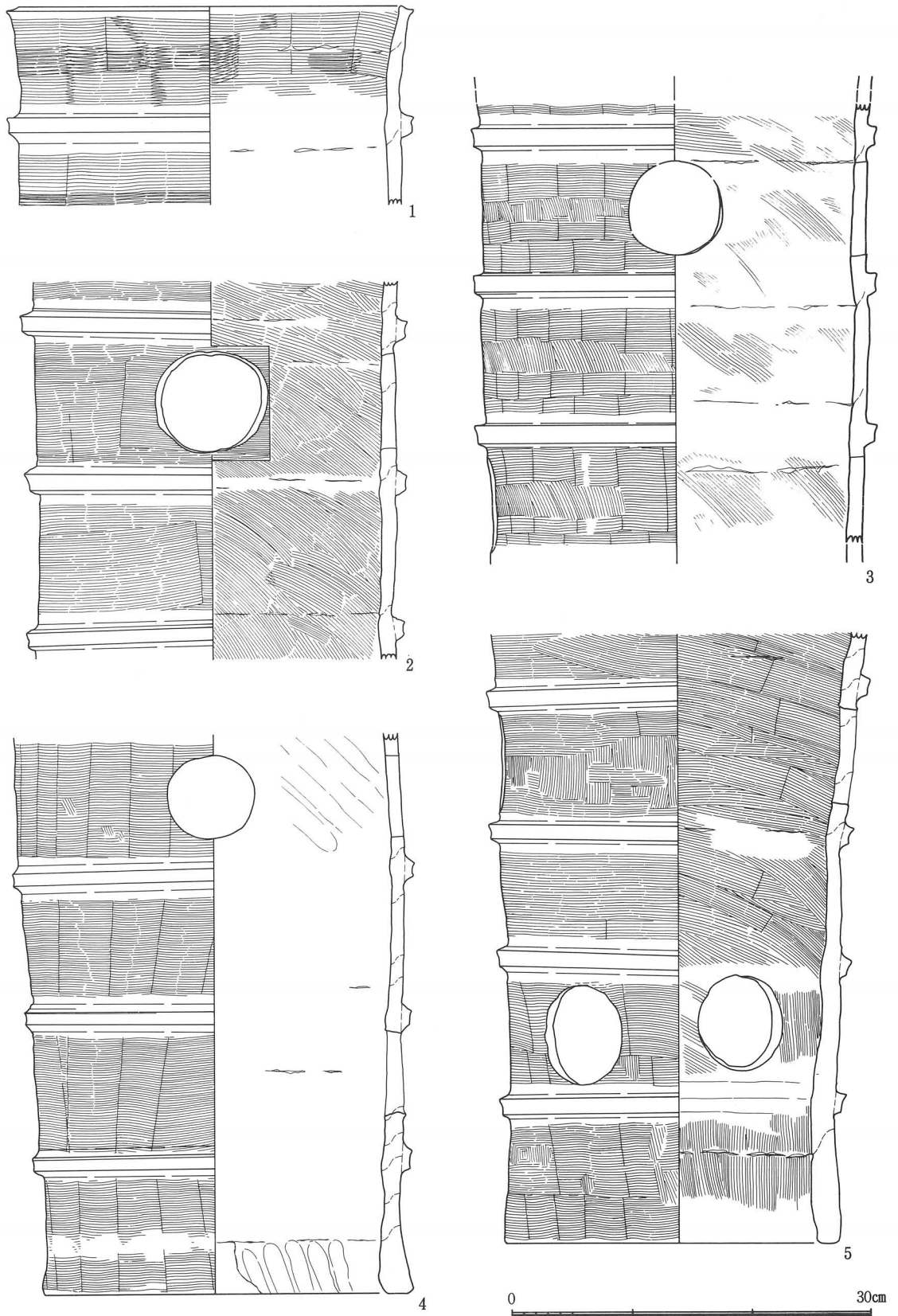


图104 1号工房 円筒埴輪 1～5

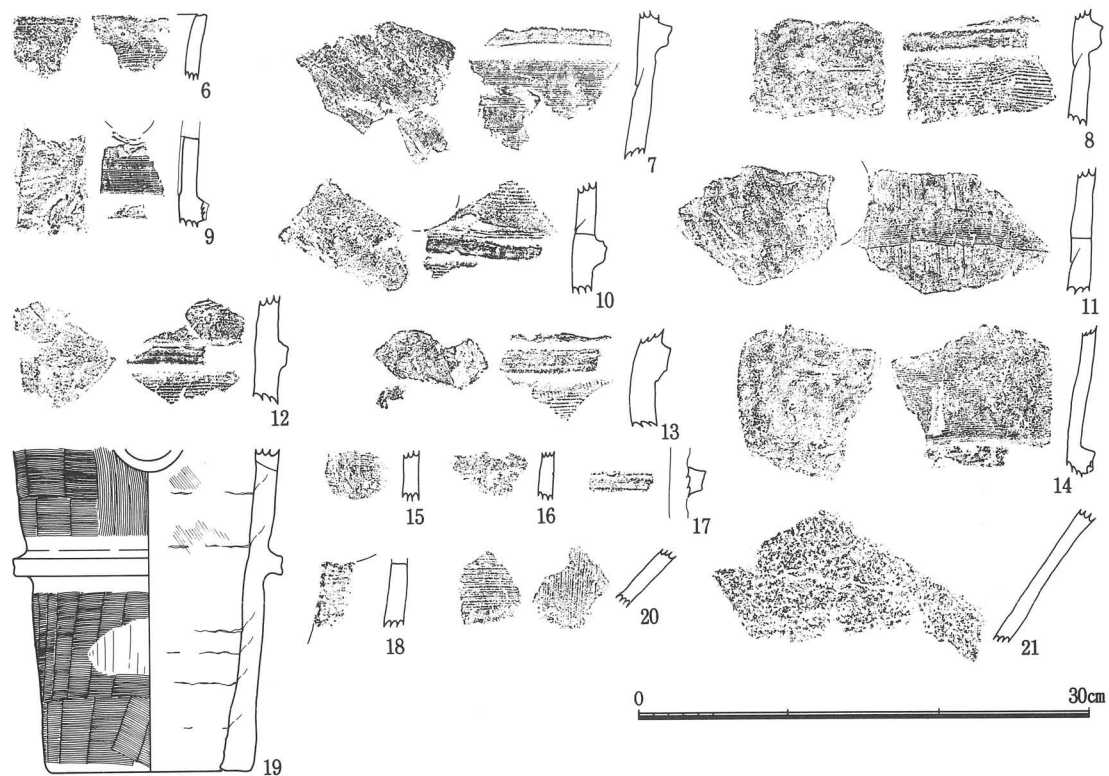


図105 1号工房 円筒埴輪6～19 朝顔形埴輪20・21

タガの間隔は、最小は5の第2段の11.2cm、最大は2の12.6cmであるが、計測数としては約12cmのものが多数を占めている。スカシ孔は大半が円形で、18については2つの弧状の切り込みが直交する変則的なもので、他に例をみない。形象としてもやや違和感がある。また4の第1段のスカシ孔は1孔で、対向するものがあけられていない。第3段には2孔一対のスカシ孔があることからすると、孔の欠落は工人の不注意によるものとみられる。外面の調整はすべてヨコハケで、種別が判明するものでは、Bb-1種が1点(14)、Bb-2種が3点(2・3・5)、Bc種が1点(4)である。内面はハケ調整するものが少なく、ナデ調整するものが目立っている。基底部分が観察されるのは、2点にとどまる。底径は4が31.1cm、5が28cmで、基底部高は10cmと10.6cmである。内外面の調整はそれぞれの胴部と一連の手法でおこなっている。接合法は4・5ともに右巻きづくりである。1号工房の中型円筒については、タガの間隔がほかのものと同じであるのに、総じてスカシ孔の大きいことが目につく。小型の19は下半部のみ遺存している。底径は13.9cmで、基底部高は12.8cmを測る。タガはM形の3類で、スカシ孔は直径約5cmの円形である。外面のヨコハケはBb-2種とみられ、内面はナデ調整で、一部にハケ調整がみられる。朝顔形は2点とも口縁部で、種別は不明である。20は外面をタテハケ、内面をヨコハケ調整したもので、両面ともベンガラを塗布している。21は風化のため、調整手法は判然としない。

須恵器では甕22・23の体部片がある。22は最大腹径24.6cmを測り、外面はタタキ成形後にナ

デ調整し、内面は当て具痕をすり消している。焼成は堅緻で、色調は暗青灰色を呈している。23は最大腹径27.9cmを測り、外面はタタキ成形し、内面はていねいなすり消しがみられる。やや軟質で、色調は灰白色である。これら2点の甕の形状は初期須恵器の様相を示すが、口縁部が遺存しないことや蓋坏の類が検出されなかったことから、細別型式の比定はできない。

土師器では、高坏・甕がある。高坏は大形24~31のみで、小形は検出されなかった。いずれも坏部の資料で、大半は坏底部に段ないしは稜をもち、上縁部がわずかに外反する。ただ31には稜がみられない。

比較的よくのこっている24は口径23.9cmを測り、坏部の深さは8cmである。内外面ともハケ調整後、ていねいなナデ調整をほどこしている。胎土・色調では、25が灰黄色で砂粒を多く含む以外は、おおむね精良な胎土を用い、赤褐色を呈している。甕はいずれも大形である。口径は34の17.9cmから32の13.9cmまであり、33・34は布留式の口縁形態を示している。36~40は甕の体部片で、36が薄手で、37~39が厚手である。外面は36・40がハケ調整で、37~39はナデ調整している。内面は38がハケ調整しているほかは、いずれもヘラケズリしていて、かならずしもヘラケズリが器壁の厚さに対応していない。36は外面に煤が付着している。なお40では外表面側に偏って著しく硬化しているのが観察された。41は甕の底部で、厚さは1.9cmを測る。胎土には砂粒を多く含み、堅緻である。布留式甕の形骸化の度合や大形高坏の形状は後述する工人集落のそれと同似で、布留式Vに相当しよう。

粘土塊42 (PLATE88b) は長さ3.6cm、幅2.4cm、厚さ2cmを測り、一端は破面になっている。全体的には厚さ7~8mmの小さな粘土板を折り曲げたような形状を呈し、上面は弓なり

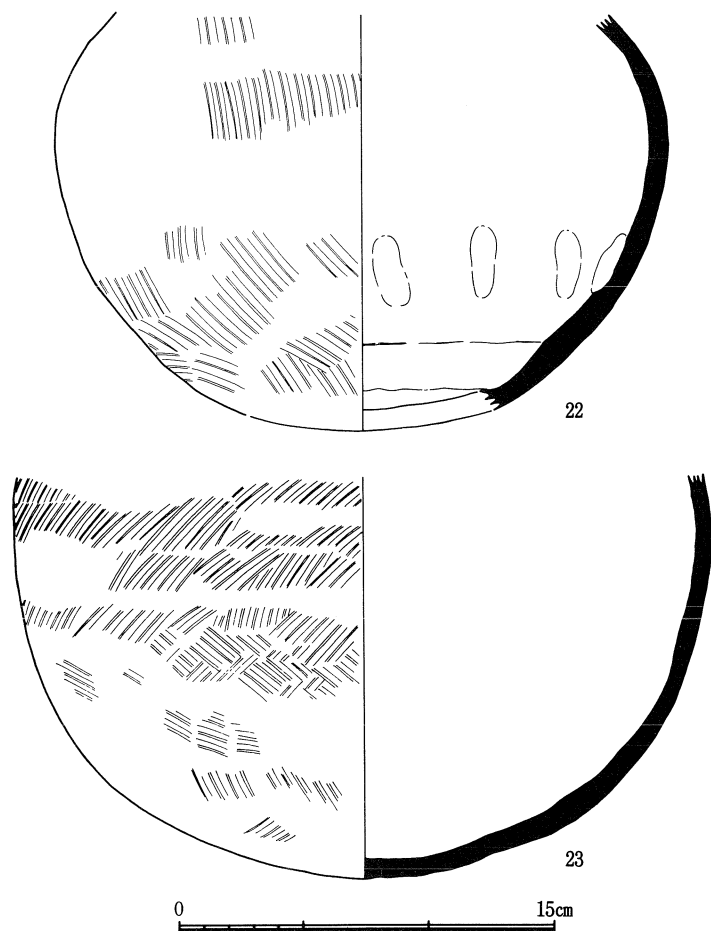


図106 1号工房 須恵器 甕22・23

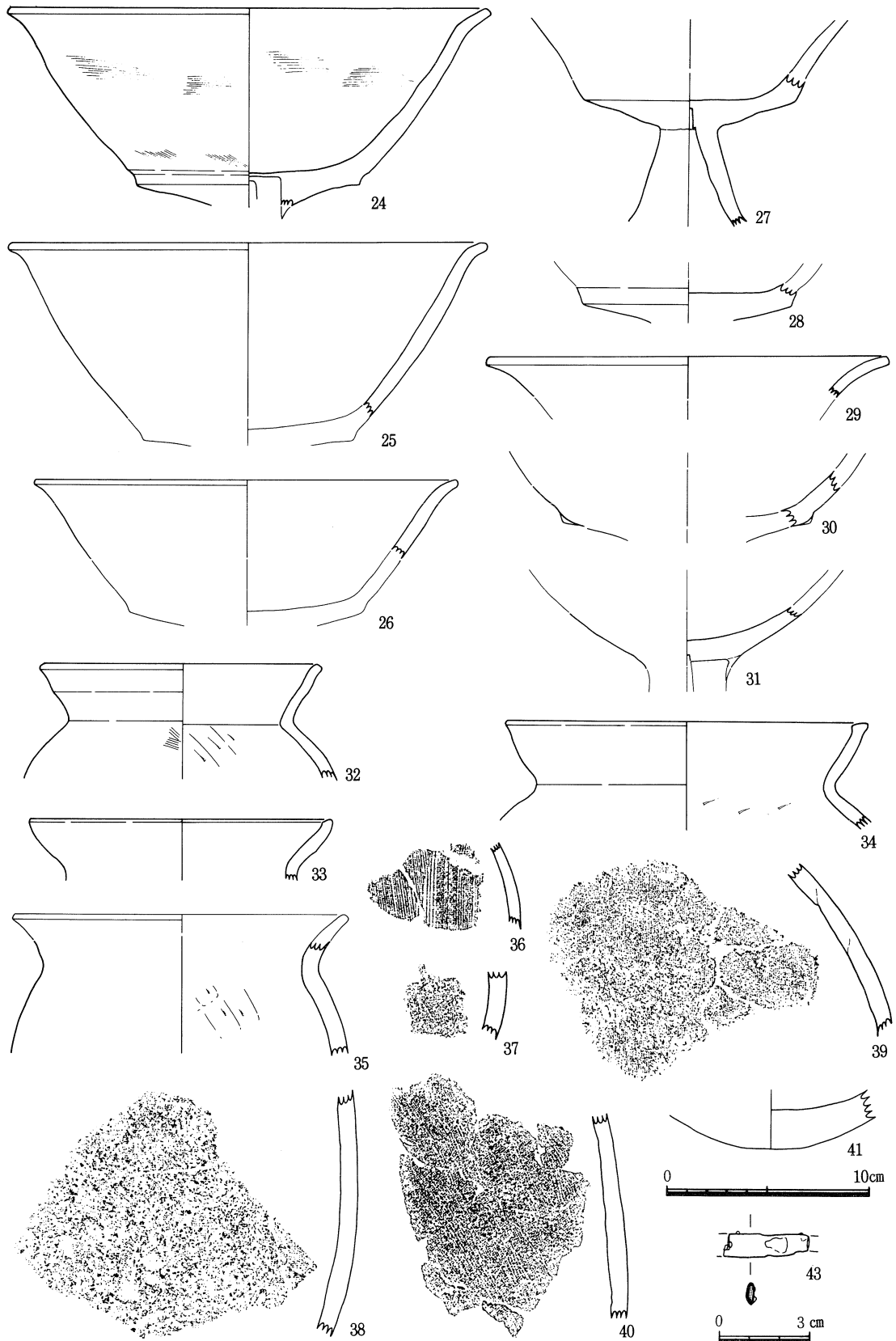


图107 1号工房 土師器 高坏24~31 甕32~41

图108 1号工房 鉄製品43

にへこんでいる。凹面には経・緯とも約15本/cmを測る平織りの布痕がみられる。胎土は埴質で、色調は淡褐色を呈し、火熱されている。

鉄製品43は埋土から出土した。残存長2.8cm、幅0.7cm、厚さ0.2cmを測る鉄片で、刀子ないし鎌の茎に相当するものかとおもわれる。

2号工房(図109・110・PLATE19)

2号工房は東西9.9m、南北11mの長方形を呈し、周溝をめぐらしている。南半部の周溝が途切れているのは、1号工房と同様に、削平されているためで、そのほかにも8号窯が西周溝、近代の用水路が南辺部を寸断していた。遺存状態のよい北周溝の最大幅は0.68m、現存深0.26mを測り、床面と外周地山面との段差は0.2mである。北周溝とわずかに残存する南周溝との底面の比高差は約0.6mあり、床面がもともと北から南へ3°前後で傾斜していたようである。また1号工房で確認されなかったものとして、南西隅の排水溝がある。排水溝は幅0.5mを測り、後世の用水路の掘削などで、長さは0.8mとごく部分的に確認されたにすぎないが、後述

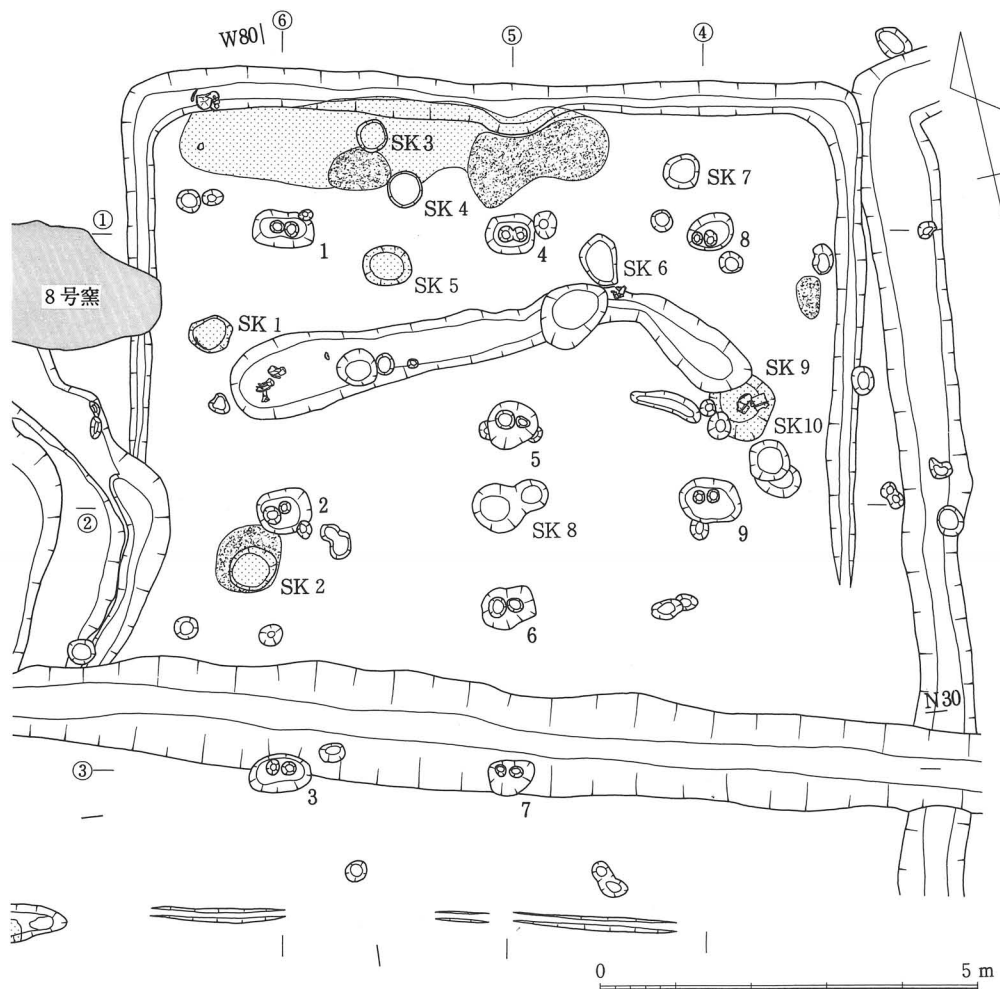


図109 2号工房 平面図

する3号工房の例からしても、工房の南西隅の周溝から西の谷部へ延びていたものとおもわれる。主柱穴は南東部のものが欠失しているが、基本的には1号工房とおなじで、桁行2間(柱間3.5~3.6m)、梁行2間(柱間2.8m前後)の側柱(主柱1~4・7~9[10は欠失])と中軸線上の2本の棟持ち柱(主柱5・6[柱間2.3~2.5m])で構成されている。中軸線の方法はN-17°-Eで、やはり南北棟である。側柱も東西にならんだ2個一対の柱痕を有し、柱穴の掘形は長辺が0.7mから1mの不整長方形(1・2)や長軸径0.85mの不整な楕円形(9)などである。棟持ち柱は1号工房にはない添柱とみられる柱痕がみられ、掘形も径0.7mとやや大きくなっている。各主柱の

58m

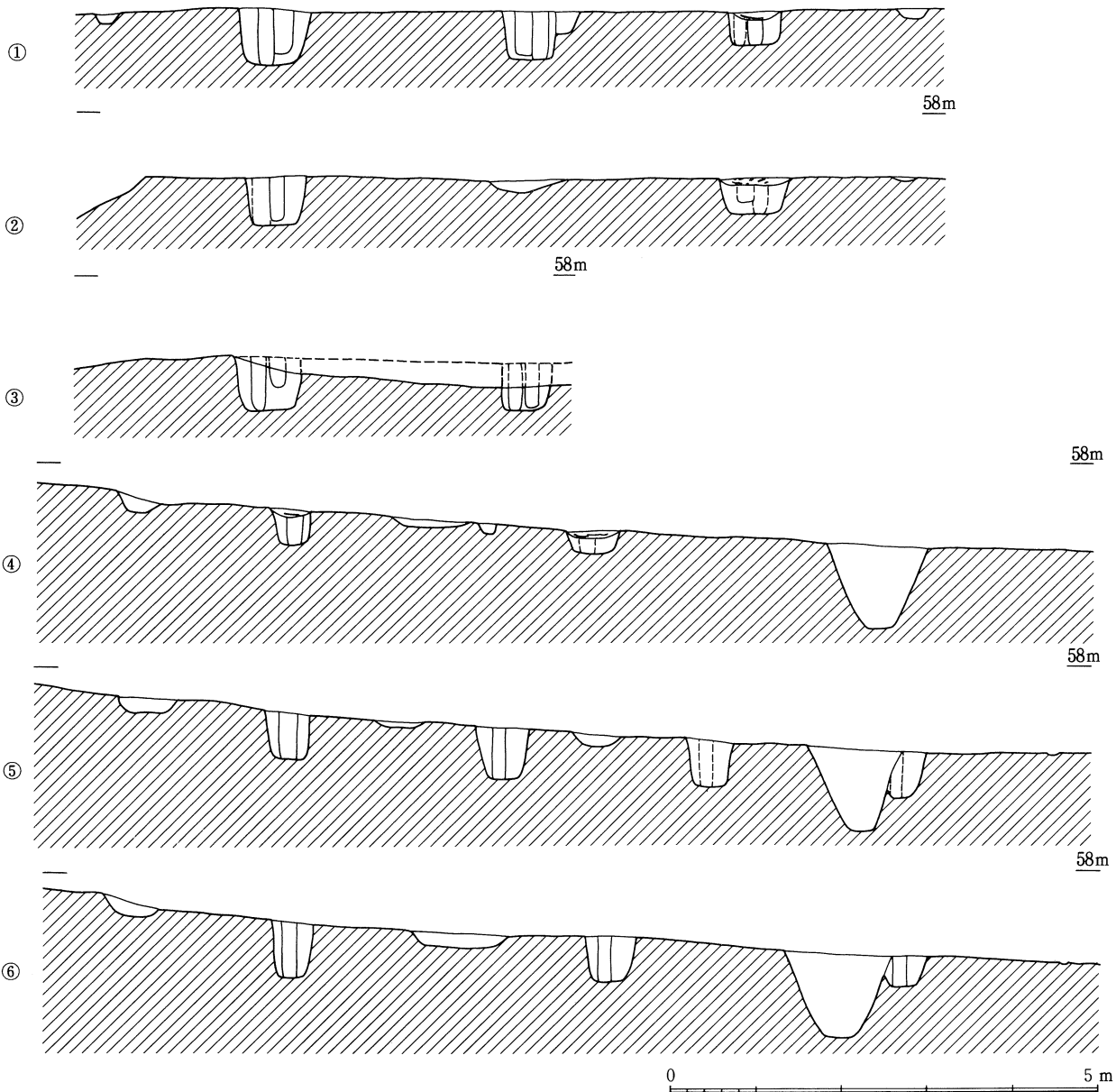


図110 2号工房 断面図

直径は15cm (7W) から最大でも22cm (4W) までである。深さについては主柱8・9の0.4mが浅めで、ほかは0.5~0.7mである。

工房内の遺構としては、土坑Ⅰ・Ⅱ類がある(図111、PLATE20)。土坑Ⅰ類は直径0.4~0.8m、深さは0.1~0.25mの不整形円で、粘土や粘質土を検出したもの(SK 1・2・5・9)が4カ所、そのうち粘土とベンガラをともに検出したもの(SK 2)が1カ所あり、粘土もベンガラも検出さ

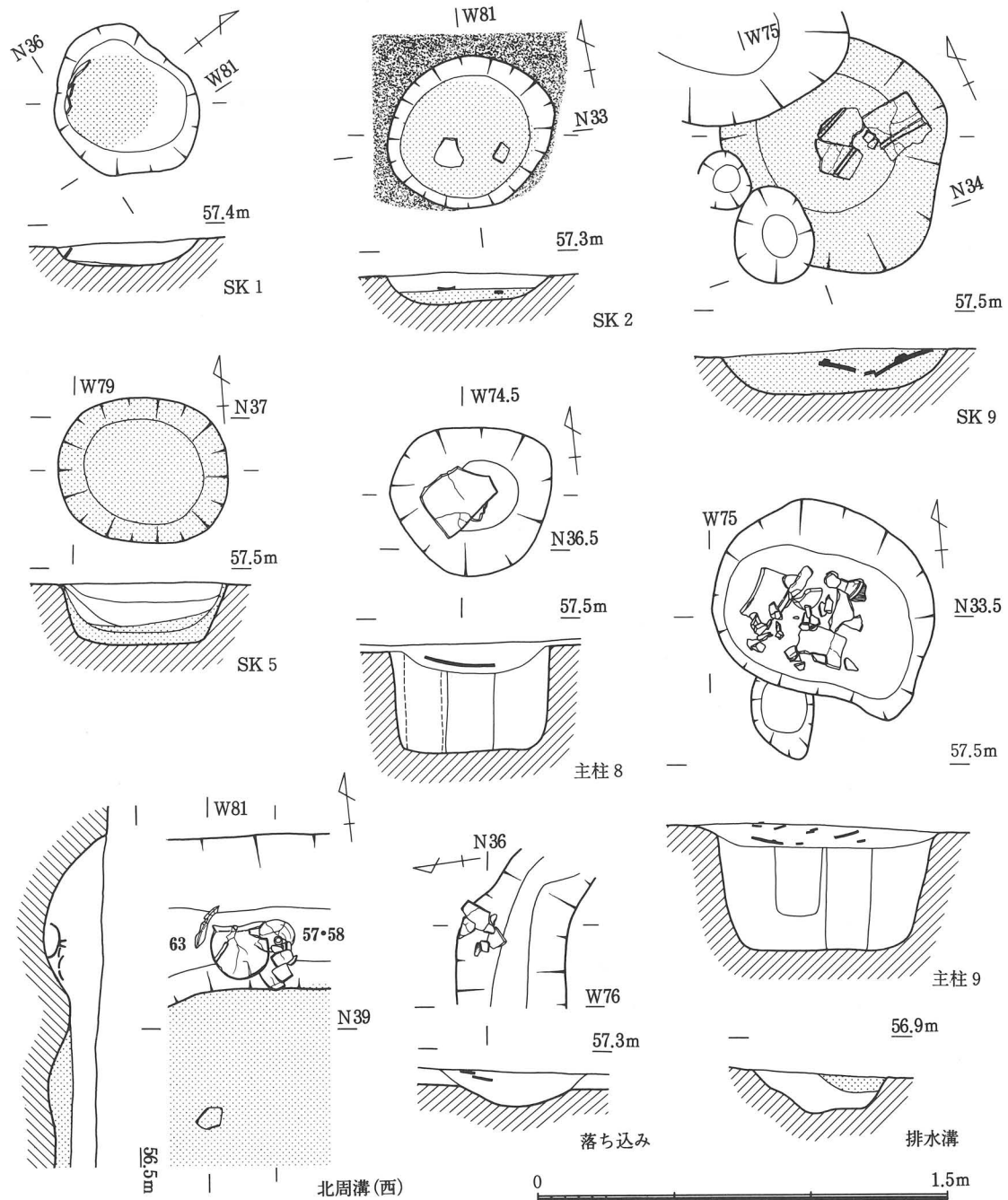


図111 2号工房 土坑・周溝

れなかったものが6カ所ほどある。粘土を検出した土坑のうち、2カ所に円筒埴輪が伴っていた。とくにSK1の底部からは引き抜かれた円筒埴輪の残余の破片が弧状に連なって出土したのを確認している。またその他の土坑Ⅰ類から出土した遺物としては、SK4の土師器**60・61**、鉄製品**68・69**、SK6の埴輪**6・16・17・54**、SK9の埴輪**2・4・7**がある。土坑Ⅱ類は明確でなく、わずかに北周溝の中央部で横幅0.95m、縦0.25mを測る周溝の内側へのふくらみを認めるにすぎない。その点では1号工房のSK20に似ている。

土坑以外から出土した遺物としては、主柱1から埴輪**15**、主柱2から埴輪**13・14・37・39**、主柱8から埴輪**3**、主柱9から埴輪**1・8・22・31・42～44・48・49・51・52**、土師器**66**、主柱5から埴輪**33**・鉄製品**67**、西周溝北部から埴輪**11・21**、土師器**57・58・63**を検出したのをはじめ、床面に散在していた埴輪や土器類**62・64・65**がある。そのほかに工房の北辺部西半の床面に灰白色粘土がひろがっていた。また排水溝にも少量の粘土が流れ込んでいたことから、1号工房と同様に、南半分にも粘土がひろがっていたことがうかがえる。ベンガラは工房の北辺中央部、東辺中央部、SK2の周辺などにみられた。

2号工房の遺物(図112～118、PLATE80・81・85・86・108a、表48-14)

埴輪・須恵器・土師器・鉄製品がある。

埴輪は円筒・朝顔形・形象などがある。円筒は中型が27点ある。口縁部は3点で、A2類が1点(1)、A3類が1点(9)、A4類が1点(10)である。いずれも内外面はハケ調整している。このうち1は口縁部高が14cmとやや高めで、ヨコハケはBa種である。また両面ともベンガラが厚く塗布されていて、塗り刷毛の痕跡も明瞭にのこっている。胴部については21点が観察できた。タガは大半が1類で、4の一部や**19・22**に2類がみられ、あと3類と4類が1点ずつみられる。形状もM形が圧倒的に多い。2のタガについては、全幅が約3cmと大振りで、埴輪自体の復原法量は中型に属すが、タイプのには大型Ⅱ類とみなせるものである。タガの間隔は、計測できるものでは、3が13cm、4が12.8cmで、どちらも若干ひろくなっている。スカシ孔は円形で、孔径は6cm～8cmを測る。外面のヨコハケ調整は、Bb-1種(2・22)、Bb-2種(31)、Bc種(3・5・7)などが認められる。内面はナデ調整が多く、ハケ調整は基底部からほどこす6と中位からおこなう5がある。基底部は4点が計測可能である。基底部高は6の8.4cmから7の11.4cmまでさまざまだが、全体的に低いものが目立っている。外面は8が縦方向のナデ調整で、あとはヨコハケをほどこしている。内面は全体をハケ調整するタイプの6を除くと、いずれもナデ調整である。接合法は5が2帯づくり、6・25が左巻きづくりである。円筒埴輪のベンガラは8点にみられ、このうち**13・14・17・21**は調整・胎土・色調から同一個体とみられる。また7についても胴部3と同一個体と判断される。朝顔形は口縁部が3点ある。27はA2類で、外面をタテハケ、内面をヨコハケ調整している。28は27と同一個体である。29も同前の調整をしているもので、A群窯の3号窯の93やピット1の31の朝顔形と酷似している。30は上縁部が屈曲ぎみに外反し、復

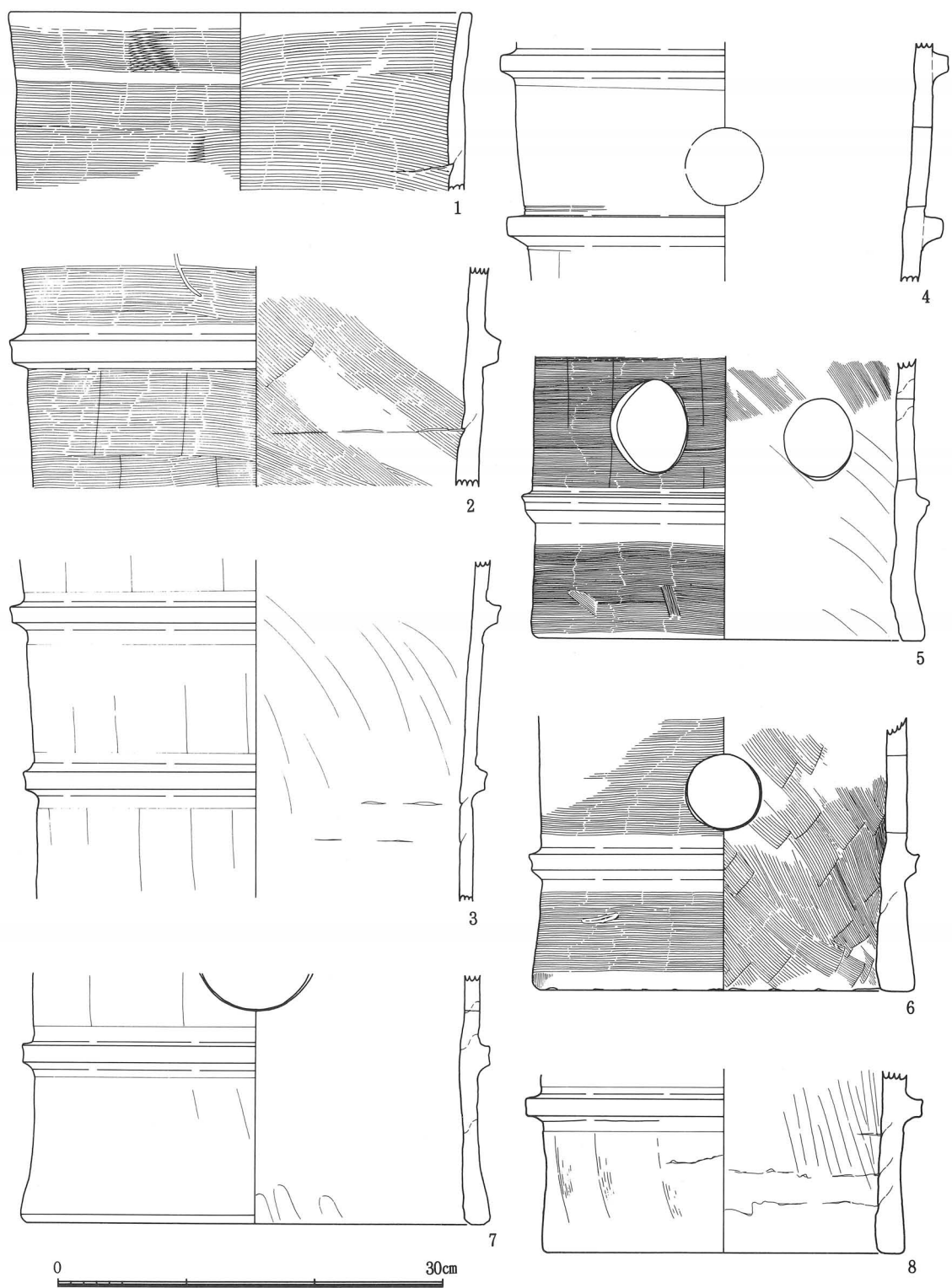


图112 2号工房 円筒埴輪 1~8

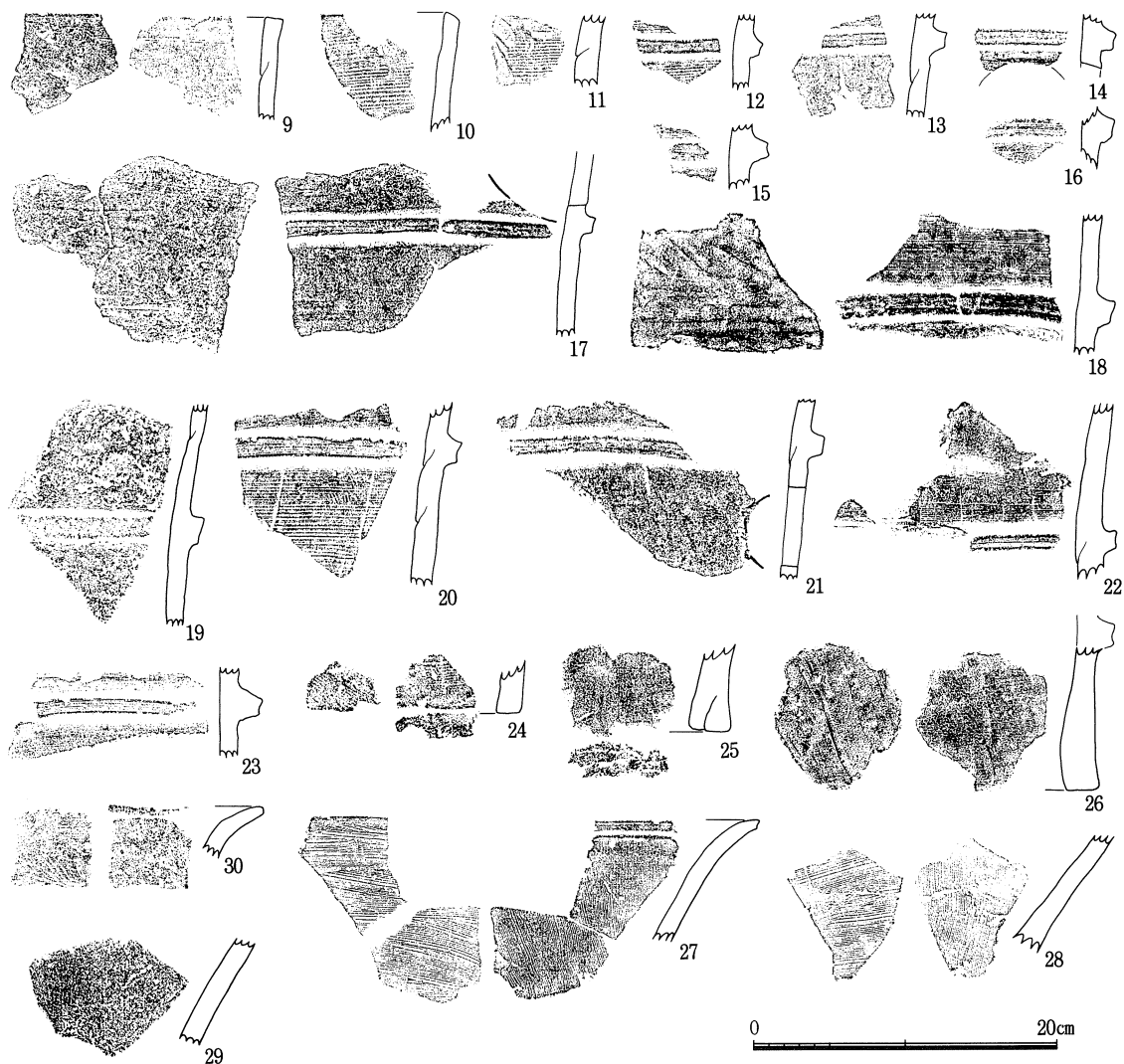


図113 2号工房 円筒埴輪9～26 朝顔形埴輪27～29 壺形埴輪30

原される口径は25cm前後で極端に小さい。壺形埴輪の類とみられる。

ヘラ記号は2と31の円筒にみられる。2は記号の下端がみられるだけで、他の資料からの類推もできない。31には幅15cmにおよぶ凹形の二重弧線が描かれている。

形象は盾・蓋・その他がある。32は盾の鱗部の破片とみられ、表面に横位の沈線が3本ひかれている。蓋は立ち飾り部と本体がある。立ち飾り部はさらに羽根飾りの部分33～36と軸部37～41がある。羽根飾りはいずれも両面に2本線による外郭線と区割り線がひかれているが、いずれも風化していて、様態はよくわからない。軸部は下方がややすぼまった円筒状を呈し、直径は上端が11.4cm、下端が約7cmで、高さは25cmほどに復原される。直径のわりに器壁が厚いのは立ち飾りを支持するためであろう。外面はハケ調整ないしナデ調整していて、内面には絞り目とナデ調整痕がみられる。胎土・色調は後述する蓋本体とよく似ている。蓋本体の破片42

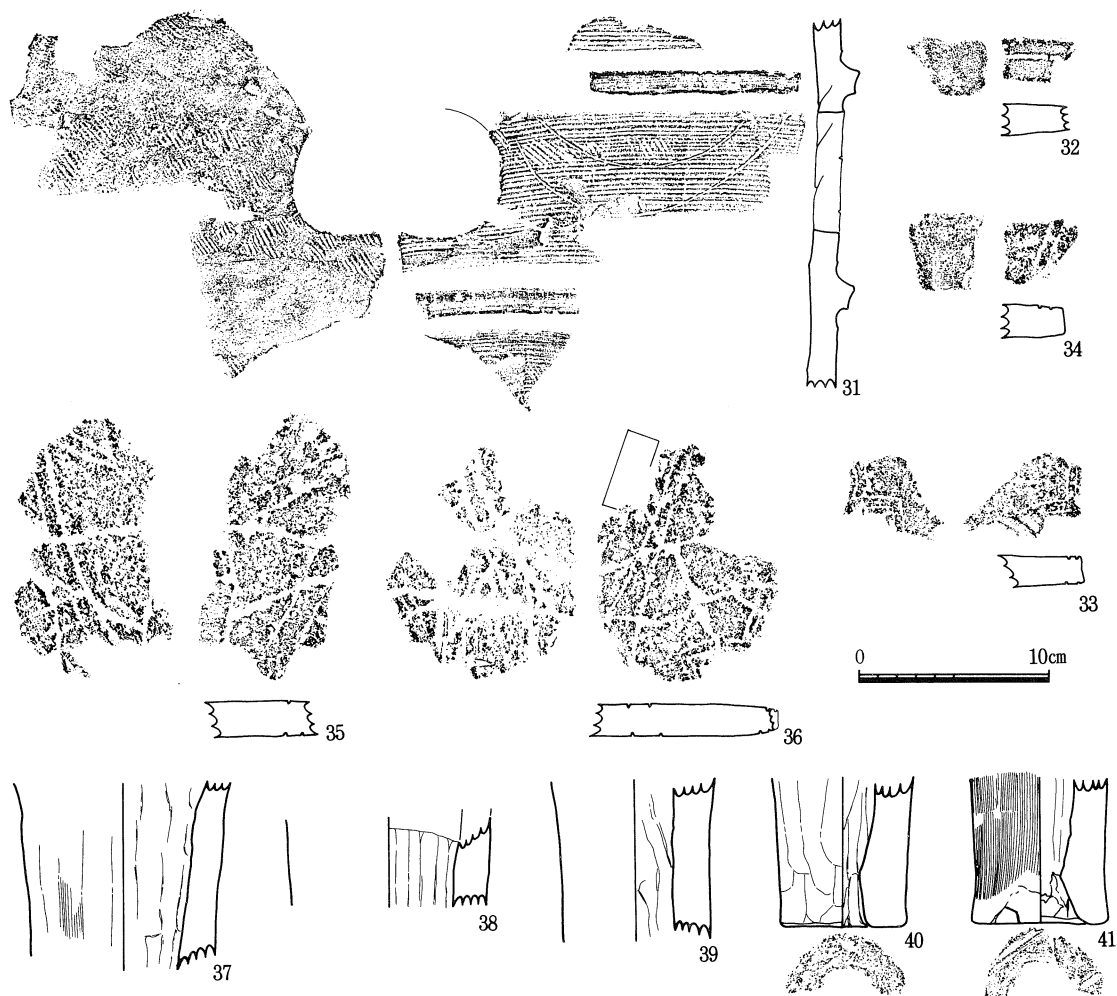


図114 2号工房 ヘラ記号31 形象埴輪 盾32 蓋33~41

~53は主柱9とその周辺から10数点がまとまって出土したもので、胎土・色調から同一個体と判断される。遺存しているのは、受け部42~44、傘部45~50、基台部51~53がある。図116はこれらを統合して復原したもので、全高56cm、傘部の高さ25.6cm、同直径67.2cm、受け部の口径20cm、基台部の底径32.9cmを測る。口縁部は外縁を肥厚させている。傘部は上端、中位、下縁に低平な突帯を貼りつけ、下段には縦の2本線を約8カ所にひいている。肘木をつけていた痕跡はみられない。傘部上半は円筒上端部から引き続いてつくっており、裾部はその後に接着している。基台部は外面をヨコハケ調整し、内面はタテハケ調整後になでている。ベンガラは認められない。

これらのほかに若干の不明品がある。54は内縁が高くなっている半環状のもので、法面と下縁にヘラによる沈線や刻み目をほどこしている。55・56は少量のスサを混ぜて焼いているもので、一見窯壁の一部のようにもみえるが、A群窯で出土した砂質で黄褐色の天井材（PLATE 63c）とは異なっていて、茶灰褐色でかなり埴質である。

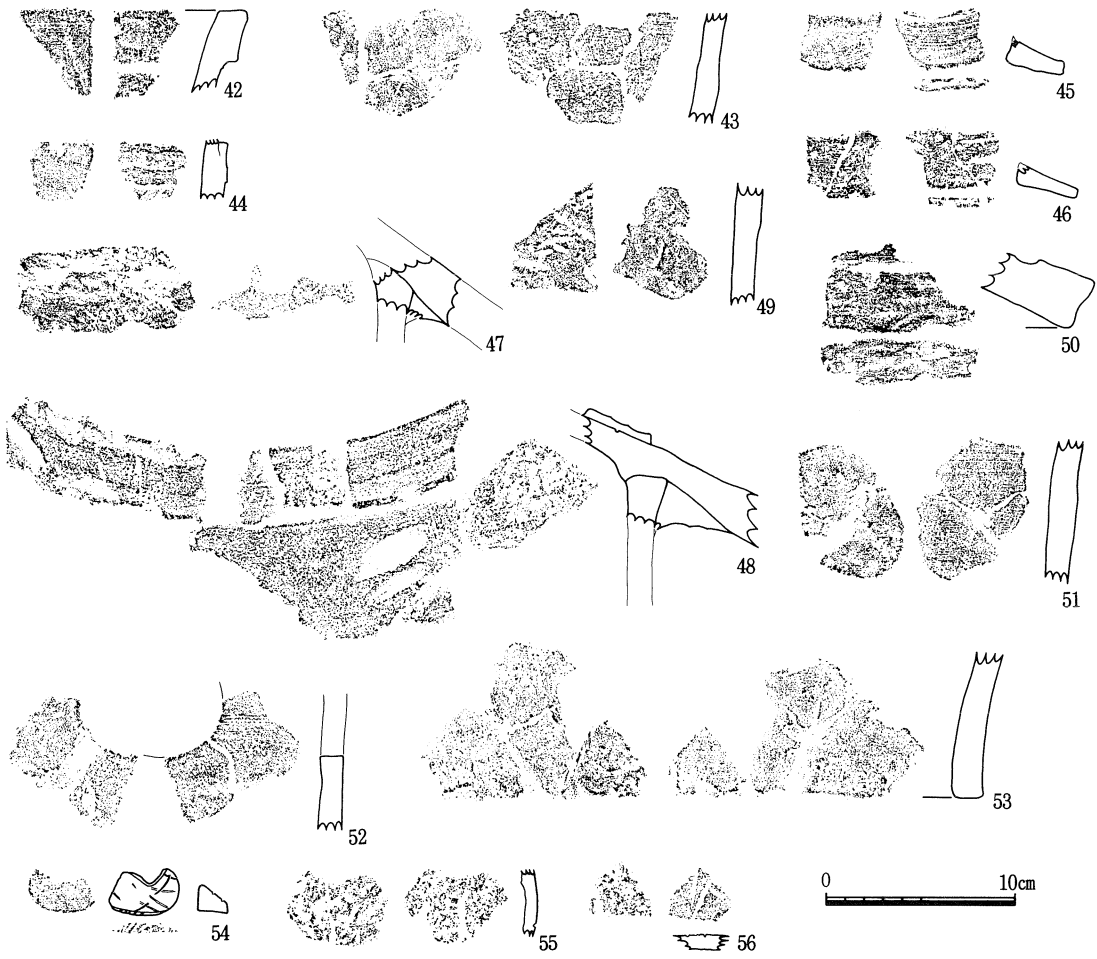


図115 2号工房 形象埴輪 蓋42~53 その他54~56

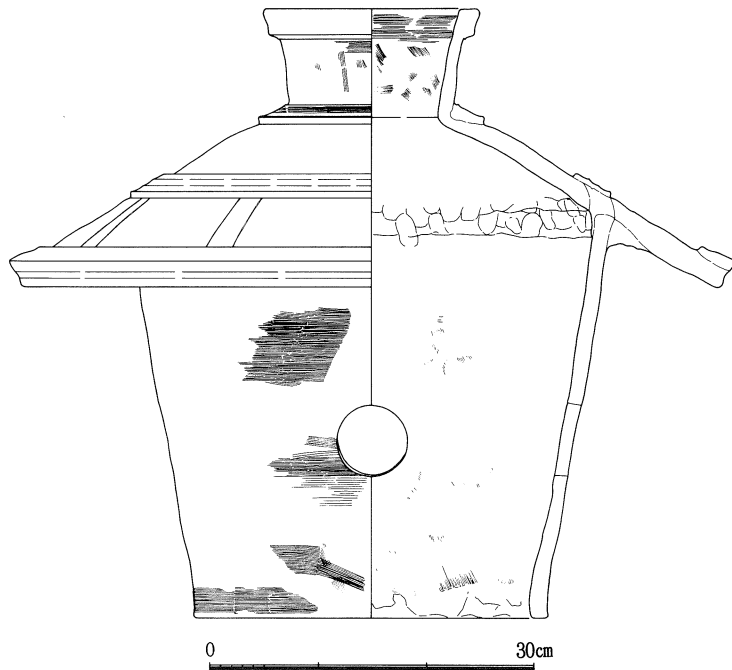


図116 2号工房 形象埴輪 蓋(42~53)の復原図

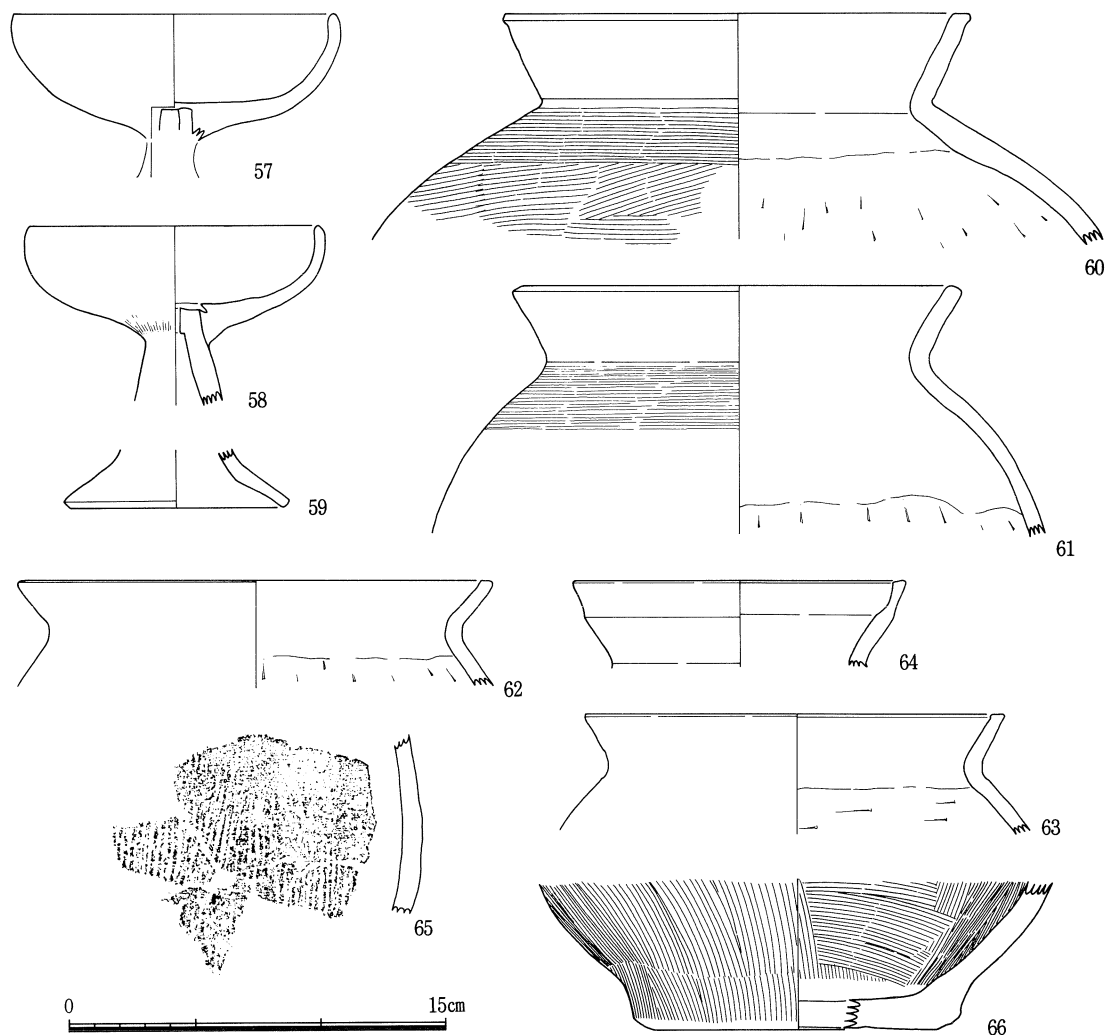


図117 2号工房 土師器 高坏57~59 甕60~66

須恵器は検出されなかった。土師器では、高坏と甕がある。高坏は小形で、口縁部が内弯するもので、稜はみられない。口径は**57**が12.9cm、**58**が11.5cmである。坏部は内外面ともナデ調整している。脚部との接合は柱状部上縁に粘土をまきつけてハケ調整したのち、なでて仕上げている。**58**の柱状部の棒状刺突痕は上端を貫通して、坏底部に食いこんでいた。**59**は**57**もしくは**58**の脚の裾部である。胎土はいずれも精良で、赤褐色を呈している。甕は大形の破片が7点出土している。口縁部は上端に面をもつ布留式の**60・62・63**と複合口縁の**64**があり、肩部にヨコハケをほどこす**61**も布留式とみなせる。口径18.7cmの**60**はひときわ大きく、外面をハケ調整、内面をヘラケズリしている。布留式の他の3点も**60**と同様の調整とみられるが、**61**は内面上半をヘラケズリ後、平滑にナデ調整している。胎土はおおむね精良で、淡褐色ないし赤褐色を呈している。**64**は風化のため調整は判然としない。胎土は砂粒を多く含み、色調は淡灰褐色

である。65はやや厚手の体部片で、外面はハケ調整、内面はナデ調整している。胎土は砂粒が多く、茶褐色を呈している。外面に煤が付着している。

66は底径13cmを測る平底で、かなり大振りの器体となる。内外面ともハケ調整で仕上げている。

色調は淡茶褐色で、胎土には粗大な砂粒がめだつ。これらは小形高坏と布留式甕の形状から布留式Vとみられる。鉄製品67は、残存長3.8cm、幅0.5~0.8cm、厚さ0.15cmを測る鉄片である。明確な刃部はみられないが、鏟類の一部かとおもわれる。68は直径0.4cmの円柱状のもので、残存長1.6cmを測る。69は縦0.6cm、横0.7cmの断面方形の棒状品で、残存長は2.7cmである。どちらも工具類の茎とみられる。

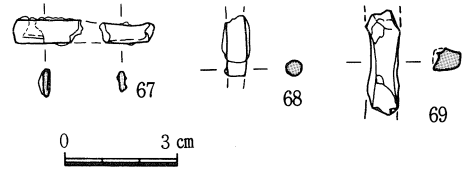


図118 2号工房 鉄製品67~69

3号工房(図119・120、PLATE21、口絵4)

3号工房は東西12.8m、南北10.7mの長方形で、3基中最大の規模をもつ。1号・2号工房

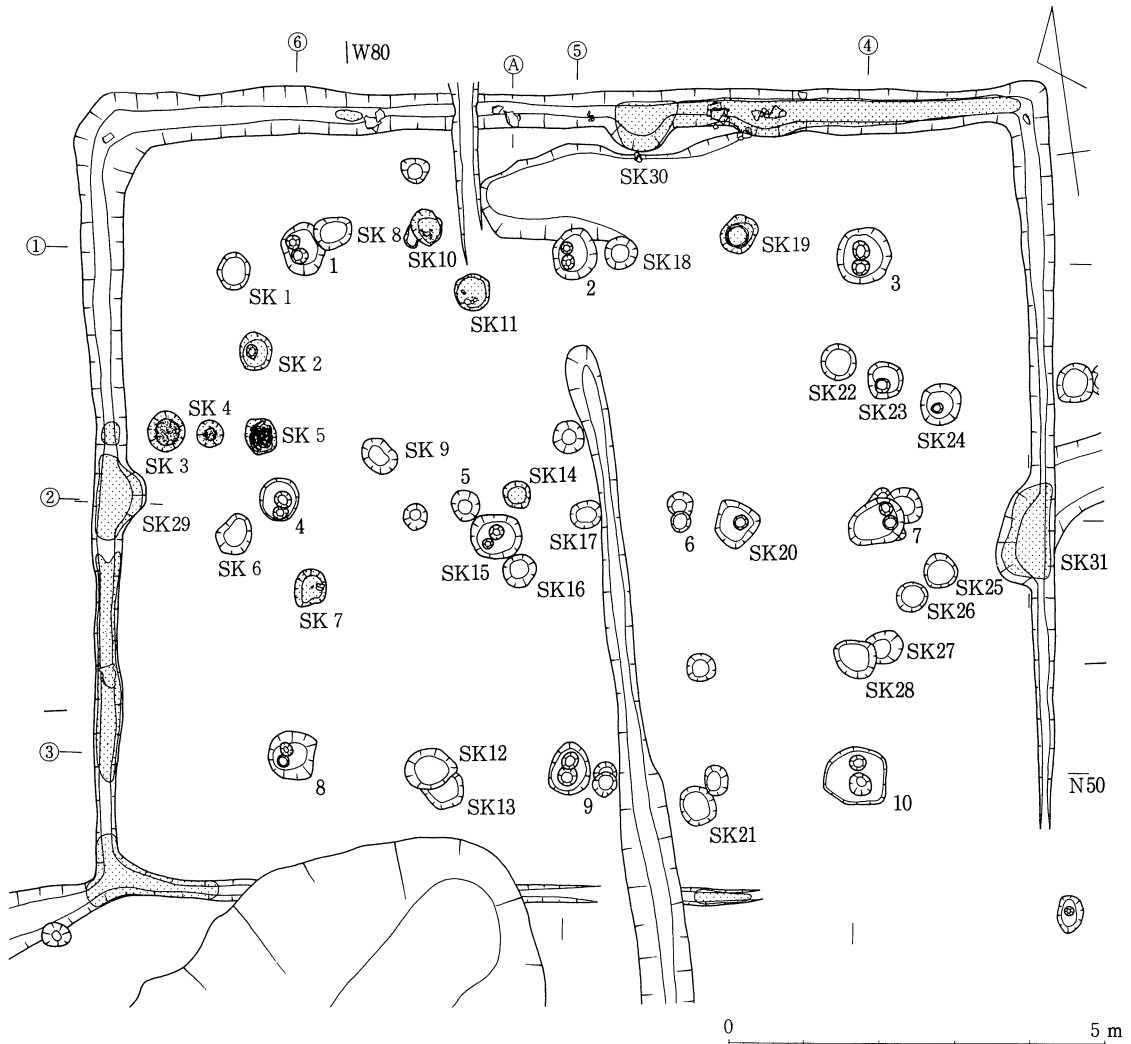


図119 3号工房 平面図

が南北方向に長軸をとるのに対し、3号工房だけが長軸を東西方向にとっている。周溝の南半部は削平のために途切れていて、さらに後世の谷状の落ち込みや近代の用水路が工房の一部を損なっている。北周溝の幅は0.65m、現存深0.25mを測り、床面までは0.12mである。南周溝は削平のために、0.06m未満と浅い。北周溝と南周溝の底部の比高差は約0.32mあり、北から南へいたる床面の傾斜は 1° 程度であったとみられる。周溝の南西隅には幅0.4~1.2m、深さ0.1~0.3m、長さ14.5mの排水溝がとりついている。溝の先端は西側にある段丘斜面地の中位までのび、落差は約3mを測る(図99)。柱組は桁行2間(柱間3.7~3.8m)、梁行2間(柱間3.3~3.4m)の側柱(主柱1~4・7~10)と中軸線上に2本の棟持ち柱(主柱5・6[柱間2.6m前後])で構成されている。中軸線の方向はE- 9° -Sで、東西棟の建物になる。側柱はいずれも南北にならんだ2個一対の柱痕(南側の柱をS、北側の柱をNと表示する)を有する柱穴からなり、掘形は径0.6mから0.9mの不整な円形を呈している。深さについては主柱の4が0.4mと浅いほかは、0.5~0.7mである。棟持ち柱の掘形は径0.4mと0.35mで、それぞれ単独の柱痕が確認され

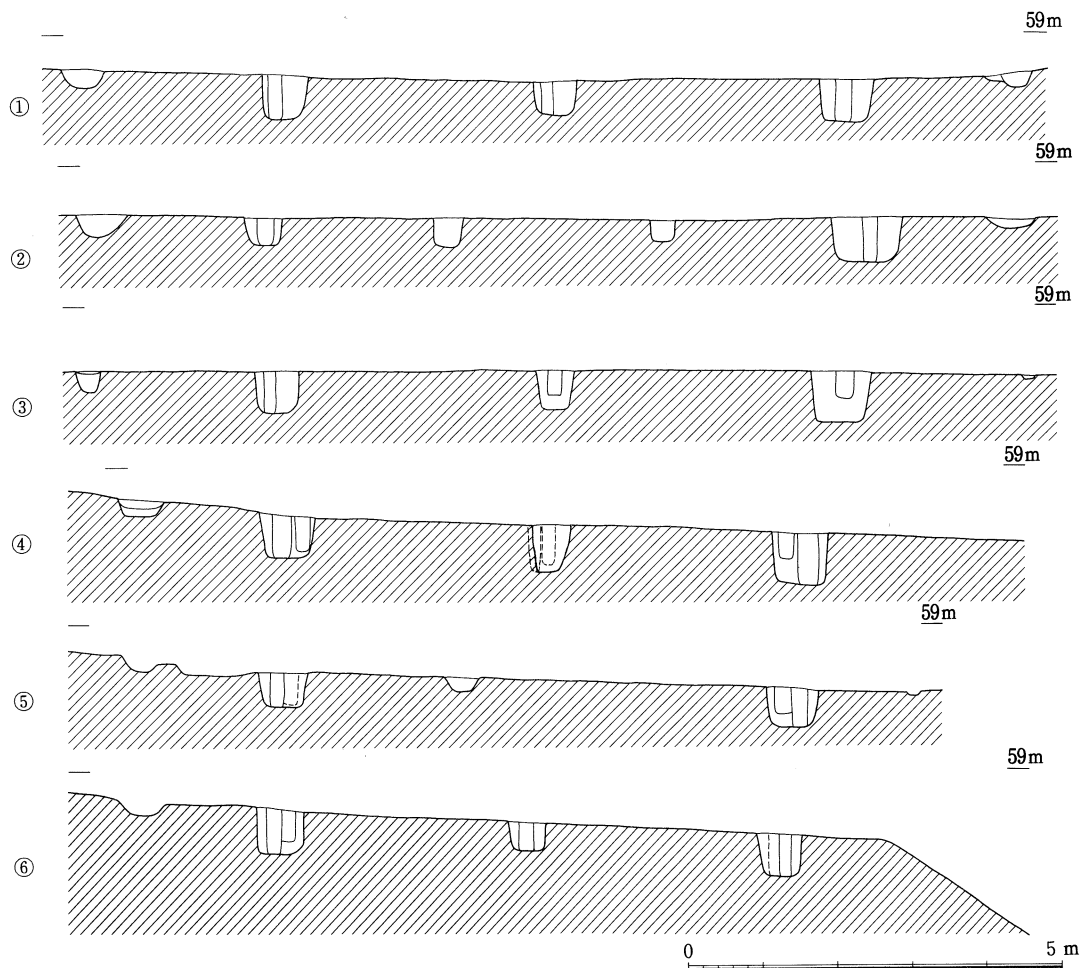


図120 3号工房 断面図

た。各柱痕の直径は3Nの18cmから10Sの30cmまでで、1号・2号と比べてやや太めの柱を用いていたとおもわれる。なお3号工房では棟をうける主柱4と7の柱痕が梁行の柱通りから少し外側にずれているのが看取される。

土坑Ⅰ類は直径0.4～0.65m、現状での深さ0.05～0.27mの不整円形で、粘土や粘質土を検出したもの(SK2～5・7・10・11・14・17・19)が10カ所あり、そのなかのSK3・4・5ではベンガラもあわせて検出されている(図121)。SK19では容器として転用された円筒埴輪5(PLATE22-6)の胴部が天地を逆にして据えられたままに出土したのをはじめ、SK5でも破碎された円筒埴輪3(同-7)、SK7・10・11では土師器の細片が出土している。興味深いのはSK19(口絵7)の円筒埴輪で、この埴輪の上方と下方に接合する埴輪片がSK30とSK20から出土している。これらの埴輪片の存在は、もともと図122-5のようなかたちで持ち込まれた円筒埴輪を高さ20数cmの粘土の容器とするために工房内で打ち割られたことを示すものである。またほかにも粘土を検出しなかったものの、これらと同等の規模・形状をもつ土坑が10数基点在しており、ともに土坑Ⅰ類であった可能性が高い。そうしたときにSK12と13、SK27と28のように重複するものが顕在化することになる。

土坑Ⅱ類(SK29・30・31)は、北周溝、西周溝、東周溝のそれぞれの中央部に設けられていた。SK29は幅0.9m、奥行0.25m(周壁までは0.65m)、深さ0.13mの不整な台形を呈している。坑底は周溝側がわずかに深くなっていて、土層の大半は若干の炭粒を含む淡茶灰色の粘質土層で占められている。土坑内からは土師器の細片、すぐちかくからは須恵器の甕片30が出土している。SK30は幅1.2m、奥行0.4m(周壁までは0.85m)、深さ0.1mの不整な台形をしている。坑内には灰白色や淡茶灰色系の粘土が残存していて、周囲には埴輪片が散らばっていた。SK31は幅1.5m、奥行0.4m(周壁までは0.77m)で、現存する深さ0.07mを測り、やはり不整な台形をしている。埋土は淡茶灰色粘土が重層的に堆積していた。坑内から土師器の高坏32が出土している。

土坑以外の遺物としては、北周溝に点在する埴輪2・21・27～29や土師器の甕34～36・39・40・42・43、粘土塊45・鉄製品48・49をはじめ、東周溝北半では埴輪4・7・19・26、土師器の甕32・33・41、西周溝では埴輪6・16・22、土師器の壺31、鉄製品46、排水溝では埴輪50・51が出土している。そのほかに粘土や粘質土を周溝内のいたるところで検出している。なかでも東南隅から排水溝にかけて出土している一連の粘土は、工房を復原するうえで重要な知見になる。

3号工房の遺物(図122～127、PLATE82・87・88・108a、表48-15)

埴輪では円筒と形象がある。円筒は小型が1点で、それ以外はすべて中型である。中型では2・3がIb₁類と判断されるほかは、類型が確定できない。口縁部の資料ではA1類が1点(7)、A2類が2点(1・10)、A3類が5点(2～4・8・9)あり、口径は4の35cmから2の38cmまでで、口縁

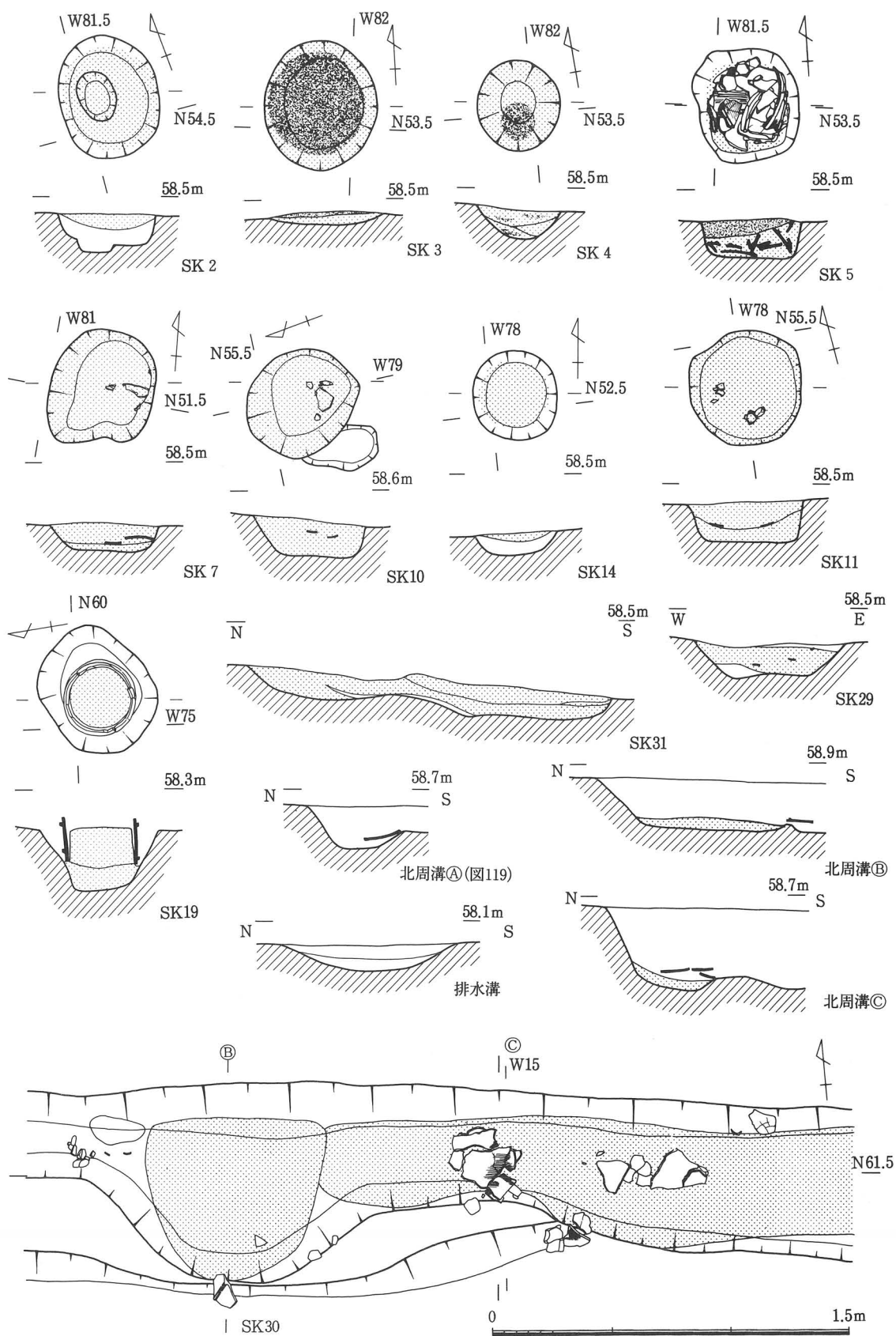


图121 3号工房 土坑·周沟

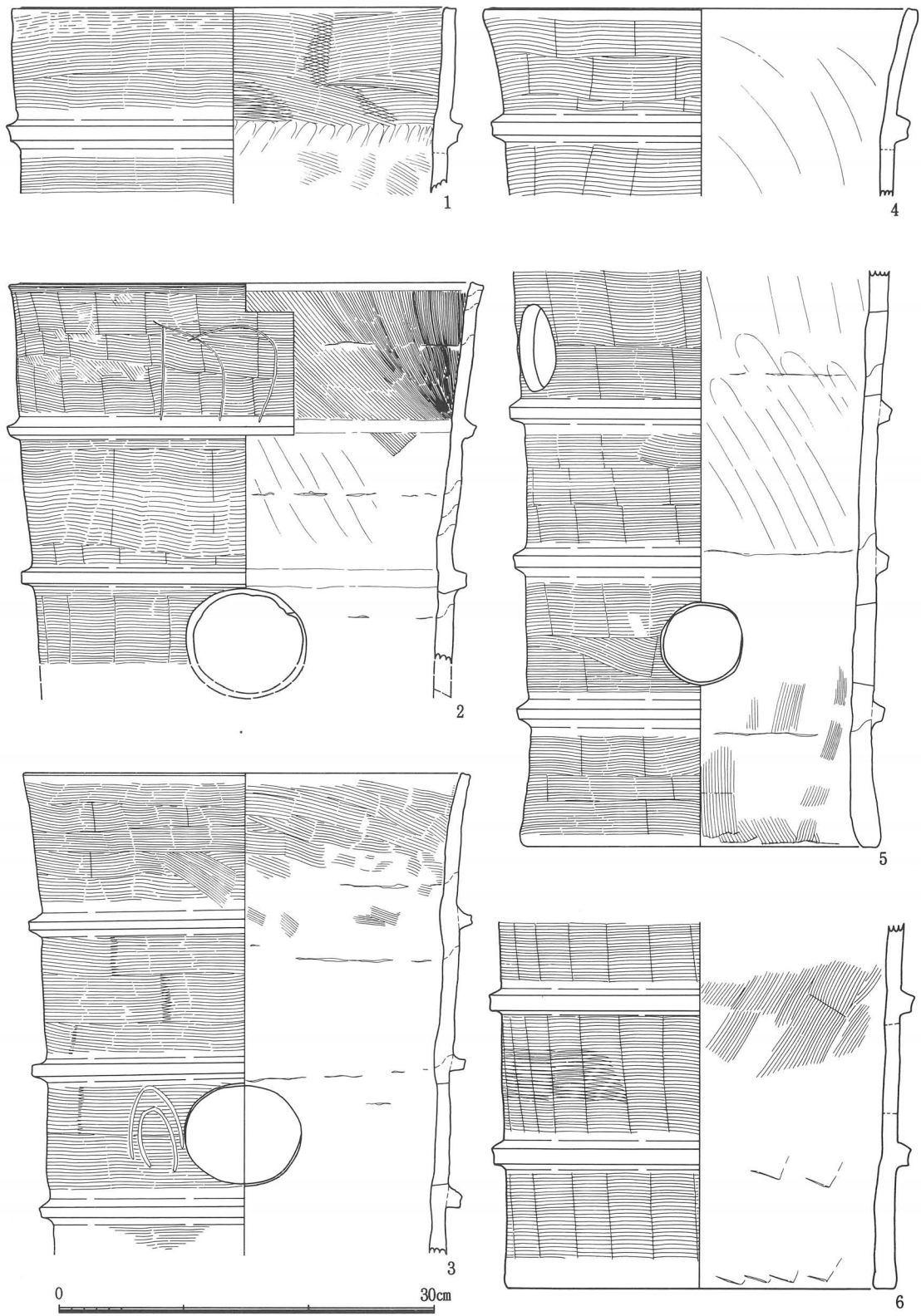


图122 3号工房 円筒埴輪 1~6

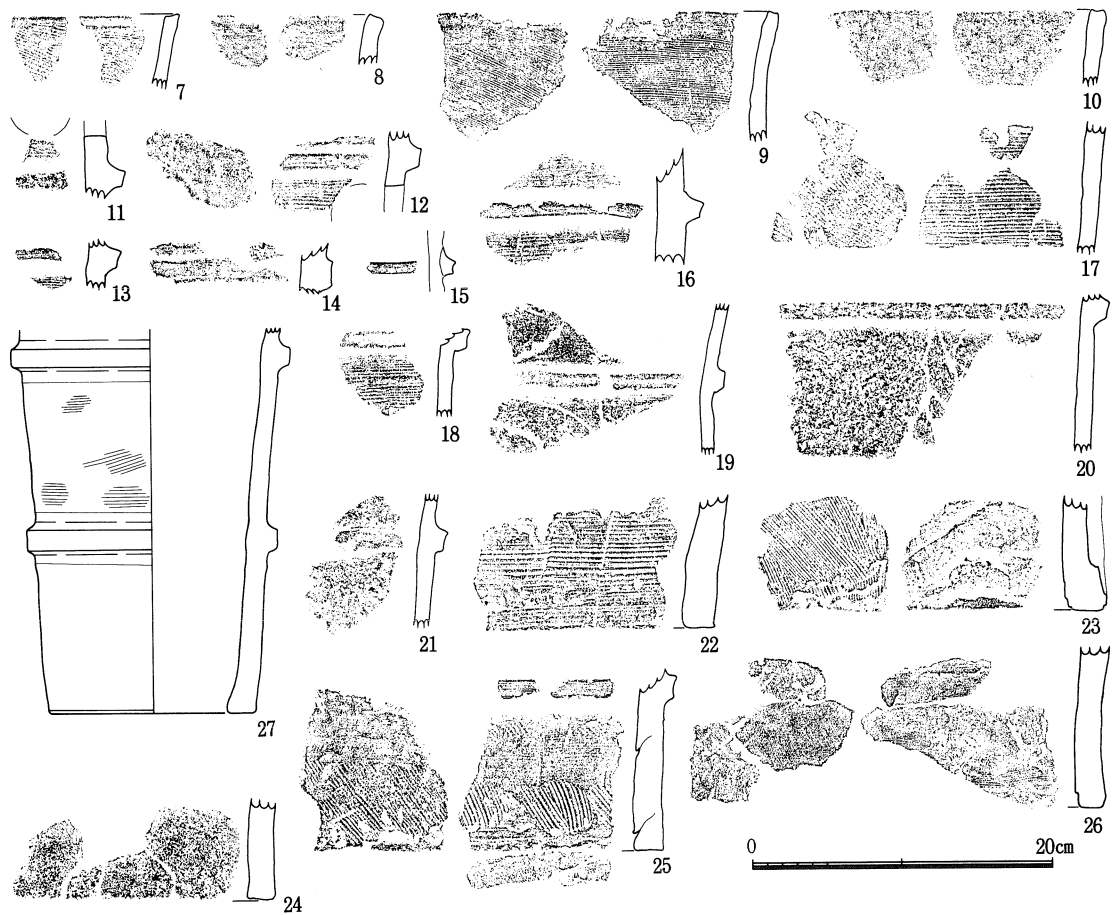


図123 3号工房 円筒埴輪 7～27

部高が判明する4点をみると、8 cm～9 cmの1・4と10 cm～11 cmの2・3とにわけられる。外面の調整はいずれもヨコハケである。種別がわかる1～4はすべてBb-1種に相当し、1が原体2帯分、2・4が3帯分、3では4～5帯分認められる。内面は4だけがナデ調整で、ほかはていねいなハケ調整をほどこしている。なお1は胎土・色調・調整などから2号工房の31と同一個体とみられる。胴部については、15点を観察した。タガは1類のM形が圧倒的に多く、あとはわずかに3類と4類がみられる。タガの間隔は各器体ともほぼ12 cmと揃っている。外面の調整で種別が判明するものは、3のBa種をはじめ、2・5のBb-1種、6のBc種がある。内面はナデ調整が多く、ハケ調整するものでも部分的にしかみられない。基底部では、7点が資料化できた。底径は5が28.8 cm、6が31.4 cmを測る。基底部高は25を含めた3点がいずれも9.6 cmである。外面のヨコハケはそれぞれ胴部

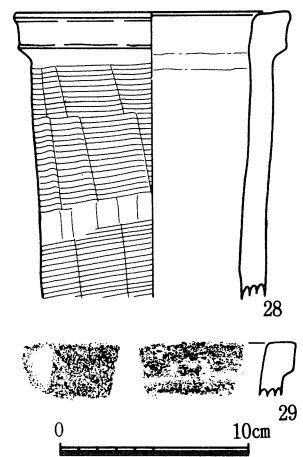


図124 3号工房 形象埴輪 蓋28・29

を測る。基底部高は25を含めた3点がいずれも9.6 cmである。外面のヨコハケはそれぞれ胴部

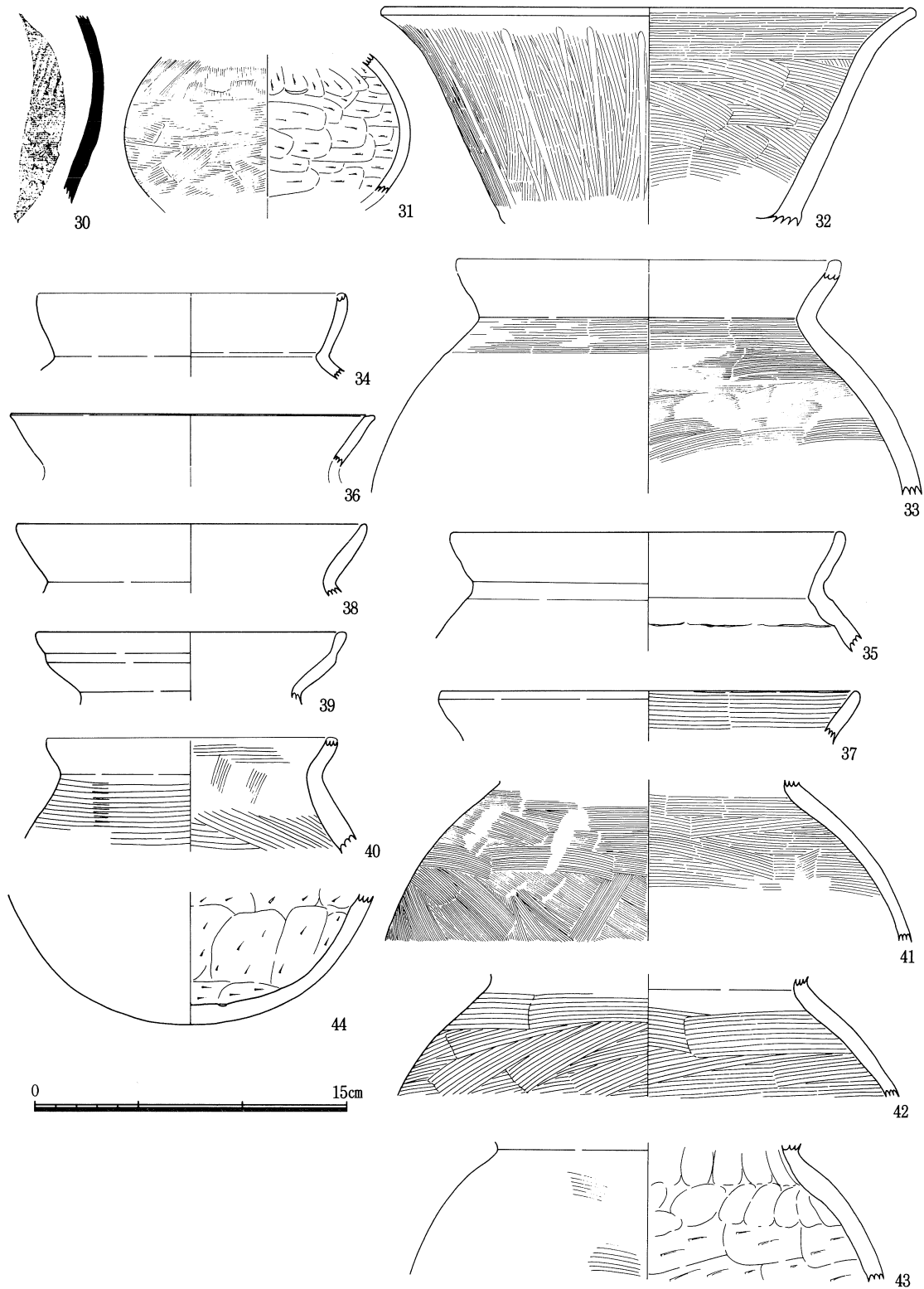


图125 3号工房 須惠器 甕30 土師器 壺31 高坏32 甕33~44

の種別に準じた調整をおこなっており、内面はナデ調整とハケ調整が相半ばしている。接合法は5が右巻きで、22と25が左巻きである。小型の27は底径13.8cmを測る胴下半部で、風化が著しい。外面はヨコハケで内面はナデ調整している。タガは1類で、形状は台形とみられる。タガの間隔は12.5cm、基底部高は10.8cmである。

ヘラ記号は2に「m」字形、3に上向きの二重弧線が認められる。

形象28は蓋の受け部の破片で、口径15cmを測る。現存高は15cmで、受け部としてはやや細身である。口縁部は外側を肥厚させている。外面の調整はいわばBb-1種のヨコハケで、内面はなでている。残存部の半面に黒斑がみられる。29も蓋の受け部の小片で、やはり口縁部を肥厚させている。

須恵器は甕の胴部片のみである。30は外面をタタキ成形し、内面は横方向のすり消しがみられる。焼成は堅緻で、外面には自然釉が付着している。調整手法は初期須恵器に相当する。

土師器では壺・高坏・甕がある。31は小形壺の体部片で、最大腹径は13.8cmを測る。外面は下半部が横方向、上半が縦方向のハケ調整で、内面はヘラケズリしている。胎土は精良で、赤褐色を呈している。32は大形高坏の口縁部で、口径は25.8cmを測る。内外面ともハケ調整をほどこしたのち、縦方向に暗文風のヘラミガキをまばらにほどこしている。胎土は精良で、色調は赤褐色である。甕は40が中形であるほかは、いずれも大形とみられる。口縁部は内弯ぎみに立ちあがる33~35や上端に面をもつ36などの布留式がめだつほか、複合口縁の39が1点みられる。口径は37の20.4cmから34の14.6cmまでである。大形の体部片は外面の調整が細かなハケの41と粗いハケの42、そしてナデによる43とがあり、三者三様である。また43は内面をヘラケズリしているが、器壁は厚い。44は内面を粗くヘラケズリした厚手の体部片である。胎土・色

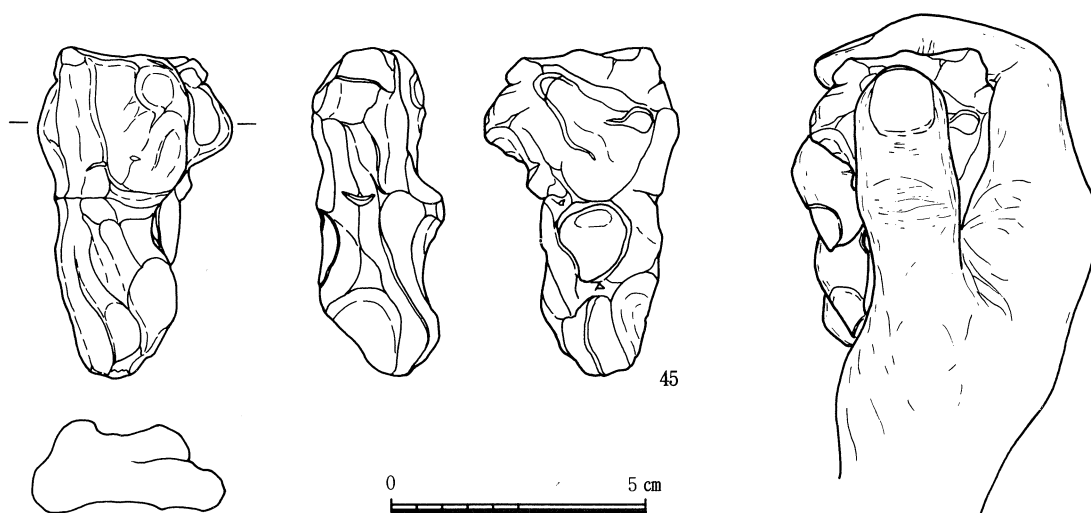


図126 3号工房 粘土塊45

調は、43と同じで、出土位置もちかいことから、同一個体とみられる。大形品の胎土はおおむね砂粒を多く含み、淡黄褐色から淡褐色を呈しているが、細かなハケで調整している41は胎土も精良である。中形の40は口径13.9cmで、体部は内外面とも粗いハケ調整をほどこしている。色調は暗茶灰色である。これらは布留式甕の形状から、布留式Vに比定される。

粘土塊45は長さ6.4cm、厚さ1.8cmを測るものである。色調は茶褐色を呈している。表面には指紋のほかに、指の関節の曲折に沿った凹凸が並列しているのが看取される。断面をみると粘土が2つ折になっていて、粘土塊を繰り返しかえし握りしめていた所作が思いうかぶ。ただ粘土自体は焼成されているために、もとの粘土塊はこれより1割程度大きかったとみられる。図126はそのことを考慮して、右手の薬指と中指を粘土の凹凸にあわせて握りしめた状態を描いたものである。

鉄製品は4点出土している。46は直径2.8cm、厚さ0.2cmの円形の鉄片である。47は残存長3.2cm、直径0.6cmの棒状のもので、一部が弯曲している。48は幅0.7~1.1cm、厚さ0.3cmの鉄片を直径約3cmの環状に曲げたもので、49も同じく、幅0.4~0.7cm、厚さ0.3cmの鉄片を直径約4cmの環状に曲げたものである。いずれも工具の一部ないし付属品であったとおもわれるが、具体例の追究はできていない。

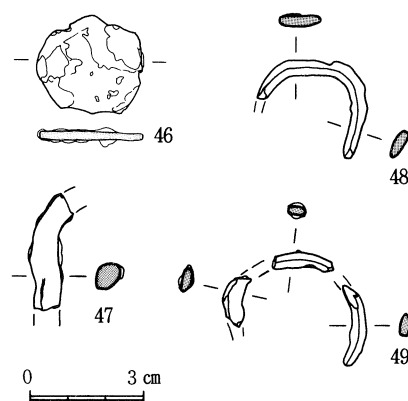


図127 3号工房 鉄製品46~49

3号工房排水溝の遺物(図128、PLATE89b)

円筒埴輪1点と形象1点がある。50はB種ヨコハケをほどこした胴部片で、内面は縦にハケ調整している。胎土は精良で、色調は淡茶灰色を呈している。51は口縁部を肥厚させた蓋の受け部で、口径14.6cmを測る。外面はヨコハケ、内面はやや粗いハケ調整である。胎土にはクサリ礫が目立ち、色調は淡灰褐色である。

工房群周辺包含層の遺物

1号工房から3号工房の北方地域にかけて検出した包含層の遺物については、各工房を分断している新しい溝や谷状の落ち込みを中心に、面的にひろがっている。そこで1号工房と2号工房の間から出土した1~16をa群、2号工房と3号工房の間から出土した17~32をb群、3号工房の北方地域の33~61をc群として分記する。

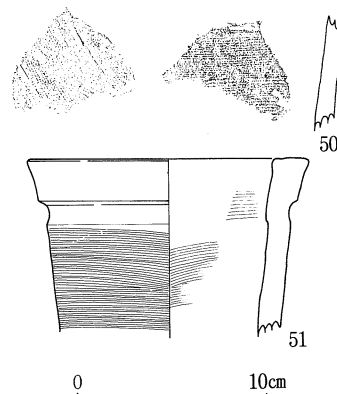


図128 3号工房 排水溝 円筒埴輪50
形象埴輪 蓋51

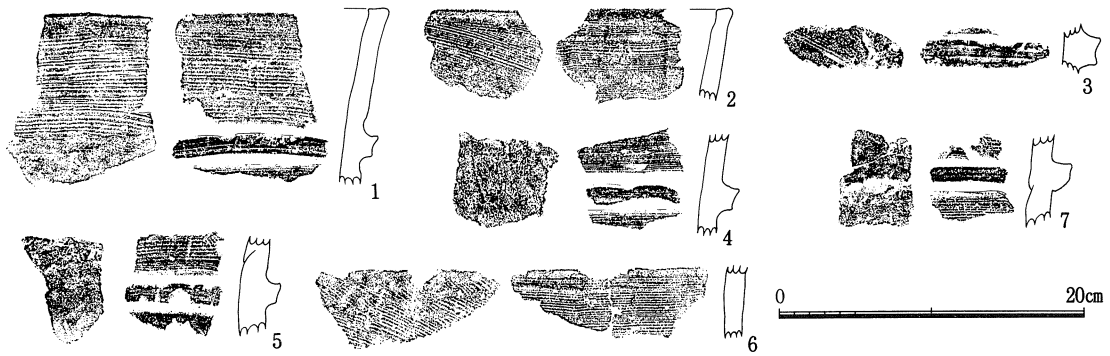


図129 包含層 a群 円筒埴輪 1～7

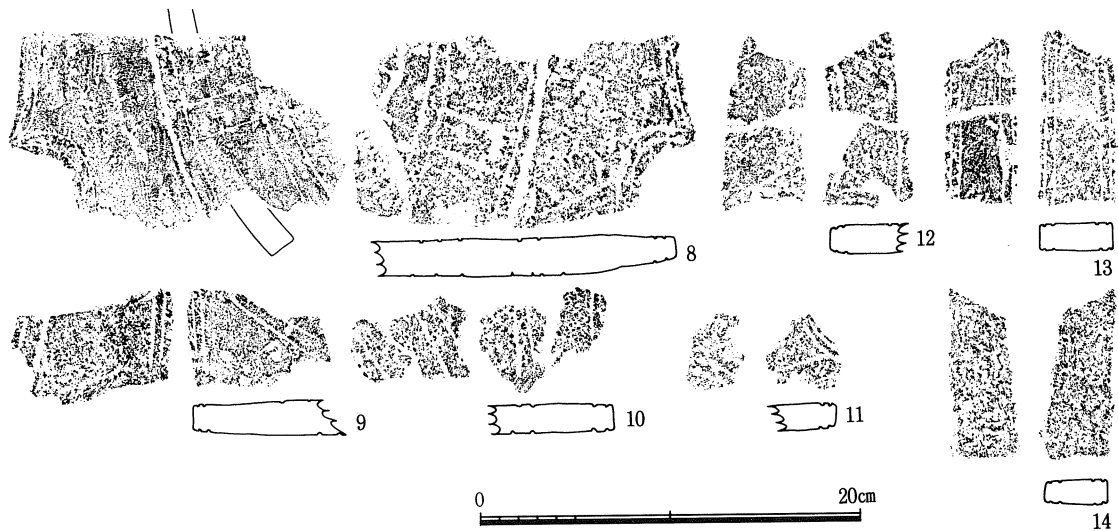


図130 包含層 a群 形象埴輪 蓋 8～14

a群では埴輪と土師器がみられる(図129～131、PLA TE89a)。

埴輪は円筒と形象がある。円筒は大型と中型がある。3は大型Ⅱ類とみられる胴部片で、1類M形の太いタガを付けている。中型はA1類2とA2類1の口縁部のほか、4点の胴部片がある。外面はB種ヨコハケ調整で、2の内外面と7の外面にはベンガラが塗布されている。形象では同一個体とみられる蓋の立ち飾り部の破片を7点検出し、本体8～11も鱗部12～14も2本の沈線で外郭を縁どっている。8では一旦ひいた縦の枠線を再度ひきなおして、その中央に2つの長方形のスカシ孔をあけている。これは2号工場の36と同様の穿孔過程をしめすもので、これらの蓋片は同一の個体であったとみなされる。

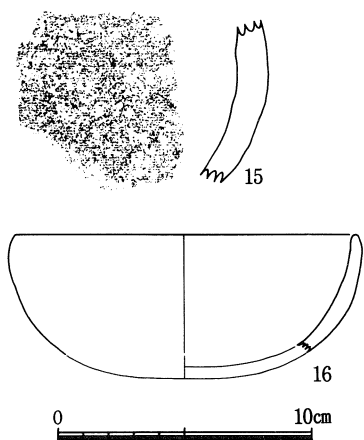


図131 包含層 a群 土師器 壺15 鉢16

土師器では壺と鉢がある。15は厚さ1.2cmを測る胴部片で、壺の形状は判然としない。外面はナデ調整、内面はハケ調整である。胎土は砂粒を含むも精良で埴質にちかく、色調は淡灰褐色を呈している。内面にベンガラが付着している。16は小形の椀形鉢の口縁部で、口径は13.5cmを測る。内外面ともナデ調整している。胎土には砂粒を多く含み、淡褐色を呈している。断面形からすると坏部の深い小形高坏の可能性もある。

b群では資料化した16点の埴輪のなかにV期の埴輪が1点(26)含まれている(図132・133、

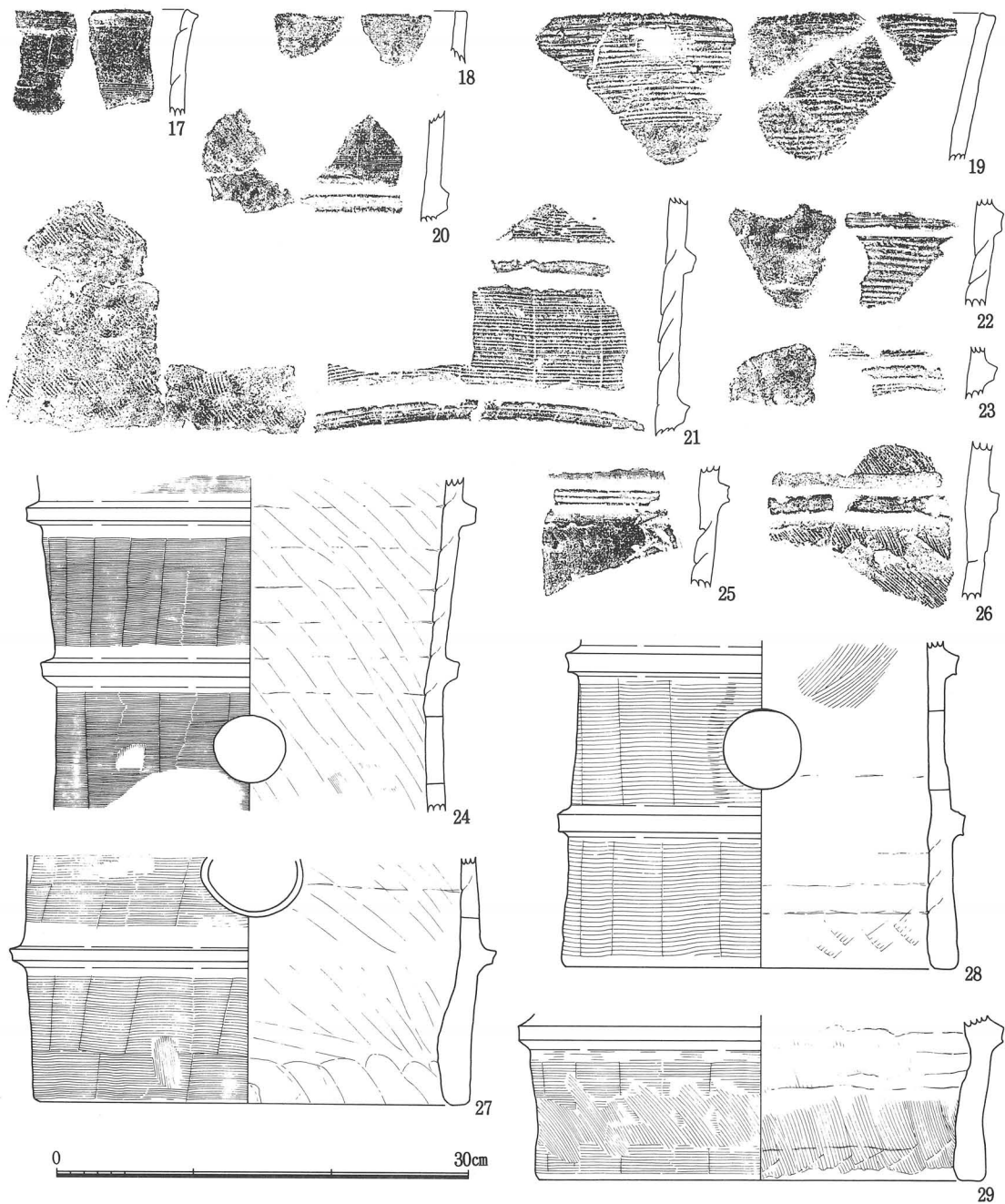


図132 包含層 b群 円筒埴輪17~29

PLATE89b)。IV期では円筒と形象埴輪が出土している。円筒は中型の口縁部3点、胴部5点、基底部3点で、ほかに小型の胴部が1点(23)みられる。口縁部はA2類の18とA3類の17・19がある。胴部はいずれもB種ヨコハケで、その種別は27がBb-2種、21・24・28などがBc種である。内面はナデ調整が目立っている。タガはおおむねM形の1類で、27のような2類は数少ない。基底部の高さは9～9.6cmで、接合法は28が左巻きづくりである。小型の23はM形1類のタガをもち、外面をヨコハケ調整している。円筒のヘラ記号

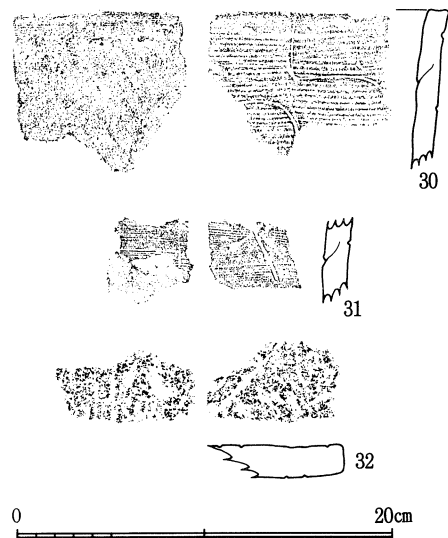


図133 包含層 b群 ヘラ記号30・31
形象埴輪 蓋32

は2点あり、30は口縁部に弧線と直線からなる幾何学的な文様がみえ、31は斜線の一部が認められる。形象では蓋の立ち飾り部32がある。風化のため文様などは判然としないが、a群の8と同じ文様とみられる。V期の円筒胴部26の外面は1次調整の粗いタテハケのみで仕上げている。タガも低平なものとなっている。これらb群のなかでは、IV期の埴輪は工房群、V期の埴輪はC群窯に関連するものとみられる。とくに21などは胎土・色調調整などから、2号工房の31や3号工房の1と同一個体とみられるものである。

c群では資料化できた29点の埴輪のなかの15点がIV期、14点がV期に属す(図134・135、PLATE90)。IV期には円筒と形象がみられる。円筒は中型が大半で、口縁部はA2類(33)、A3類(34)、A5類(35)がみられる。胴部はすべてB種ヨコハケで、42はBb種と特定される。タガは1類が主体で、3類(37・43)が若干みられる。基底部は2点ともBc種ヨコハケとみられ、その高さは43で9cmを測る。形象では鋸歯文を刻み付けた盾面の一部46と基台部ないし蓋の軸部片とみられる47とがある。また37・39・40にはベンガラが塗布されている。

V期の円筒は中型の口縁部5点、胴部1点、および小型の胴下半部が1点(53)みられる。口縁部はA2類(49・54)、A3類(48)、C類(50・51)がある。胴部52では外面を1次調整ですませていて、内面はナデ調整している。タガは低平な1類の48と2類もしくは4類の52、繊細な1類をもつ54などがみられる。52のタガの間隔は8cmと狭く、スカシ孔は円形である。小型の円筒53はきわめて低平なタガをもち、その間隔は13.5cmを測る。外面の調整は左あがりのヘラナデで、内面は指ナデ調整している。スカシ孔は不明。基底部の高さは13.7cmである。円筒のヘラ記号文としては54の口縁部に描かれた鹿とみられる動物画が特筆される。動物は胴体と4本の脚を沈線であらわし、右端には途中で枝別れした角状の表現がみられる。後ろ足に付加

された2本線の意味するところはわからない。全長は12cmで、高さは8.8cmである。形象は盾・蓋・不明品がある。盾には2本の単線で直弧文を描いた55と半截竹管で直弧文などを描いた一群56~58とがある。60は蓋の傘部の下端にあたる。上縁に粘土帯を貼り付けた鱗状のもので、右半分に粘土の剥がれたあとがある。59の両面と61の鱗部にはベンガラがみられる。

c群の埴輪については、IV期のものがおおむね3号工房に属すとみられ、V期のものはC群窯に属すと考えられる。

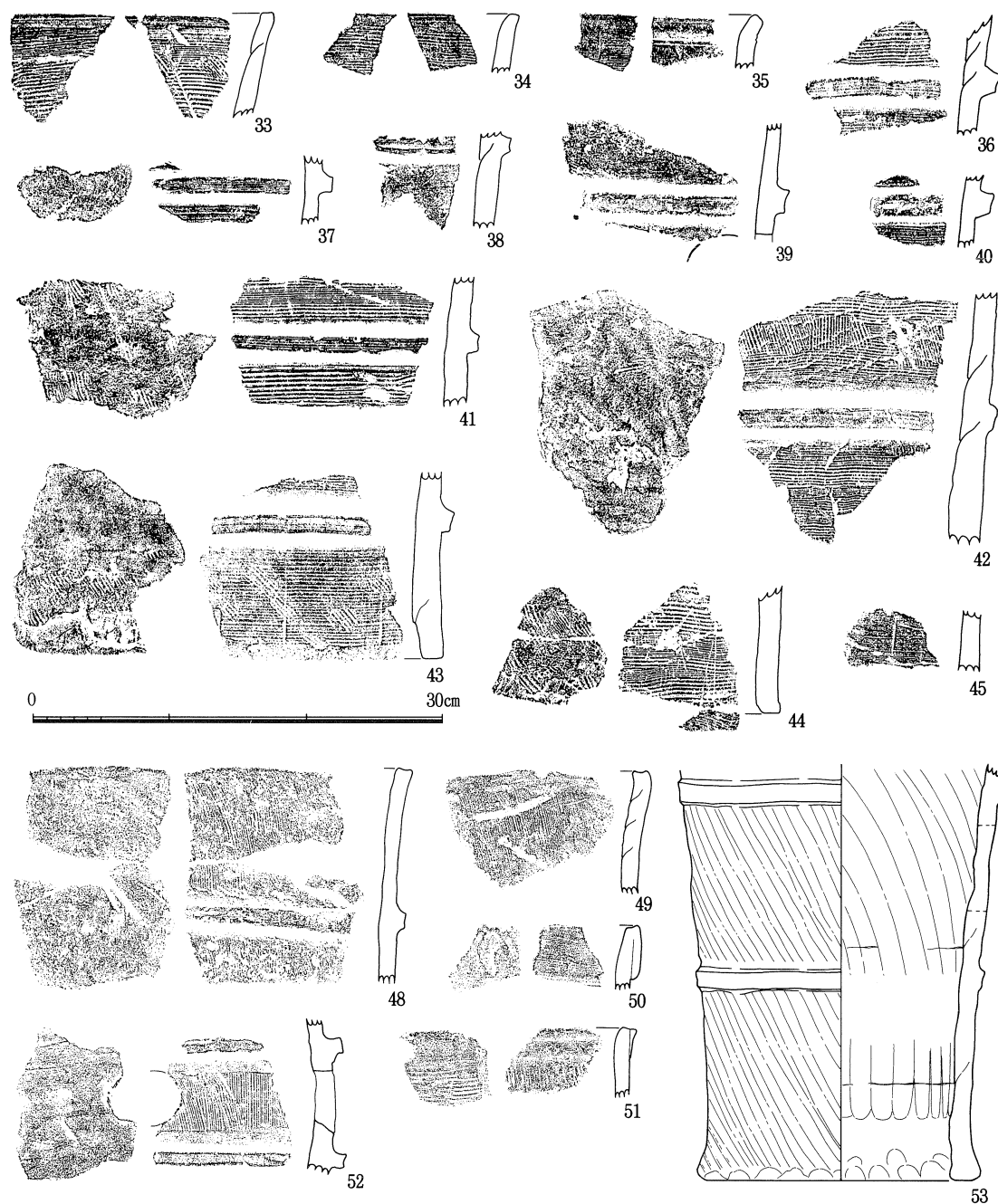


図134 包含層 c群 円筒埴輪33~45・48~53

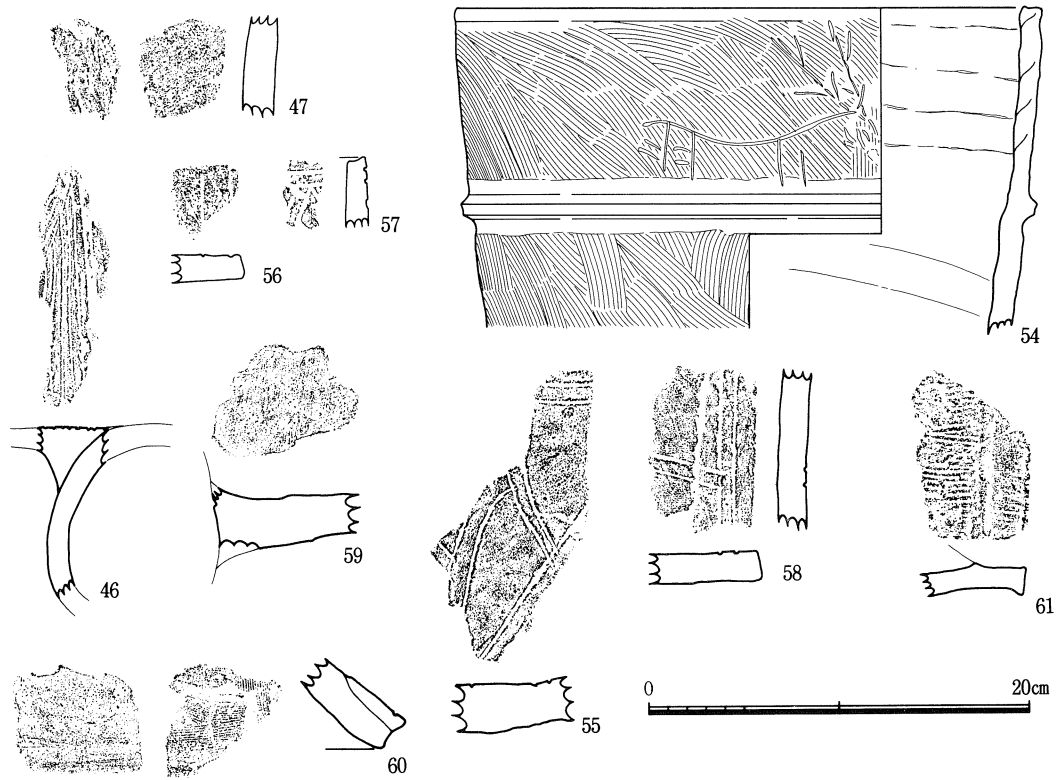


図135 包含層 c群 形象埴輪 盾46・55~58 蓋47・60 ヘラ記号(動物画)54 その他59・61

Ⅲ 工人集落

工人集落は、段丘東南部のおよそ50m四方の範囲に営まれていて、標高は53m～57mである。集落のすぐ東側は谷が北へ入り込み、南側は比高差が約10mの急な斜面地となり、居住区が画されている。西側についても、幅25mほどの浅い谷が段丘中央部を南北に縦走している。ただし集落の北側については良好な開地があるにもかかわらず、古墳時代の遺構・遺物は検出されなかった。

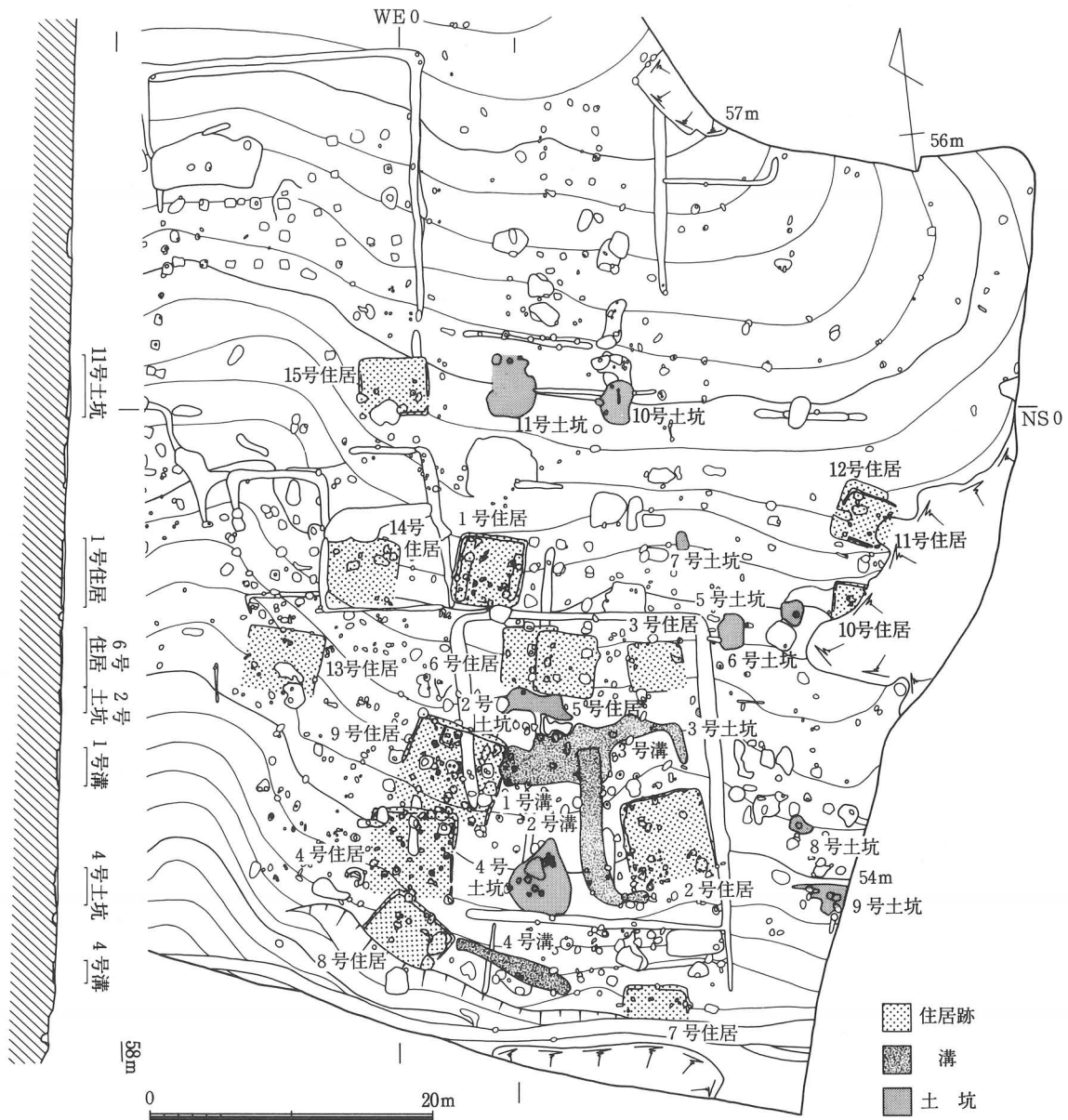


図136 工人集落 位置図

工人集落にかかわる遺構としては竪穴住居・溝・土坑・落ち込みなどがある(図136、PLATE 23a)。

竪穴住居はいずれも方形であるが、工房群と同様に、削平のため遺存状態は悪く、各住居とも、壁面の高さはおおむね0.2m以下となっており、とくに南辺部は欠失しているものが多い。構造的には四主柱と周溝をそなえたAタイプ、四主柱も周溝ももたないBタイプ、二主柱と周溝をもつCタイプがある。Aタイプの主柱は西南部のものから右回りの順で、主柱1・2・3・4とする。また周溝については、工房と同様に、北周溝・西周溝といった表現にする。表9に住居跡の基本的なデータを一覧している。

1号住居(図137、PLATE23b)

集落の北寄りで検出した。Aタイプである。周溝は南西部で途切れている。一部で幅広く深いところが認められるが、大略幅0.2mで、深さは検出した現状で約0.2mを測る。主柱穴は径0.26~0.33mで、深さは0.1~0.22m前後である。床面は南に緩く傾斜していて、西辺と東辺にはそれぞれ長さ3m、幅0.8m、深さ0.2mと長さ3.4m、幅0.7m、深さ0.08mの細長い溝状の落

No.	EW	NS(m)	四主柱	主柱の直径・深さ(cm)				柱間(m)	周溝	深さ(cm)	カマド 焼土	タイプ	床面の深さ
				1	2	3	4						
1	5.0	5.0	○	28.0 22.0	30.8 10.0	26.0 11.0	33.2 19.0	2.1~1.6	○	15.6	焼 土	A	12.4
2	6.0	6.0△	○	40.4 51.0	40.8 45.5	38.0 45.0	31.6 20.3	2.8~2.6	○	12.4	カマド(東辺)	A	4.0
3	4.2	4.0△	×						×		焼 土	B	8.0
4	6.2	6.3△	○	42.0 33.0	39.2 37.5	41.6 28.0	41.2 22.5	3.4~3	○	12.8	カマド(北辺)	A	10.0
5	4.6	4.5	×						×		焼土(床面)	B	30.0
6	4.1	4.0△	×						×		焼 土	B	11.2
7	4.7	2.2△	○	— —	26.8 9.0	22.4 11.0	— —	3.1	○	14.4	カマド(北辺)	A	12.0
8	5.7	4.0△	○	24.8 35.0	27.6 30.0	24.0 28.5	20.4 13.0	2.9~2.8	○	11.6	カマド(北辺)	A	12.0
9	7.2	6.0△	○	39.2 43.0	47.2 55.0	38.8 40.0	49.6 34.0	3.4~3.2	○	16.8	×	A	10.0
10	2.5△	3.0△	○	32.4 28.0	— —	— —	— —		○	22.4	焼 土	A	16.0
11	3.7△	3.6	○	22.0 26.0	20.0 22.0	28.8 21.0	31.2 29.5	1.6~1.4	○	13.6	×	A	4.8
12	4.4	3.0	×						×		焼 土	B	8.4
13	5.3	4.0△	×						一部		焼 土	B	7.2
14	4.7△	3.0△	×						×		カマド(東北部)	B	19.2
15	5.0	4.2	二主柱	38.4 25.0	36.8 21.5			2.6	○	7.6	×	C	8.8

表9 工人集落 竪穴住居一覧表

△は現存値

ち込みがみられる。また北東隅の床面直上で直径0.5mほどのうすく堆積した焼土がみられた。埋土は黄灰色ないし茶灰色の土層、もしくは砂質土層である(土層断面図の網点部分)⁽¹⁾。

遺物は東辺の溝から須恵器の坏蓋1、土師器の高坏・甕13・15(図138)、ピット1から土師器の鉢10、ピット2から土師器の高坏12、ピット3から同じく14を検出している。また黄灰色土の埋土からは須恵器・土師器・円筒埴輪片2~9、11、16が出土している。なお東南部で直径0.8mほどの不定形な落ち込みがみられたが、なかからは奈良時代の土器が出土している。

1号住居の遺物

(図139、PLATE91・92b)

須恵器では、坏蓋、坏身、高坏蓋、甕がある。坏蓋1は、口径12.5cm、器高4.2cmを測る。天井部がやや扁平で、稜線も鋭く突出している。口縁部はほぼ垂直で、端部は内傾ぎみに面をもつ。天井部外面のヘラケズリ

は稜線ちかくまで及んでいる。小片の2も同様の特徴をもつ。坏身3~7は、口径10.4~11.2cmを測る。口縁部は内傾ぎみにつき、端部は面をもつ3・4と段をなす5がある。底部外面のヘラケズリは受け部のちかくまで及んでいる。扁平な底部をもつ3はやや古相を示し、底部外面に粘土が溶着している。高坏蓋8は、口径13.3cm、器高5.2cmを測る。口縁端部は平坦な面をもち、天井部のヘラケズリの範囲は、坏蓋に比べて少し狭くなっている。外面には一様に自然釉が付

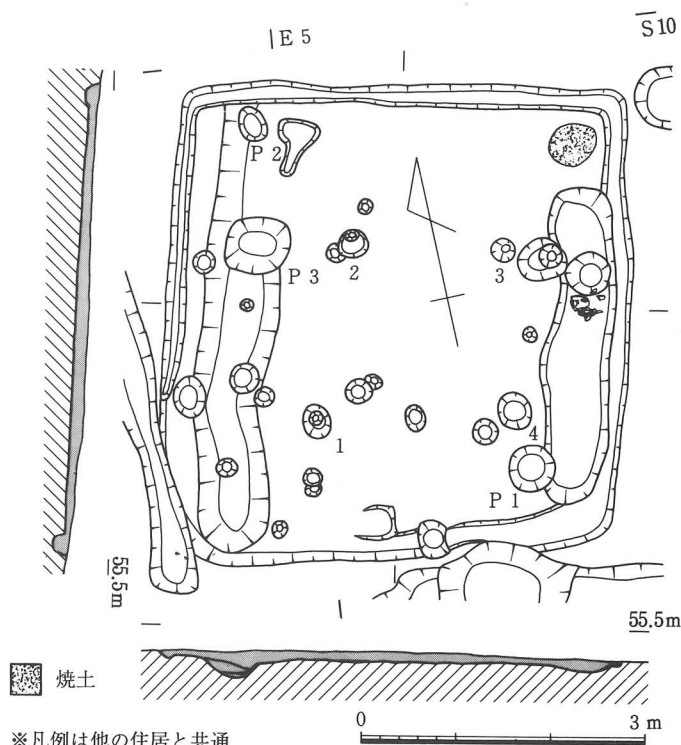


図137 1号住居 平面図・断面図

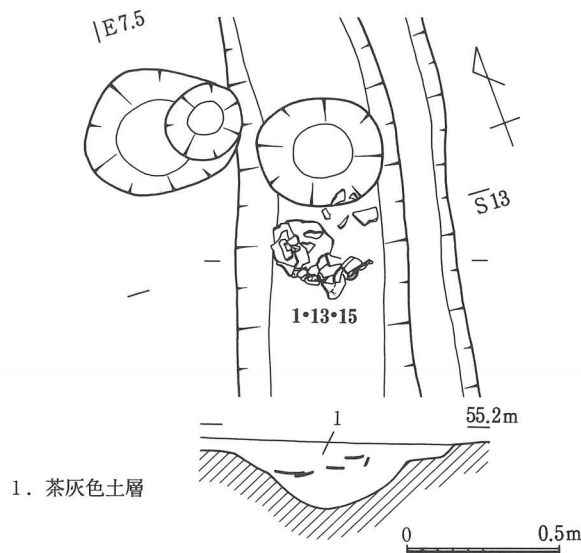


図138 1号住居 東溝 遺物出土状態

着している。9は甕の胴部片で、外面は平行タタキ目がみられ、内面はていねいにすり消している。これらはTK208型式²⁾とみられる。

土師器では鉢、高坏、甕がある。鉢10は平板な底部から垂直にたちあがる体部を有する小形品である。口径11.7cm、器高4.9cmを測る。高坏は口径が12cm前後の小形で、いずれも口縁部が内弯し、内外面ともハケ調整後、なでて仕上げている。坏部が3点11~13、脚部が1点14である。甕15は、大形の薄手のもので、下半部のみ遺存している。胴部外面はタテハケ調整、内面はヘラケズリしている。これらは布留式Vとみられる。

埴輪は円筒の口縁部片16がある。内外面ともヨコハケ調整し、形状はA3類である。残存高4.6cmで、IV期とみられる。

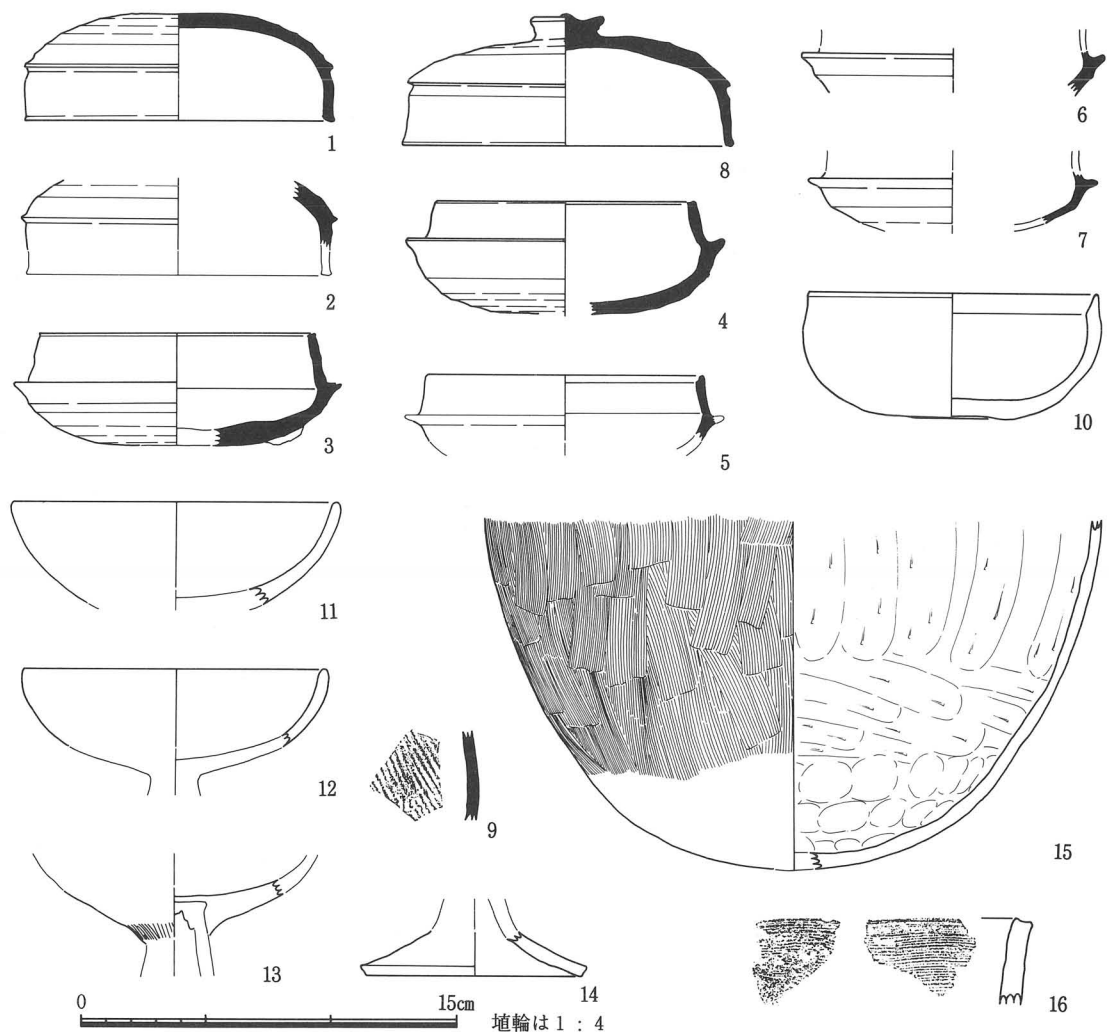


図139 1号住居 須恵器 坏蓋1・2 坏身3~7 高坏蓋8 甕9
土師器 鉢10 高坏11~14 甕15 円筒埴輪16

2号住居(図140、PLATE24a)

集落の東南部で検出した。Aタイプの住居で、大きい部類に属す。南辺部は削平されて遺存していない。周溝は北側と西側でみとめられたが、東辺部については掘り込みが浅かったのか、明確でない。周溝内や東側の周壁に沿った限られたところに杭穴とみられる小穴が点在していた。支柱穴は径0.3~0.4mで、深さは支柱4が0.2mと浅いほかは、0.4m前後で深く掘られている。床面は南にわずかに傾斜している。また東辺部のやや南寄りで、幅0.7~0.8m、奥行1mほどのカマドを検出した(図141、PLATE24b)。カマドは床面を7~8cmほど掘りくぼめた周囲に土を置き固めて成形したもので、構築に際して粘土をもちいた形跡はみられない。燃烧部中央には高さ約10cmの白っぽいチャートの台石(PLATE105b-20)が据えられていた。カマドの上半部は削られているために、掛け口や煙出しの形状は不明で、煙道も明確でない。遺構の平面をみるかぎりでは、カマドの中軸線は周壁と直交せず、約60°の角度で取り付いていたようである。焼土面と炭灰層は交互に2層ずつみとめられ、上下の焼土面にはそれぞれに対応したかたちで新古の2個体分の甕が出土している。とくに上層の甕13は破片が折り重なり、押し潰された恰好で出土したことから、甕を据えたままの状態でカマドが遺棄されたものとみら

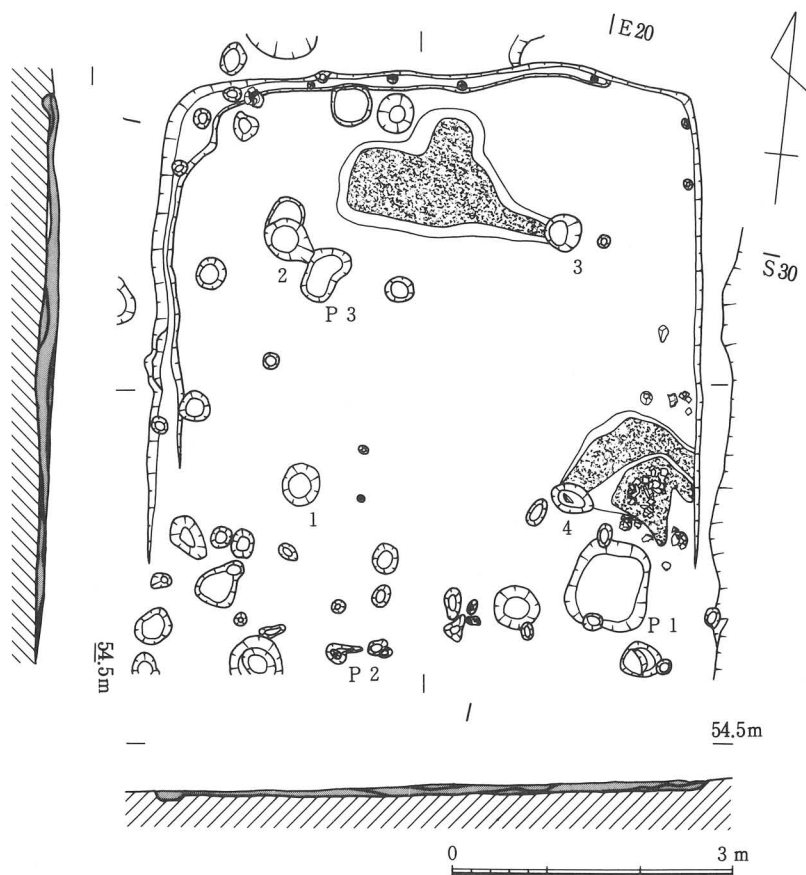


図140 2号住居 平面図・断面図

れる。また台石の底面が下層の焼土面に密着しつつ、上面には新相の甕がのっていた。これなどは、当初に据え置かれた台石が最後まで維持されていたと判断されるものである。なお住居の北半部にも、縦0.6m、横1mの範囲に焼土のひろがりが見られた。

遺物はカマドの周辺から土師器の高坏5・8や甕片がまとまって出土したほか、すぐ南のピット1からはほぼ完形に復原される小形の甕14、ピット2からは高坏片12、支柱穴3からも高坏片

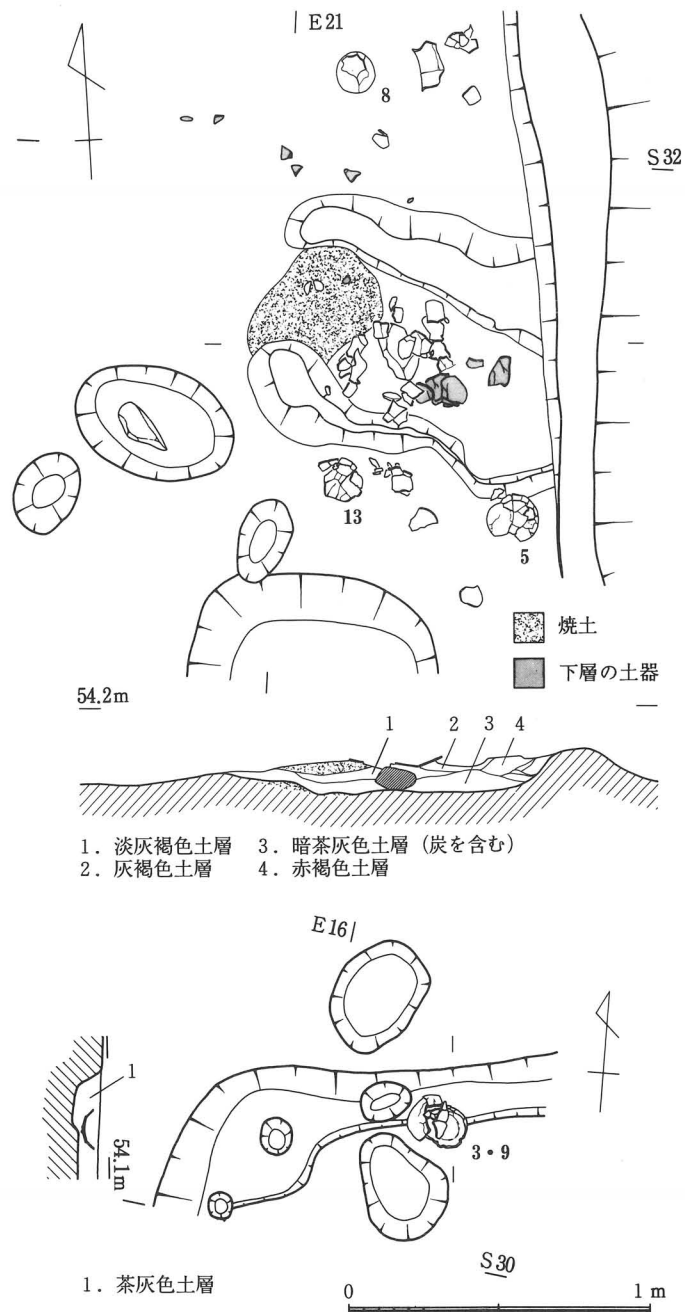


図141 2号住居 カマド(上)・周溝北西部(下)

7が出土している。北西のコーナーちかくでも高坏が2点3・9みられ、そのほかでは支柱穴2の東南に隣接するピット3で滑石製品16を検出している。また黄灰褐色土を主とする埋土からも若干の土器片1・6・10・11、埴輪片15、砥石類(17~19)が出土している。

2号住居の遺物(図142~144、PLATE91・92・105b・106)

須恵器・土師器・埴輪・石製品がある。須恵器は甗のみである。1はやや肩の張った軟質の体部片で、文様はない。復原径12.3cmである。ON46型式とみられる。

土師器は高坏と甗がある。高坏は口径12.2~14.6cmで、いずれも小形である。稜をもつ2~4と、もたない5~10があり、後者では5の口縁部が外反ぎみになっている。色調はおおむね淡灰褐色であるが、2のみは灰白色を呈している。ほかに脚部の小片11・12がある。甗は大形13と中

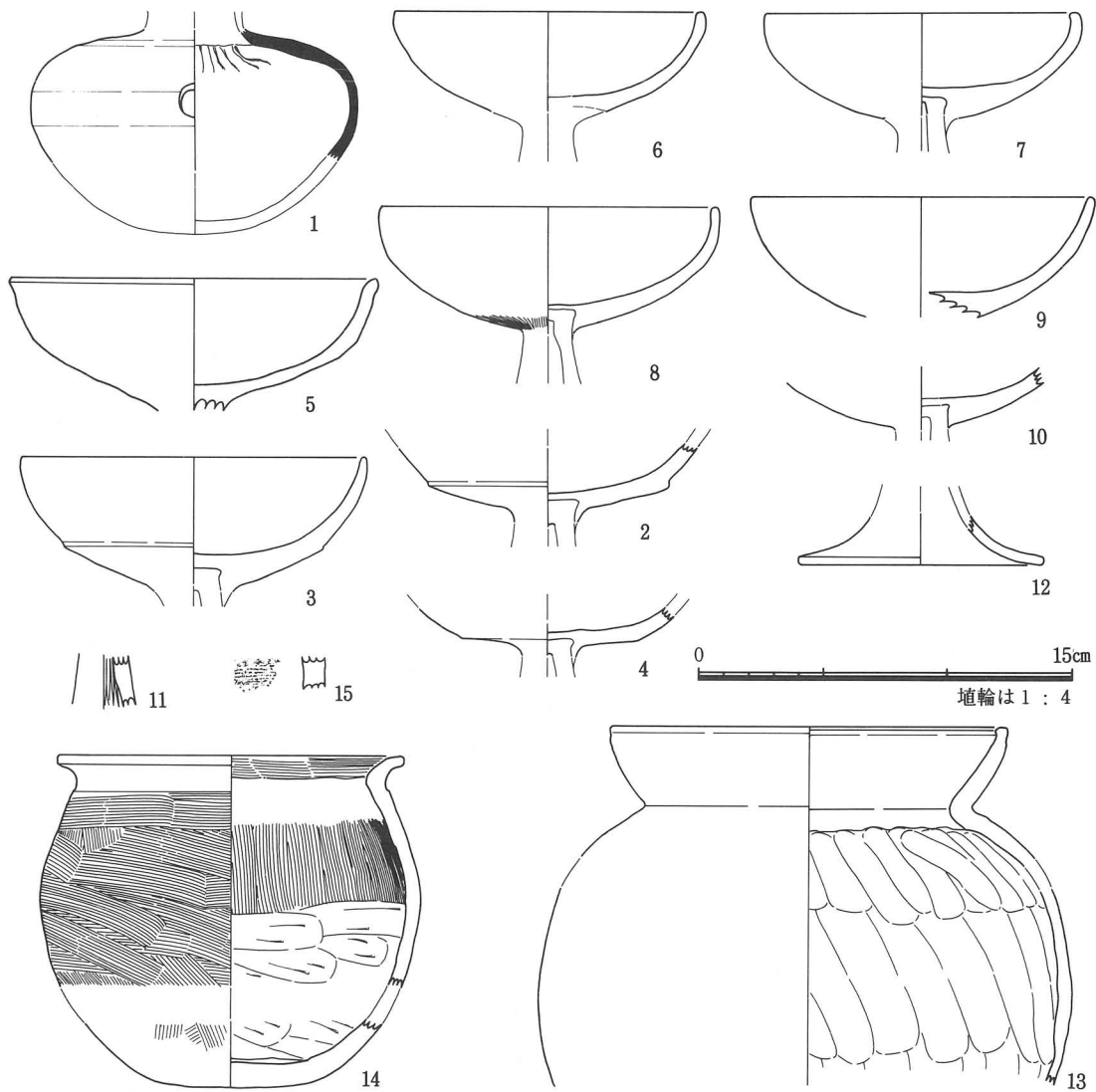


図142 2号住居 須恵器 甗1 土師器 高坏2~12 甗13・14 埴輪15

形14がある。13は布留式古相の特徴を色濃くのこしたもので、口径は15.9cm、最大腹径は21.4cmである。14は平底と球形の体部をもち、口縁部は短く外反している。外面はていねいな横方向のハケ調整がみられ、内面はヘラケズリ後に上半部をハケ調整している。口縁部は外面をヨコナデ、内面をハケ調整している。口径13.9cm、器高13.2cmを測る。これらは13がやや古相を示すが、高坏類の形状から布留式Vと判断される。

埴輪15は外面にヨコハケをほどこした細片である。

石製品では滑石製品と砥石の類がある。滑石製品16は縦3.9cm、幅2.05cm、厚さ0.5cmで、重量は7.57gを測る。形状は扁平な勾玉形で、直径1.5mmの穿孔がある。暗青灰色を呈する粘板岩系のもので、両面には擦痕がみられ、端面には整形時の研磨痕が明瞭にのこっている。

砥石は3点出土している。17は三波川帯の結晶片岩の砥石で、両端を欠損している。残存長13.6cm、幅5.6cm、厚さ4.5cmを測り、重さは429.67gである。三方の面に使用痕が認められ、なかでも上面と右側面の使用が顕著である。18も三波川帯の結晶片岩で、下端が折損している。残存長12.5cm、幅5.1cm、厚さ3.1cmを測り、重さは287.06gである。左側の面の一部に擦痕がみとめられるが、砥石としてはあまり利用されていない。先端は中央がわずかにへこんでいて、敲具としての使用痕がみられる。19についても同じ結晶片岩の砥石で、扁平な形状はよく使われたことを示している。全長17.1cm、幅4.8cm、厚さ2.2cmを測り、重さは226.25gである。先端に敲打痕が認められる。なお、これらの砥石はいずれも搬入されたものと考えられる。

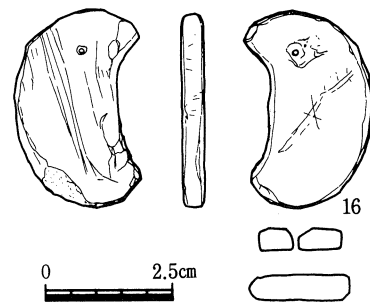


図143 2号住居 滑石製品16

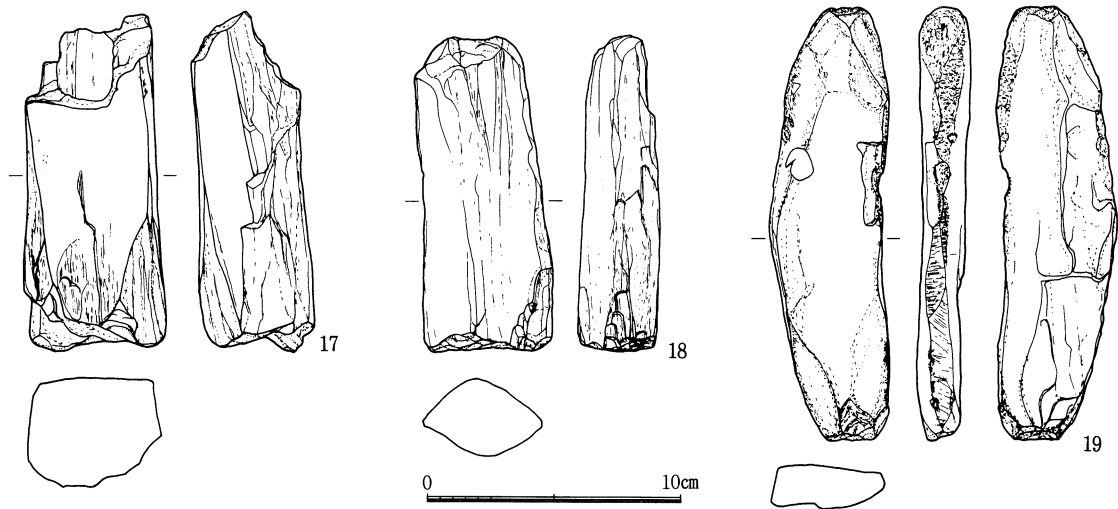


図144 2号住居 砥石17~19

3号住居(図145、PLATE25a)

集落の中央部のやや東寄りで見出した。Bタイプで、南東の一角を欠失している。一辺が4m強の小さな住居だが、北端と南端の比高差が約0.3mもあって、床面はかなり傾斜している。中央部では床面からやや浮いた状態で縦0.7m、横0.5mほどの炭灰のひろがりがあるが、明確な焼土はみられなかった。

遺物は淡黄色土の埋土から土師器の鉢1、高坏2~6、甕7・8と埴輪片9が出土している。

3号住居の遺物(図146、PLATE92)

須恵器は検出されなかった。

土師器は鉢と高坏と甕がある。1は口径10.3cmの小形の直口鉢で、口縁部はわずかに外反している。遺存状態は良くない。高坏はいずれも小形品で、稜をもつ2・3ともたない6がある。口縁部は外反ぎみにおわる2・3がみられるが、内弯するものは確認されなかった。3の脚部は中空部上端の調整がていねいで、下縁のみが屈曲してひろがる形状は、ほかの住居から出土し

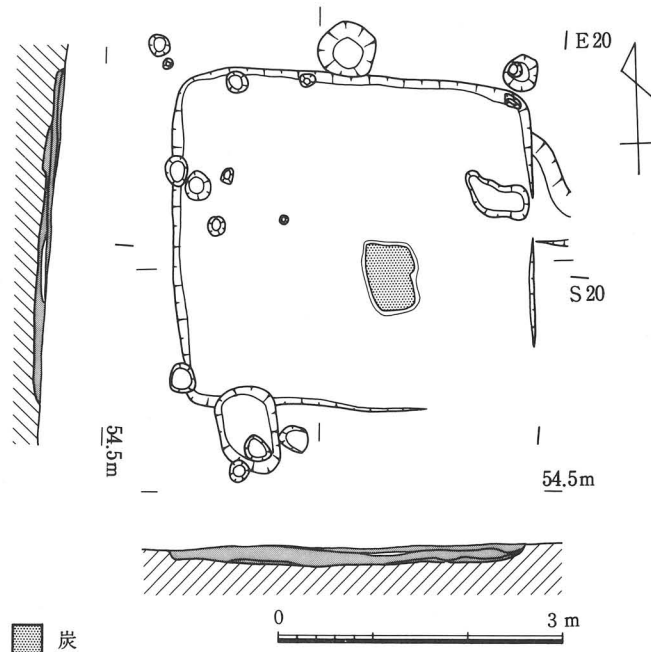


図145 3号住居 平面図・断面図

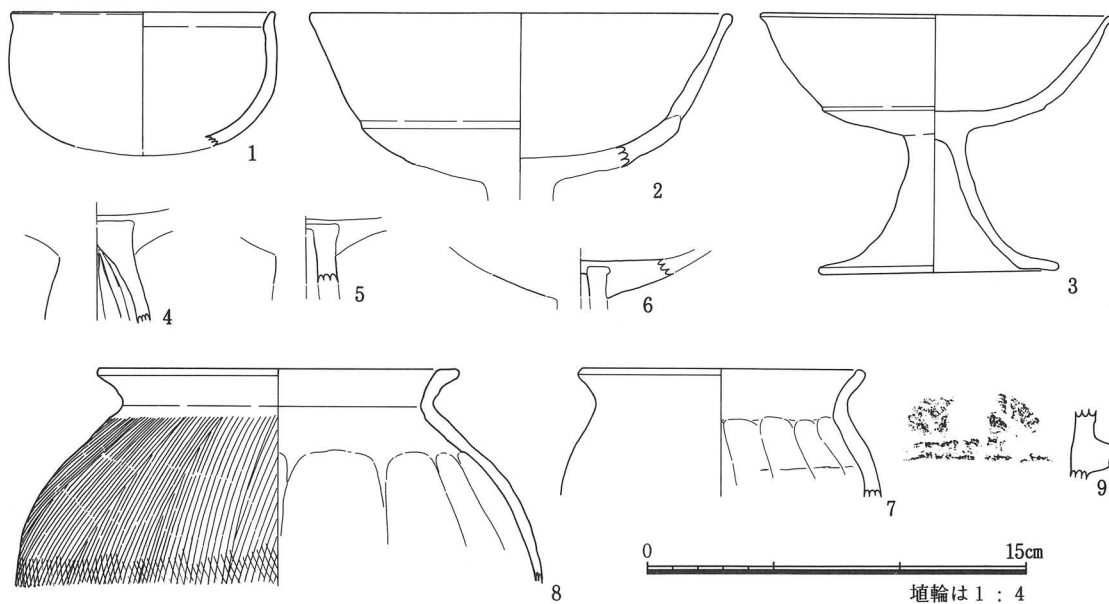


図146 3号住居 土師器 鉢1 高坏2~6 甕7・8 円筒埴輪9

た小形高坏にはあまりみられないものである。また4には内側に絞り目、5・6には棒状刺突痕がみられる。甕は小形の7と大形の台付甕8がある。7は内面をヘラケズリしたもので、口径は11.4 cmである。8は口径14.4cm、腹径20.8cmを測り、いわゆる台付甕の上半とみられる。縦長球形の体部に外反する口縁部を有する。上縁部は外側に肥厚し、上端に面をもつ。体部外面には粗い羽状ハケ目がみられる。内面の調整は風化のため判然としないが、幅3～4 cmほどの縦方向にヘラで搔きとったような痕跡が認められる。胎土には直径2～3 mmの小石粒がかなり含まれ、色調も淡茶褐色を呈するなど、ほかの土師器とはあきらかに異なっていて、搬入品と考えられる。これらの土師器は高坏2・3に古い様相を認めつつも、高坏5・6の存在から、布留式Vとみられる。甕8については、東海地方の松河戸式の新相と考えられる⁽³⁾。

埴輪9は風化のために調整は不明。淡褐色を呈し、小型円筒の破片とみられる。

4号住居(図147・148、PLATE25b)

集落の南西部で検出した。Aタイプである。後世の削平がひどく、とくに南半部は床面も削り取られるといった状況で、周溝も北と東および西周溝の北端部がかるうじて遺存してただけである。支柱穴は径0.4m前後で、深さは0.22～0.38mである。床面は残存部分ではほぼ水平

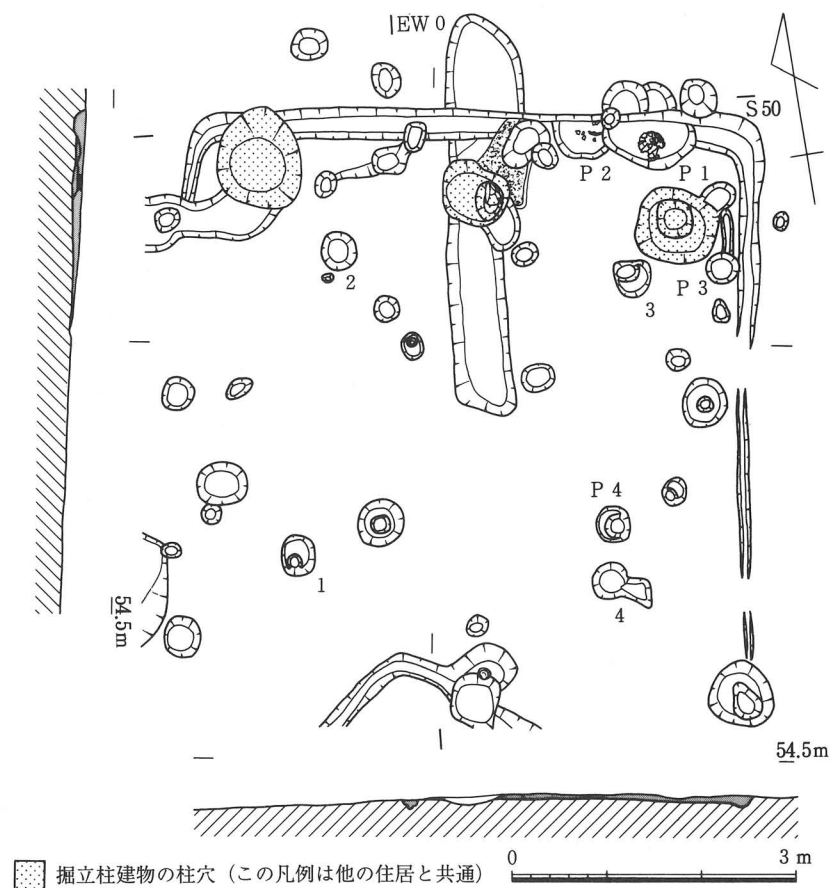


図147 4号住居 平面図・断面図

である。北辺中央部では幅0.6m、奥行0.9mの範囲に焼土を検出した。この焼土を切り込んだピットのなかにやや扁平な径15cmほどの台石が落ち込んでいたことから、カマドがあったとみられるが、攪乱部分が多くどのような構造なのかよくわからない。

遺物はカマドの東側のピット1から土師器の甕12、ピット2から高坏7、ピット3から須恵器の甕3、ピット4から須恵器の坏身片2がそれぞれ出土し、また暗茶灰色土の埋土からも若干の土器片1・4・5・8～11が出土している。

4号住居の遺物

(図149、PLATE92)

須恵器では坏身、壺、甕がある。坏身1は、口径11.4cm、器高4.3cmを測り、底部はかなり扁平である。口縁部は内傾して、高く立ちあがり、端部はまるくおさめている。破片の2も同様の形態とみられる。壺3は、胴上半部片で、内外面とも回転ナデ調整がみられる。甕4は胴部片で、径14.7cmに復原される。肩部に波状文をほどこし、全体に自然釉がかかっている。なお孔部は遺存していない。これらはON46型式とみられる。

土師器では壺、高坏、甕がある。5は小形の直口壺とみられる。外面はていねいなハケ調整、内面はナデ調整している。6は中形壺の胴部片とおもわれ、調整は5と同じである。高坏7は口縁部が内弯する小形のもので、稜はみられない。復原口径は12cmを測る。脚部8は風化がはなはだしい。内面に絞り目と棒状刺突痕がみられる。甕はいずれも大形品で、布留式の9と口縁部が単純に外反する10がある。胴部11・12は2点とも内外面をハケ調整している。これらの土師器は布留式Vとみられる。

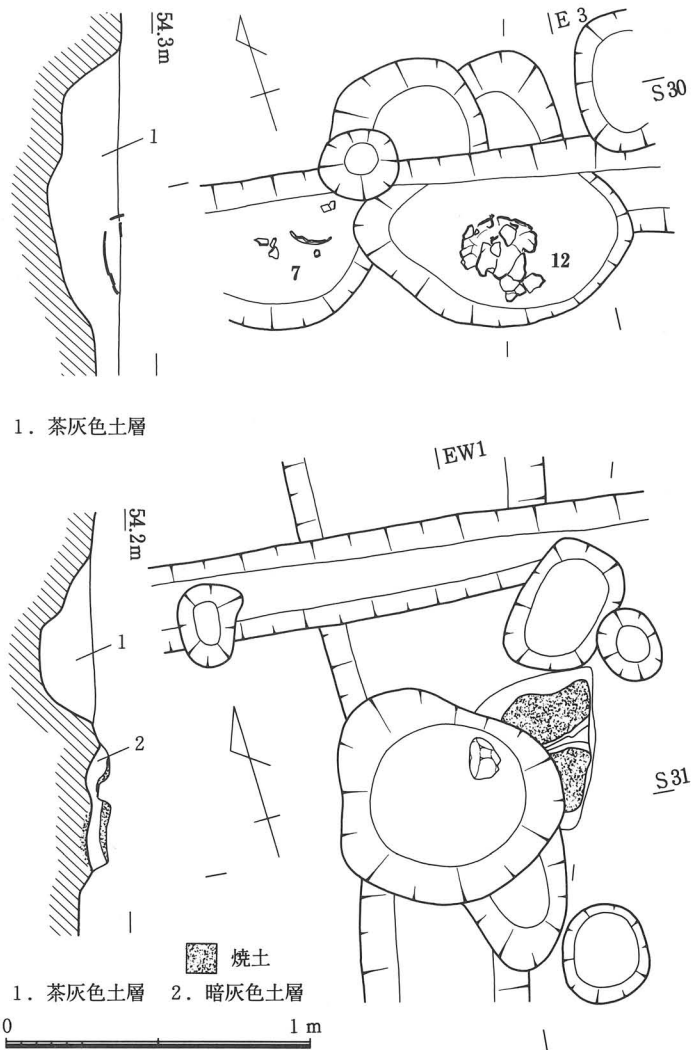


図148 4号住居 ピット1・2(上)・カマド(下)

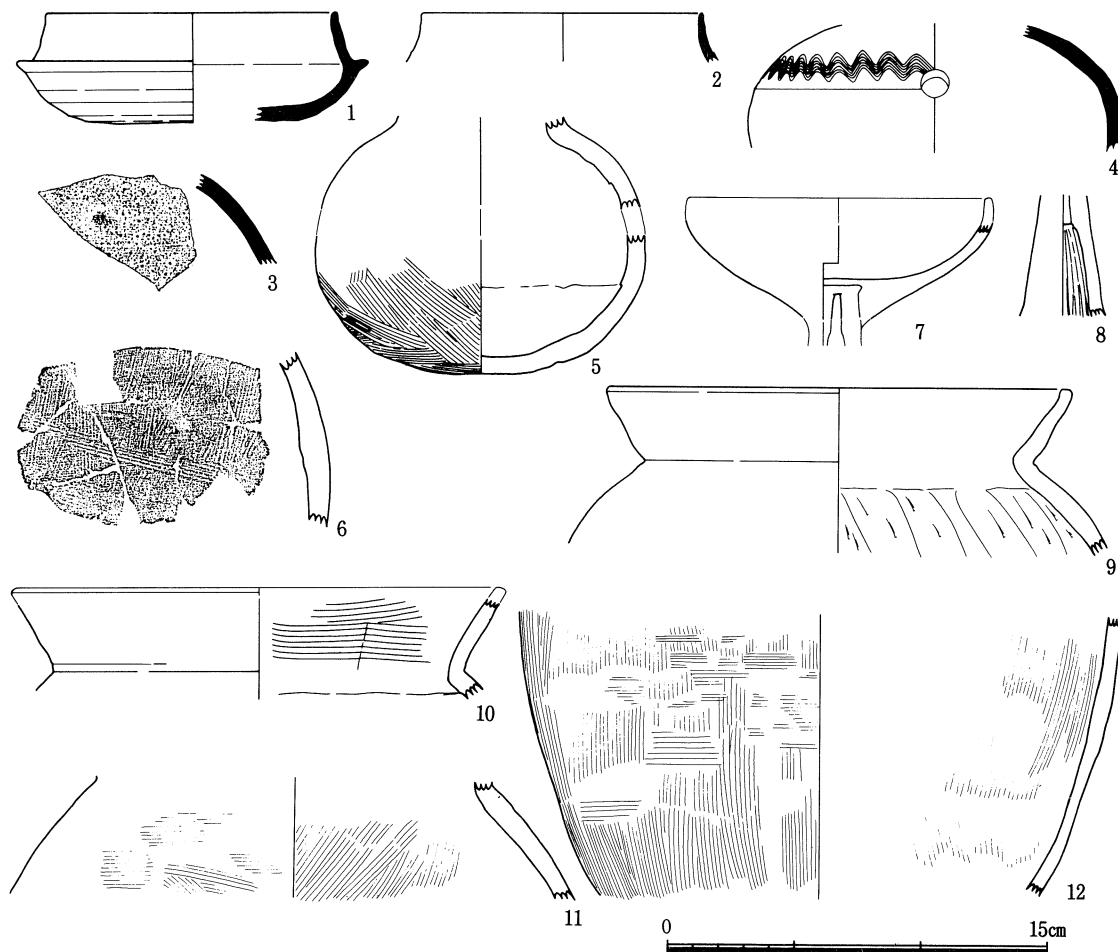


図149 4号住居 須恵器 坏身1・2 壺3 甗4 土師器 壺5・6 高坏7・8 甕9～12

5号住居(図150、PLATE26a)

6号住居とともに集落の中央部で検出した。Bタイプで、すぐ西の6号住居を大きく切り込んで堅穴が掘られていた。周壁の掘り込みは集落内でもっとも深く、現存で0.3mを測る。床面はほぼ水平で、南辺中央部に径0.8mほどの焼土がみられる。埋土は下層が堆積土である茶灰色砂質土層、上層が流入土である暗黄灰色土層で、この流入土はほかの住居ではみられなかった。床面の遺物としては須恵器の坏身5と若干の土師器片だけで、大半(1～4、6～17)は上層の暗黄灰色土層から検出されている。

6号住居(図150、PLATE26a)

5号住居の西隣で検出した。Bタイプで、東半分は5号住居の掘削によって欠失している。床面は南側がわずかに低くなっている。埋土は黄灰色土と茶灰色土で、上層にはきわめてうすい焼土がみられる。遺物はすくなくて、高坏2点(18・19)と5号住居の甗7に接合した資料ぐらいである。

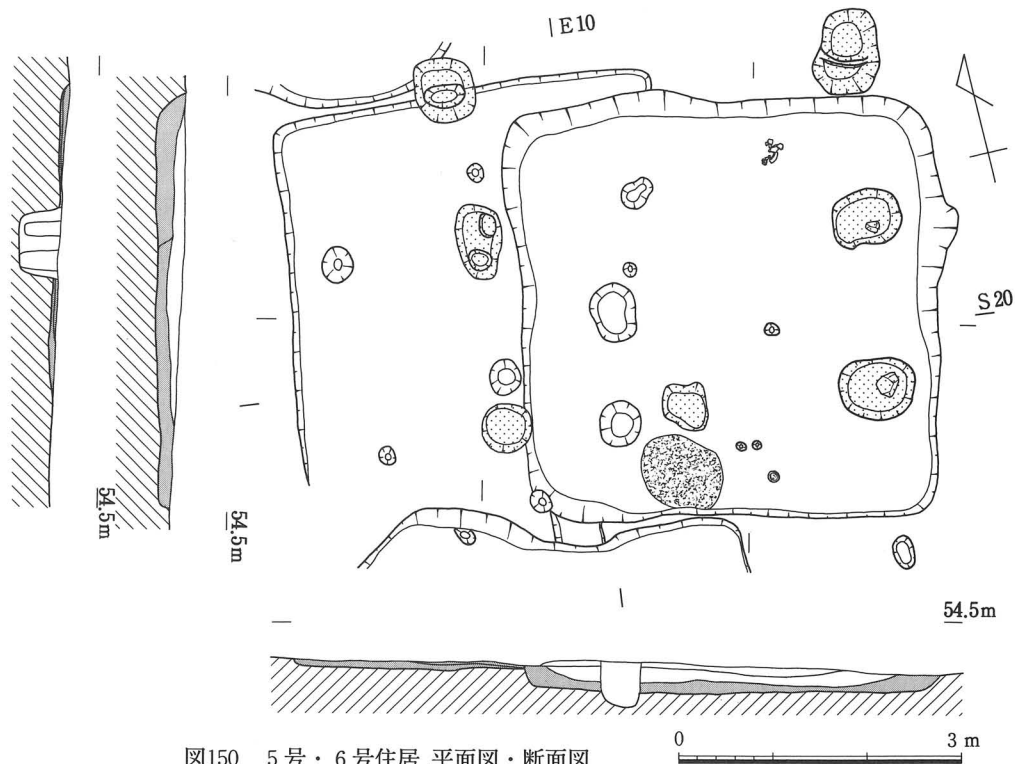


図150 5号・6号住居 平面図・断面図

5号・6号住居の遺物(図151・152、PLATE93・94a・106)

5号住居からは須恵器・土師器・埴輪・石製品が出土している。須恵器では坏蓋、坏身、高坏蓋、甕、甕がある。坏蓋1は口径12.7cmを測る。器壁が薄く、シャープなつくりである。口縁部は垂直にちかく、端部はわずかにへこんでいる。天井部のヘラケズリは稜線ちかくまで及んでいる。坏身2は口径12.4cm、器高4.3cmを測り、底部は扁平である。口縁部は高く立ちあがり、端部は面をもつ。破片の3・4も似たものとみられる。坏身5は、口径9.9cm、器高4cmを測る。底部から口縁部にかけてなだらかに移行し、端部はまるくなっている。底部のヘラケズリは雑で範囲も狭い。高坏蓋6は、つまみ周辺のみで、外面はなでている。甕7は大形の胴部片で、復原径17.2cmになる。肩部に列点文と波状文をほどこしている。甕8は肩部の破片で、外面は平行タタキのあとヨコナデし、内面は当て具痕をすり消している。これらの須恵器はTK46型式の坏身5を除けば、大半はTK208型式とみられる。

土師器では、高坏、甕がある。高坏9は大形であるが、風化が相当すすんでいる。10～12は小形の高坏片である。13は甕の肩部で、上縁にヨコハケをほどこし、内面はヘラケズリしている。布留式の系統であろう。14は風化のため、内面のヘラケズリ調整以外は判然としない。これらは高坏の形状から、おおむね布留式Vと判断される。

2点の埴輪15・16は同一個体とみられる小型円筒で、突出したタガをもつ。外面は細かなタテハケ後に粗いヨコハケで調整し、内面は粗いタテハケをほどこしている。

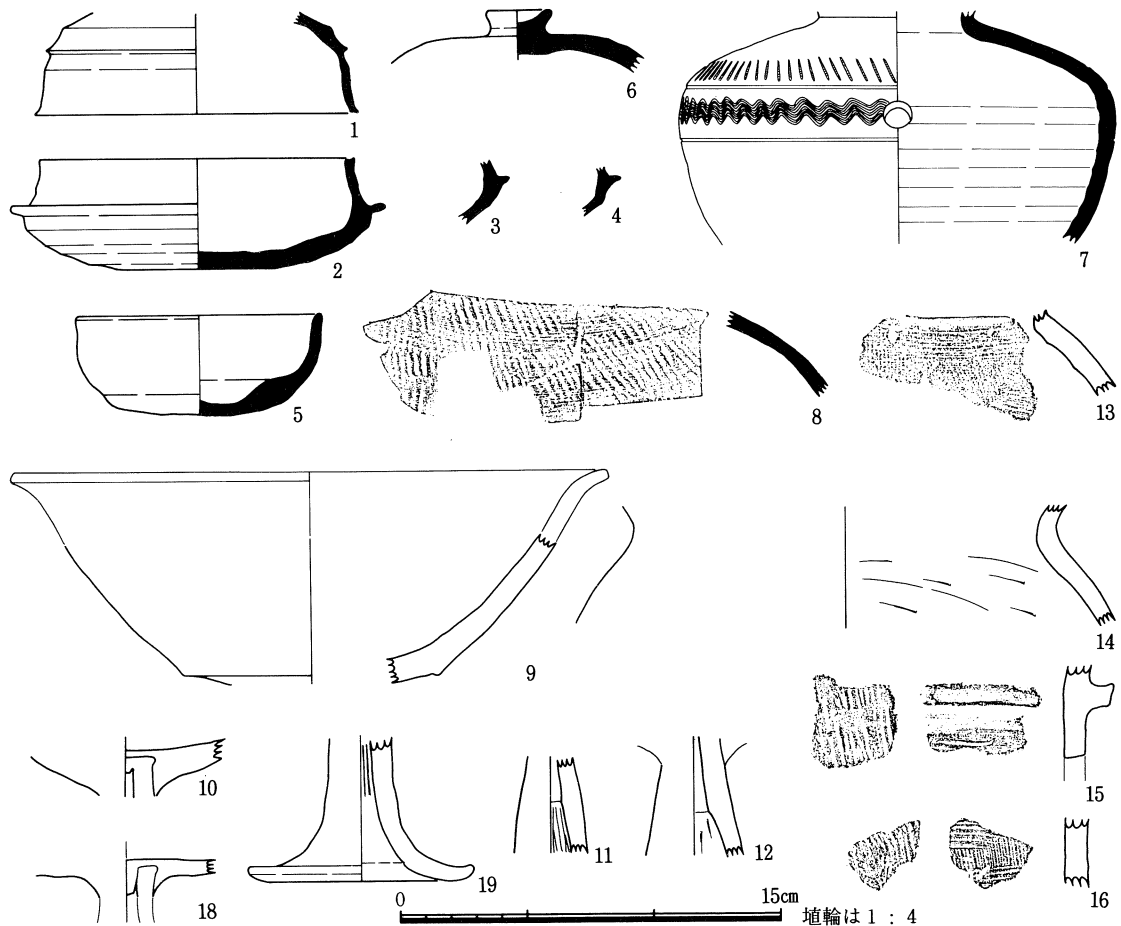


図151 5号住居 須恵器 坏蓋1 坏身2~5 高坏蓋6 甃7 甕8 土師器 高坏9~12 甕13・14 円筒埴輪15・16
6号住居 土師器 高坏18・19

砥石17は扁平な砥石で、一端を欠失している。現存長7.8cm、幅6.6cm、厚さ1.1cm、重さ98.43gを測る。表裏の面には擦痕がみられず、両側面と小口には擦痕がある。岩質は、変成度の高い砂岩である。

なお、5号住居の遺物は、甃7に端的に示されるように、いずれもが6号住居からの流入品であり、5号住居の時期を示すものは、TK46型式の坏身5とみられる。

6号住居からは小形高坏が2点出土している。18は稜を有するものかも知れない。また19の脚部のように円筒形の柱状部から裾部で大きくひろがる形態は、あまりみられないものである。

7号住居(図153、PLATE26b・27a)

集落の東南端で検出した。Aタイプの住居で、南半部は砂防用水路の掘削のため遺存してい

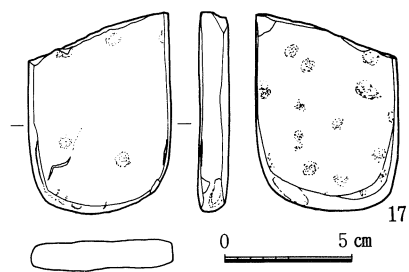


図152 5号住居 砥石17

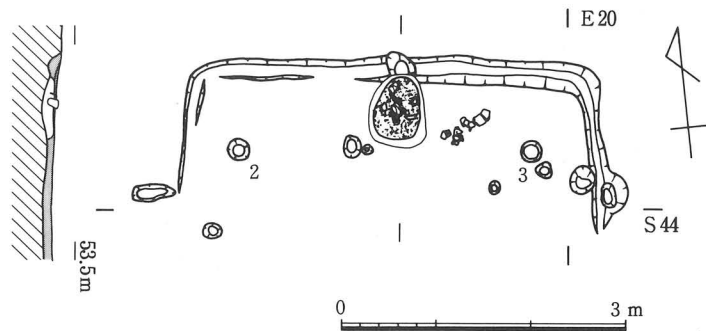
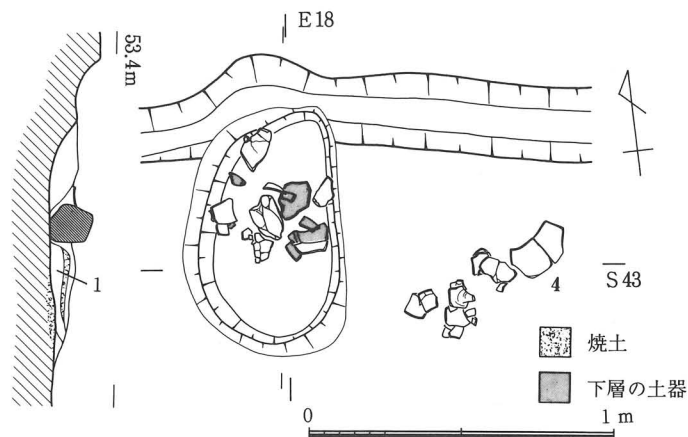


図153 7号住居 平面図・断面図



1. 暗灰色土層

図154 7号住居 カマド

ない。主柱穴は径約0.25mで、深さは0.1m前後と浅い。また住居の大きさのわりに柱間は3.1mとひろくとっている。床面は南へわずかに傾斜している。北辺部中央には幅0.5m、奥行0.7mのカマドが付設されていた(図154)。カマドは床面を5cmほど掘りくぼめ、その周囲に土を置き固めて成形しただけで、粘土でつくったような堅牢なものではない。燃烧部中央には高さ約15cmの淡灰色砂岩の台石(PLATE105b-6)が立てて据えられていた。掛け口は削平されているが、周壁には幅0.25mの煙道の掘り込みが認められた。焚口では焼固した地山がみられ、その上には炭を多含する暗灰色土が堆積していた。この堆積土の上面からは同一個体に復原される甕2・3が出土している。遺物はカマドのすぐ東側の床面で甕4と2に接合する甕片を検出したのをはじめ、暗茶灰色土の埋土から4とは別個体の甕底部5や高坏1が出土している。

7号住居の遺物(図155、PLATE93・94a)

須恵器は検出されなかった。土師器では高坏、甕、甑、がある。高坏1は脚部片で、稜のない小形品である。柱状部内面にヘラケズリの痕跡がみられる。厚手で大形の甕2・3は外面をハケ調整し、内面をヘラケズリしている。甑4は口縁部が短く外反するもので、外面上位はヨコハケ、内面は中位をヘラケズリし、上方はハケ調整後になでている。把手は中実で、挿入法に

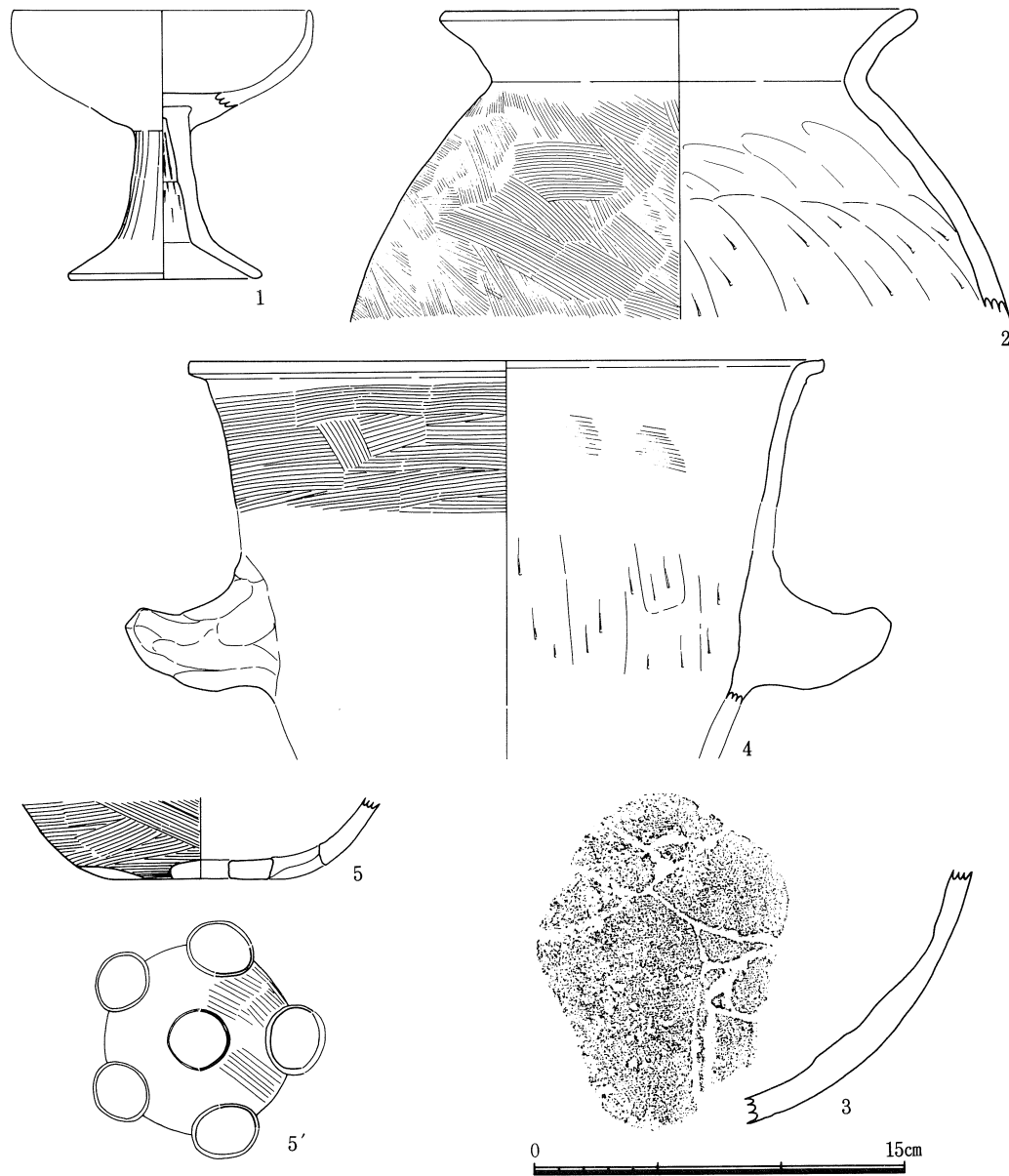


図155 7号住居 土師器 高坏1 甕2・3 甗4・5

よる。胎土には砂粒を多く含んでいる。5は甗の底部で、穿孔は1+5である。胎土は良質である。これらのなかに時期を端的に示すものはないが、ほかの多くの住居と同様に、布留式Vとみて大過ない。

8号住居(図156、PLATE26c・27b)

集落の西南端で検出し、4号住居に南接している。Aタイプの住居で、南側の一部が欠失している。主柱穴は径0.2~0.28mで、深さは主柱穴4がやや浅いほかは、0.3m前後である。床面はわずかに傾斜している。北辺部中央に幅0.9m、奥行1mのカマドが設けられていた(図

157)。カマドは、床面を5cmほど掘り、その周囲に土を置き固めて成形するのは2号・7号住居と同じであるが、焚口を重点的に掘りくぼめるのは2号のカマドとよく似ている。燃焼部中央には高さ約15cmの茶灰褐色のチャートの台石(PLATE105b-22)を横位に立てたままの状態で見出した。カマド奥部の壁面には煙道の痕跡とみられる15cmほどの掘り込みがある。縦断面を観察すると、赤褐色の焼土層と暗灰褐色の炭灰層の互層が3重に堆積しているのがみとめられ、当初のカマドが壊れるなどして使用不能な状態となった段階で、その上面にあたらしい床面を順次造成していったことがわかる(口絵8)。台石が最終面の炭灰層中に据えられていることからすると、台石もそのつど据え直されていたとみられる。カマドが再生されるにつれて、焚口が壁面にむかって移動したことが、焼土の堆積位置から読み取れる。カマド内の土器は第2次焼土面に対応する甑14・皿状土製品15と第3次焼土面に対応する甕13が出土している。また住居の東北部には長さ1.4m、幅1.2m、深さ0.3mほどの不定形な土坑があり、若干の土器類17~21が出土している。さらに北周溝の西寄りのところに、壁面を掻きとるように段掘りされた土坑があり、なかから須恵器の坏身4が出土している。そのほかの遺物としては、カマドの東側から須恵器の坏蓋2と土師器の高坏10、西側からは土師器の高坏9と鉢6があり、さらに暗茶灰色土などの埋土から須恵器・土師器・埴輪片(1・3・5・7・8・11・12・16)が出土している。

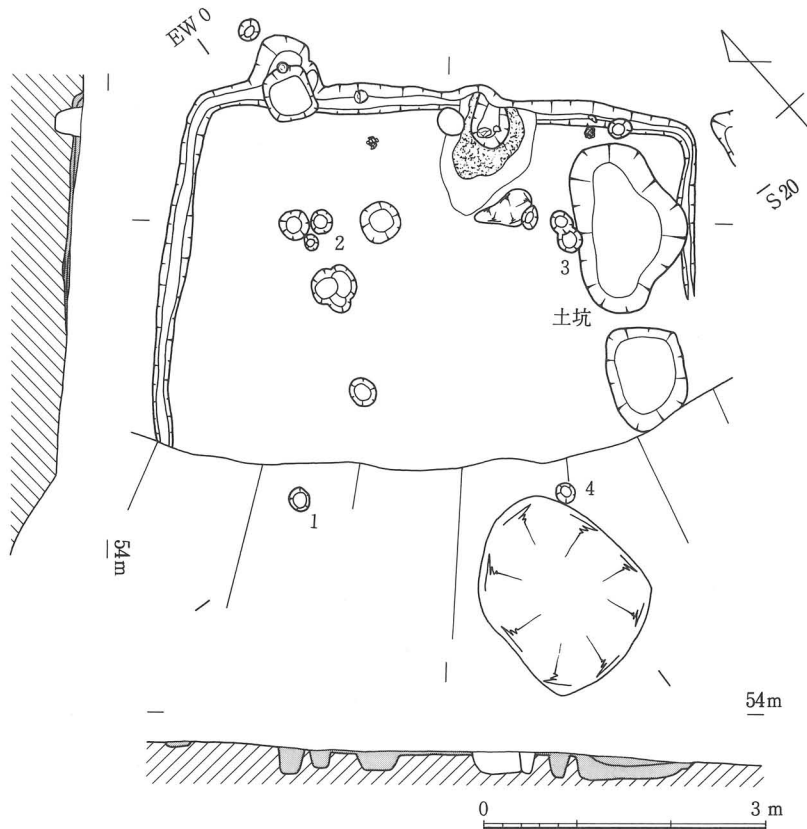
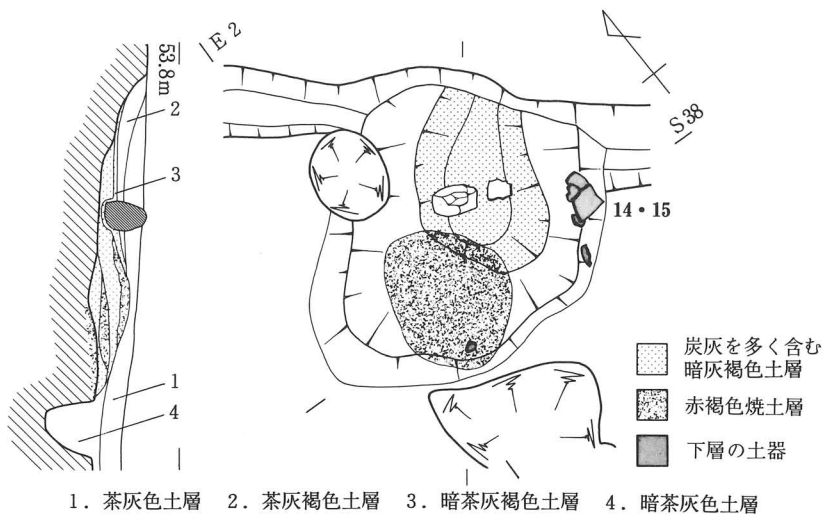
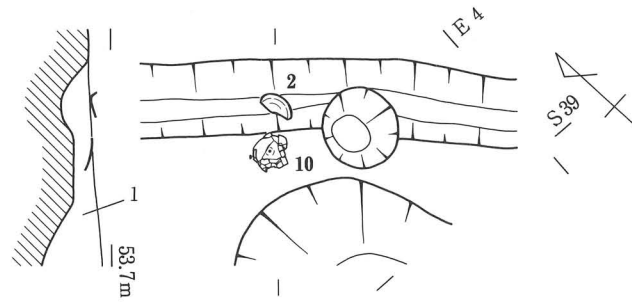


図156 8号住居 平面図・断面図



1. 茶灰色土層 2. 茶灰褐色土層 3. 暗茶灰褐色土層 4. 暗茶灰色土層

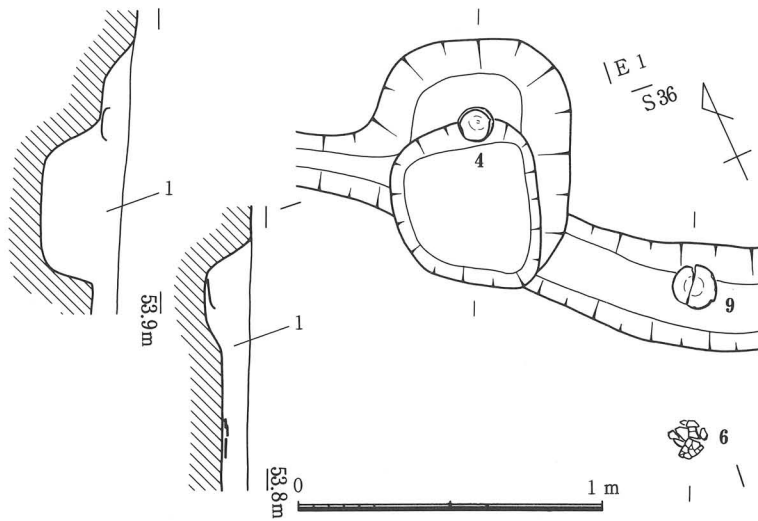


図157 8号住居 北周溝東半(上)・カマド(中)・北周溝西半(下)

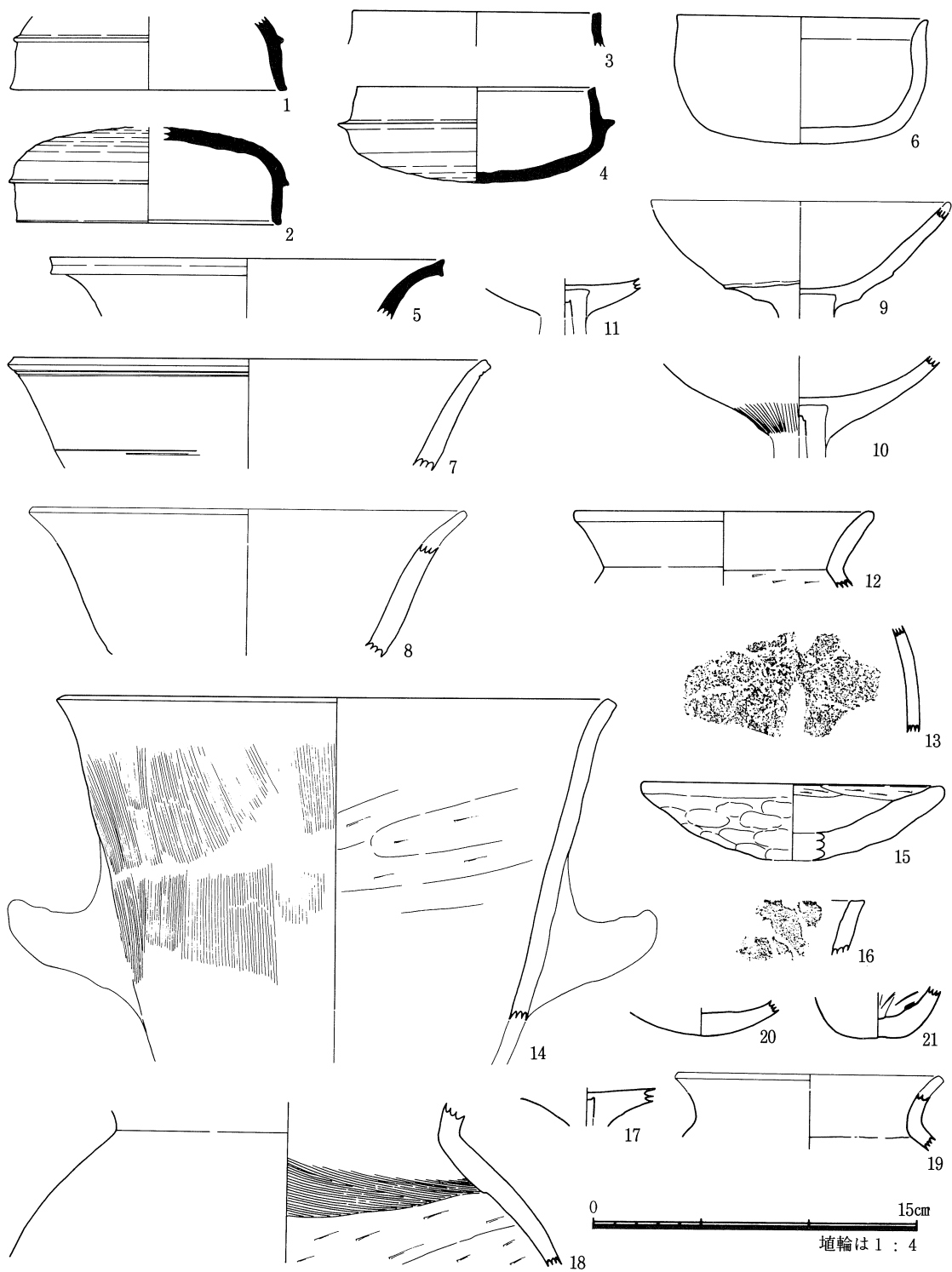


图158 8号住居 須恵器 坏蓋1・2 坏身3・4 壺5 土師器 鉢6 高坏7~11 甕12・13
 甑14 皿状土製品15 円筒埴輪16 住居内土坑 土師器 高坏17 甕18~21

8号住居の遺物(図158、PLATE93・94)

須恵器では坏蓋、坏身、壺がある。1は口径12.9cmを測り、稜線は鈍く突出している。口縁部はほぼ垂直で、端部に平坦な面をもつ。2は口径12.3cm、器高4.5cmで、やや低い天井部に垂直にのびる口縁部がつく。口縁端部は内傾し、わずかにへこんでいる。天井部のヘラケズリは稜線のちかくに及んでいる。坏身3は口径11.5cmに復原できるもので、口縁端部に平坦な面をもつ。坏身4はほぼ完形で、口径11.1cmを測る。やや扁平な底部は受け部ちかくまでヘラケズリしている。口縁部は直線的にたちあがり、端部はわずかに内傾して面をもつ。稜線ちかくに指紋がついている。5は壺の口縁部片で、口径は18.3cmに復原される。これらはTK208型式とみられる。

土師器では鉢、高坏、甕、甑がある。6は小形の直口鉢で、平底の底部をもち、口縁部は短く外反している。口径は11.8cm、器高6cmに復原される。高坏は大形の坏部片7・8と小形の9～11があり、後者には稜のある9とない10・11がみられる。あと小形の脚部が1点出土している。甕は大形の口縁部片12と胴部片13がある。12は口径14cmを測り、体部内面をヘラケズリしている。色調は淡褐色を呈している。13は薄手のもので、外面をハケ調整、内面をナデケズリしている。外面には煤が付着している。甑14は口縁部がわずかに外反し、外面をハケ調整、内面をヘラケズリしている。これらはおおむね布留式Vに相当する。

皿状土製品15は、口径14.1cm、高さ3.6cmで、厚さは0.9～1.2cmを測る。内外面とも雑になで調整しており、口縁部内周を軽くヘラケズリしている。胎土は小石粒をふくむものの良質で、色調は暗灰褐色である。埴輪16は円筒の口縁部片で、A2類に属す。

土坑からは土師器の高坏と甕が出土している。17は小形の高坏で、棒状刺突痕がみられる。甕では18が大形の胴部、19が中形の口縁部で、20は中形の底部とみられる。21は小形の甕の底部であろう。

9号住居(図159、PLATE27c)

集落の中央部で検出し、4号住居の北側に位置している。Aタイプであるが、竪穴全体の削平が著しく、壁面の立ち上がりはほとんど認められない。周溝も南辺部と西側の南半部を欠いている。住居の規模は一辺7.2mを測り、最大である。主柱穴も径0.4～0.5m、深さ0.35～0.55mで、ほかの住居よりひとまわり大きくなっている。床面は南側にむかってわずかに傾斜している。カマドや焼土の類はみられなかった。北辺のやや西寄りでは鍵の手に曲がる小溝(南北1.3m、東西1.1m)を検出している。遺物は主柱2(10)、ピット1(2・5)、ピット2(8)、ピット3(7)、ピット4(3)、ピット5(6)や周溝(1・4・9)からわずかに出土している。

9号住居の遺物(図160・PLATE94b)

須恵器は坏蓋1と壺2がある。1は復原口径12.4cmで、口縁部が内湾ぎみに垂下し、端部は平

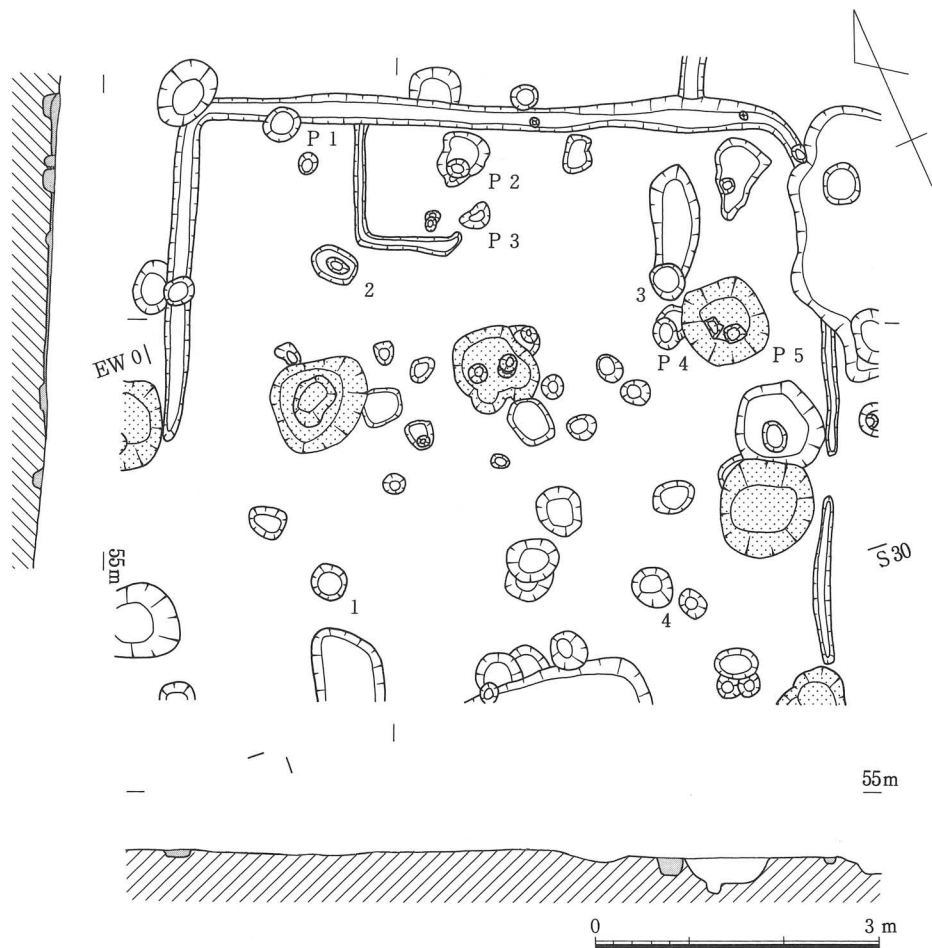


图159 9号住居 平面图·断面图

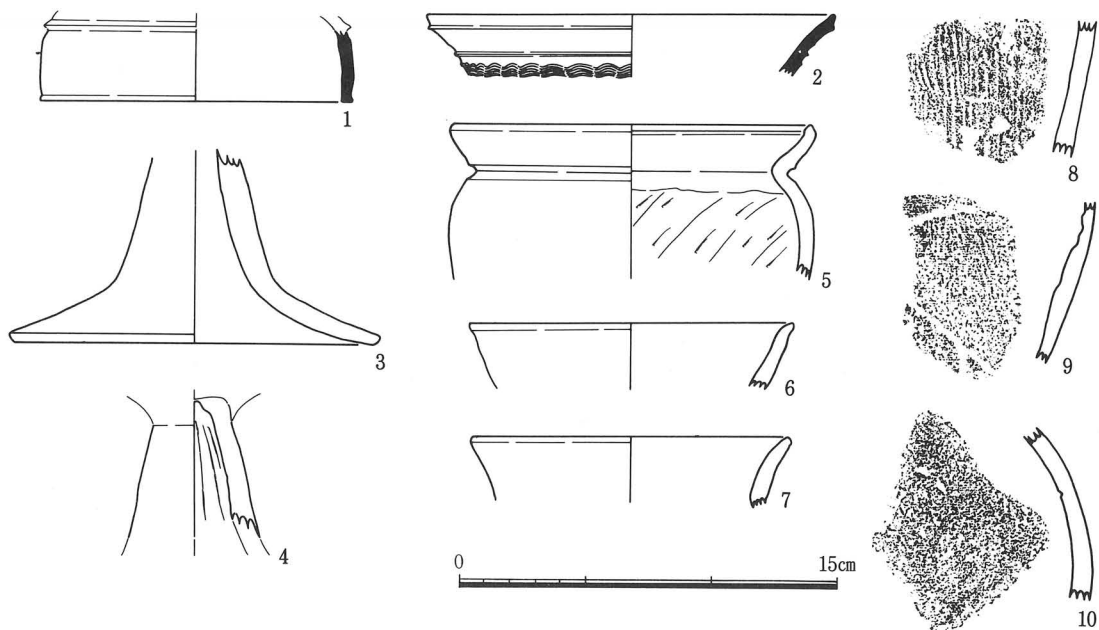


图160 9号住居 須惠器 坏盖1 壶2 土师器 高坏3·4 甕5~10

坦な面をもつ。口縁部の形状からは高坏蓋とも考えられる。2は口縁部片で、口径16.1cmに復原される。外面に波状文をほどこし、内面には自然釉が付着している。これらはTK208型式とみられる。

土師器では高坏、甕がある。高坏3・4はともに大形の脚部で、4には絞り目が観察される。甕の5・6・7は中形ないし大形で、6は布留式である。8~10はいずれも大形甕の胴部片で、10は厚手のものである。

10号住居

(図161、PLATE27d)

集落の北東部で検出した。竪穴の大半は欠失していて、西北部の4分の1を確認しただけである。Aタイプとみられる。唯一検出した支柱穴2は径0.32m、深さ0.28mを測る。床面はやはり南へわずかに傾斜している。西辺の中央部付近で東西が0.5m、南北が0.4mほどの小判形の焼土のひろがりを検出した。後世の攪乱のために全容はわからないが、土層の観察では、焼土が西の壁面にむかって傾斜しているのが認められ、カマド焚口部の残欠である可能性が高い。遺物は出土しなかった。

11号住居

(図162、PLATE27d)

集落の北東端で12号住居と重複して検出した。Aタイプである。竪穴の東側は削平と攪乱によって欠損している。

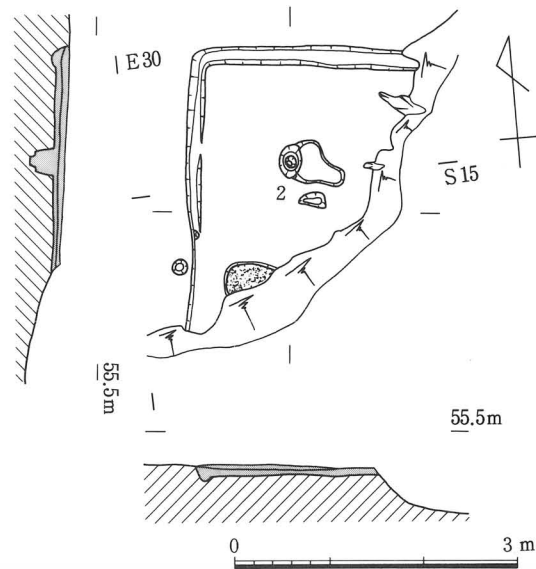


図161 10号住居 平面図・断面図

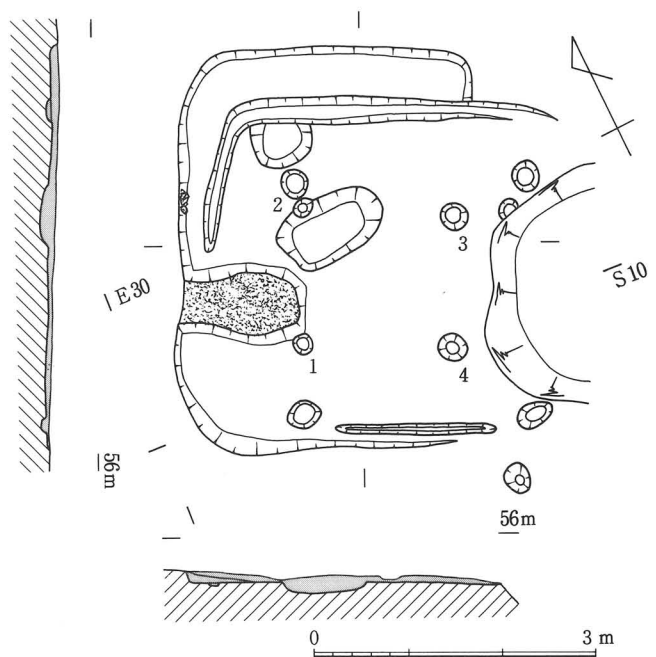


図162 11号・12号住居 平面図・断面図

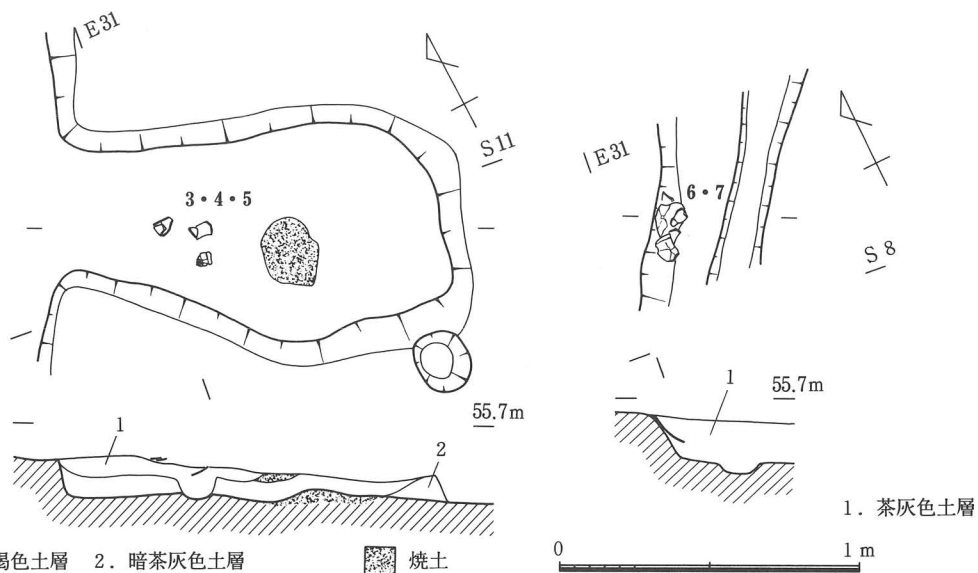


図163 12号住居 カマド(左)・西周溝(右)

周溝の位置から復原される竪穴の大きさは一辺が3.6~3.7mとなり、もっとも小規模な住居である。主柱穴はおおむね径0.2~0.3mで、深さ0.2~0.3mである。床面は12号住居の構築時にほとんどが削りとられたと考えられ、プライマリーな部分は土層断面図では確認されなかった。カマドや焼土は検出されず、11号の出土品として確定できる遺物もみられなかった。

12号住居(図162・163、PLATE27d)

やや南北に長い長方形を呈するBタイプである。床面は南にむかってわずかに傾斜している。西辺のやや南寄りで幅0.7m、奥行1.3mのカマドを検出した。遺存状態はあまりよくないが、構造的には2号住居などのカマドとおなじく、置き土によって成形していたと考えられる。土層図では台石を据えていた坑が観察され、その上方には甕片3、4、5が散乱していた。そのほかでは、カマドの北側から検出した甕6、7や淡茶灰色土の埋土から出土した土師器の高坏1、2がある。

12号住居の遺物(図164、PLATE94b)

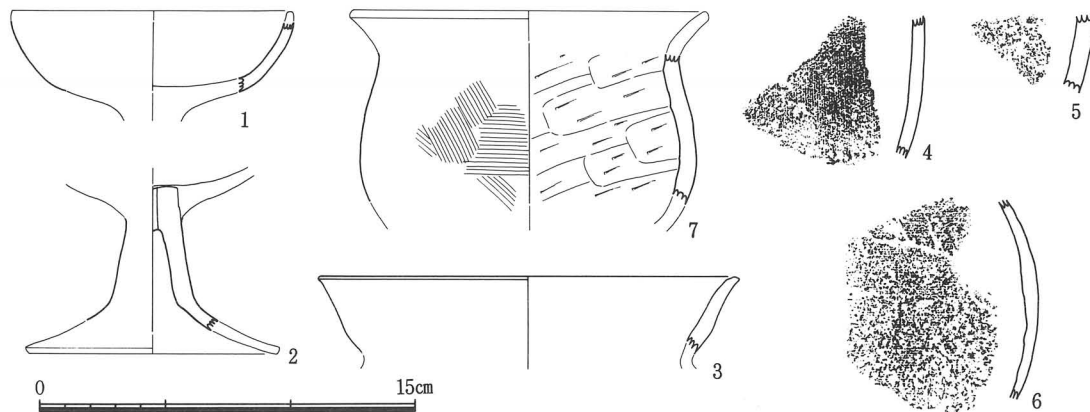


図164 12号住居 土師器 高坏1・2 甕3~7

須恵器は検出されなかった。土師器では高坏、甕がある。高坏は2点とも小形品で、1は内弯する坏部、2は脚部である。2の棒状刺突痕は貫通している。甕3~6は大形品である。3は布留式の口縁部で、口径16.8cmに復原される。5はやや厚手のもので、4と6は内面をヘラケズリしている。3と4は同一個体とおもわれる。7は小形ないし中形の甕で、外面をハケ調整、内面をヘラケズリしている。

13号住居 (図165、PLATE28a)

集落の西端で検出した。Bタイプである。著しく削平され、かろうじて輪郭がつかめた程度である。とくに南半部は攪乱もあって、劣悪な遺存状態であった。竪穴はやや不整な方形で、床面もわずかに傾斜していたようである。北辺の東側で幅0.6m、奥行0.5mほどのアーチ形の

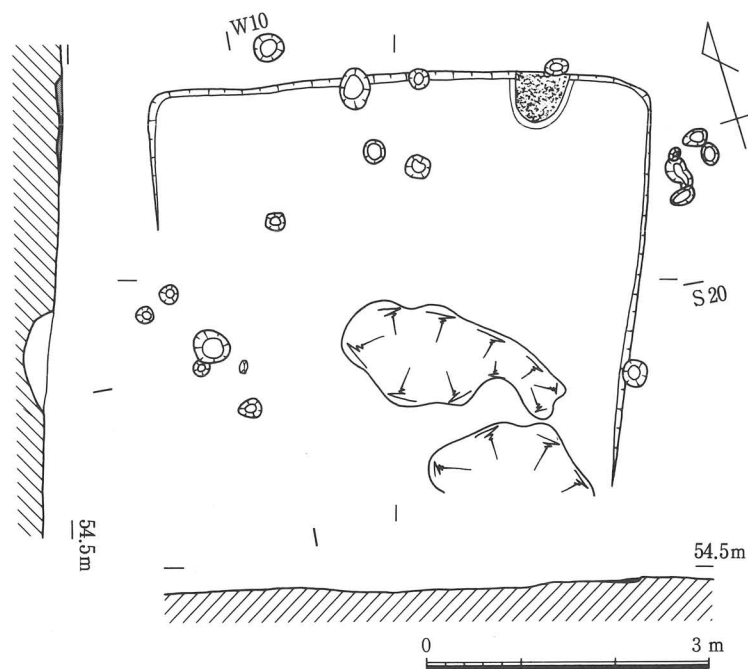


図165 13号住居 平面図・断面図

うすい炭灰のひろがりを検出した。検出位置からはカマドではないかとおもい精査したが、確定できなかった。埋土は暗茶灰色土で、遺物は出土しなかった。

14号住居 (図166、PLATE28b・c)

集落の西北部にあり、1号住居の西側に位置する。Bタイプである。竪穴は開墾や用水路の掘削によって、周壁の大半が失われている。床面はほぼ水平になっている。比較的のこのよかった東北隅部から幅0.3m、奥行0.7mのカマドを検出した。焚口は床面を4~5cm掘り下げ、カマド本体は黄灰色土などを置き固めることによって成形している。燃烧部の真中には高さ8cmの砂岩の台石 (PLATE105b-12) を横置きに据えていて、その上には据え置いた状態のま

まの甕10を検出した。もとより掛け口は遺存していないが、土層図(図167)をみると、焚口の上方では炭・焼土・土器片2・4・5・8などがカマドの形成土とともに崩れ落ちている状況が観察された。カマドの南側には東西1.2m、南北0.8mにわたって炭灰のひろがりが見られ、周辺か

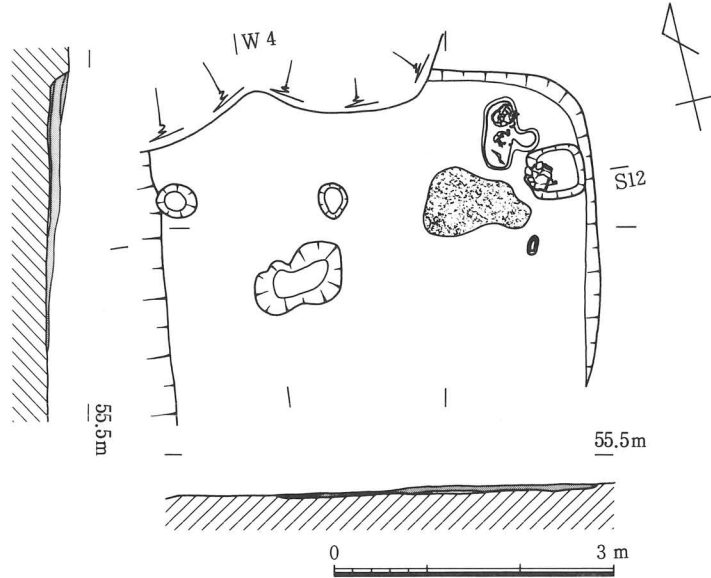


図166 14号住居 平面図・断面図

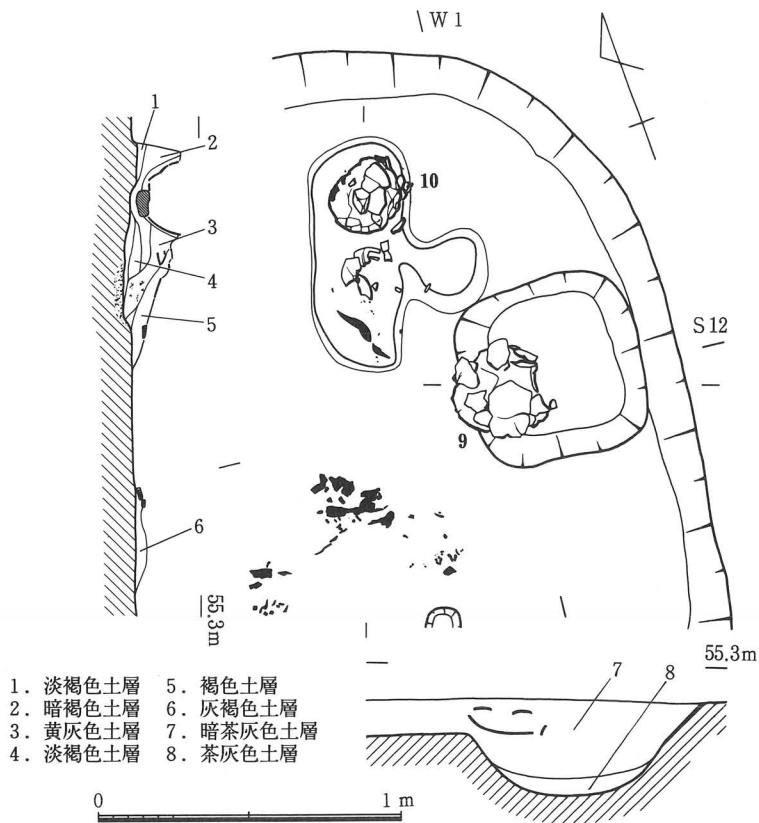


図167 14号住居 カマド・土坑

らは土師器の高坏1・3・6・7や埴輪片11が出土している。またカマドの東側には縦0.6m、横0.55m、深さ0.35mの方形の土坑があり、埋土の上層から土師器の甕9が出土している。

14号住居の遺物(図168、PLATE93・94b)

須恵器は出土していない。土師器では、高坏と甕がみられる。1と2は大形の高坏で、1は内外面ともナデで仕上げているが、2はハケ調整痕がよく残っている。3～8は小形の高坏である。

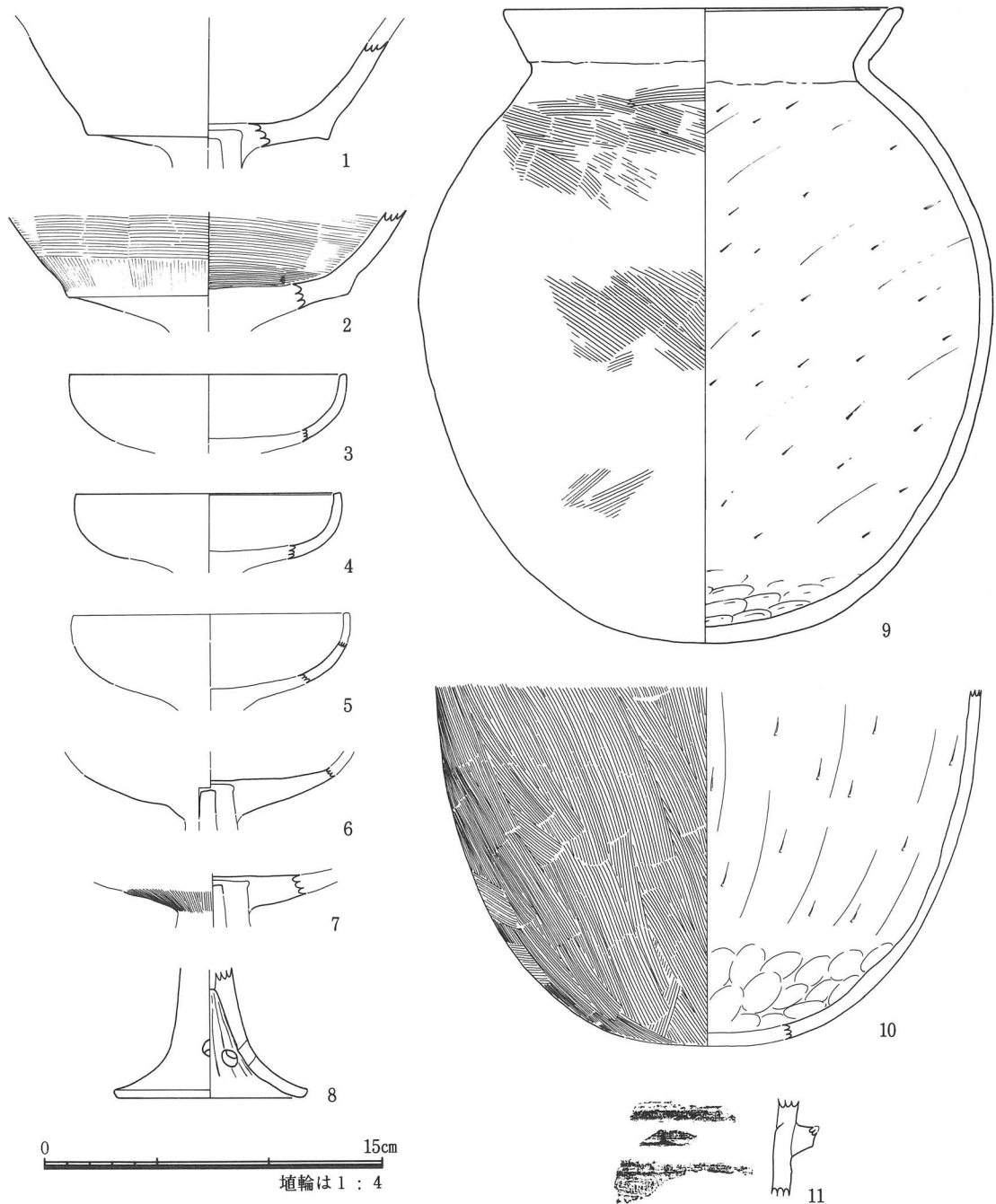


図168 14号住居 土師器 高坏1～8 甕9・10 円筒埴輪11

3~5は内弯するものであるが、3・4はこの形式としては坏部がやや浅くなっている。また8の脚部には絞り目と穿孔がみられる。住居出土の高坏脚部で穿孔を確認したのは、本例のみである。9は口径17.8cm、器高26cmを測る布留式の甕である。やや縦長の球形を呈する体部に外反する口縁部がつく。口縁部はわずかに内弯し、上端に面をもつ。体部外面はハケ調整している。内面は底部に指頭圧痕がのこり、胴部はヘラケズリしている。胎土には砂粒を多く含み、色調は淡褐色を呈している。外面中位に黒斑がある。甕10は大形の胴下半部で、外面にはハケ調整痕がよくのこっている。内面は底部に指頭圧痕がみられ、胴部はヘラケズリしている。いわば薄手の甕で、残存部分での最大腹径は24.3cmを測る。色調は淡褐色で、外面に煤が付着している。これらは甕9や小形高坏の形状から、布留式Vとみられる。

埴輪11は小型円筒の胴部片で、タガは2類のM形である。外面はヨコハケ、内面は斜めにハケ調整している。胎土は精良で、淡茶褐色を呈している。IV期のものである。

15号住居(図169、PLATE29a)

集落の北端で検出した。唯一のCタイプである。奈良時代の土坑の掘削や近年の開墾によって、南西の一角が欠失している。周溝は深さ数cmときわめて浅く、断続的にしか検出されなかった。2つの支柱穴によってしめされる東西方向の長軸線は、中心よりやや南にずれている。床面は南にわずかに傾斜している。また南周溝に接したところで、径0.6mの炭灰のひろがり

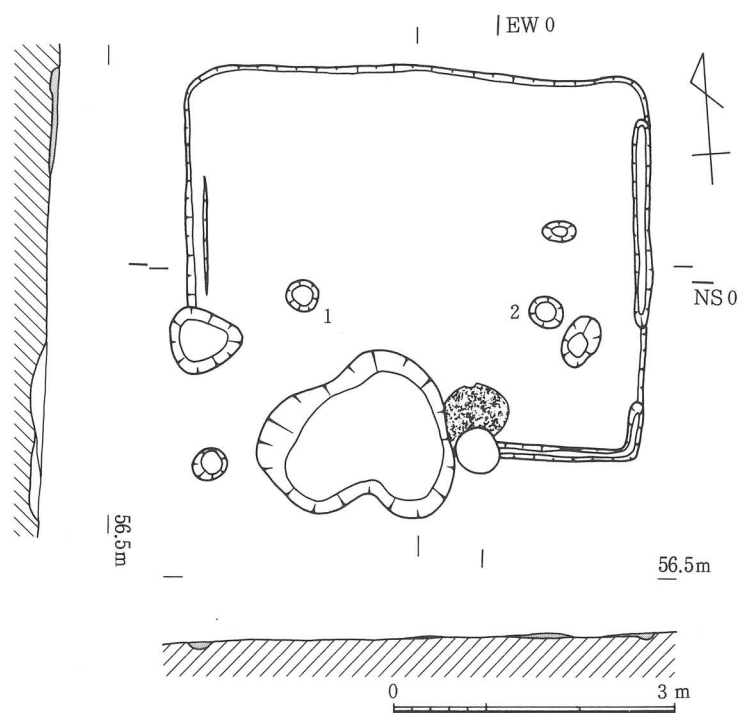


図169 15号住居 平面図・断面図

が認められたが、焼土も顕著でなく、つくり付けのカマドがあったとはおもわれない。埋土は暗黄灰色土で、遺物はみられなかった。

1号溝(図136・170、PLATE29b)

集落の中央部で検出した東西溝である。規模は長さ8m、幅2～3m、深さ0.05～0.15mで、やや不定形な長方形土坑ということもできる。横断面図をみると、北半部が少し深く掘り下げられているのがわかり、遺物の多くはこの部分から出土している。埋土はおおむね下層が暗茶灰色土、上層が茶灰色土で、上層は廃絶後の流入土とみられる。



図170 1号溝 土器溜 平面図・断面図

1号溝の遺物(図171~177、PLATE95~98・104a、表48-16)

須恵器・土師器・埴輪・砥石・半環状形石製品・その他がある。須恵器では、坏蓋、坏身、高坏蓋、甕がある。坏蓋は11点(1~11)出土した。口径は3の11.8cmから1の13.2cm、器高は8の4.2cmから1の5.2cmまでである。天井部はかなり扁平な9からやや丸味を帯びた2までであるが、多くみられるのは1や8の形態である。天井部のヘラケズリはいずれも稜線ちかくまで及んでいる。口縁部はほぼ垂直で、なかには内弯ぎみの6・7やあきらかに内弯しているものもある。口縁端部はまるくおさめる1、水平な平坦面をもつ2~7、わずかに内傾する8・10がある。なお1は2号溝の埋土から出土した破片と接合している。11は一応坏蓋に含めたが、稜線がなく、壺蓋の可能性もある。天井部の形状は1に似ていて、ヘラケズリは口縁部の境までほどこしている。口縁端部はやや内傾し、面をもつ。坏身は5点検出し、そのなかの12~15を図化した。扁平な器体をもつ13は口径11.8cmとやや大きい。対して丸味のある底部をもつ14は口径10cmである。ヘラケズリは受け部のちかくまでほどこしている。口縁部は内傾ぎみに立ちあがり、端部は面をもつものとわずかにくぼむ14がある。高坏蓋16は口径12.9cm、器高5.5cmを測る。天井部のヘラケズリは鋭く突出した稜線のちかくまで及んでいる。口縁部は内弯ぎみに垂下し、端部は平坦な面をもつ。16と同様の口縁部をもつ6・7などは、高坏蓋かもしれない。17は甕の胴部片で、最大腹径は12cmである。肩部に列点文を有し、自然釉の一部が残存している。これらの須恵器は、おおむねON46型式である。

土師器では、壺、高坏、甕、甗がある。壺は広口の直口壺18~20と口頸部の短い直口壺21~24がみられる。18は器体の外面をヘラミガキし、19・20はていねいなナデ調整で仕上げた中形の直口壺である。胴部の内面はヘラケズリし、いずれも胎土は精良で、赤褐色を呈している。21は口径9.7cm、器高15.7cmを測る。胴部は縦方向のナデをていねいにほどこし、肩部はヨコハケ調整している。内面はヘラケズリし、頸部以上はなでている。胎土は砂粒を多く含むも良質で、色調は暗茶灰色を呈している。22は口径11.8cmで、外面はハケ調整、内面はヘラケズリしている。胎土は砂粒が目立ち、色調は暗茶灰色である。23・24も同前である。高坏は大形が8点と小形が40点あり、全般的に風化がすすんでいる。25は口径21.7cmで、26も同程度に復原される。脚部は裾が屈曲してひらき、多くは内面に絞り目をのこしている。27には穿孔がみられる。小形では、口径が34の12.3cmから40の13.9cmまであり、口縁部は内弯するもの33~39が圧倒的で、外反するものは1点である。坏部の深さは4cmの33から2.7cmの37まで、深淺の差がある。坏部外面に明確な稜を有する資料は得られていないが、40・41・43・59・67などはその部位で屈曲ぎみになっている。坏底部が薄めで、内面が水平にひろがる48・56などもその可能性が高い。柱状部の資料には、すべて棒状刺突痕が認められ、そのなかの53・55・61・68・72は柱状部の上端を貫通している。また、42は孔部が2.9mmと深い。内面のしぼり目は約半数にみられ、そのほかのものは調整されている。裾部は屈曲してひらき、穿孔のあるものは、33・

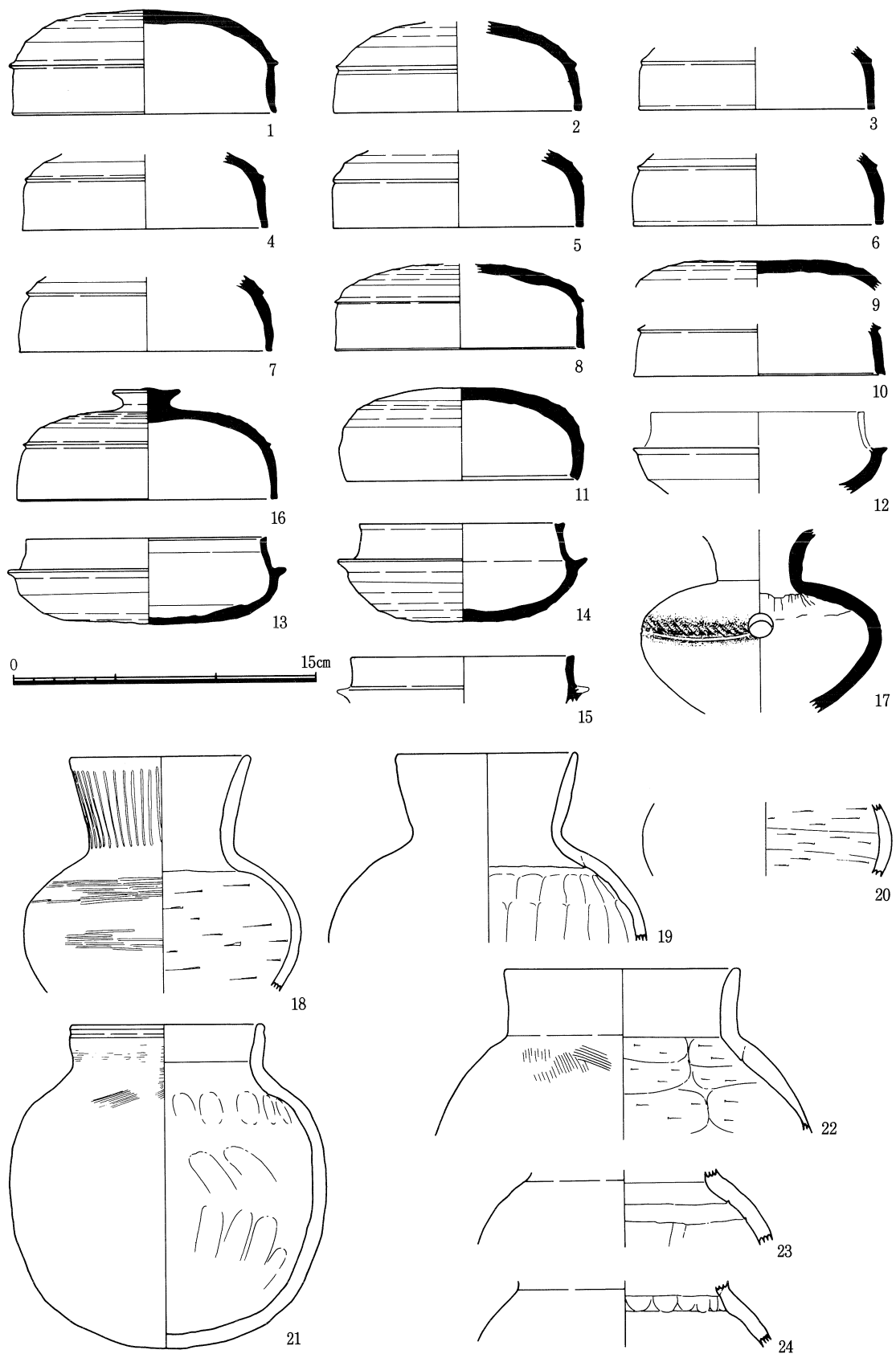


图171 1号溝 須恵器 坏蓋1~11 坏身12~15 高坏蓋16 甕17 土師器 壺18~24

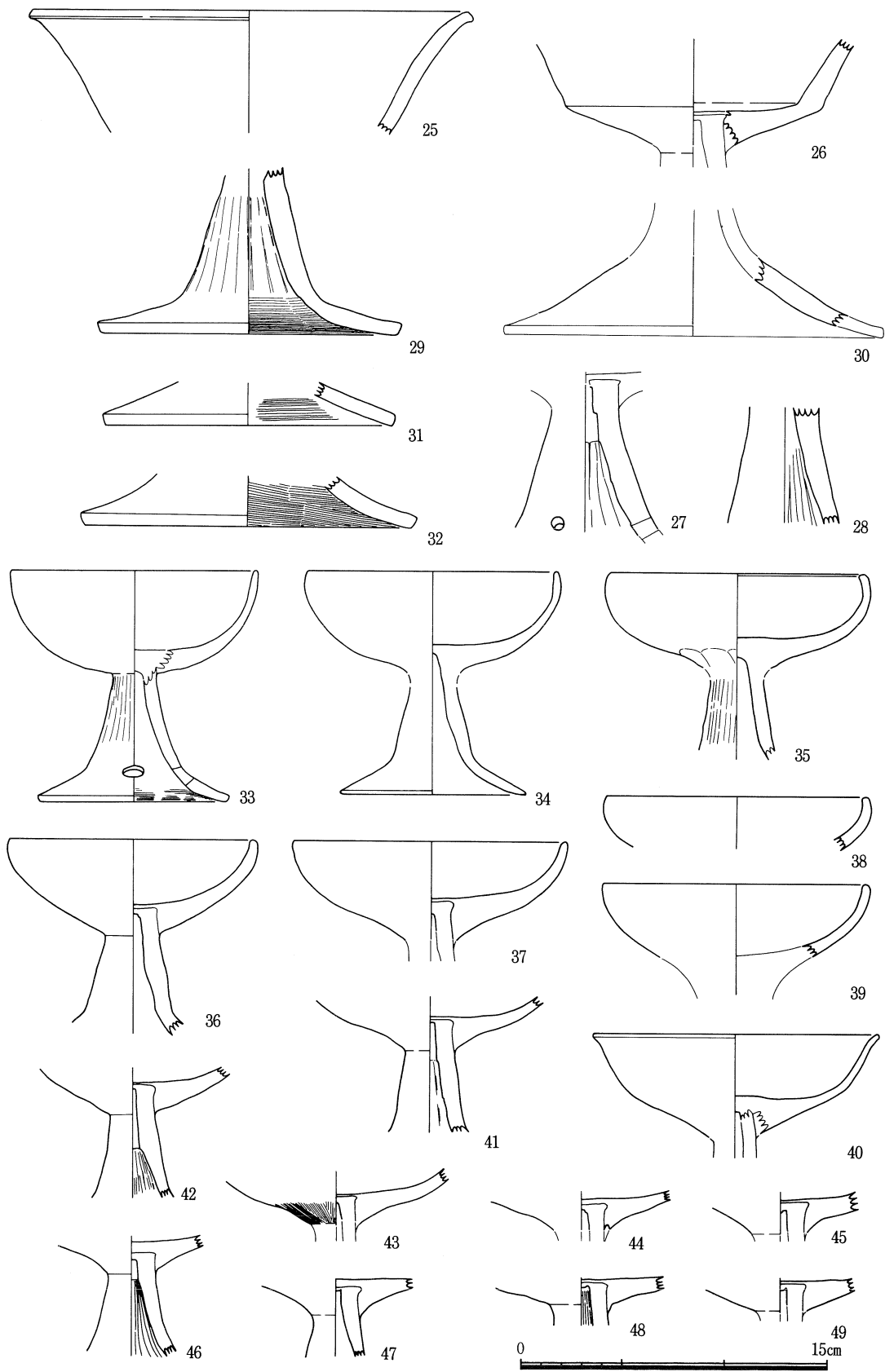


图172 1号沟 土師器 高坏25~49

67・68・71の4点である。

甕は大形12点と小形1点を検出した。大形は資料化した10点のなかの半数以上が、肩部のヨコハケや口縁端部に面をもつなどの布留式である。77は球形の胴部の外面をハケ調整し、内面はヘラケズリしている。肩部にはヨコハケをほどこしている。小形の83は屈曲して短くひらく口縁部をもち、体部外面はハケ調整、内面はヘラケズリしている。甌は把手を含めて、6点検出した。84は直口のもので、把手は挿入法によっている。把手類はいずれも中実で、85・86は挿入法のものである。88・89は底部片で、穿孔は径2~2.5cmである。これらの土師器は布留式Vとみられる。

埴輪は円筒の破片が7点資料化できた。中型と小型がある。中型は胴部3点90~92と底部2点93・94である。90・91は同一個体とみられ、復原径34cmを測る。タガは端面がわずかにへこむ1類である。スカシ孔はやや歪な円形である。外面のヨコハケ調整はBb-2種とみられ、内面はタテハケのあと部分的に横方向になでている。焼成は堅緻で、茶灰褐色を呈している。92はヨコハケをほどこした小片で、淡茶褐色を呈し、やや軟質である。93は基底部片で、高さは9.7cmを測る。接合法は右巻きづくりで、胎土・色調・調整から90・91と同一個体と考えられる。94も基底部の小片で、92と同一個体とみられる。

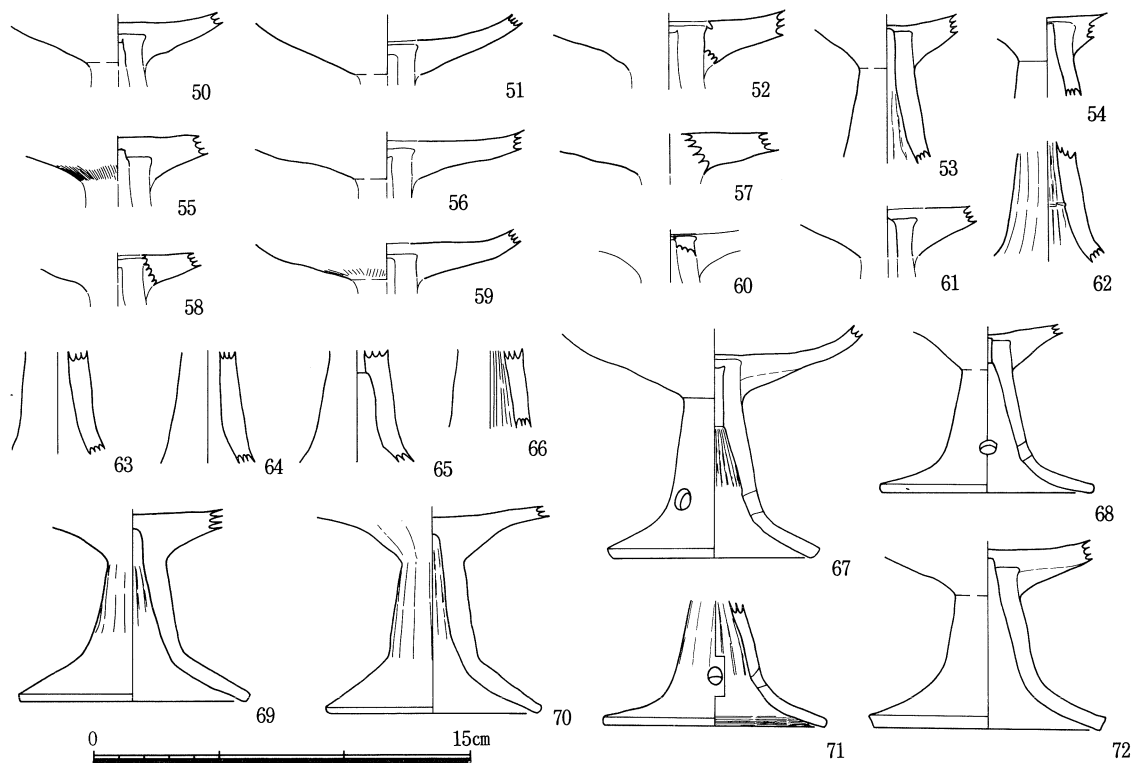


図173 1号溝 土師器 高坏50~72

小型の2点は風化が著しい。95のタガは1類で、黒斑が認められる。外面の調整は判然とせず、内面はなでている。96のタガはやや扁平な1類で、調整痕は不明。どちらも軟質で、淡褐色を呈している。

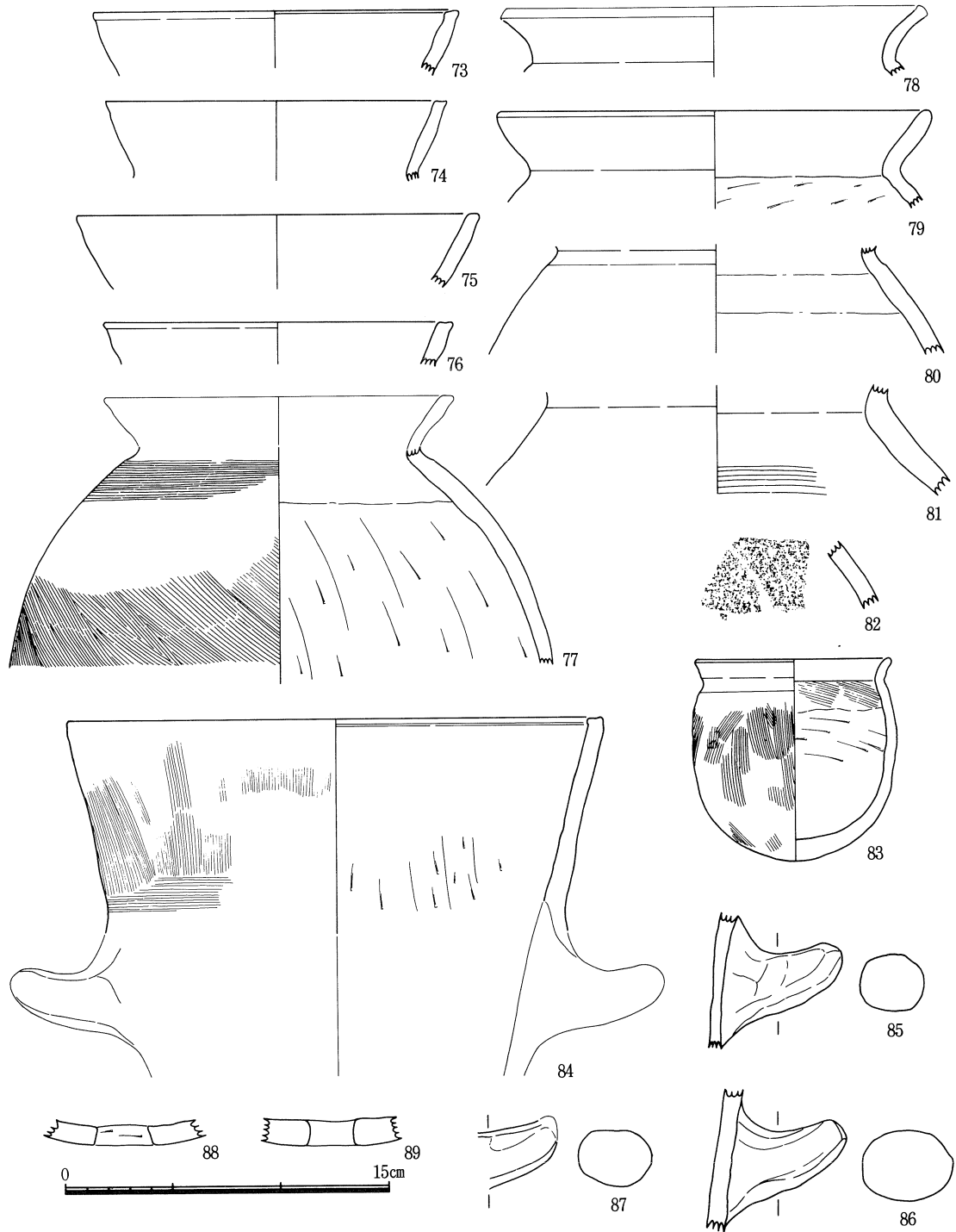


図174 1号溝 土師器 甕73~83 甑84~89

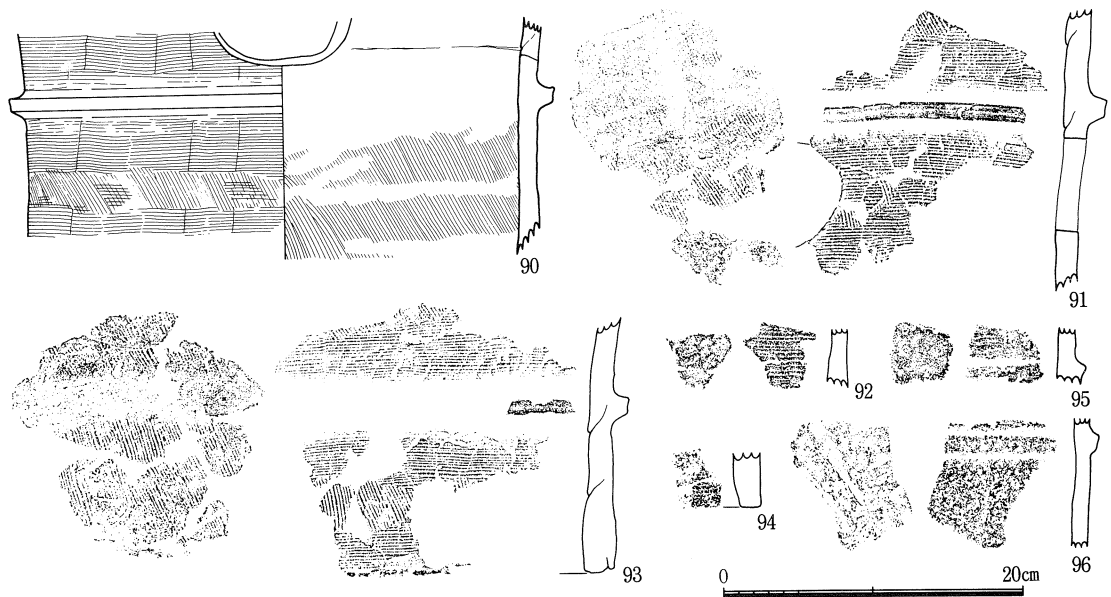


図175 1号溝 円筒埴輪90～96

砥石**97**は有柄砥石の柄の部分で、末端部分に直径4mmの穿孔がみられる。残存長4.1cm、幅2.1～2.4cm、厚さ0.7cmを測り、重さは12.9gである。上面側には研ぎだしによる凹面が顕著にみられる。岩種は淡灰褐色を呈する凝灰岩である。

半環状形石製品**98**は途中で折損しており、全形はうかがえない。残存長3.7cm、幅1.3cm、厚さ0.5cmで、重量は5.52gである。形状は扁平で、先端の幅は0.5cmとかなり細くなり、表面や側面には整形時の研磨痕がよくのこっている。玦状耳飾りとするには、中央の円孔は大きすぎるようで、縄文時代の「の」の字形石製品になるのかもしれない。粘板岩系の石材で、茶褐色を呈している。

そのほか1点の頁岩**99**(PLATE98a)がある。形状は亜角礫の角部を割りとったかたちを呈していて、縦2.9cm、横2.6cm、厚さ1.4cmを測る。重さは10gである。色調は暗茶褐色で、頂部はわずかに赤色化し、焼かれた形跡がある。この種の頁岩は、A群埴輪窯の1号窯で検出し

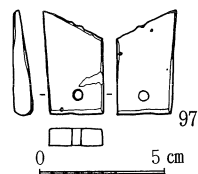


図176 1号溝 砥石97

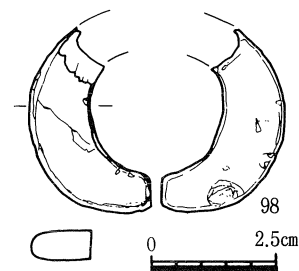


図177 1号溝 半環状形石製品98

た頁岩と同じもので、第4章第2節Ⅱ項で考察するように、埴輪に塗布されたベンガラ原料とみられるものである。

2号溝(図178)

1号溝の東端部に食い込むようにして掘削された南北溝である。検出したのは長さ12mあまりで、2号住居の西側に沿うようにして南流したのち、東に曲がり、徐々に浅くなっておわっている。当該部での削平の状況からすれば、さらに東に延びていた可能性が高い。溝の幅は1.6mで、深さはもっともよく遺存しているところで約0.25mを測る。埋土は茶灰色土を主体とする土層で、須恵器と土師器が出土している。

2号溝の遺物(図179・180、PLATE99・100)

須恵器と土師器がある。須恵器では、坏蓋、坏身、壺・甗・甕がある。坏蓋は、10点(1~10)検出した。口径は7の12cmから10の13.8cm、器高は1の3.4cmから3の4.8cmまでである。天井部は扁平な1や丸味を帯びた7があるが、多いのは2や4の形態である。天井部のヘラケズリはいずれも稜線ちかくまで及んでいる。口縁部は8が外傾しているほかは、いずれもほぼ垂直である。3の口縁部は内弯ぎみで、1号溝の6・7と同様に、高坏蓋の可能性もある。なお3は4号土坑の資料と接合している。口縁端部は丸味のあるわずかな面を有する1・2と水平な平坦面をもつ3~5、内傾ぎみの6・9、少しくほみのある7・8、そして段状になった10がある。坏身は8点検出した。口径は12の10.1cmから13の12cm、器高は12の5cmから17の5.6cmの範囲にある。底部のヘラケズリは受け部のちかくまで及んでいる。口縁部はいずれも内傾ぎみに立ちあがり、端部をまるくおさめる11~13、平坦な面をもつ14・15、内傾した面をもつ16・17、そしてわずかにくぼむ18がある。19は広口壺の胴部片で、最大腹径の部位にある沈線の上方面にごくわずかの波状文が観察される。20は腹径18.1cmを測る大形甗の体部で、頸部の直径は4cmあまりとかなり細い。肩部に波状文と沈線をほどこしている。甕21は口径16.3cmを測る。外面はタタキ目をかかくなでており、内面は当て具痕をて

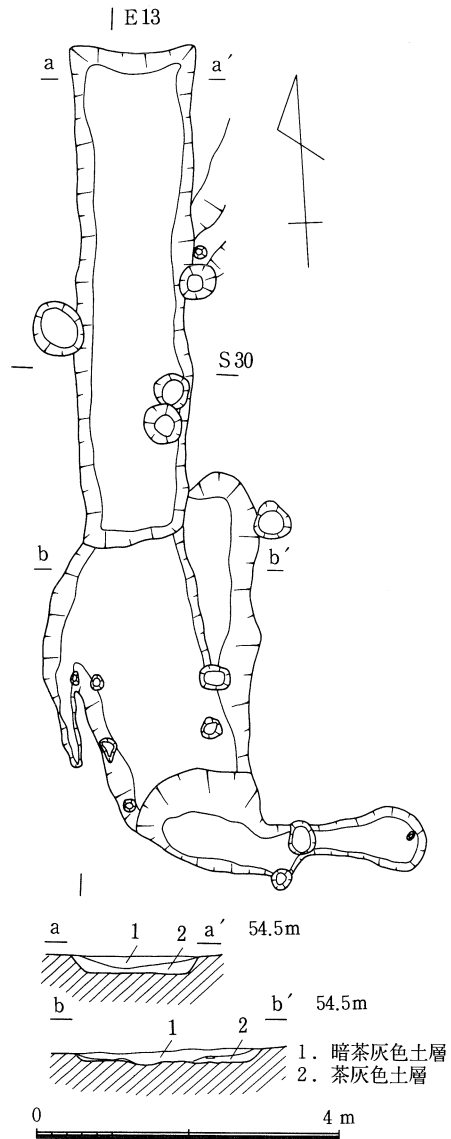


図178 2号溝 平面図・断面図

るわずかな面を有する1・2と水平な平坦面をもつ3~5、内傾ぎみの6・9、少しくほみのある7・8、そして段状になった10がある。坏身は8点検出した。口径は12の10.1cmから13の12cm、器高は12の5cmから17の5.6cmの範囲にある。底部のヘラケズリは受け部のちかくまで及んでいる。口縁部はいずれも内傾ぎみに立ちあがり、端部をまるくおさめる11~13、平坦な面をもつ14・15、内傾した面をもつ16・17、そしてわずかにくぼむ18がある。19は広口壺の胴部片で、最大腹径の部位にある沈線の上方面にごくわずかの波状文が観察される。20は腹径18.1cmを測る大形甗の体部で、頸部の直径は4cmあまりとかなり細い。肩部に波状文と沈線をほどこしている。甕21は口径16.3cmを測る。外面はタタキ目をかかくなでており、内面は当て具痕をて

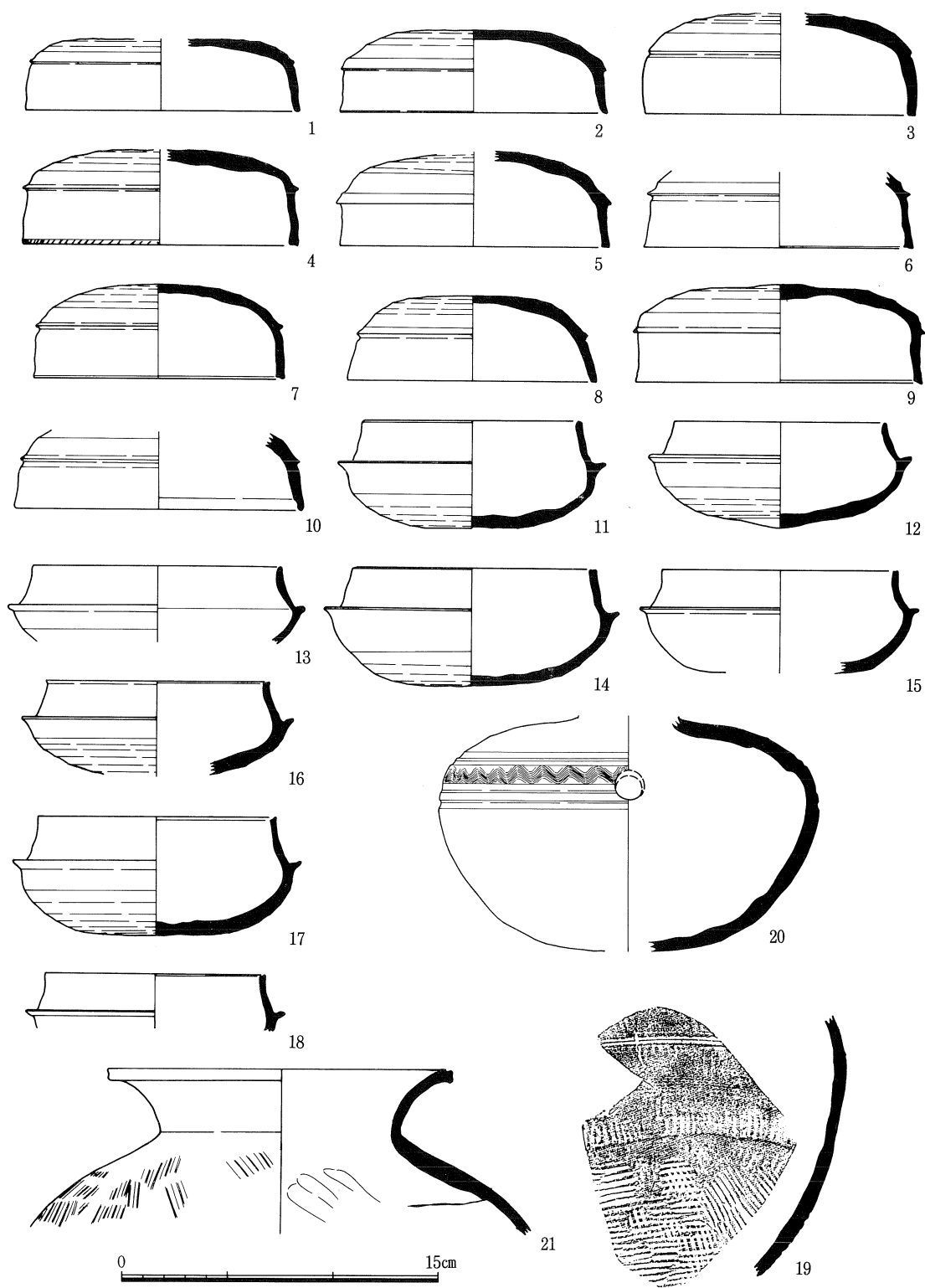


图179 2号沟须惠器 坏盖1~10 坏身11~18 壶19 腿20 甕21

いねいにすり消している。口縁端部に1条の沈線がみられる。これらの須恵器はON46型式を主体としながら、一部(17など)にTK208型式を含んでいる。

土師器では、壺、鉢、高坏、甕、甑がある。22は広口の直口壺で、風化のために調整は不明。23は中形壺で内外面ともなでている。24は直口の小形の鉢で、外面をナデ調整し、内面はかるくヘラケズリしている。高坏は大形と小形がある。大形は4点検出した。25・26は赤褐色を呈し、精良な胎土を用いているが、27・28は淡茶褐色で、胎土も粗く風化している。小形は6点出土している。口縁部の2点はどちらも内弯するもので、坏底部の3点はいずれも稜のないも出土している。

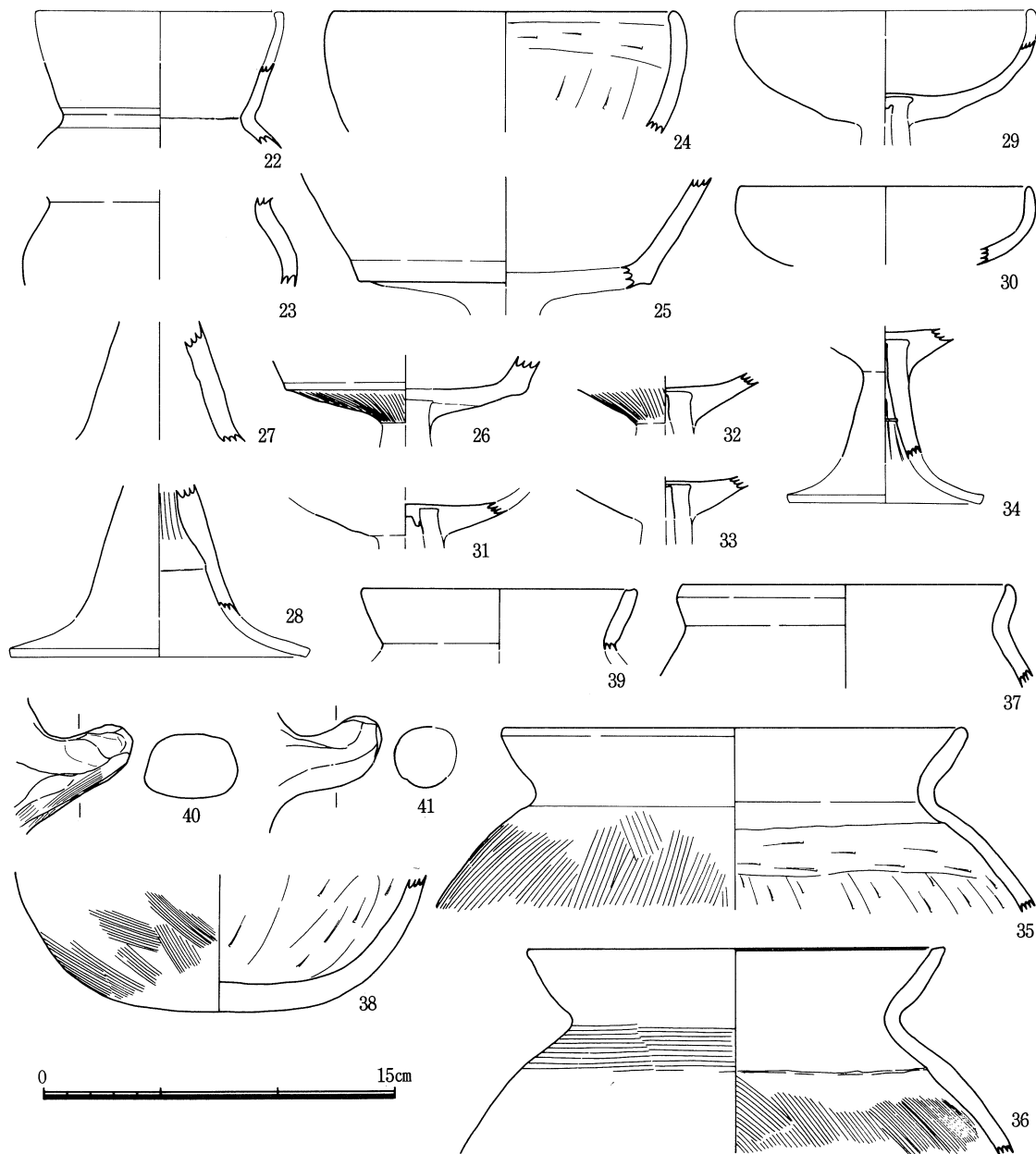


図180 2号溝 土師器 壺22・23 鉢24 高坏25~34 甕35~39 甑40・41

のである。また棒状刺突痕をみる資料のなかの31は一度貫通したあとで、粘土を充填し、再度突き直したようにみうけられる。柱状部の破片では過半のものに絞り目が認められる。甕は大形4点と中形1点を検出した。35は大形の布留式で、口径は19.9cmを測る。外反する口縁部はゆるくカーブし、端部をまるくおさめている。外面はハケ調整、内面はヘラケズリしており、形状・調整・色調から、1号溝の79と同一個体である可能性が高い。36も布留式の大形甕で、口縁部上端に面をもち、肩部にヨコハケをほどこしている。37の口縁部は頸部から緩やかに外反し、上縁をややすぼめている。38は厚手の底部片で、外面はハケ調整、内面はヘラケズリしている。中形の39は上端に面をもつ布留式の口縁部である。甑は把手のみを2点検出した。どちらも中実で、断面形は40がやや扁平で、41は球形にちかい。2点とも器体への装着は挿入法である。胎土は41に砂粒が目立ち、あきらかに別個体である。これらは小形高坏や甕の形状から、布留式Vとみられる。

3号溝(図181)

1号溝の東側に設けられていた細長い東西方向の溝で、端部は南側に曲折しておわっている。総延長は7m、幅は0.4~1.8mを測り、深さは0.1m前後でかなり浅い。ただし溝底のレベルをおさえていくと、実際には東から西に向かって水が流れていたとみられ、1号溝や2号溝と一連の遺構であることは明らかである。埋土は茶灰色土で、須恵器と土師器が出土している。

3号溝の遺物(図182、PLATE101・105a)

須恵器と土師器がある。須恵器では、坏身と甕がある。坏身1は口径12.1cm、器高4.1cmのかなり扁平なものである。底部のヘラケズリは受け部のちかくまで及び、口縁部はほぼ垂直に

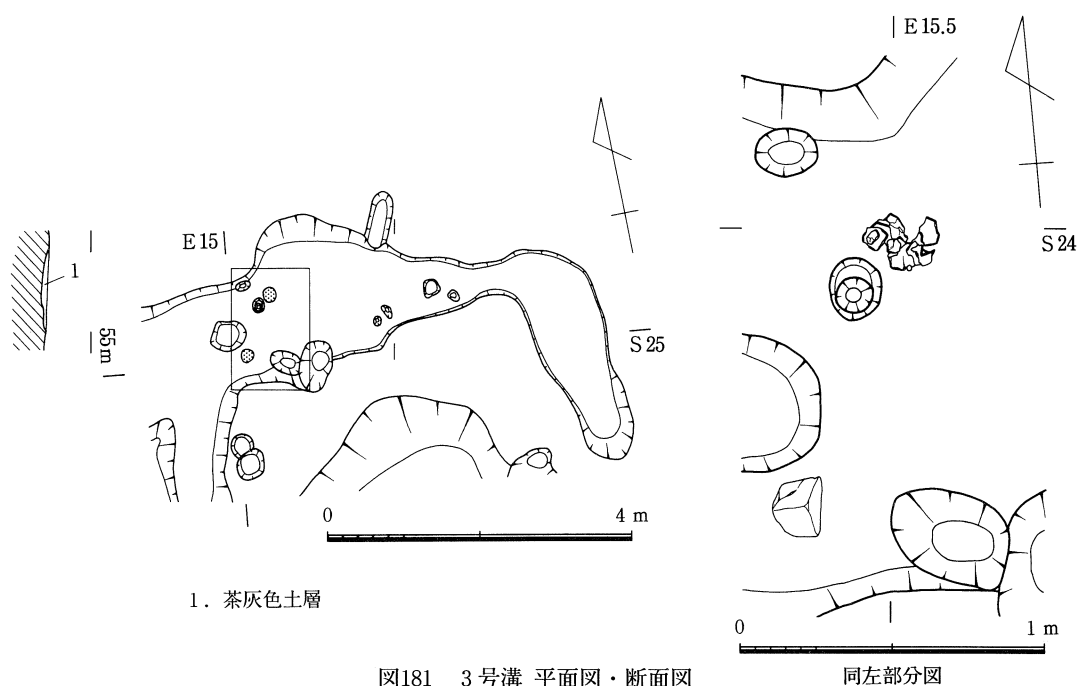


図181 3号溝 平面図・断面図

同左部分図

立ちあがり、わずかに内傾する端部は平坦な面をもつ。ほかに底部の細片が1点出土している。甕2は口径16.5cmを測り、中位の突帯の上下に波状文をほどこしている。3は肩部が張った形態で腹径は28cmである。外面はタタキ成形ののちヨコハケを幾段にもわたってほどこし、内面は当て具痕をかるくすり消している。これらはON46型式ないしTK208型式とみられる。

土師器では、高坏、甕がある。高坏は大形と小形がある。大形は2点検出し、1点を図化した。4の外面は荒れて観察できないが、内面はハケ調整後にていねいになでている。小形は6点検出した。5は内弯する口縁部で、やや浅いものである。坏底部6~9や脚部10の破片には柱状部上端に棒状刺突痕がみられるが、8では貫通孔をふさぐために坏底部の粘土を押し込んでいた。また10には絞りが認められる。甕のなかで11は中形の口頸部片で、外面には粗いハケ調整をほどこしている。上縁端部に面をもつが、整形は粗雑である。12は甕の肩部片である。風化のために外面の調整は不明で、内面はヘラケズリしている。13は平底の破片で、内外面ともナデ調整している。器種は不明であるが、胎土はどちらかといえば埴質で、色調は淡褐色を

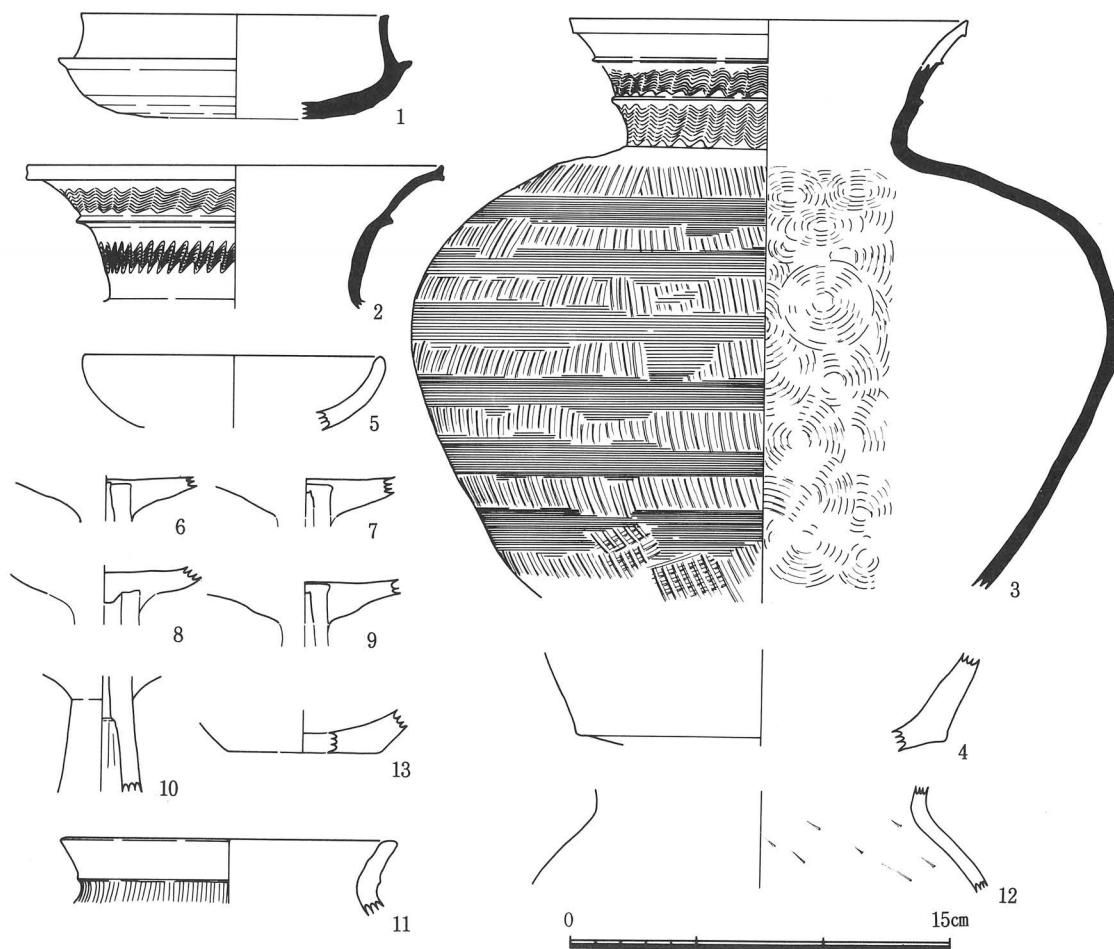


図182 3号溝 須恵器 坏身1 甕2・3 土師器 高坏4~10 甕11・12 底部13

呈している。これらは高坏の形状から布留式Vとみられる。

4号溝(図183左)

8号住居の北東隅部から東にのびるもので、長さは8.8m、幅は0.7~1.6m、深さは0.2mである。淡灰褐色土ないし暗茶灰色土の埋土からは、わずかに須恵器が出土している。

4号溝の遺物(図184、PLATE105a)

1は復原口径が13.2cmとやや大振りになる坏蓋片である。口縁部は内弯しながら垂下するもので、端部は平坦な面をもつ。形状から高坏蓋の可能性が高い。TK208型式とみられる。

2号土坑(図183右)

6号住居の南側にある不定形な落ち込み状の遺構である。規模のおおよそは長さ5m、幅1.7m、深さ0.1mである。暗茶灰色土の埋土からは、須恵器と土師器が出土している。

2号土坑の遺物

(図184、PLATE101、103b)

須恵器では坏身と甕がある。坏身は口径が4の9.6cmから2の11.7cmまでで、扁

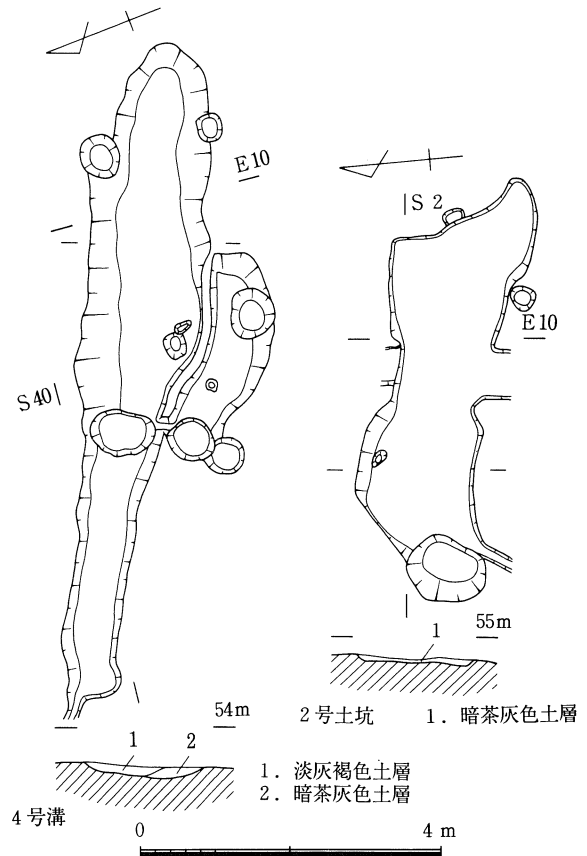


図183 4号溝(左)・2号土坑(右) 平面図・断面図

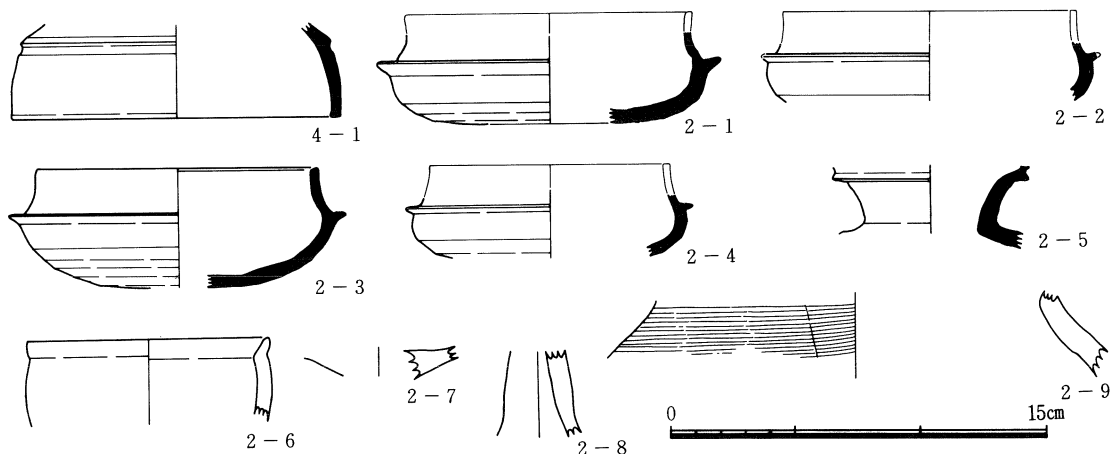


図184 4号溝 須恵器 坏蓋1 2号土坑 須恵器 坏身1~4 甕5 土師器 鉢6 高坏7・8 甕9

平なもの1・2・4が目立っている。やや丸味のある3もヘラケズリが受け部のちかくまで及んでいる。口縁部が遺存している3では、内傾ぎみの端部が平坦な面をなしている。甕5は頸部片で、文様はみられない。これらはやや古相を示すもののおおむねTK208型式である。土師器には鉢、高坏、甕がある。6は小形の直口鉢の細片で、内外面ともナデ調整している。2点の高坏は小形で、風化が甚だしい。甕9は肩部にヨコハケをほどこしたもので、布留式とみられる。これらは布留式Vに属する。

3号土坑(図185)

3号住居の南東部に位置している。長さ0.9m、幅0.6m、深さ0.1mほどの小さな土坑で、北東隅部が用水路で断ち切られている。茶灰色土の埋土から須恵器と土師器が若干出土している。

3号土坑の遺物

(図187・188、PLATE101・103b・106)

須恵器では坏蓋がある。1は口径13cmあまりに復原されるかなり扁平な器体である。天井部のヘラケズリはシャープに突出した稜線のちかくまでほどこしている。TK208型式とみられる。土師器の高坏は

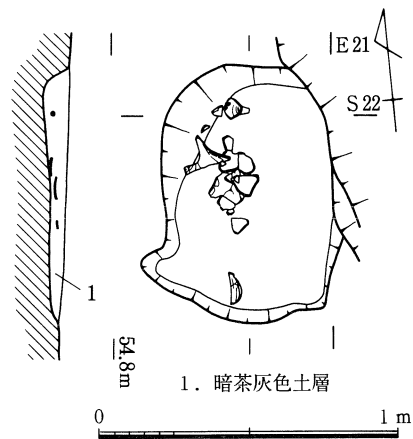


図185 3号土坑 平面図・断面図

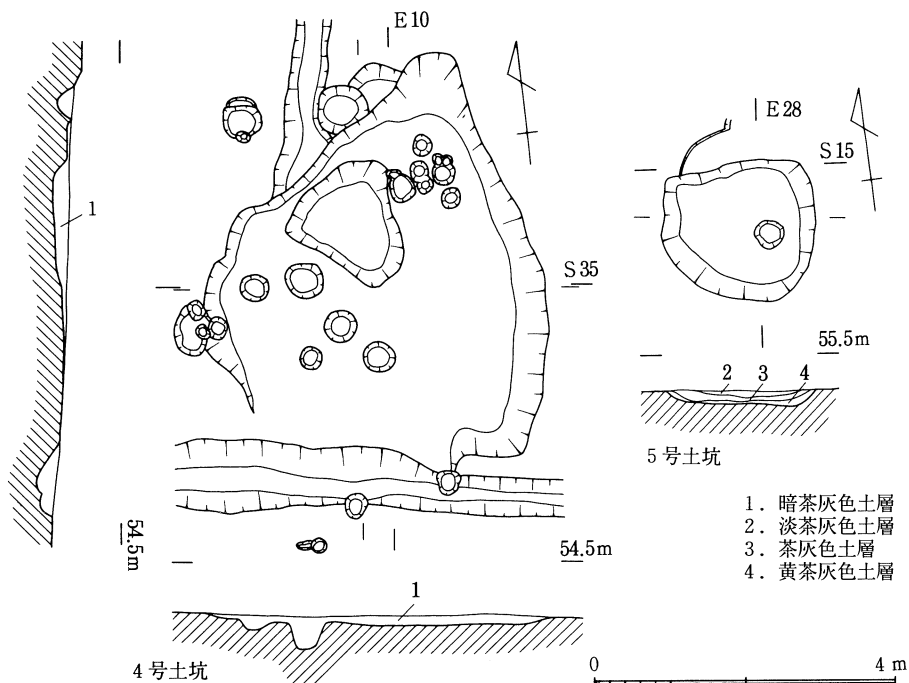


図186 4号・5号土坑 平面図・断面図

小形のみ3点検出している。2は口径13.6cmの内弯する口縁部で、接合しなかったが、3の坏底部と同一個体とみられる。3の棒状刺突痕は柱状部の上端まで貫通している。4の柱状部内面

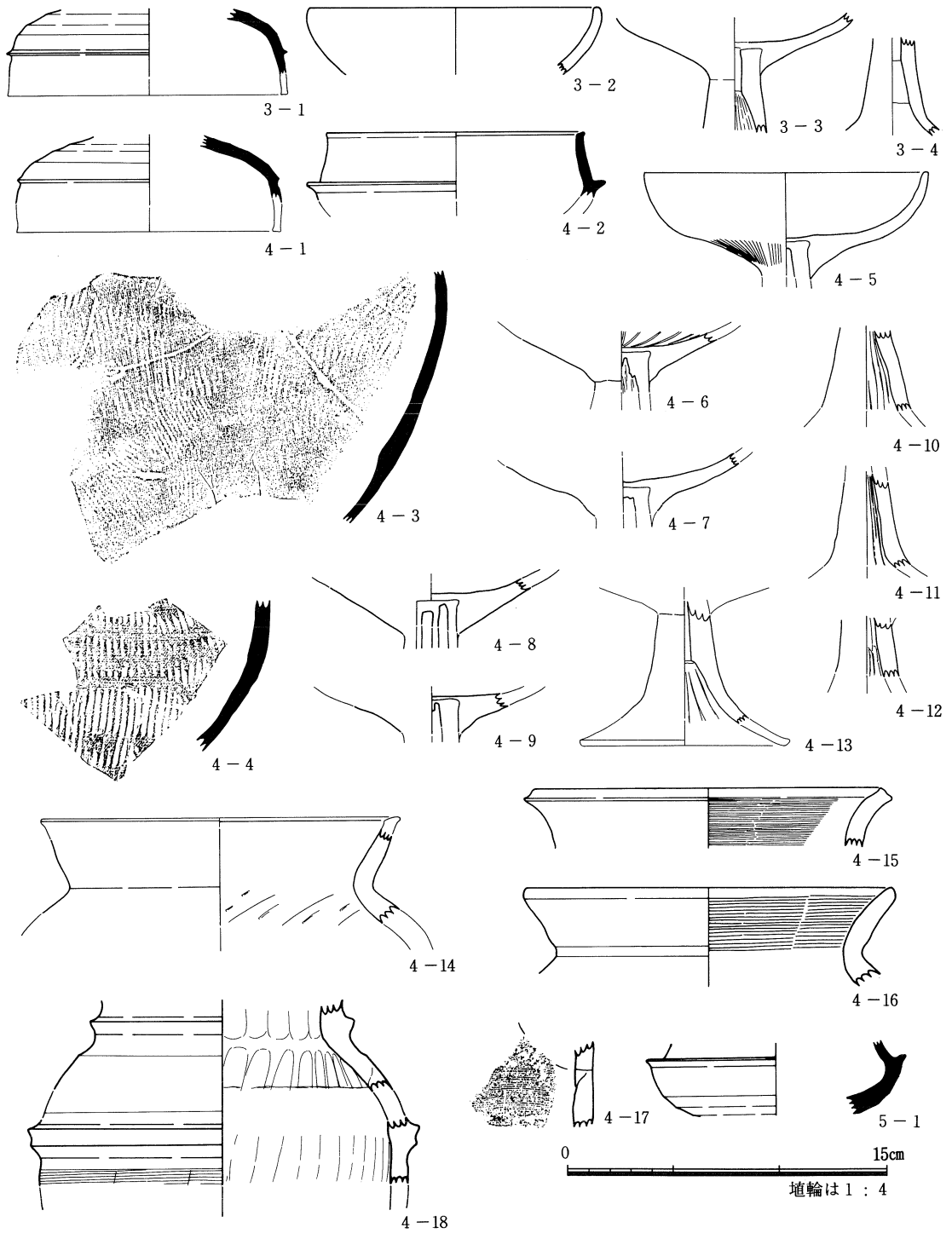


図187 3号土坑 須恵器 坏蓋1 土師器 高坏2~4
4号土坑 須恵器 坏蓋1 坏身2 甕3・4 土師器 高坏5~13 甕14~16 円筒埴輪17 朝顔形埴輪18
5号土坑 須恵器 坏身1

には工具の圧痕が観察される。これらの小形高坏は布留式Vの所産とみられる。

砥石5はそら豆形をした扁平なもので、両面にみられる使用痕は顕著である。また両側面にはわずかに擦痕がみられ、上下の端部には敲打痕をみとめる。全長10.7cm、幅6cm、厚さ1.3cm~1.9cm、重さ227.93gを測る。岩種は緻密な砂岩である。

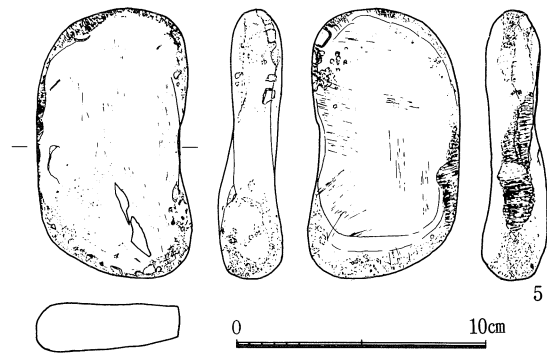


図188 3号土坑 砥石5

4号土坑(図186)

2号溝の西側にあつて、ちょうど2号住居と4号住居の間にある。長さ5m、幅4.6m、深さ0.2mほどの不定形土坑である。坑底に径1.5mほどの掘り込みや直径0.3m前後の小ピットが点在している。茶灰色土の埋土からは、須恵器、土師器、埴輪が出土している。

4号土坑の遺物(図187、PLATE101・103b)

須恵器では坏蓋・坏身・甕がある。坏蓋1は口径12cmあまりで、丸味のある天井部から内弯ぎみに垂下する口縁部にいたる。高坏蓋の可能性もある。2は坏身の口縁部片で、端部に面をもつ。3・4は甕の胴部片で、外面には細かなタタキ目がみられ、内面はていねいにすり消している。これらはTK208型式とみられる。土師器では高坏と甕がある。高坏はすべて小形で、9点検出した。5は口径13.3cm、坏部の深さ3cmを測る。口縁部は内弯し、稜はない。柱状部の棒状刺突痕がみられる資料は6点あり、そのなかの6・8・9では刺突を数回繰り返した痕がみられる。甕は大形品の口縁部を3点検出している。14は口径16.8cmで、布留式とみられる。15は外傾する端部に面をもつもので、口径はおおよそ17cmに復原される。16は厚手のもので、端部は外傾している。口径は17cm強になる。胎土は小石粒を含み粗い。これらは布留式Vとみて大過ない。

埴輪は2点検出した。17は小型円筒の胴部片で、外面をヨコハケ調整し、内面はなでている。胎土は精良で、淡褐色である。18は小型の朝顔形の胴上部から肩部にかけての破片で、直径22.6cmを測る。胴部のタガはM形の1類である。外面は胴部をB種ヨコハケ、肩部をナデ調整し、内面はていねいにナデ調整している。色調は淡褐色を呈している。

5号土坑(図186)

10号住居の西側で検出した。直径2m、深さ0.2mの不整な円形土坑である。埋土は黄茶灰色土のうえに茶灰色系の砂質土層が堆積し、須恵器と土師器の細片が出土している。

5号土坑の遺物(図187、PLATE103b)

須恵器1は坏身片で、受け部での復原直径は12.1cmである。底部のヘラケズリはやや狭く、器体はかなり扁平である。TK208型式とみられる。そのほかに土師器の大形高坏の坏部片がある。

6号土坑(図189)

3号住居の東側で、5号土坑と3号住居の間にある。規模は長さ2.4m、幅1.7m、深さ0.2mである。埋土の大半は、茶灰色ないし暗茶灰色土であるが、下層の一部に暗赤褐色の焼土が認められる。

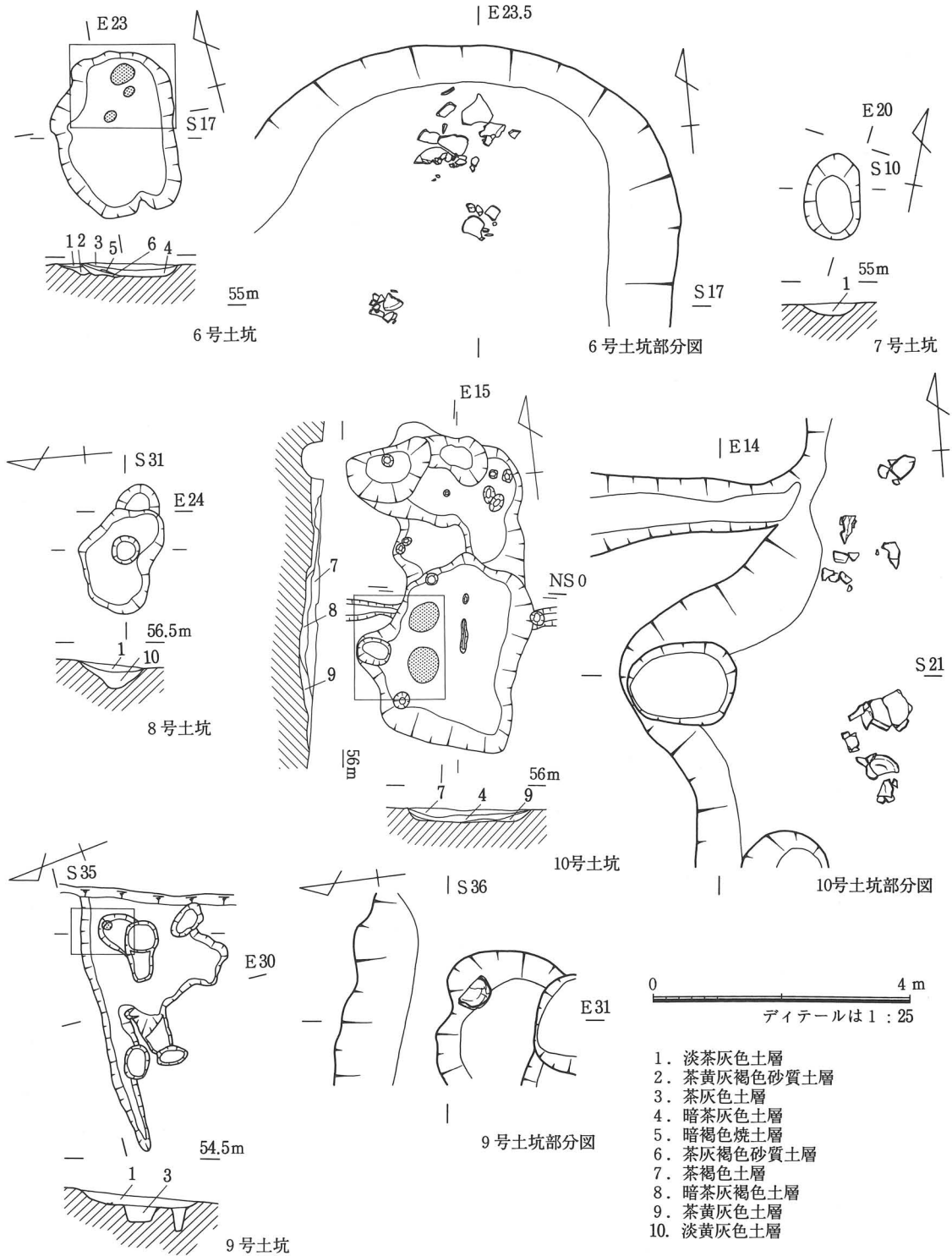


図189 6号・7号・8号・9号・10号土坑 平面図・断面図

められた。遺物は須恵器と土師器のほかに鉄滓が出土している。

6号土坑の遺物(図190・191、PLATE101・105a・108c)

須恵器では坏蓋・坏身がある。坏蓋1は口径13.9cm、器高4.5cmのかなり扁平なもので、天井部のヘラケズリも稜線のすぐちかくまでほどこしている。口縁部はほぼ垂直につけられ、端部はわずかにへこんでいる。坏身2は口径10.1cm、器高4.9cmを測り、底部は丸味をおびている。

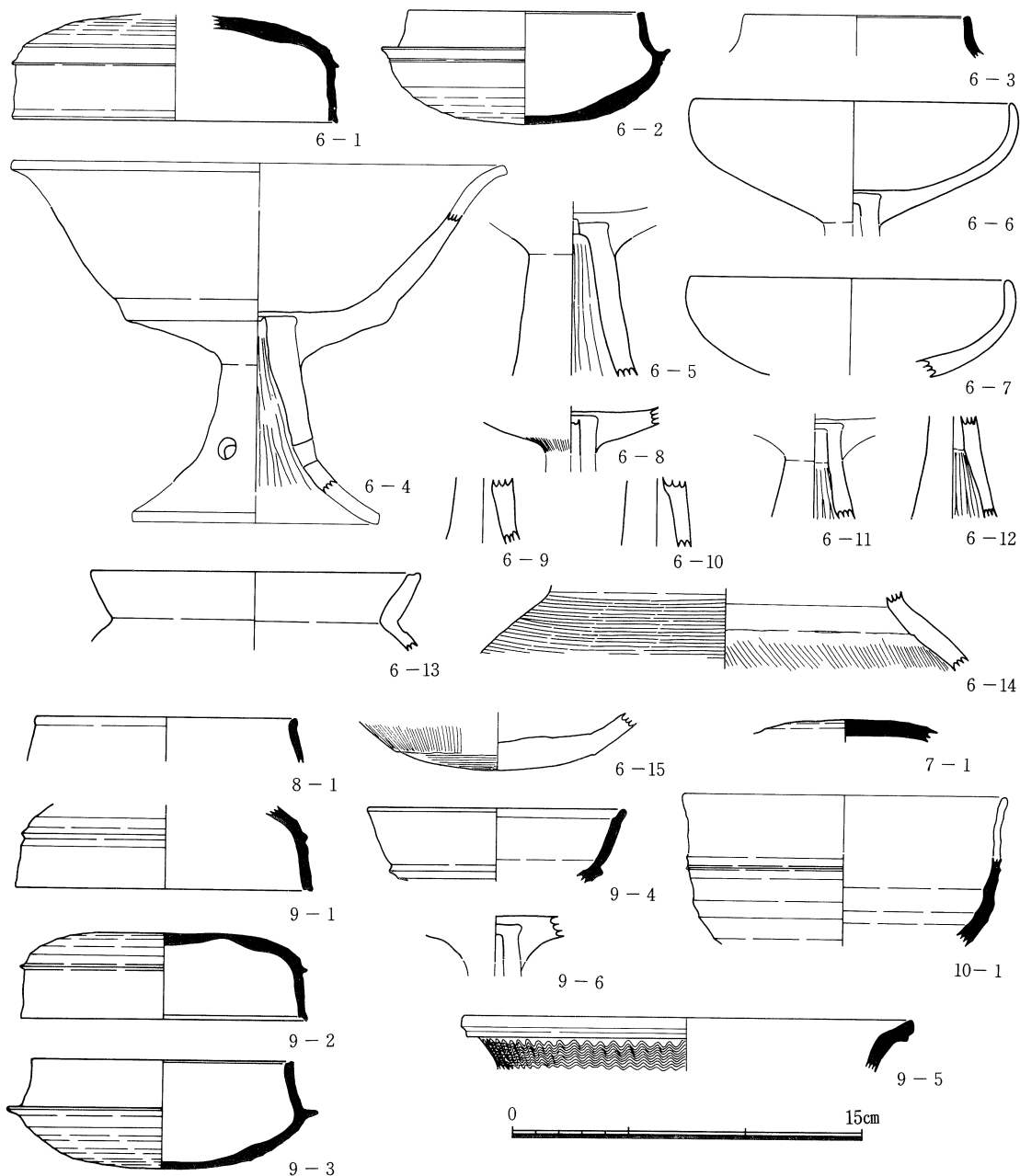


図190 6号土坑 須恵器 坏蓋1 坏身2・3 土師器 高坏4~12 甕13~15
 7号土坑 須恵器 坏蓋1 8号土坑 須恵器 坏身1
 9号土坑 須恵器 坏蓋1・2 坏身3 甕4 甕5 土師器 高坏6 10号土坑 須恵器 碗1

ヘラケズリの範囲は受け部のちかくまであり、受け部の突出も鋭い。口縁部はやや内傾ぎみに立ちあがり、端部は平坦な面をもつ。3は口縁部の細片で、端部は面をもっている。これらはTK208型式である。

土師器では、高坏と甕がある。高坏は大形(4・5)と小形(6~12)がある。4は口径21cm前後に復原されるもので、器表面は相当荒れている。脚部には2孔が穿たれ、内面に絞り目がみられる。5は柱状部のみ残存している。内面に絞り目がみられ、上端の棒状刺突痕は貫通している。

小形の2点の口縁部は内弯するもので、6に稜はみられない。柱状部では4点のうち2点に絞り目が観察される。甕は3点とも大形品である。13は布留式の口縁部で、口径は14.1cmを測る。14は肩部のヨコハケが顕著なもので、内面にもハケ調整がみられる。15は底部で、分厚く安定した丸底である。これらは布留式Vとみられる。

鉄滓16は直径約11cm、厚さ3.6cmの円盤状で、下方が円弧状に厚くなっている。重量は662gを測る。鍛冶滓とみられ、かなり鬆抜けている。断面の形状からすると、トリベから剥離した残滓になるのかも知れない(第4章第1節Ⅶ項参照)。

7号土坑(図189)

3号住居から北へ約7m隔てたところで検出した。直径2m、深さ0.2mの不整な円形土坑である。埋土は黄茶灰色土のうえに茶灰色ないし淡茶灰色の砂質土層が堆積していて、わずかに須恵器の細片が出土している。

7号土坑の遺物(図190、PLATE105a)

須恵器の坏蓋1は天井部のみ残存している。かなり扁平とみられ、ヘラケズリも顕著である。

8号土坑(図189)

2号住居から東へ約6mのところ検出した。長径1.6m、短径1.1m、深さ0.38mの不整な長円形土坑である。埋土は黄茶灰色土のうえに淡茶灰色の砂質土層が堆積していて、須恵器の細片が出土している。

8号土坑の遺物(図190、PLATE105a)

須恵器の坏身1は口縁部のみ遺存している。端部はわずかに外方に突出し、まるくおさめてい

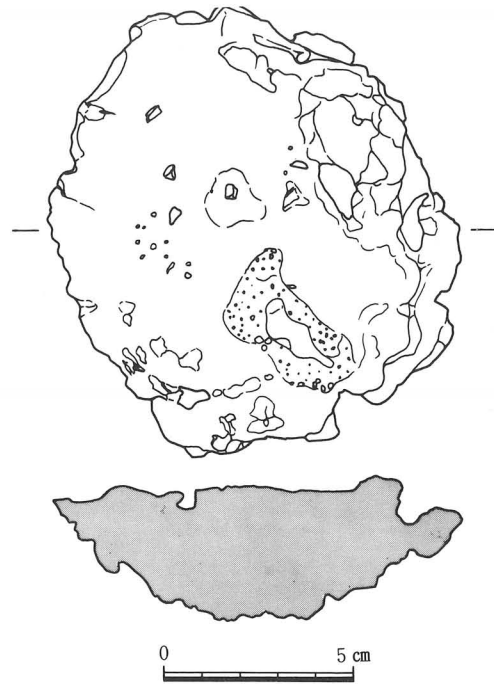


図191 6号土坑 鉄滓16

る。ON46型式とみられる。

9号土坑(図189)

集落の南東部に位置し、遺構の残余の部分は東側の調査区域外に続いている。検出した規模は、長さ4m、最大幅2.2mで、深さは0.15m前後である。埋土は茶灰色土で、なかからは須恵器と土師器が出土している。

9号土坑の遺物(図190、PLATE102・105a)

須恵器では坏蓋・坏身・甕・甕がある。坏蓋は2点出土している。1は口縁部片で、天井部のヘラケズリは稜線のちかくまでほどこしている。口縁端部はわずかにへこんでいる。2は口径12.3cm、器高3.7cmを測り、天井はかなり扁平である。ヘラケズリはシャープな稜線のごくちかくまで及んでいる。口縁部は垂下し、端部は段になっている。坏身は1点出土している。3は口径11.2cm、器高4.7cmで、丸味のある底部から鋭く突出する受け部にいたり、やや丈高の口縁は端部に平坦な面をもっている。4は甕の口縁部で、口径11.2cmを測る。文様はみられない。甕5は口縁部片で、口径は19.3cmに復原される。突帯の下方に波状文をほどこしている。これらはTK208型式とみられる。

土師器は、小形の高坏片が4点ある。内訳は6をふくむ坏底部片2点と脚部片2点である。いずれも著しく風化し、観察に耐えない。

10号土坑(図189)

集落の北部にあり、15号住居の東側、約12mのところにある。長さ4.8m、幅2m、深さ0.2mの長方形土坑である。坑底はかなりの起伏がみられ、径0.1~0.2mの小ピットが点在している。埋土は茶灰色土や暗茶灰色土で、わずかに須恵器の細片が出土している。

10号土坑の遺物(図190・192、PLATE105a・106)

須恵器は椀が1点認められた。1は体部中位の破片で、腰部までヘラケズリをほどこしている。胎土・焼成とも、きわめて良好なものである。ON46型式とみられる。

砥石2は厚板状のもので、大半を欠いている。上下の面は使用によりくぼむが、片側がより深くえぐれている。残存長6.8cm、同幅3.4cm、同厚2.5cmを測り、重さは68.88gである。岩種は二上山もしくは有馬層群の熔結凝灰岩である。

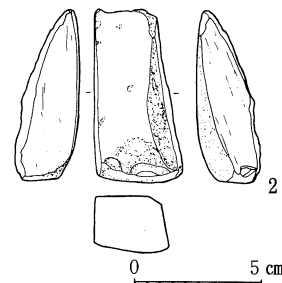


図192 10号土坑 砥石2

11号土坑(図193、PLATE29c)

10号土坑の西4mのところにある、ちょうど15号住居と10号土坑の中間に位置している。土坑全体の形状は長さ4m、幅3.2m、深さ0.1mのごく浅い長方形土坑であるが、坑底の北西隅にある楕円形のピットからほぼ完形の土器1・2・3・7がまとまって出土している。ピットは長径

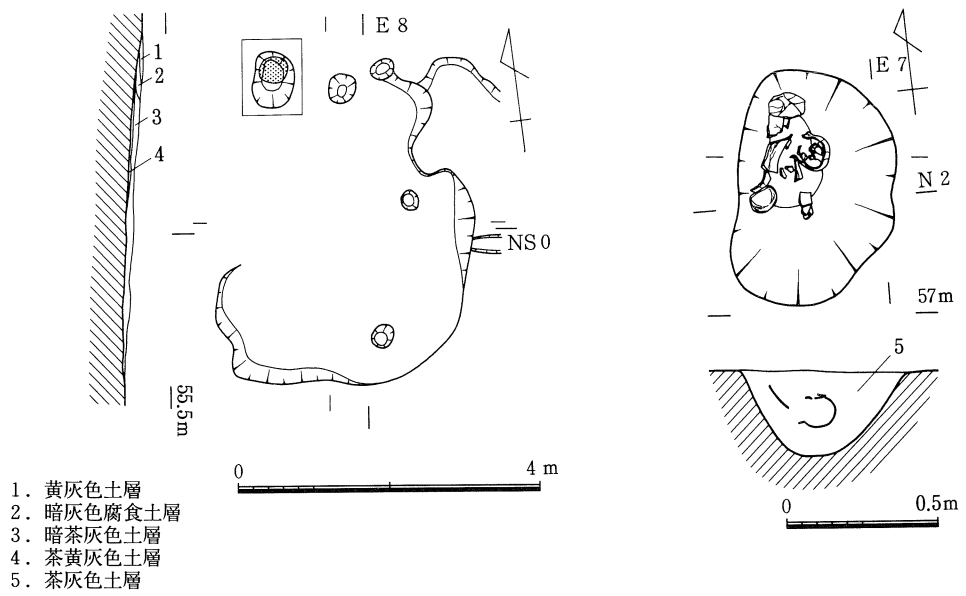


图193 11号土坑 平面图·断面图

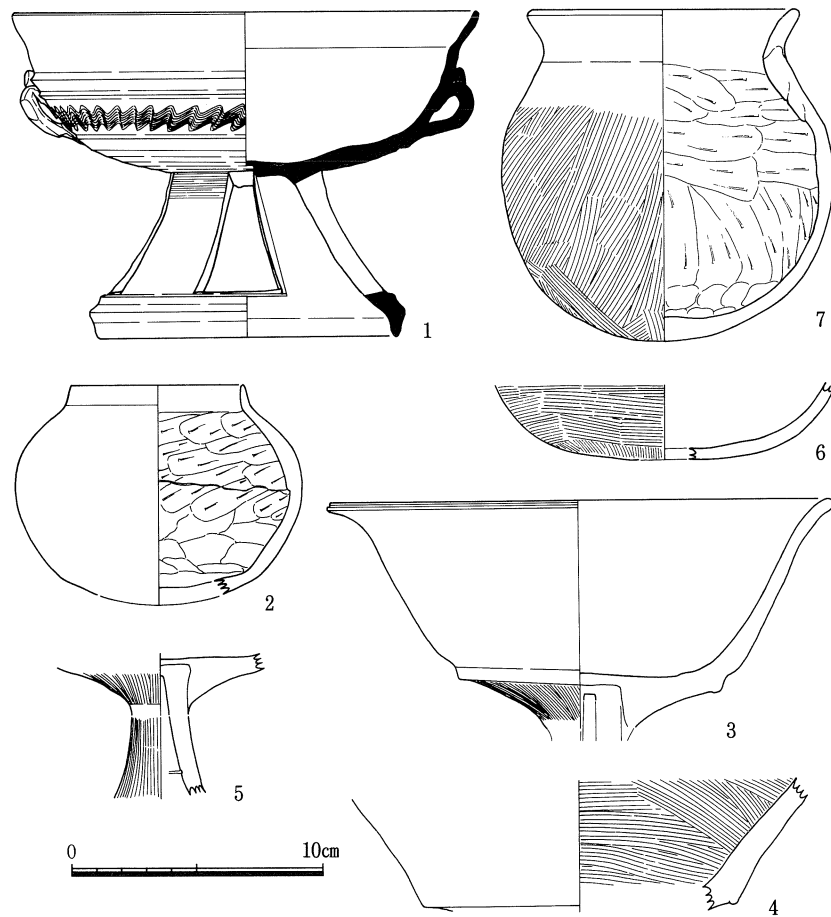


图194 11号土坑 須惠器 高坏1 土師器 壺2 高坏3~5 甕6·7

0.8m、短径0.5m、深さ0.3mである。土坑の埋土は暗茶灰色土を主とし、ピットの埋土は茶灰色土である。

11号土坑の遺物(図194、PLATE102・105a)

遺物としては須恵器と土師器がある。須恵器は無蓋高坏が1点ある。1は口径18.7cm、器高12.8cmを測る。坏部中位に1帯の波状文をほどこすとともに、一对の環状の把手を付している。脚部には台形のスカシ孔を四方に穿っている。ON46型式とみられる。

土師器では、壺・高坏・甕がある。壺2は小形の直口壺で、短く立ちあがる口縁部がつく。口径は6.9cmで、器高は8.2cmに復原される。外面はやや雑なナデ調整で、内面は下半部が指ナデ、上半部はヘラケズリである。胎土は若干の砂粒を含み、色調は茶灰褐色を呈している。高坏は大形と小形がある。3は口径20.3cmで、坏部の深さは6.6cmを測る。内面はナデ調整で、外面は口縁部をヘラ状の工具でていねいになでているのに対し、底部はハケ調整痕をそのままにとどめている。4は風化のため外面の調整は不明。内面はハケ調整後に、ナデ調整している。小形の5は坏底部から柱状部にかけての資料である。坏部はナデ調整で、外面はハケ調整痕がよくのこっている。甕は中形と大形がある。大形の6は底部片で、薄手のものである。外面はハケ調整し、内面はヘラケズリしている。中形の7は球形の器体に短く外反する口縁部がつく。外面はハケ調整後に肩部をかるく横になでている。内面は底部を指おさえし、胴部はヘラケズリしている。口縁部はヨコナデしている。胎土には砂粒を多く含み、色調は淡褐色を呈する。

包含層の遺物(図195～200、PLATE102～106)

工人集落とその周辺で出土した包含層の遺物としては、須恵器・土師器・埴輪・その他がある。細片を除いて、主要なものを記述する。それぞれの出土位置を示すと、1・3・5・8・10・11・13～15・17・19～25・28が1号住居周辺を中心とする集落の北西部、2・29が集落の南東部、4が集落の北東部、6・7・26・27が1号溝のすぐ北側、9が3号溝の北側、12・16が3号住居の北側、18が4号住居の周辺である。

須恵器では坏蓋・坏身・甕・甗がある。坏蓋は5点を資料化した。口径は2の12.3cmから1の13.6cmまでで、いずれも天井部のヘラケズリは稜線のちかくまで及んでいる。口縁部はおおむね垂下しているが、内湾ぎみの1については、高坏蓋の可能性もある。口縁端部は水平で平坦な1、真中がわずかにへこむ2・3、やや内傾する面をもつ4がある。坏身は3点ある。口径は6の10cmから7の10.6cmまで、全般的に扁平な形状を呈している。底部のヘラケズリの範囲は、6・7・8の順で狭くなっており、その変化は口縁端部が丸いもの、水平な平坦面のもの、さらには内傾する平坦面のものへ移行することとうまく対応している。9は甕の胴部片で、外面はタタキ痕がみられ、内面はていねいにすり消している。また外面には自然釉が垂れている。10は甗で、口径21.9cm、器高18.9cmを測る。平坦な底部と逆台形の体部からなり、口縁部はわずかに内

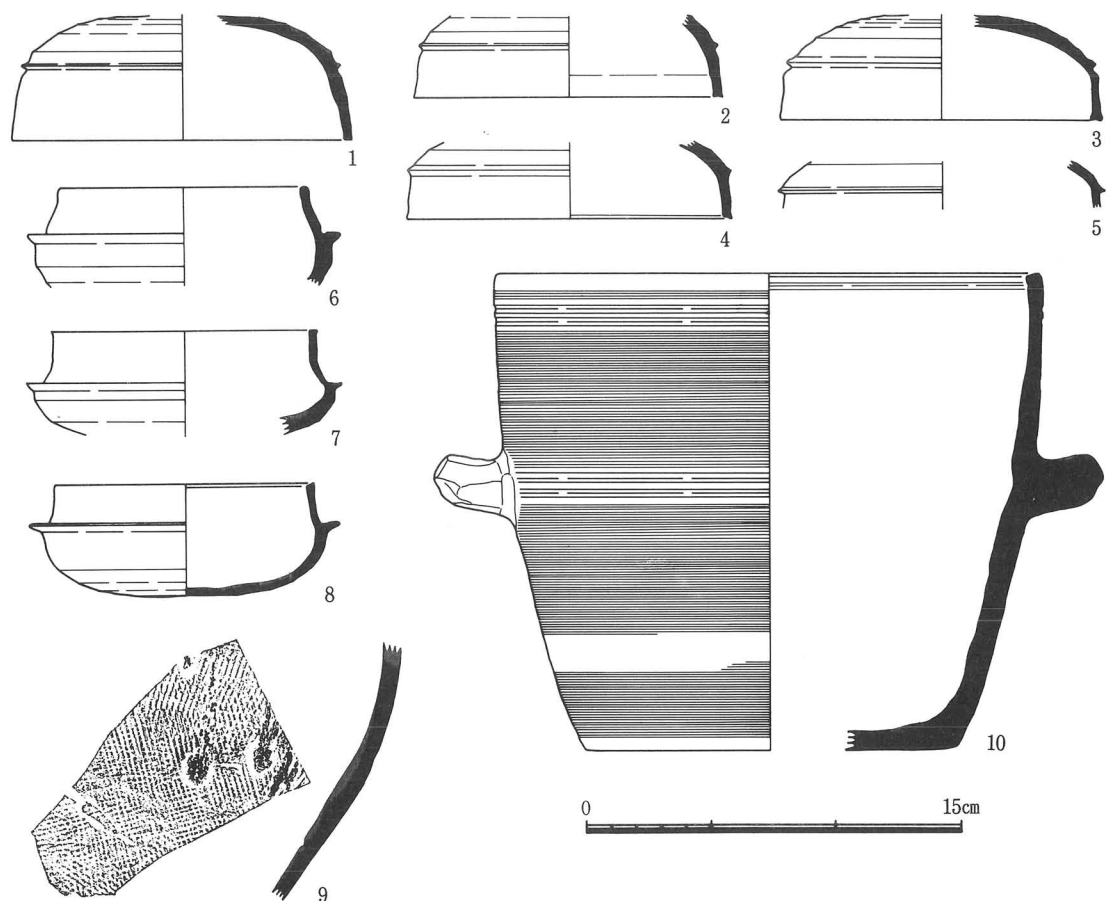


図195 包含層 須恵器 坏蓋1~5 坏身6~8 甕9 甑10

傾し、端部に面をもつ。体部の中位と口縁下に沈線状の文様がみられる。一对の把手は中実で、挿入法によるとみられる。外面は回転カキ目調整、内面はナデ調整している。底面の孔部は遺存していない。これらはON46型式ないしTK208型式に属す。

土師器では、壺・高坏・甕・甑がある。壺11は広口の直口壺で、口径9.3cm、器高15cmを測る。体部はやや横長の球形で、器表面は相当に荒れている。高坏は脚部片がかなりの量が出土しており、そのなかのいくつかを図化している。12は大形、13~15は小形である。16の甕は胎土・色調・外面のハケ調整の特徴から、3号住居出土の台付甕と同一個体とみられる。17の甑は、口径24.7cm、器高22.3cmを測る。平坦な底部と逆台形の体部からなり、直口する口縁の端部はわずかに内傾している。中実の把手はやや上向きになっていて、挿入法でつけられている。外面は下半が不定方向、上半が縦方向のハケ調整で、内面はヘラケズリしている。口縁部はヨコナデしている。底面の穿孔は1+5である。これらの土師器は11がやや古相を示すとはいえ、全体としては、住居、溝、土坑などの集落出土資料の布留式Vの範疇を逸脱するものではない。

埴輪は円筒・朝顔・形象がある。円筒では中型と小型がみられる。中型の18~22・27・28は胴部片で、いずれも外面をヨコハケ調整している。種別のわかるものとしては、27がBa種、

18がBb-1種で、あと23・24の胴部もBb-1種である。内面は27がナデ調整で、ほかはハケ調整している。タガは基本的にM形の1類である。23・24の基底部高は約9cmを測り、24は右巻きづくりである。中型品の胎土はおおむね良質で、20・23・24にはいわゆるクサリ礫が目立っている。色調は18・20が淡褐色系、21・23・24・27が淡灰褐色系、19・22・28が淡茶褐色系である。小型の25は胴部片で、外面をヨコハケ、内面をタテハケ調整している。タガは高く突出した2類である。胎土は精良で、淡茶褐色を呈している。26は小型の朝顔形の肩部で、かなり風化している。外面をタテハケ、内面はナデ調整している。色調は淡灰褐色を呈している。ヘラ記号は27・28にみられる。27は胴部に二重弧線で刻まれたU字形の記号で、2号工房から同種のもので出

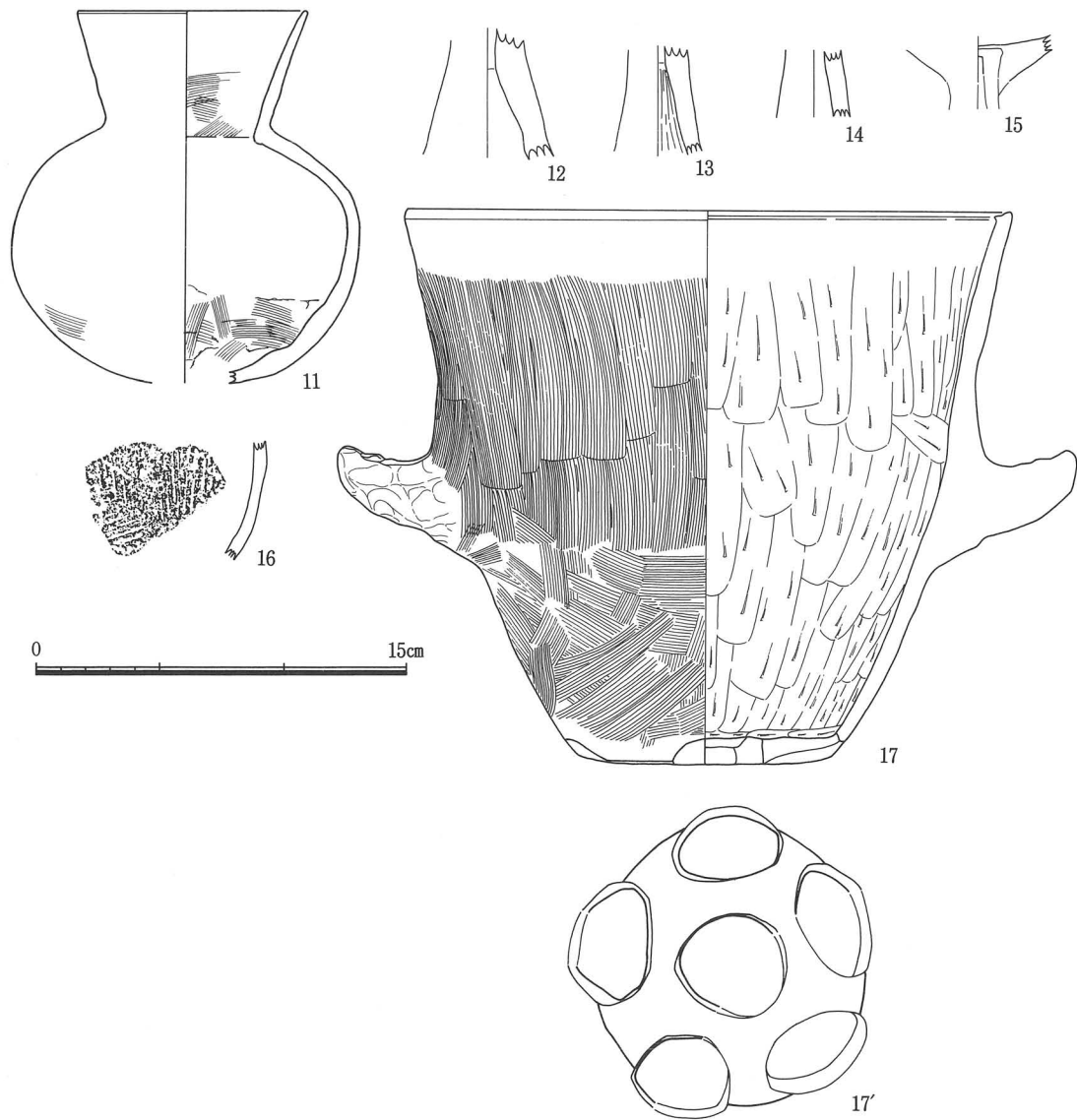


図196 包含層 土師器 壺11 高坏12~15 甕16 甑17

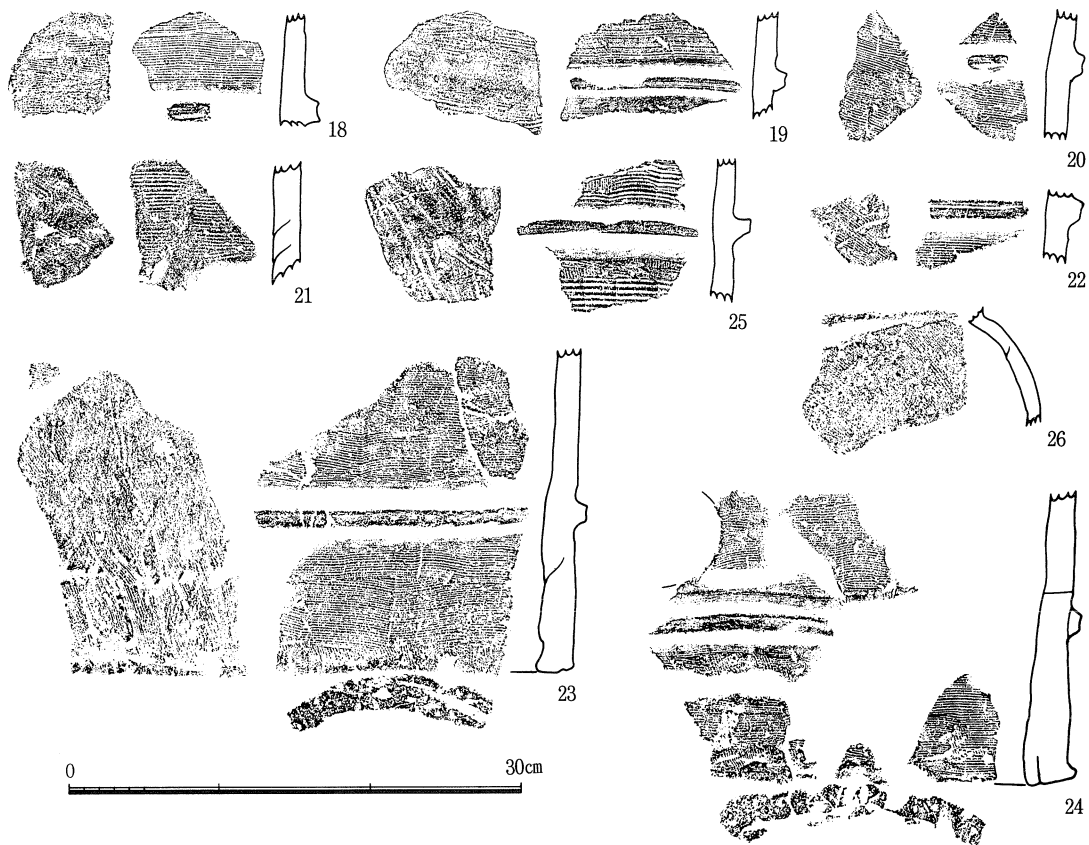


図197 包含層 円筒埴輪18~25 朝顔形埴輪26

土している。28は縦線と斜線をくみあわせた幾何学的な記号で、A群窯包含層出土品(36)に類例がある。形象では草摺29と円筒状の基部30がある。29は風化が著しく、微かに3本の平行沈線がうかがえるものである。胎土はやや粗く、色調は淡灰褐色を呈している。30は底径7.5cm、残存高5.2cmを測るもので、器壁は1.8cmである。蓋の軸底部もしくは獣脚とみられる。胎土は精良で、淡黄灰褐色を呈している。

鐸形土製品31は高さ4.8cm、頂部幅1.4cm、底径3.8cmを測るもので、底部の横断面形はほぼ円形なのに対し、上半部はつまみ状にへこんだやや扁平な形を呈している。また内側は高さ2.6cm、底径2.1cmの

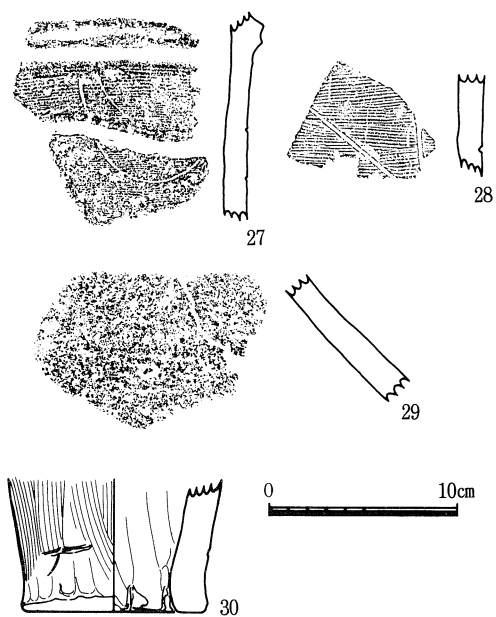


図198 包含層 ヘラ記号27・28 形象埴輪 草摺29 その他30

円錐形の空洞になっている。表面にはヘラで縦線を放射状にひいたのち3本の横線をほどこして雑な格子文を描いている。前面とみられる上位には直径約1mmの孔が2つ、裏面にも同様の孔が1つあいている。紐穴を模したものとみられるが、いずれも貫通していない。胎土は精良で、色調は淡褐色である。

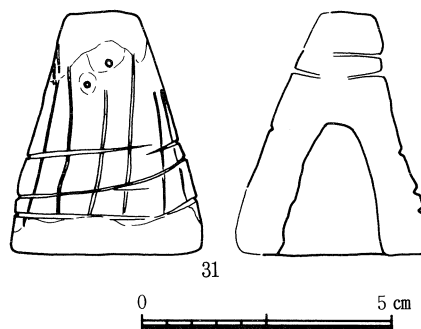


図199 包含層 鐸形土製品31

石製品32は、流紋岩製の扁平な砥石で、大半は欠失している。両側辺を擦り切りして製品化したものである。上面はかなり使用されてへこんでいるが、底面は粗く調整したままになっている。残存長5.2cm、幅6.8cm、厚さ1.0cm～1.2cmを測り、重さは45.05gである。33はやや砂質の三波川帯結晶片岩の砥石で、片面のみ使用している。残存長8.1cm、幅2.9cm、厚さ0.8cm～3cmを測り、重さは72.55gである。

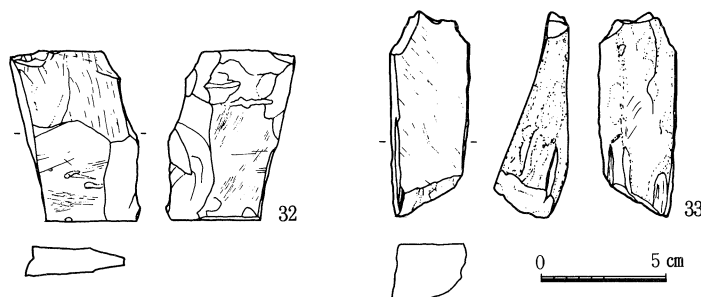


図200 包含層 砥石32・33

注.

1. 各住居の埋土は断面図に示すように、一様に茶灰色ないし淡茶灰色の土層、もしくは砂質土層であることから、とくにことわらないかぎり、1号住居と同じとし、本文での記述を略す。
2. このTK208型式については、第3章第1節の注4に掲げた田辺昭三(1982)の論考をうけたものである。すなわち一般に流布しているTK208型式を前後に2分し、その前半がON46型式、後半が本書でもちいているTK208型式である。
3. 赤塚次郎1991「濃尾平野の土器生産と流通」第7回庄内式土器研究会資料および加納俊介1991「土師器の編年4 東海」『古墳時代の研究』6

IV 新池古墳

墳丘 (図201、PLATE30a)

新池古墳は3号工房の北西側の平坦部に位置する直径約11mの円墳である。墳丘はほとんど削平されていて、淡黄灰色ないし灰褐色の砂質土のブロック土の盛土が石室付近に厚さ0.1m程度のこっている。

周溝は幅1.4~3m、深さ0.1~0.4mを測り、南にいくにしたがって浅くなっている。断面は皿状を呈している。周溝埋土の層序は表土、茶灰色土(0.1m)、黒灰色腐食土(0.1m)、茶黄褐色土(0.2m)、黄灰色砂質土(地山)である。茶黄褐色土は墳丘側から流入しており、7世紀中頃以降の遺物を含まない。黒灰色腐食土は戦後の開墾にともなう埋土で、茶灰色土は現今

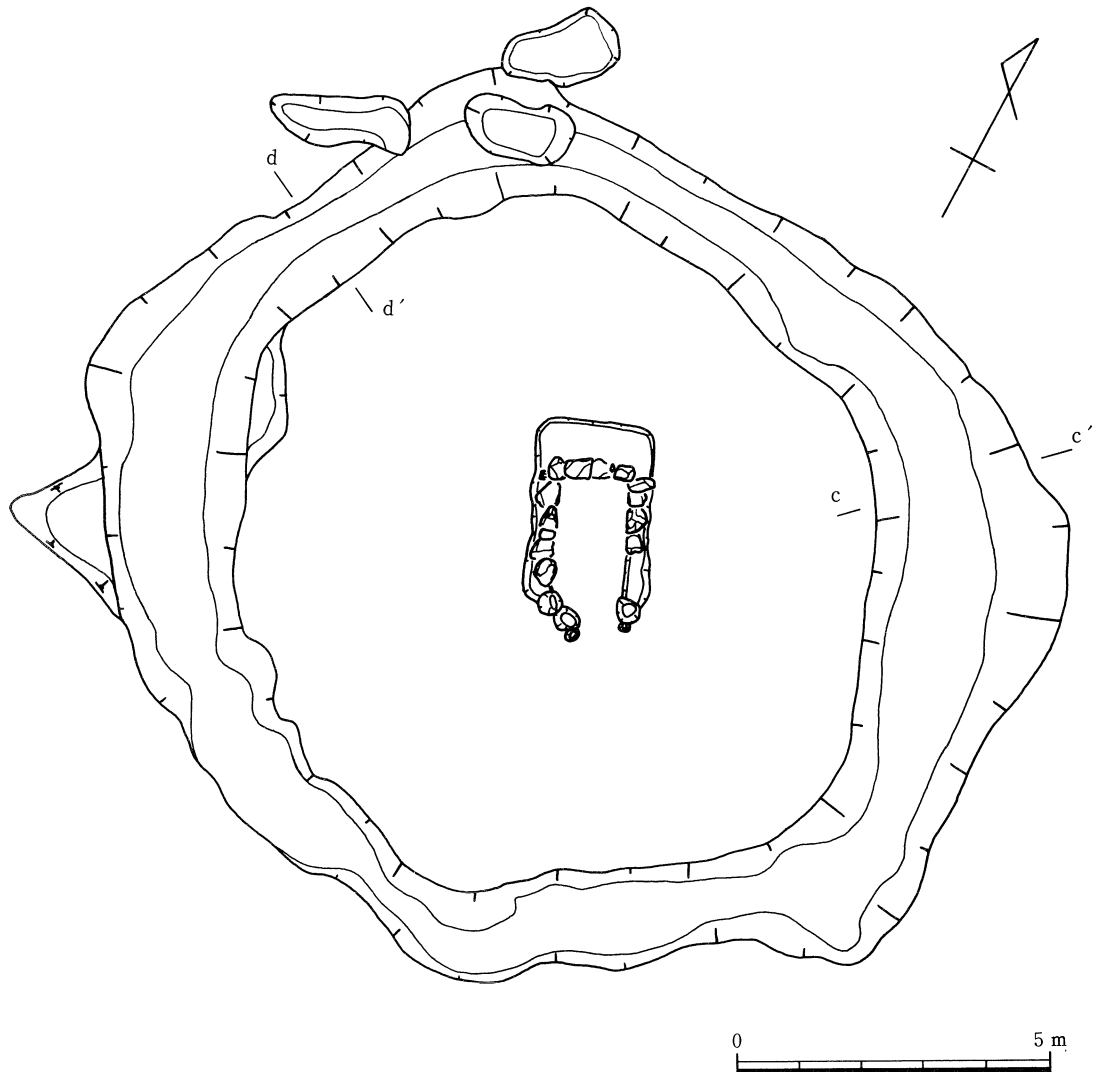


図201 新池古墳 平面図

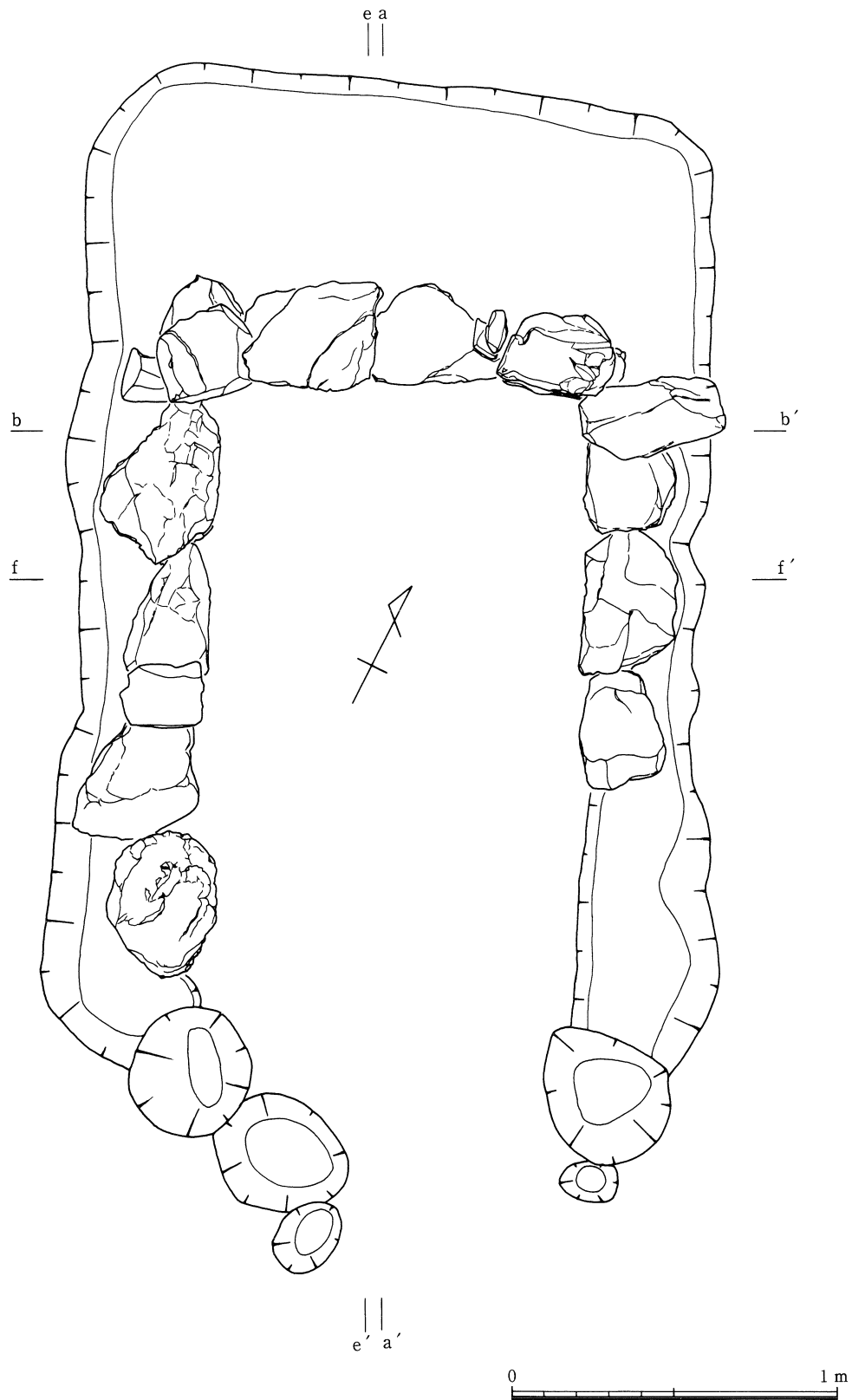


图202 新池古墳 石室上面图

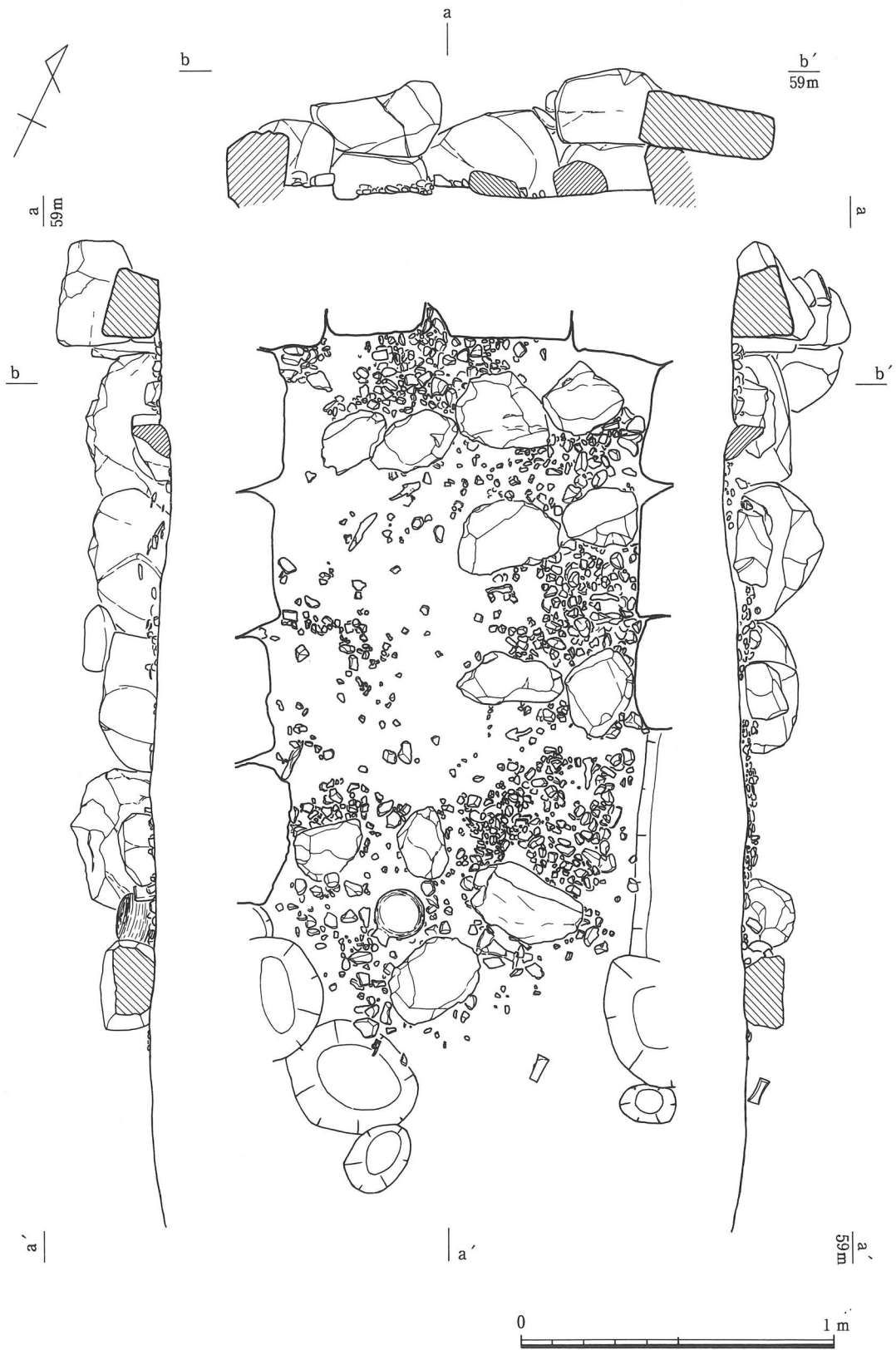


图203 新池古墳 石室平面図・立面図